神様それはないよ！

紅姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様それはないよ！

【Ｎコード】
Ｎ０６７７Ｖ

【作者名】
紅姫

【あらすじ】
大学を卒業しても中々仕事が決まらない桂木正美（かつらぎ まさみ）はある日、異世界へ飛ばされてしまう。気がついた先では男から女になっていた。癖のある人間に動物、妙な性癖すら持つメイドに囲まれて前途多難。唯一もってる力である主人公補正は、運の悪さだけ？

この作品はフィクションです。実在の人物、団体、事件などにはいっさい
関係ありません

プロローグ。

最近は温暖化などが進み、１２月とは言っても昼間は寒いと言う事はなくなっている。
それでも、日が沈めば寒くなる。
雨が降れば尚更、気温は下がっていく。
そして、今、薄暗（うすくらい）、夜の街の歩道を一人の男が雨に打たれながら歩いていた。
今日は昼間晴れてる事もあり、突然振り出した雨に男が打たれていても特に気にする者などはいない。
むしろ、今のこの国は人に無関心になるあまり、男がどういう顔をして歩いているかを気にする者は皆無と言っていい。
傘を持たずに歩いている男の顔色はとても悪く、白く能面のようであった。

俺の名前は、桂木正美（かつらぎ まさみ）といった。
東京の経済大学を卒業してから、すでに1年が経過している２３歳の男。
そして、桂木正美は雨の降る中を傘をもたずに自宅への帰路を歩いている。

何故、桂木正美が傘をもたずに雨に打たれながら、うな垂れるように歩いているかと言うと、話は数時間前に遡る。

「今日も一日お疲れ様でした。」

「おつかれさん。明日もよろしくな」

「はい、それでは失礼します。」

俺は、中々就職が決まらない事もあり、派遣先でパソコンを使って書類作成の事務職をしている。
今日も一日、何事もなく仕事が終わり派遣先の上司から退勤の印鑑をもらって退社の挨拶をした所だった。
派遣先の会社はビルの４Ｆに在り、ビルから出るとポタッと髪の毛の上に雨粒が降ってくる。
空を見上げると、空一面の雨雲が視界に入ってきた。

「今日、傘持ってきてないぞ?家に帰るまでに天気もてばいいけど.....。」

会社から、家までは電車に２０分ほど揺られて、駅で降りてから自転車に乗ってから全力で漕いでも１５分は掛かる。
俺が見た限り、天気は、いつでも準備おーけー。としか見えない事もあり、「スーツ乾くかな?」と独り言を愚痴ってしまう。
会社から駅に向かう道の途中は、繁華街があり、何を考えてるのか、恋人達や不倫同士が通うホテルも近くにある。
俺は、近道をするためにいつもは通らないホテルが隣接してる通りを早足で進む。
そこで、ホテルから見知った女性が俺の知らない男と出て来たのを目撃してしまっていた。
一瞬、俺は自分が見た者が理解出来なかった。
ほら、世界には同じような顔をしている人間が三人いるって言うし.....。
俺がチラッと、女性の方を見ると俺の方を見て一瞬、呆気に取られていたようだったが男が女の耳元で何かを囁くと、妖艶な笑みを俺に向けてきた。
男と女が出てきた建物に視線を向けるとそこは、彼氏彼女御用達の

ホテルだった。
俺の心臓は、踊るように鼓動を早めている。
男と一緒にホテルから出てきた女は、結城奈津実（ゆうきなつみ）
大学４年生だった時から結婚を前提に付き合っている彼女・・・・・・。

結城奈津実（ゆうきなつみ）と付き合ったきっかけは、俺の両親の他界が原因だった。
両親は、わずか４２歳という若さでこの世を旅立ってしまった。
学生結婚と聞いたのがつい最近だった。
恥ずかしい話だが、親の年齢をずっと知らなかった。

両親が他界した原因は、交通事故と言う事に対外的には成っていたが、実際の所、何故？何も無い所でガードレールを突き破って海に転落したのかは分からなかった。
そして、連休でも無いのに、その事故の現場が南伊豆だったのかも謎だった。
俺の記憶に間違いが無ければ、両親は普通の会社に勤めている会社員だったはずだった。
それが何故？
その際に、俺は原因を調べたが素人の俺に分かる筈も無く、分からない事が分かったという事くらいだった。

だが、そんな俺の心情を掻き乱す事件が起きた。
それは、テレビ局やマスコミと呼ばれる連中が、視聴率を取る為だけにドキュメンタリーとして俺の両親が死んだ事を面白可笑しく報道した事だった。
最終的には、プラズマの仕業、幽霊の仕業などと言った事まで上げてくるわ、遺族の心情をも視聴率を取る為だけに、俺が言って無い事まで加工して放送する始末。

葬式の際も、報道陣が押しかけて来た事もあり、両親の葬式の手配、遺産問題でノイローゼ気味になっていた俺は報道陣が入ってくるのを許可しなかった。

そして、俺が報道陣から離れる際に、「正美君、君の父親が何をしていたのか知っているか？」という声が報道陣の中から聞こえてきたが、俺は報道に携わる人間達の狂言だと思い、すぐにその場から離れた。

一週間ほどすると、マスコミ達は潮を引くように来なくなった。
俺はその事にホッとしながら、マスコミやテレビ局が一切信じられない体質になっていた。
あいつらは、視聴率を取る為、自分達が利益を得る為なら嘘でも本当だと言って流す奴らだったのが分かったからだ。

両親の遺品を一人で整理していると、俺宛に運送会社から荷物が届いた。
差出人は、父親。そして差出日は事故を起す前の前日になっていた。
俺はすぐにリビングに戻ると、印鑑を持ち出して玄関に戻った。
運送会社の人は俺の顔を見て、少し驚いていたようだったが俺はその事を気にする余裕は無かった。
すぐに印鑑を押し、荷物を受け取った後、リビングで荷物を紐解いていくと、中には金属製の小さな立体系のキューブが入っていた。

「金属製？なんだこれ？」

俺は、独り言を言いながらも継ぎ目の無い四角いキューブを触っていくがまったく反応がない。
しばらく触っていると一面だけツルツルした感じの表面がある事に気がついた。

そしてそこだけ薄っすらと光っている。
俺は何気なく、指先を触れるとキューブが割れて中から、『２２歳の誕生日おめでとう』という綺麗に彩られたプラカードと見た事も無い携帯電話が入っていた。
気がつくと、プラカードが濡れているのに気がついた。
それは、俺の瞳から流れている涙だった。
ようやく、俺は両親が本当に死んでしまい天涯孤独の身になった事を実感した。

その後の、俺はかなり荒れていたと思う。
荒れていたと言っても大学に行かずに引き篭もりをしていただけだが・・・・・・。
そんな俺を、同じサークル仲間の結城（ゆうき）奈津実（なつみ）が見かねて色々と世話をしてくれた。
精神的もまいっていた事もあったが、俺はそんな彼女に少しづつ引かれていった。
そして大学卒業まで、あと半年と行ったところで彼女に告白をした。
結婚を前提に付き合ってほしいと・・・・・・。

そして、そう言う事もあり、奈津実とは彼氏彼女の関係になった。

それからしばらくして、彼女は少しづつ俺から距離を置き始めた。
その頃から、大学のサークルの仲間達が奈津実の素行については噂をし始めていた。
奈津実はすでに、他の男がいてそいつに体を許していると・・・・・・
奈津実の相手の男は、外務省の高級官僚の息子で大学を卒業後コネ

で外務省に入る事が約束されてるらしいとか。
外務省の年収１０００万を超えるとか。
噂の域を超えた話しもチラホラと出始めていた。
それでも俺は、そんな事を彼女がするはずがない！
何かの間違いに違いないと信じていた。

そう、今、俺の前にホテルから出て来た彼女と会うまでは・・・・・。

「奈津実（なつみ）、何を、していたんだ？」

俺が、声を震わさずに言えた事は表彰に値すると思う。
だが、すでに、俺は心の中で最悪の状況を思い描いていた。
就職が決まらない人となんて付き合っていられないわ！彼の方が将来性があるもの！という言葉を、組み立ててしまっていた。

「あーあ、ばれちゃたか。せっかく、あの土地と家を売らせて貢がせようとしたのに」

悪びれもせずに、男に抱きつきながら、妖艶に笑っていた。
俺は、予想斜め上をいく言葉に、ショックを隠せずにその場から走り去った。

そして、俺は今、雨に打たれながら歩いてるわけだ。

「俺は一体何をしていたんだろうな・・・・・・。」

独り言を口にしても、溜息しか出てこない。
俺は、家の帰り道の途中にあるスーパーでビールと摘(つま)みを購入した。
３０分ほど時間をかけ、自宅へ戻ったあとは、雨ですっかり冷えた体をシャワーを浴びて温めてからテレビをつけながら、ビールを飲んでいた。
テレビを見ていても最近は劣化したつまらない番組しかやっていない。
こんな心境で、テレビが面白いとは到底思えない。

「まったくくだらない。嘘や偽りで塗り固めたニュースに、それに便乗するように下らない番組こんな放送しかしないテレビに見る価値なんか・・・・・・。」

相変わらずテレビは、偏見報道ばかり流している。
それを見ながら俺は天井を見上げて独り言を呟いた。

「明日から、どうするか・・・・・・。」

今の、俺は無気力になっていて何もやる気は起きなかった。
そのうち、体にアルコールが回ってきたのか、眠くなってくる。
暖房をつけるのを忘れていた事もあり、アルコールを摂取してそのまま寝ると風邪を引く可能性もあった為、リモコンに手を伸ばすが辛うじて届かない。
そのうち、倦怠感に包まれてきて、もういいかと諦めそのまま寝ることを俺は選択した。

ソファーの上で寝転がると一気に眠気が襲ってくる。
どうやら、俺は相当に精神的に疲れていたようだ。

意識が途切れるその瞬間、「もう、こんな世界も女もコリゴリだ・・・・・・。」と自暴的に呟いて眠りについた。

もし、その時、意識がはっきりしていたなら、『お前の願いを聞き届けよう』という声が聞(きこ)えたはずだった。

これは夢なんです！

柔らかな日差しが降り注ぎ、鳥のさえずりが澄んだ空気を振るわせる。
そして、川のせせらぎが耳に入ってくる。
川の音に反応したのか、

「んっ。」

鈴の音を鳴らしたような音が、口から紡がれる。
長く整った眉が振るえ、瞼がゆっくりと開いていく。
瞳の色は、どこまでも澄んだ黒。
日差しを受けていた事もあり、すぐに焦点はあってはいないようであった。
何度か瞼を開いたり閉じたりを繰り返してから、ゆっくりと開いていく。
ようやく焦点があったのか、黒い瞳は光が差している。

最初に視界に入ってきたのは、どこまでも澄んだ綺麗な青。

俺は家の中にいたはずなのだが、何時の間に外に？とまず疑問に思う。
どうやら、俺は横になっているようだった。
体に力を入れて立ち上がろうとするが、自分の体とは思えない程、言う事を聞かない。
数分を要してようやく指先が動くようになった。
四苦八苦していると、ようやく寝返りを打つことが出来た。同時に何か圧迫される感じと「ん～っ」と吐息が漏れてしまっていた。
そこでようやく俺は気がつく事が出来た。

「こ、これは・・・・・・。い、一体？」

仰向けに近い形になったことで、寝る時に来ていたパジャマの胸の部分が大きく膨らんでいるのが分かる。
それにさっき、自分が漏らした吐息も男の時とはまるで違う音質だった。

しばらくして体の自由が効くようになった後、立ち上がると、俺が寝ていた場所を中心に緑の草原に覆われていた。

「ずいぶん、リアルな夢だな。」

とりあえず、女の体になっているのは１００歩譲って俺が望んで夢の中で代わった事だろうと思うことにした。
周囲を見渡しても草原がずっと続いているのが確認できる。
日本にはこんな所はないから夢で間違いない！
それに、さっきまでリビングで酒を飲んで寝たから、ここは夢の中というのがしっくりくる。
それにしても・・・・・・。
懐かしい感じがするのは気のせいか？
自分の夢だしな。
そう思うのは当然か、そのまま、今の自分の姿を見下ろした。

「それにしても、身長は１５０ｃｍくらいか？１９０ｃｍ近くあった身長が縮むと、さすがにパジャマの裾がダボダボだな。」

ウェストや裾がダボダボになってるのと逆に、胸が相当大きいのか胸元のボタンが両側に引っ張られていてかなり苦しい。
俺は溜息をつきつつ、全てリアルな夢って事で全部処理する事にし

た。
それがいい。むしろ、そうじゃないと精神衛生上よくない。

「それにしても、自分の胸だと欲情しないものなんだな・・・・・・。」

自分の胸で欲情してたら変態である。
先ほど、、俺は男の象徴の部分に手を持って言ったがそこは、新大陸（フロンティア）だった。
どうしようも無いほど下らない自問自答としていると、ふいに不思議な感覚が俺の中に生まれた。
不思議な感覚に誘（いざな）われるかのように一歩づつ、草原を無意識に俺は進んでいった。

気がつくと、俺は草原から抜け出していた。
どのくらいの時間を歩いたのかは分からないが、疲労具合からかなり歩いたのは理解出来た。

「これは、道か？」

舗装すらされてない、田舎道のようなモノが視界に入ってきた。
唯一違うのは、タイヤではなく、もっと細い何かが通った跡がいくつも見受けられる点だ。

「一体ここはどこなんだよ？」

俺は、一人愚痴を言いながらも一歩踏み出す。
まったく訳がわからない、家のリビングでビールを飲んでいたらこんな訳の分からない夢を見るなんて・・・・・・。
しかも、女になってるし、もうそろそろ眼を覚ましたい。

そこでふと気がつく。
先ほどまで胸や新大陸（フロンティア）に眼がいっていたが、視界に入ってきた手足はとても細くて雪のように真っ白だった。
それはまるで、運動って何ですか？っと言うほどのモノ。
髪も歩くたびに手足に絡まって歩きにくい。
どれだけ髪長いんだよ！貞子か、俺は！と思わず突っ込みを入れたくなってきた。

しばらく、踏み固められただけの舗装されていない道を歩いていると足に激痛が走って俺は思わず座り込んだ。
足裏を見てみると、右足の皮膚に尖（とが）っ形をした小石が刺さっていた。
まったく男の時なら、こんな事なかったのに・・・・・。
小石を抜いてから歩こうとすると痛みで歩く事が出来ないし、こんな所では傷口を洗う事もできない。
俺は、痛みを我慢して一歩づつ歩こうとするが、痛みでまともに歩く事も出来ない。
そして、その事で真後ろまでそれが近づいてくるのに気がつくことが出来なかった。

突然、寒気がして振り向こうとした所で俺は痛みでバランスを崩して倒れこんだ所で、さっきまで丁度立っていた頭の位置に金属製のモノが通り過ぎたのか視界に映った。
それは無骨な巨大な斧だった。
でも、それよりもっと衝撃的なモノが俺の視界に入ってきた。
それは、特撮とはまったく違うとても現実（リアル）的なモノだった。
トカゲの頭に、人間の体、皮膚は緑色ところどころが赤い斑点で覆われていて恐怖を掻きたてられた。

夢の中だという事も忘れて、俺は転げるように走る。

足が痛いとか言ってる場合じゃない、これは・・・・・・。

「ハァハァハァ、一体何なんだ、何なんだよ！夢じゃないのかよ？どうなってるんだよ！」

俺が走り出したのを見て、その化け物は追ってくる。
振り返ってそれを確認した俺は、一生懸命に走り続ける。
それでも、距離は少しづつ縮まっていく。
その時の俺の心の中にあったのは、怖い、怖い、怖いと言う気持ちだった。

そして、疲労もありとうとう、俺は足が縺(もつ)れてしまい地面に倒れた。
化け物の方を振り返ると、丁度、俺に向かって斧が振りかぶられる所だった。
俺は、振りかぶられる瞬間を、直視する事が出来ずに瞼を閉じた。

１０秒ほど経っても、痛み、斧が振り下ろされる気配が無い事に俺は不思議に思い、
瞼を開けると化け物の胴体から一本の剣が生えていた。
力を失った化け物が後ろに倒れこむようにして倒れた為、斧もそれに伴い倒れた化け物に突き刺さる。

自分の命が助かった事に俺は安堵していると、ふと誰が助けてくれたのか不思議に思った。

「大丈夫だったか？」

俺の疑問に答えるかのように声をかけられた。
その声はとても懐かしいような、それでいて力強い感じを受けた。
俺に声をかけてくれたのは燃えるような紅い髪に紅い瞳をした１８

０ｃｍほどの２０歳くらいの青年だった。
俺は助けてもらった青年へお礼をいいつつ、立ち上がろうとすると、立ち上がる事が出来なかった。
どうやら、安心して腰が抜けてしまったようだった。
まったく格好悪い。
俺が自力で立てないと理解してくれたのか成年は、近くに寄って来ると俺の背中と膝裏に腕を通してから抱き抱えるようにして立ち上がった。

いわゆるお姫様抱っこと言うモノなのだが・・・・・
女でも羞恥プレーに近い物があるのに、男の俺にとっては辛すぎる体勢である。

「助けてくれてありがとうございます。でも、一人で歩けるので、下ろしてもらえませんか？」

「気にすることはない。困った時はお互い様だしな」

困った時はお互い様ってやっぱりここは日本なんですかー？というか夢の中だからそう言う言葉が出てくるのか？
謎である。

「ところで、貴女はこんな所で何をしていたんだ？ここはリザードマンの縄張りという事を知らないわけではないだろう？」

「リザードマン？俺、日本って国にいて気がついたら草原にいたんです。」

「日本？気がついたら？」

青年は不思議そうに首を傾げている。

「日本と言うのは、町か村の名前か？」

どうも話が通じないと俺は思いつつも国の名前ですと答えた。
何か証拠になる物が無いか探してると誕生日プレゼントにもらった携帯電話がパジャマの中に入っていた。
それを、見せるとその青年は納得したような顔を笑みに浮かべてこう俺に囁いてきた。

「ようこそ、幻想大陸ルシアードへ」

と・・・・・・・・・

夢と言う幻想をまずは

あの後、お姫様抱っこされたまま馬に乗せられて吐きそうになるのを我慢してたどり着いた場所には巨大な門が立ち塞がっていた。

「で、でかい・・・・・・。」

思わず、そう呟くほどの大きさだった。

１０トントラックが楽々すれ違うほどの幅と高さは４m近くある門が眼前に立ち塞がっている。

門は鉄製で出来ており格子になってる事もあり、門の外から伺うと遥か奥に大きな洋館が建っているのが確認出来る。

「え、えっとアレイ？」

馬に乗せられて移動してる間に教えられた男の名前を言うと、アレイが自分の方を見てくる。

「どうかしたのか？傷が痛むのだろう？すぐに治療術師に見てもらうからもう少し我慢してくれ」

治療術師？治療って言うくらいだから、医者なのか？それよりも・・・・・。

確かに傷は痛むがそれ以上に、こんな大豪邸に住む医者に見てもらったらいくら請求されるのか想像もつかない。

たしか、医者ってのは儲かるから金持ちが多いと聞いた事がある。

偏った情報である。正美は今、全国の医者を敵に回したかもしれない。

「あ、アレイ?俺なら大丈夫だから、もっと普通の医者に見てもらおう」

「ん?医者?そうか。正美の世界では治療術師の事を医者というのか」

俺の前でアレイは一人でウンウンと納得すると、門の内側に控えていた兵士達に合図を送っていた。
しばらくすると、両開きの鉄製の門が音を立てて開いていく。
門を通りぬけると、手入れの行き届いた庭園が視界に入ってくる。
俺がその風景に圧倒されていると、一人の鎧を着込み帯刀した男が俺達の側に歩いてくる。

「無事お戻りになられて幸いです。アレイ様、あまりお一人で遠乗りは控えて頂きませんと…　…」

男は、アレイにそう言いながら、俺の方へ不審者を視るような視線を這わせてきた。
それに気がついたアレイが、俺に対して質問される前に先手を打っていた。

「特に問題はなかったか?」

アレイのその言葉に、周囲にいた兵士達の顔色が変わるのが俺でも分かった。
そして、先ほど、この門を警護していた人達が、今、俺を抱きかか

えてる青年の事を様付けしてた事からもしかしたら?と思ってしまった。
俺の思考中も、話しかけてきた兵士とアレイの話は続いている。

「いえ、レイユーズ公爵様が先ほど来られて執務室の隣。応接間でお待ちしてるはずです」

俺がアレイの顔を見ると、少し溜息をした?
自分の顔を俺が見てるのに気がつくと、何事も無かったかのように馬を館の方へ向けて馬を走らせた。
館まではまだ距離があった事から、先ほど思いついた事をアレイに聞くことにした。

「な、なあ。アレイ。もしかしたら、アレイってここの屋敷でかなりの地位なのか?」

その質問に、アレイは一瞬キョトンとした後、いたずらぽく笑う。

「一応、公爵をしている。どうせ正美はどこにも行く宛てがないのだろう?当分は正美の保護者をしてやる。」

「べ、べつに保護者とかいらないから!どうせ…」

夢の中だから、すぐに目が覚めるし!

それより今、さらりとすごい事言わなかったか?
爵位っかなりの地位の人間だよな?
つまりお金持ちか…。

そして、そんな二人の姿を見てる者がいた。

今日は、館に来たばかりの新人のイリシアに通路の掃除の仕方を教えていた。

筋はいいんだけど、飽きっぽいのがイリシアの問題なのかな～？

そんな事を考えていると、「先輩、先輩！」と突然、イリシアに話しかけられた。

少し疲れていた事もあり、気分転換でもしようと、「どうしたの？」と聞くとイリシアは窓の外を見て目を輝かせていた。

「アレイクード様が戻ってきましたよ」

「そう、でもきちんと仕事はしましょうね？」

まったく、最近の新人の子は本当に仕事をしないんだからっ。

「でも、先輩」

「先輩じゃなくて、お姉さま！」

「は～い。エルフィーナお姉さま、アレイクード様が女性を馬に乗せて館に向かって来てますよ？」

え！？ずっと異性に興味を示さなかったアレイが？

気になり、窓ガラスに張り付くようにして外を見ると、アレイと一緒に一人の少女がアレイに抱き抱えられるようにして馬に乗せられていた。

その少女は、この世界では、存在しない黒髪と黒い瞳をしてる。
そして、なによりマスコットのように小さい。思わず「ちっちゃくてかわいい～～～」と無意識に声を出してしまうのは仕方の無い事だろう。

「エルフィーナお姉さま何か言いましたか？」

「ううん、何も言ってないわよ。それよりイリシア！館の窓拭きまだ終わってないんだから２Ｆの窓拭きを終わらせておくのよ？」

その私の言葉に、イリシアが脱力する。

「先ぱ…、お姉さま。まだ３桁はあるのですが…　…」

大丈夫よ。と私が片目だけ瞑ってウィンクするとイリシアが頭を抱えていたけど、私はそれを見ながらチラッと外を見てこれから面白くなりそうと心の中で考えていた。

今、俺の前には、これってどこのゲームですか？って言うほどデカイ洋館が佇んでいる。
そして、俺は未だにアレイにお姫様抱っこされている。
正面玄関の前に続く、階段が俺を抱き抱えたまま上がっていくと重厚な扉が左右に開いていく。

そして、アレイが屋敷に踏み込むと俺の視界には１０人近いメイド達が入ってきた。
アレイは、メイド達の中を当然のように俺を抱いたまま、屋敷の通路を進んでいくがお姫様抱っこされてる俺は、メイド達が食い入る様な視線で見られている。

やめてくれー。羞恥心で死んでしまう。
もう俺のライフは０なのよ。
と思っていると、階段近くの部屋のドアをアレイが開け部屋に入っていた。
部屋の中は、天蓋つきのベットと、白い家具が綺麗に設置されていて、赤い絨毯が敷かれていた。そのまま、そっと俺をベットに下ろしてくれた。
柔らかい羽毛がクッションになってくれてほとんど振動を受ける事が無かった。

アレイは、治療術師を呼んでくるから大人しく待っていてくれと言って部屋を出ていってしまった。

「はぁ」

それにしても、良く出来てるな。
今まで、何度も夢を見て、それを夢だ！と理解出来た事はあったがここまで現実（リアル）では無かった。
まさか…　…。本当に異世界とかじゃないよな？
そんな思考をしてると

年配の白髪の男と２０歳くらいの身長１８０ｃｍくらいの女性が部屋に入って来た。

「始めまして、私はクレイネルと申します。こちらは正美様の専属メイドとなるエルフィーナです。」

ベットの側まで来た、白髪の男の人が女性を含めて自己紹介をすると、エルフィーナと呼ばれた女性が腰を折り曲げるようにして挨拶をしてきてくる。
その際に腰まである青色の髪の毛が揺らめいて光っていた。

「え、えっと、俺は正美です。よろしくお願いします」

って夢なんだから何を言ってるんだー。と突っ込みを入れていたが……。

クレイネルという人が俺の診察を始めた途端にその夢と言う幻想は打ち砕かれた。

「いたい、いたいから！とても痛いから！」

どうやら、今まで色々な事で興奮して気がつかなかったが体中に擦り傷、捻挫、打撲があった。
車で事故ったらしばらくしてから痛みが出てくる。それと同じ感じなのだろう。
おかげで、俺は今、体中が痛いわけだ。
しばらくすると、診察が終わったのかクレイネルと言う人が俺から離れる。

「ふむ、この程度の怪我でしたら治療術ですぐ治りますな」

なんだと！？

この怪我が治る？
しかも治療術って何かの技なのか！
俺は、年甲斐もなくワクワクしながらクレイネルを見てると、何やら口で言っている。
これはまさか…。ＲＰＧ（あーるぴーじー）で言う所の詠唱ってやつか！
つまり魔法！
そう、あの何でも出来ちゃうという魔法。
宇宙崩壊から蘇生から空も飛べたりする万能の魔法。
それが今、俺の前に！！
期待して見ていると、クレイネルの手の周辺に光球が旋回しそれが俺の足裏に吸い込まれていく。
一番裂傷がひどい所だったはず。
これで一瞬で俺の怪我が完治し…　…なかった。
何も起こらない。

「む！」

「え？」

二人とも、驚いていたようだったが俺も魔法というのにかなり期待していた事から落胆した。
まぁ、魔法なんて在るわけ無いしな。アハハハと心の中で空しく突っ込んでおいた。

そのあと、何度もクレイネルは治療術を試していたが、効果が見られないと思うと、立ち上がり顎に手を当てて考え込んでいた。

「おかしいですな、魔法が効かない体質ですかな？」

クレイネルは俺を見ながらそう聞いてきたけど、俺には「さあ？」

としか答えることは出来なかった。
むしろ、魔法とかそんな非科学的なモノに関しての答えを経済大学での俺に聞かれても困るんだが。

俺の返答に、二人はしばらく考え込む。
その後は、俺の傷口を洗い、何かの薬を塗ってから包帯?を巻いてからあまり動かないように言ってクレイネルは部屋を出ていった。

そして、部屋の中には、俺とエルフィーナさんがそのまま残された。

「えーと、エルフィーナさん何か用事でも?」

俺のその言葉にエルフィーナさんは用事?という顔を向けてきた。

「私は、主様より正美様のお世話を言い使ったメイドですのでこの部屋におります。」

「そ、そうなんですか…　…。」

見ず知らずの女性と一緒にいるなんて落ち着かない。

「それと、正美様、私の事はエルフィと呼び捨てにして頂いて構いません」

「わかった、エルフィ。」

これから、一日中、このエルフィーナって人と一緒なのかと思うと疲れがどっと出てきていつの間にか眠くなってしまい意識が遠のくのを感じた。

羞恥心

正美を客室のベットへ下ろしたあと、俺は突然訪問したレイユーズ公爵の待つ応接間へ向った。
扉を開けると相変わらずの典型的な成金姿が眼に映る。
体中、金・金・金。毒々しいまでに金を散らばめた服装に両手に一本一本に指輪を一つづつ嵌めた姿は、頂けないと思う。
俺の姿を見て、レイユーズ公爵は笑顔を向けてきたと思うが、カエルのようにしか見えない。

「ずいぶんと久しぶりですな、アレイクード公爵殿」

「こちらこそ、おひさしぶりです。レイユーズ公爵殿」

俺は、はっきり言ってこいつが嫌いだ。
レイユーズのいる公爵家は元々、豊かな広大な土地を持ち作物で領地運営をしている土地柄であった。
それをこの男が経営する商会が、その時の公爵家家長を誑(たぶら)かして無理な土地開発を行った結果、最初は良かったが数年で付けが回ってきた。
土地がやせ細り作物が取れなくなった時期が数年続き食料を確保する為に公爵家が奔走する間、レイユーズが経営してる商会はあろう事か公爵家の娘を差し出せば無償で食料を供給すると言ってきたのだ。
最初の数年で荒稼ぎし、自分達で食料が確保出来ないようにして、最後にはその食料を楯に公爵家を事実上乗っ取った。
その事から、貴族達の間からもレイユーズの評価は限り無く低い。
公爵と言う地位を金で買った男と呼ぶ者も多くいる。
王室関係者のかなり上の方までこの男は献金していて、公爵家の乗

っ取り関して王室が動く事はなかった。
噂では宰相までこいつの息がかかってるともっぱらの噂だ。

「今日はどうかしたのですか？」

俺は、嫌悪感を押し殺して笑顔で話しを切り出した。

「実はですね、アレイクード公爵殿もそろそろお歳かと思いましてぜひ我が娘をと思いまして」

レイユーズがそう言うと、レイユーズの隣に座っていた女性が立ち上がりスカートの裾を軽く持って優雅に挨拶をしてきた。
容姿は金髪にスレンダーと言った感じだろうか？目元はレイユーズに似ていてかなりきつい印象を受ける。
この女性が、レイユーズと元、公爵令嬢ルフィンの間に生まれた子供なのだろう。身長は１７０ｃｍくらいか。

「よろしくお願いしますわ、私はフィンナです。アレイクード様をずっと前からお慕いしてました。」

ずっと前からって、今、初めて会ったんだがと心の中で突込みつつ冷静に挨拶を返した。

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

社交辞令だけ返してから俺はレイユーズの方へ顔を向けた。レイユーズはニコニコと笑っているが俺としては特に親しい間柄でもない者に婚姻話をもってくるのは些か問題があるとしか思えなかった。

「レイユーズ公爵殿、本日はＭｓ．フィンナ嬢のご紹介だったので

すか？」

俺が聞くと、そうですよと肯定してきた。
まったく、この男は貴族社会どころか一般人にまでどう思われてるか分かっていないならしい。
そのあと、レイユーズは自分の娘を俺に嫁がせようと実りの無い話ばかりを切り出してくれるため、かなり疲れた。

レイユーズ公爵と娘のフィンナが、馬車に乗り姿が消えていくのを見たあと、どっと疲れが出た。
まったく、親も親なら子も子だな。
俺は、執務室に入り、一冊の古い本を取り出した。
その本は幼児向けに書かれた昔話の本だ。

創生時代、太陽神と月の女神は大陸を作り多くの動植物を生み育て文明は栄華を謳歌していた。そこへ異界からの白い悪魔が現れ世界を絶望の暗闇へと落とした。太陽神と月の女神はお互いの力を合わせ異界より一人の女性を召還した。
その女性は黒い髪に黒い瞳をしており異国の美しい衣を纏い、不思議な術を使い最後は白い悪魔を封じたと言う。
その女性の最後は、救った人と結ばれたと、この本には書いてある。

俺は今読んだ、幼児むけの昔話の本を執務室の机に置き、溜息をついた。
もし伝承どおり本当ならば、近いうち同じ事が起きるかもしれない。
実際、大陸全体で不作が続き、疫病や本来存在するはずの無い魔物までいる始末だ。
俺は頭を左右に振り、今日の領地内に関する書類の整理を始めた。

そしてその頃、正美がいる部屋では一つの事件が起きていた。

「えっとエルフィ？これは一体。」

「これは、正美様の着替えになります。」

俺の眼の前には、白いシルクで編まれたネグリジェとドロワースが置いてあった。

「・・・・・えーっとエルフィさん？普通の男物の寝巻きでお願いします」

俺が頼むとキッパリと無理ですと言われた。

くっ、融通が効かないなと・・・・・俺が考えていると、エルフィが何人かのメイドを連れてきて俺を両脇から抱えて一つの部屋へ連れていった。

そこは・・・浴室だった。

「まってください、一人で入れますから！！！！！」

俺の意見はスルーされ浴室に裸の女性が何人も入ってくる。

体は女性だが心は男なんだ！刺激がつよすぎる

「ちょっ、まっ、一人であらえ」

体を押さえつけられて背中、足、手、髪と同時に洗われる。

そして胸と大事な部分に差し掛かったところで意識が飛んだ。
意識がフリーズしたままベットの上でネグリジェを着たまま俺はボーっとしていた。

三途の川

俺は、川のほとりに気がつくと立っていた。誰か俺の名前を呼ぶ声が聞こえる。

「正美や～い。こっちはいいぞ～」

5年前に無くなったおじいちゃんが川の向こうから手を振っているのが見える。

俺は、なんか大事なモノを損失した気持ちが一杯だった事もあり、川へ入ろうとするが突然、地震に襲われ地割れに飲み込まれた。

「ハッ！」

意識が覚醒すると、肩を両手でむんずと掴んだエルフィが大丈夫ですかー？と言いながら俺の体を揺さぶっている。

体が揺さぶられるとそれに釣られて頭ががくんがくんと揺れ動く。

うっ・・・　・・・気持ち悪い・・・　・・・

俺が気持ち悪そうな顔をしてエルフィの瞳を見ると安心したような顔をして肩から手を離してくれた。

「一時はどうなるかと思いました。正美様の魂が体から抜けかけて昇天しかかっていたので心配しました」

ちょ、昇天って・・・　・・・

そういえば、なんか不思議な夢を見たような見なかったような気がする。

「そうだったんですか」

俺はエルフィの言葉に相槌だけ打ち立ち上がろうとすると、膝と腿と胸にやわらかい違和感を感じた。

「え？」

「どうかしましたか？」

俺は違和感から、体を見下ろすとそこには体の線に沿うように薄いシルクで編まれたネグリジェを着ていた。ネグリジェは胸元で大きく開いており腰の部分で紐を結ぶ形になっている。腰の部分からスカートのように踵まで伸びていた。しかも半分透けているものだから俺は自分が女の体になった事を再認識すると同時に俺の体をじーっと見ていたエルフィから逃げるようにベットの掛け布団を剥がして体に巻いた。

「え．え．え．え．え」

自分自身で初めて真直で見た女の体と卑猥な寝巻きを着ていた事、それを異性に凝視されていた事から、うまく舌が回らなかった。俺の様子を見ながらもエルフィは怪訝な表情で俺の顔を見てくる。

「エ．．．．エルフィ。お、俺のパジャマはどこにやったんだ？」

「パジャマ？」

「寝巻きのことだよ！」

「今、着てるじゃないですか？」

エルフィが何をこいつ言ってるんだ？と言う瞳で俺を見つめてきた。

「いや、そうじゃなくて俺がさっきまで着てた服だよ！」

「それなら、今洗っていますが？」

「そう・・・・・・」

そこで俺は携帯電話をパジャマの中に入れていた事を思い出した。

「じゃねえー。エルフィすぐに俺のパジャマを回収してきてほしい」

「回収ですか？」

「洗わなくてもいいのですか？」

俺は、服をまず持ってきてくれるように頼むとエルフィが部屋を出て行った。携帯電話を水洗いとか勘弁してください・・・・・・・・エルフィがいない間に、着せられた服装のチェックをすることにした。

良く発育している2つの胸はブラをされておらず直にネグリジェを着せられている。キャミソールみたいな物にロングスカートを合わせた形と言えば、分かりやすいだろうか？白いシルク生地で仕立てられていて、胸元が大きく開いていて胸の頂が自分から見えてしまうという問題のある作りになっている。

しかも半分透けてる事もあり、服の上からも素肌が見えてしまうという・・・・・・下半身はドロワースを穿いていた。

ドロワースもシルクで出来ていて肌触り的には女の体になった敏感肌にはとても気持ちのいいものだ。

とりあえず、俺は着ている服をどうしたらいいのか考えた。

1．元の服に着替える。
2．男性用の寝巻きを持ってきてもらう。
3．このままこのネグリジェを着る。

とりあえず、3はないな、こんな服装は男の俺にはきびしすぎる。
1は、かなり走って汚れてるし、汗も染み込んでる事から却下だな。
そうすると2の男性用の寝巻きを借りるしかない。

そこまで、考察すると扉が数度ノックされてからエルフィが部屋に入って来た。その手には俺が着ていた青いパジャマを持っていた。

「正美様、お持ちしました。」

俺は、お礼を言いパジャマを受け取るとすでに湿っていた。
俺の携帯電話、終ったか？と思いつつパジャマのズボンのポケットから塗れた携帯電話を取り出してボタンを操作すると問題なく動いた。
携帯電話をベットの枕の方へ置いてパジャマをエルフィに渡して再度洗ってくれるように頼んだ。
エルフィが出ていってしばらくしてから戻ってくると、俺は男性用の寝巻きを用意してもらえるようにお願いした。

「男性用の寝巻きを？」

エルフィは、困惑した顔をしながらストックはありませんと言ってきた。

「え？それは困ります。こんな服で寝るのはちょっと．．．　．．．」

俺のその言葉にエルフィは、さっと紐のついた小さいコインのような物をスカートから取り出して左右に揺らしてきた。

「あなたは寝むくな～る。眠くな～る」

「な！ん・・だ・・・と・・・・」

どうしてそんな古典的な方法を、と続けようとした俺の意識が睡魔に負けて闇に沈んだ。そして、ポフッと言う音と同時にベットの上に正美の体は倒れこんだ。

エルフィは寝ついた正美をベットに寝かせてから布団をかけてた。

私は、正美様のようなかわいい女の子が男のような言葉とガサツな態度を取っていた事から苦労していた事をすぐに理解した。

だから、私が正美様のメイドでいる限り、本来の女の子らしい幸せを享受出来るように頑張ろうと心に誓った。

正美様に着せた、高級シルク製の寝巻きも侯爵以上の令嬢用にストックしていたものだった。

それでも、正美様の身長があまりにも小さかった為、膝までの丈が床につきそうになってしまった。

着せた女性用の寝巻きを拒否して男性用の寝巻きをご所望された時は思わず、泣きそうになってしまった。

治癒術師顔負けの怪我への教養がある以上、きっと位の高い地位の家柄に生まれて男として育てられたのだろう。

だから、私は少し強引に骨董屋で購入した催眠術の手引きと言う本に乗っていた術を使って正美様を寝かせたのだった。

「正美様、明日からは無理に男の真似事をしなくてもいいように、

女の子らしいドレスを用意しておきますね！」

主の為に最善を尽くす事はメイドとして当然の事。私は明日に向けて、寝ている正美様の３サイズを測った。Ｂ９０、Ｗ５８、Ｈ８８ですか、すごいですね。思わずゴクリと唾を飲み込んでしまった。同じ女としてウェストが私の方が太い・・・　・・・はううううう。落ち込んでも仕方ないのですが落ち込んでしまいました。

私は、測ったサイズにあったドレスを用意するべく後輩メイド達へ指示を出す事にしました。

罰ゲーム

日が沈んだ屋敷内の通路で扉を数度ノックする音が響き渡る。
扉の主たるアレイはノックをした訪問者へ入るように伝える。
しばらくして、ストレートにすれば腰まで届く青い髪をツインテールにしたおっとり系のお姉さんと言った女性が部屋にはってきた。
女性の名前はエルフィーナと言ってこの公爵邸ではメイド長の次の位にあるメイド副長という肩書きをもっている。
見た目は１８歳程度に見える。
エルフィーナが俺に向って礼を取ると、正美に関しての報告を上げてきた。

正美には治癒魔法が効かない事、治療術師顔負けの医術に対する見解を持っている事からそれなりの身分の者の可能性が高いことを告げてきた。

「アレイ様、少し気になったのですが、よろしいでしょうか？」

俺が了承をするとエルフィーナが、正美はもしかしたら男として育てられて今に至っているのではないか？と意見を上げてきた。
俺としても、正美の『俺』という言葉や、男のような粗暴な空気を気にしていなかった訳ではない。
男の俺としてはどうしたらいいか分からない事もあり特に指摘する事はしなかったが・・・・・・
エルフィーナの方を見ると妙案を思いついたような顔をしていた。
まぁ女同士の方が分かりやすいだろうと俺は判断した。

「わかった。お前の考えてる通りに行動して構わない。」

「はい！ありがとうございます。それで侯爵令嬢様以上の方用に確保してある洋服や装飾品、靴などの寸法変更を含めた使用を許可頂きたいのですがよろしいでしょうか」

エルフィーナの言った言葉を聞きながら、正美をきちんとした服装で着飾ればどれだけ美しくなるかを心の中で想像した。
夜空のような漆黒の黒髪に幼い容姿を凛とした瞳が打ち消し一厘の完成された花のような芸術を思わせる輪郭。そして抱いた際の女性特有の香りと体型。
そこまで俺は考えた所で即、了承した。
決して、正美の恥らった姿を見たいわけではないと言い訳はさせてもらおう。
そう、女性として生まれたからには女性らしい服装を与えてあげたいというのは人としてのやさしさの表れだろう。

「わかった、どうせ女はメイド以外には誰もいないんだ。好きなようにしてくれて構わない。
それと、朝食前にはきちんとした服を着せて食堂にエスコートしてくれ」

俺のその言葉にエルフィーナが頭を下げてから執務室の扉から出て行った。
エルフィーナの後ろ姿を見送った後、俺は、王宮からの早馬でつい先ほど届いた書類に目を通した。
そこには、隣国のエスタールの領土の１割が空の海に崩れ落ちたという内容と
今度、王宮で各国の王族達とこれからの事を取り決める会談が行わ

れる事が記載されていた。

目を覚ますと、周りは見渡す限り何もない白い空間だった。

「ここはどこだ？」

疑問に思いながらも、自分の体が男に戻っていた。
来ている服は青いパジャマだ。
しばらく回りを観察していたが、何も変わらなかったこともあり、
歩く事にした。
どこまで進んでも、まったく何もない白い空間が広がっていて進んでる気がしない。

《き、聞こえるか？》

突然、俺の頭の中で女性の声が響いた。

「誰だ？」

俺は若干パニックになりながらも声を主を探そうと周囲を見渡した。

《私はお主の中におる。時間がないので手短に話す》

「俺の中に？どういうことだ？」

《時間がないと言ったじゃろう？まず、お主をこの世界へ招待したのは私じゃ》

「な！　」

《この世界はとても不安定な状態になっているようじゃ、
そこで、お主の意思の強さを反映させる使役獣を一匹つけておく。
何かあったらそれを使うのじゃ》

「使役獣？まさか、ドラゴンとか召還できたりするのか？」

俺はワクワクしていた。まさか、俺がそんな大それたモノが使える
ようになるとは・・・・・・・
まあ、俺が聞いた話の内容はスルーされて女の話が続いたのはデフ
ォルトというか何と言うか

《お主の世界では携帯電話と言う物の中に入れておいた。
それを使って危険な時は自分の身を守るのじゃ。呼び出す時は、そ
うじゃの・・・・・・
「私の正義が悪を撃ち滅ぼす。こい、神の使者！」と言えばよい、》

「ちょっとまてぇえ、何？そのどこぞのヒーロー戦隊モノの必殺技
ぽいネーミングセンスの欠片もない掛け声は。そういうのやめて！
危険人物に思われるから」

《それではがんばるのじゃぞ》

俺の必死の言葉はスルーされてた。

そして女の声が遠ざかると同時に意識が空間の存在が薄くなり始め
た。

人物・世界観編集

人物編集

《桂木正美（かつらぎ　まさみ）》

大学を出たが、彼女に振られしかも就職も決まらない典型的なダメな人。
すでに両親と祖父・祖母は他界、天涯孤独。
異世界へ飛ばされたと同時に体が女性化。
他の追従を許さないほどの美貌を手に入れる？
身長は１５０ｃｍほど。

《桂木正美（かつらぎ　まさみ）の使役獣》

謎？

《謎の声》

正美の中に寄生している？人の話をとにかく聞かない。

《アレイ》

正式名　アレイクード公爵　公爵領領主

《エルフィーナ》

アレイクード公爵邸のメイド副長

《レイユーズ公爵》

貴族達から嫌われている。権力、お金大好き

《フィンナ》

レイユーズ公爵の娘

《ルフィン》

フィンナの母親であり、レイユーズの奥方。

世界観

《アレイクード公爵邸》

正美いわくバイオハザード1の洋館らしい？

《幻想大陸ルシアード》

桂木正美（かつらぎ　まさみ）が謎の声により飛ばされた世界。

催眠術はらめえぇぇ

静まりかえったアレイクード公爵邸の通路を靴音を鳴らし、１０人近いメイドが歩いていた。
私は、正美様が起きないように少しだけそっと扉を開けた。
そして、正美様が寝ているのを確認した後、人が一人入れるように扉を空けてから通路に待機しているメイド達へ中へ入るように合図をした。
メイド達も私が鍛えた優秀な部下なだけあって、靴音を立てずに全員が正美様を起さずに部屋に入る事に成功した。
そして、手筈どおりに、合図をした５人のメイドが隣の部屋に続くドアを音を立てないように開けて中に滑り込んでいった。
私は、正美様のベットの近くまで寄ってから、骨董屋で手に入れた本。無意識下へ語りかける催眠術と言うのを実行してみた。

「私は、女の子らしくしたくな～る。俺という言葉から私と言う言葉を使いたくな～る」

と耳元で囁くと、私の言葉を無意識的に聞いているのか

「私は、女の子らしくしたくなる？私と言う言葉使いむにゃむにゃ」

と呟いてる。私はどうやら催眠術が有効と思い、催眠術の手引き初級編を読んだ。

「これから、あなたは何をされても目が覚めなくなります。わかりましたね？はい、言ってください、私は起きませんと」

しばらく、様子を見ていると、正美様の唇が開いて、私は起きない

です。と言った後、瞼を開いても何も映さない瞳で私を見つめてきた。
それは人形のようでいて、とても綺麗だった。思わずたべちゃ・・・・・けふん

私は、残った４人のメイドに正美様を、朝風呂へお連れするように指示をした。
今日のお風呂は薔薇風呂でそのあと、髪の毛に塗る薔薇のエキスから抽出した香油もふんだんに用意してある。
正美様がお風呂から出て来る間に、サイズなどを夜なべして調整したフリルをふんだんに使用した
白いドレス。
ドレスに合わせた白いハイヒールと、
スリーインワンとストッキングとシルクの手袋をベットの上に広げた。
装飾品は、黒い髪に栄えるように銀の蝶の髪飾りで長い髪をアップにしようと考えていた。

しばらくしてから、正美様が薔薇の香油を塗られたのか良い匂いをしてお風呂から運ばれてきた。
私は、正美様に用意したドレスと装飾品と下着を着せていって軽く化粧をした。
うん、きっと今までで一番の会心の出来だわ。自分で自分を久しぶりに褒めてしまっていた。
私は、催眠術を解く為に、あなたは今から0と言われたら覚醒します。と言って少し離れた。

「3．2．1．0」

私は、長い夢を見ていたような気分のまま、ゆっくりと瞼を開けた。

前を見ると、エルフィが興味津々と感じで私を見ていた。
え?私ってなんで?私って言ってるの?
私は私といってる事に混乱してしまった。
エルフィが私の事を見て、ニヤニヤしている。
この顔は見た事がある、彼女が私に何かする時の顔にそっくりだった。

「エルフィ！　私に何かしたでしょう？」

「何もしてませんよ？」

「いいえ、間違いなくしてるわって！　あーっもう、なんでこんな言葉使いになってるの」

「きちんと効いてるみたいですね」

「今、さりげなく爆弾発言したわよね？」

「何かありましたか？」

私の言葉をスルーして、エルフィが朝食の準備がそろそろ出来ますのでこちらへ来てくださいと私の手を取った。
エルフィに手を取られて初めて気がついたけど、シルクの手袋を私はつけていた。
嫌な予感しかせずに洋服を見てみると、私が着てる服装はまるでウエディングドレスみたい。
髪もきちんとアップされてて、暑苦しくなくていいんだけど、ドレスを着るのは男としては羞恥心がありえない事になっていてすごい困った。

私はエルフィに何度も戻すように抗議したけど、全部スルーされて館の中をエスコートされて通路を歩いていった。

通路を5分ほど歩くと重厚な両開きの扉が開いたのでその中に入っていくと、アレイがすでに席に座って部屋に入って来た私を見て顔を真っ赤にしていた。

私としては、これって何の罰ゲー？っという感じもあって終始顔を真っ赤にしながら朝食を食べていたから、朝食を味わう暇がなかった。

俺は、入ってきた正美を見た途端、思わず白い薔薇を連想してしまった。

清楚可憐でいて白いドレスに黒い髪がとても栄えており、銀色の髪飾りがさらにそれを強調している。

今の正美と比べたら昨日、私の元へ自己紹介にきたフィンナなんて霞んでしまう。

いや、どの女性と比べてもこれ以上の女性はいないだろう。

それに、着慣れていないのか、顔を真っ赤にしたまま、恥らってる姿も新鮮で良かった。

いつもの食事は味気ない物だったのだが、この時だけは至福の時を過ごす事ができた。

これは、エルフィーナの基本給のアップも考えてやらないといけないなと心の中で思ったほどの仕事ぶりだった。

俺は、今日一日する事も無い。だからこそ、正美を連れて遠乗りに出かける事にした。

アレイが変な目線で、私を見てきた事に何故か感覚で気がついた。

これが、男が女を見るときの目線という物なのかな？

私が溜息をついていると、アレイが少し付き合ってほしいと言って

きたので、どこに行くか聞くと城下町へ遠乗りに出かけるようだった。

アレイにお世話になってる事もあるし、少しは付き合ってあげるかと思い、了承すると朝食を食べたあと、私をお姫様抱っこするとそのまま、屋敷の入り口へアレイが向かって行った。

屋敷から出ると、すでに手配してあったのか昨日の馬がすでに準備されていて、昨日と同じように私が先に乗せられてから抱き抱えられるようにアレイが馬を巧(たくみ)に走らせた。

エルフィーナの決意

えー。拝啓、天国のお父様、お母様。
今、俺はベットの上で体中を襲ってくる激痛と戦っています。
今の現状をご理解頂けない方がたくさんいらっしゃると思いますので時間を少し遡(さかのぼ)ってみたいと思います

――２０分前――

「ねぇ、アレイ。城下町ってどんな所なの？」

私がアレイに城下町の事を聞くと、馬を巧(たくみ)に操りながら、司法神(エルメルド)を奉(まつ)ってる大神殿がある所で、中央に政治機関を置き、そこを中心に煉瓦作りの道が放射線状に広がった綺麗な町並みという事を話してくれた。

「へ～。それは楽しみだね」

私は、この世界に来てから館と草原しか見たことが無かったのでとても楽しみにしてた。
馬が館の門を潜りぬけるところで体中が軋む様に激痛が走った。
良く考えて見れば、昨日あれだけ怪我しておいて、今までまったく痛みを感じなかったのがおかしいと言えばおかしいんだけど・・・・
私の様子に、アレイは気がついて、すぐに館に戻り、私が滞在している部屋のベットにやさしく横たえてくれた。

「正美、すぐに治療術師を呼んでくるから待っていてくれ」

アレイはそう言うと、飛び出すように部屋から出ていき、廊下から聞える靴の足音が遠ざかっていった。

しばらくすると、エルフィーナが部屋に入ってきた。

「大丈夫ですか?正美様」

「大丈夫じゃないから!というかエルフィ、一体、俺に何をしたんだ?」

「あら、もう術が解けてしまったのですか」

「まて、術って何をしたんだ?」

「大丈夫ですわ、正美様。細かい事を気にしていたら良い男性は掴まりませんよ?」

「俺にそっちの趣味はないから!」

男となんて冗談じゃない。とりあえずこの体の異常をなんとかしないと・・・・・・

痛すぎて、段々と意識が朦朧としてきた。

「正美様、これを見てください!」

俺はエルフィーナがあまりにも真剣に話しかけてきたので、エルフィーナの右手にぶら下がって揺れてる硬貨をモロに見てしまった。

そのまま正美の体は布団の上に撃沈した。

私は、寝付かせた正美様のドレスが皺になる前にネグリジェに着替えさせた。
着替えが終った頃に、アレイ様が治療術師のクレイネル殿を連れて部屋に入って来た。

「エルフィーナ、正美の様子はどうだ？」

「大丈夫です。疲れて寝ています。」

「そうか、意識を失うほどの激痛だったのだな」

エルフィーナとアレイが話してる間に、クレイネルが正美の怪我を治療していく。

「ふーむ。これは完治するまで最低2週間はかかりますな」

「そんなにか？」

アレイ様が正美様の頭を撫でながら心配そうにクレイネルに聞き返していた。

「何分、魔法が効きませんから」

アレイ様が、正美様をすごく心配しているのが傍から見ても分かる。
きっと、アレイ様は正美様に恋をしているのですわ。

私は、正美様が痛みを感じなかった理由は、女の子として振舞うように催眠術を掛けた事の副作用で痛覚が麻痺してるからと悟った。
それと同時に、屋敷のメイド達には催眠術は効かなかったけど、正

美様にはかかるので、一つの作戦を思いついた。
思わず、ニヤついた顔がアレイ様にバレないかヒヤヒヤしたくらい。
男みたいな口調と考え方と態度を催眠術を使い、正美様を立派な淑女に育てあげようと考えた。
きっと正美様は長い間、男として育てられた事から中々女としての幸せを考える事ができないの。
だから私が立派な淑女にしてあげようと、拳を固く握り締めた。
よし、善は急げって言うし、明日から、正美様の精神を淑女のようにする計画を立てないと・・・・・・

男の人って・・・

この館の主である、アレイは正美の部屋へ向かって廊下を歩いていた。

俺は、エルフィーナとクレイネルから正美の容態を聞いた後、一度は執務室へ戻ってから仕事をしていたのだが、
正美の容態が気になってしまい仕事が進まなかった。
今までは、どんな事があろうとこのような事は無かった。
父上が死んだ時も、領地内の仕事だけは常に行うようにと言われた事もあり、
冷静に仕事が出来ていた。
それが、正美の痛みにより歪んだ顔が脳裏(のうり)を掠(かす)めただけで気が狂いそうになるように
胸が締め付けられる。

クレイネルは、古い文献(ぶんけん)を探し、魔法が聞かない体質と言うのを欠損した書物から
調べてくれていた。
それでも、古代の文字で書かれてる事もあり、曖昧であったが・・・・

それほど、魔法が効かない体質を持つ者はこの世界では異質な存在という事だった。
クレイネルの話によると、この世界を作り出した神々と魔法が効かない体質というのは、
密接な関係があるという事であった。
結局は、魔法が効かない体質の根本的な要因は未だ不明であったが、
それは引き続きクレイネルが調べてくれる事になっていた。

「2週間か・・・・・・」

俺は、思わず口に出して呟いていた。

2週間というのは、正美の両手の肘、両足の裏、膝の怪我の回復にかかる時間らしい。それまではあの痛みにずっと苛まれる事を思うと、何もしてやれない事に無力感を感じてしまう。

それと同様に、正美の姿はこの世界の者では無いほど美しく、それでいて儚く思えてしまい、自由にしてしまったら消えてしまう気がして、いつまでも治らなければ良いと心の片隅では思っていた。

俺は、正美が寝ている部屋の扉をそっと開けると音を立てないように部屋に忍び込んだ。

暗闇の中で目を凝らすと、赤薔薇で色付けされた天蓋つきのベットが視界に入って来た。

ベットの方へ歩を進めると、月明かりが丁度、正美を照らし映し出してきた。

この世界では、滅多に見ない顔つき。普段は強い目元が強調されている事もあり幼さが隠れているが今は、瞼を閉じている事もあり幼いながらも、月明かりに照らされた正美の姿は、薄く透けた白いネグリジェが聖女の衣に見え、月明かりが照らしだしてる艶やかな黒い髪が夜空もように輝き、まるで物語に出てくる聖女のようであった。

そこまで考えた所で俺は、なんという事を考えてるんだと頭を振った。

そして、普段の俺なら絶対にしない事を、俺はしてしまった。

鳥の囀りが、館の住人に朝を知らせる。

エルフィーナとメイド達は、朝の支度をする為に正美の部屋の扉をそっと開けた。

部屋の中に入った、私の視界に入って来たのは、主様と正美様がベットの上で抱き合ってる姿でした。

「・・・・・・」

私は一瞬放心してしまいました。

男性が未婚の女性の部屋で一夜を共にすると言うのは良くはないですが・・・・・・

とりあえず、現状確認としては、一緒のベットで寝て、お互いに洋服を着ています。

そして正美様を腕の中に抱き抱えるようにして主様が寝ています。

正美様も主様に抱きついて寝ていますが、今日の朝はとても冷えていたので無意識に暖を取るために行ったと思います。

私は冷静に、そう本当に冷静に寝ている主様の服の後ろ襟(えり)を魔法で強化した両手で握り締めて、正美様から引き離しました。

ぐえっ、という言葉が聞えてきましたが、きっと気のせいでしょう。

主さまが目を覚ましたようで、私を恐怖の眼差しで見てきますが何故でしょうか?

「ど、どうしたんだ?エルフィーナ。お前怒ってないか?」

何を、主野郎様は言ってるのでしょうか?

私が主野郎様に殺意が芽生えるわけがないじゃないですか。

「別に怒っていませんよ。怒られるような事でもしたんですか?」

「何もないぞ?添い寝くらいしかして・・・な・・・・・・・い・・

・・・・　・・・・？」

話の途中で、エルフィーナの眼が赤く光った気がする。
やばい、エルフィーナが怖い。
くっ、なんて威圧感。戦場でもこれほどの威圧感を感じた事はなかった。
一歩一歩エルフィーナが俺の方へ近づいてくる。
まさしく、死神の行進のように・・・　・・・・
というか俺、エルフィーナの主なんだが・・・　・・・・
余計な事を言ったら大変な事になる気がする。

「エルフィーナ、少し落ち着いて、話合おう。きっと悲しい誤解があったにちが」

アレイのその言葉の途中で、エルフィーナは輝きを失った瞳のまま、ニコッリを笑いそして・・・　・・・・

館にア――――――ッと言う声が響き渡った。

一部始終を見ていた、メイド達にその時の証言を聞こうとするとガタガタ震えながら何もありませんでした。何もありませんでした。と壊れた表情をして同じ言葉を繰り返していたとか繰り返していないとか・・・　・・・・

女の人って・・・

「エルフィ、変な所さわるなよ！」

「あら、女の子同士ですから私は気にしませんよ？」

「俺が気にするんだよ！」

ベットの上では、エルフィが正美の体中を弄（まさぐ）っていた。

私だって、正美様ともっと一緒にいたいのに、主様ったら最低だわ。
正美様っていい匂いがして胸も腰も触るだけで、ぴくんって感じてすごく感じやすいわ。
同性なのにドキドキしてきちゃう。
そろそろ、メインデッシュでも頂こうかしら？

俺は一瞬、貞操に危険を感じて、エルフィの鼻に肘打ちを打ちこんだ。
同時に肘の皮がまだむけたままで完治していなかったので激痛が走った。

「痛いですわ！正美様、酷いですわ！女の顔を殴るなんて淑女らしくないですわ！」

「俺は、淑女でもないしその気もない！」

俺のその言葉に、エルフィは世界の終わりみたいな顔をしてきた。

「そんな、正美様。私よりあの野郎が好きなんですか？」

あの野郎って、野郎って事は男だよな?俺の頭の中で心辺りのある人物像をピックアップしていくと、俺とエルフィの接点がある男はアレイくらいしか想像がつかない。
流石(さすが)に男相手に恋愛感情を持つ事などありえない。

「エルフィ、良く聞いてほしい。」

俺の言葉にエルフィが身をずいと押し出して近づいてくる。

「俺は、男には興味はない。」

続いた言葉に、エルフィの顔がパーッと明るくなる。
そして何かぶつぶつと呟(つぶや)き始めた。
えーっと、エルフィさん、瞳になんか光がありませんよ・・・・・・・・・

はぁ、俺はエルフィのその様子に頭を抱えた。
どうしてこんなになっちゃたんだろう・・・・・・・・・
前はエルフィは、とっても清楚で可憐な女性て感じだったのに・・・・・・

――――30分前――――

ゆっくりと揺(ゆ)り篭(かご)の中に居るような、まどろみの中で意識が薄(うっす)らと覚醒するのを感じた。

まだ寝ぼけてる事もあり、俺の視界に白いモノが映っていた。
あまりにも近かった事からそれが何か分からず興味本位に、なんだろ、これと？思わず握ってしまったモノはふかっと言う音が聞えてくるくらいやわらかいモノだった。

「あんんっ、正美様ったら積極的なんだから・・・　・・・」

俺はその言葉を聞いた途端、頭の中のまどろみが一気に晴れていくのを感じた。
そしてすぐに身の危険を感じ、話しを逸らす為の行動に移った。

「エ、エルフィ。おはよう」

「おはようございます。正美様」

今の、状況を簡単に説明すれば俺の体は、座ってるエルフィにお姫様抱っこされてる形になっていて顔はエルフィの右胸に押し付けられる形になっていた。

「なあ？エルフィ。朝からそんなに近くにいると息苦しいから離れてくれないか？」

昔の俺からしてみたら信じられないほど、冷静に女性に対して離れるように拒否をする事が出来た。
きっと昔の俺なら、好意を寄せてくれた女の子にこんな風に接する事はできなかったはず。

「でも、正美様。いいのですか？」

エルフィがそんな事を言い確認しながら、俺から離れていく。

「何を言ってるんだ？良いも悪いも・・・　・・・」

俺はエルフィが離れて行った後の自分の姿を見て脳がフリーズした。
今の俺の姿は、薄い白いベビードールを着ていて、体の全てが丸見えに透けていてこれって何プレイ？っていう服装になっていた。

「あわわあわわわわわわ」

私の目の前で、正美様は顔を羞恥心で真っ赤に染め上げていて、意味不明な言葉を発しながら瞳には無意識に涙を浮かべている。
はわぁー。とってもかわいい、普段の男らしい正美様から、
一枚一枚、剥けて淑女の階段を上っていくのを感じるわ。
羞恥心を煽る為に、夜なべして寝巻きを作った甲斐があったわ。
でもあんな風に、扇情的に煽られると我慢できなくなっちゃう。
私は正美様がまだ怪我が治っていない事が分かっていたので、
ぬるま湯とタオルで正美様の体を隅々（すみずみ）まで探求し・・・
ううん、拭いてさしあげようと、
タオルをお湯でしぼって正美様の方を向いた。
正美様は、私の顔を見て、涙を流しながらイヤイヤと頭を左右に振りながら逃げ場のないベットの上で懸命に私から距離を取って逃げようとするの。
なんで、逃げようとするのかしら？
これから、と～っても気持ちよくなるのに・・・　・・・

俺は、体中痛みながらも近づいてくるエルフィから逃げるようにベットの上を移動していく。

「大丈夫ですわ、何もしませんから体を隅々まで探索、ううん拭く

だけですから、とっても気持ちよくなれますわよ？」

エルフィの瞳が壊れた人形のようになっていて、頬が真っ赤に染まってる。

しかも唇を舌で舐めてるし・・・　・・・・

俺の、生存本当が危険アラートを滑車気のように振り回してる。

もう、エルフィの胸が俺の膝まで来ている。

やばい、やばい、やばい、やばい、やばい

そこでエルフィが、飛び掛るように俺に抱きついてきた。

使役獣－初めての召還編（1）

「・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・」
先ほどまでの、エルフィの過剰なまでのスキンシップを跳ね除けた俺は、今、ベットの上で、エルフィと無言で対峙しながら、もくもくと朝食を食べていた。
エルフィが俺の胸元を見て、じーっと頬(ほほ)を赤らめて、何か物欲しそうな目線を向けて来ているのは、明らかに同性を見る目では無い気がする。
いわゆる好きな異性に向ける目線というか、そんな感じ。
さすがの俺も今は女の体であり、女性に抱きつかれるくらいなら元男だったし悪い気はしないけど、明らかにエルフィの行動は、容認できないと言うか、間違いなく危険物指定のような気がする。
「エルフィさん、そんなに見つめられると困るんですが？」
俺は、先ほどのやり取りと、これからもお世話になる為、なるべく穏便に済ませたいと考えていた為、丁寧語で話しかけていた。
俺のその言葉にエルフィは、瞼(まぶた)を大きく開いて部屋から走って出て行った。
俺は、思わず何かまずい事でも言ったか？と疑問に思いながらも、ひさしぶりに一人になれたので安心して朝食を食べ始めた。

その頃、ここの公爵邸の主アレイは執務室にて、怪我を治療してもらっていた。
「申し訳ありません、アレイ様。エルフィーナがとんだご無礼を・・・・・まことに申し訳ありません」
「クレイネル、気にすることはない。女性の寝室に忍びこんだのだ、このくらいの怪我で済んだのは幸いだろう？」

「ですが、アレイ様、主様に危害を加える事は重罪でございます。
王族特有の再生呪(エール)が無ければ半年近い療養が必要になる所でした。
後で、エルフィーナには厳しく躾(しつ)けておきます」
クレイネルは昔は王宮勤めの治療術師であったが自分にも相手にも厳しい所があり、一度決めた事は中々変えない頑固な所があった。
王宮では、権力になびく事の無いクレイネルは厄介者扱いされ、王宮と勤めを辞退させられてしまった。
そこを、前当主であり我が父であったフルハード公爵がクレイネルの人柄に惚れこんで我が公爵家お抱えの治療術師に誘った。
その後は、クレイネルは時間を置き、専属の治療術師として当家に仕える事になり、その娘も潜在魔力は高いのにも関らず、礼儀作法の勉強という事でメイドとして年頃になってから我が家に仕える事になった。
「分かった、わかった。お前の娘だ、その辺は任せた」
俺が、そう答えると、クレイネルは納得したようで、傷跡に回復魔法を掛け始めた。
クレイネルが魔法をかけてる間に、俺は今日の朝、王宮より届いた書類に目を通し始めた。
ここ１０年ほど、大陸全体の外縁(がいえん)部分が少しづつ、削れ始め、それがここ数日で目に見えるように崩落を始めたと報告書に記載されていた。
そもそも。
この世界、幻想大陸ルシアードは、大気海と呼ばれる、空の上に浮かんでいる。
大陸の下には永遠(えいえん)と雲が漂(ただよ)っており、大陸から下を見ても雲の下に何があるのか見る事が出来ない。
それに空を飛ぶ魔流術(まりゅうじゅつ)が、存在して無い事もあり分厚い大気を越えた者は未だに存在しない。
唯一、分かるのが王宮の禁書図書館(きんしょとしょかん)に封印されている古文書(レコード)に書かれた内容である。

古の遥(いにしえはる)か昔に栄えた文明の後があり、未だに劫火(ごうか)が燻(くすぶ)ってると書かれている。
この、幻想大陸ルシアードでは、劫火は地獄と言う意味を持つ。
だからこそ、誰も率先して究明する者はいない。
「どうかしましたか？アレイ様」
手紙を読んでから、黙っていた俺の様子を心配してクレイネルが声をかけてきてくれた。
「なんでもないよ、それに私的の場では子供の頃のようにアレイでいいよ」
「いいえ、普段からきちんとしておきませんと何か合ったときに困りますからな」
クレイネルの言葉に、俺は相変わらず融通が効かないなと思ってしまった。
「アレイ様、今、私の事をこの頑固爺(がんこじじい)がと思ったでしょう？」
「そ、そんな事ないぞ？」
当たらずとも遠からずのクレイネルの言葉に俺はしどろもどろと答えてしまっていた。
それを聞いていたクレイネルは顎鬚に手を添えながら俺の眼を見つめてきた。
「アレイ様、一度、正美様に魔力検査を受けてもらったら如何でしょうか？」
「魔力検査をか？」
「そうです。本来、魔力検査と言うのは成人する前の者がどんな魔法に適正しているか、どんな能力があるのか、どれだけの魔力容量(キャパシティ)があるのかを測るモノですが、今回は、正美様がどこから来たのかそして何故魔法が効かないのか。公爵家の客人とするのでしたら大切な事です。早急にした方がいいでしょう。」
「なるほど、確かにそうだな。私達は正美については何も知らないからな、今後の怪我の手当てを考えていくと情報はあればあっただけいいだろうな。それでは、正美が怪我が治ったら近場の町で魔力

検査をしてみるか」
「いえ、アレイ様、魔力検査でしたらここ公爵邸の地下にある水晶（クリスタル）でも調べる事は出来ます。それでしたら正美様の完治を待たずとも検査ができますでしょう」
「ふー分かった。クレイネル、お前に任せようとしよう。」
俺としても、正美の正体を含め、はっきりさせたいことは山ほど会った為、クレイネルの意見に従う事にした。

食事を食べ終わった俺は、食器を下げにきたメイドさんへエルフィーナがどうしてるか聞くと、部屋で何か縫い物をしてると教えてくれた。
たぶん、エルフィーナは俺の何気ない言葉に傷ついて部屋で何かしてるに違いない。
本来ならば、相手を傷つけた俺がエルフィーナの所にいくのが筋なのだが、昨日無理をしてしまったのか足を軽く動かすだけで激痛が走った。
「うっ・・・・・・」
体中に走った激痛に俺が、声を漏らすと、メイドが顔を真っ青にして近くに寄ってきた。
「大丈夫ですか?正美様」
「う、うん、だ、大丈夫」
俺は体に走る激痛に耐えながら、メイドさんに大丈夫だからと伝えるとホッとした表情で無理はしないでくださいね。と気遣ってくれた。
ベットの上に戻されて、布団を掛けさせられた。
特に眠くもないのに、俺の意識はあっという間に闇に飲まれた。

使役獣－初めての召還編（2）

正美（まさみ）が不自然な程の速さで寝付いた頃、屋敷のメイド達が宛（あて）がわれている部屋の一室でエルフィーナはせっせと人形を作っていた。
その人形は何かに良く似ていた。
黒い絹糸で現した髪の毛に白い布で作られた体そして、白いウェディングドレスがその人形には着せられていた。
エルフィーナはその人形の背中の部分に一本の長い髪を入れてから乾燥した小麦を手足の先まで詰めて背中の部分を赤い糸で縫いつけた。
「完成ですわ！」
エルフィーナが歓喜の声を上げながら、等身大の正美の人形に抱きついて頬擦（ほおず）りをしていた。
そしてエルフィーナの周りには色々な書物が重ねられており、その一冊にはこう書かれていた。《都市伝説万葉集》と・・・・・・

私の名前はイリシア・ローストと言います。
同僚のメイド達からはイリシアと呼ばれているのです。
今日は、メイド副長のエルフィーナお姉さまから、お客人である正美様のお世話を仰せつかりました。
今、私の前では正美様が唸（うな）っているのです。
何か怖い夢でも見ていらっしゃるのでしょうか？
「正美様！正美様！」
私は、正美様を起す為に名前を呼びながら体を揺すりますが、起きてくれません。
正美様の体を見るとうっすらと黒いモヤに包まれてる気が・・・・・・
私は急いで、クレイネル様を呼びに行く為、ドアを開けてから通路

を走りました。
時間的にはそんなに経っていないのに、初めて任されたお客様である正美様の異常事態と中々見つからずに時間だけが経過していく中で私の体力はあっという間に削られていきました。
執務室の前を通ると、探していた人の声が聞えて来ました。
間違いないです。アレイ様とクレイネル様の声です。
私は、ドアをノックもせずに扉を開けました。
アレイ様とクレイネル様は突然、開け放たれた扉と開けた張本人である私を二人で見ていました。
「イリシア！ここは館の主様のアレイ様の執務室なのだぞ？ノックもせずに開けるとはどういう事だ？」
クレイネル様が私を問い詰めてきます。
でも、今は、正美様の容態を話すのが先決。
「アレイ様、クレイネル様！正美様が大変なのです」
私の言葉を聞いた途端、二人の顔色が目に見えて変わりました。
「クレイネル、急いで正美の元へいくぞ」
私の横を通り過ぎて、クレイネル様とアレイ様は正美様の部屋へ向けて走って行かれました。
私も、お二人の後を追って正美様のお部屋へ疲れた体に鞭を打ちながら向かいました。

今、俺とクレイネルは、メイドのイリシアの話しを聞いて、正美の部屋に向かっている。
正美の部屋まであと1分ほどという所で、まだ昼間にも関らず館の魔流照明（まりゅうしょうめい）が全て消えうせ、館が暗闇に飲まれた。
「くそ、どういうことだ？クレイネル何か分かるか？」
「検討がつきませんが、嫌な空気が漂ってきています。すぐに正美様のお部屋へ向かいましょう」
昼間なのにやけに暗い廊下を歩いていくと、窓からの景色がおかし

い事に気がついた。
さっきまで晴天の青空だったのが、館の周辺だけ暗い雲に覆われていた。
「やっぱり何かの呪(まじな)いが掛けられているようですな」
その言葉を聞きながら先に進もうとすると、何もない虚空で何かにぶつかった。
「――――ッ！」
俺は、ぶつかった壁の周辺に手を這わせて調べてみると、通路一杯に不可視の壁が作られて居る事がわかった。
不可視の壁を俺は殴りつけたが、５m程弾き飛ばされて通路の床に背中を打ちつけた。
俺の様子を見ながらクレイネルが魔流術を使い始めた。
そして、言葉と同時に不可視の壁へ力を叩きつけるが全て霧散してしまう。
俺は思わず、奥歯を噛み締めた。
王宮最高峰と言われた、クレイネルの魔流術が通用しないという事はこの不可視の壁は力押しでは破壊する事が出来ないからだ。
「アレイ様、結界の力場の発生地点が分かりました。」
「何？本当か？」
「はい、結界に攻撃した際に力の補充を確認しました。恐らくはそこで儀式を執り行ったと思われます。」
そこで、イリシアが俺達に追いついてきた。
俺は、イリシアとクレイネルを連れて、クレイネルが指示する方へ向けて廊下を走っていった。

ここは夢の中？
周りには金色の粒子が舞い上がり幻想的な雰囲気を醸し出している。
同時に、脳味噌がかき回されるような痛みが体を襲ってきた。

「くそ、またか」
《正美、大変じゃ。どうやらお主に呪(まじな)いを掛けた者がおる》
「お前、相変わらず突然なのな・・・・・・」
《細かい事を気にするではない。今は呪いをなんとかするのじゃ》
「呪い？」
《そうじゃ、呪いがかかる直前にお主を強制的に眠らせて意識だけをここに隔離したのじゃ、だがこの呪いはかなり強い物のようじゃ。下手をするとお主の体がマズイかもしれん。私が与えた使役獣(しえきじゅう)をうまく使って呪いをなんとかするように》
「まてよ！俺には呪いって言われても何がなんだが」
《よし、理解したようじゃな。がんばるのじゃぞ、使役獣を召還する際の合言葉を忘れるでないぞ？》
「だから、少しは俺の話しを聞け、俺は何も承知してな・・・・・・」
そこで俺の意識が覚醒した。

意識が覚醒していくと同時に、体中に悪寒が走った。

アレイとクレイネルとイリシアが魔力の発生源であろう扉の前で立ち止まっていた。
「クレイネル、本当にここなのか？」
「はい、間違いありません」
「でも、ここってエルフィーナお姉さまのお部屋なのですよ？」
3者3用の言葉が通路で響く。
「あまり女性の部屋に押し入るのもな・・・・・・」
アレイが倫理観を持ち出しかけた所でクレイネルは特に気にした様子もなく、エルフィーナの部屋のドアを開け放った。
途端、鳥肌が立つような寒気がした。
クレイネルを先頭にアレイとイリシアが部屋の中へ入っていくと、エルフィーナが床に倒れていた。
クレイネルとアレイが駆け寄り抱き起こす。
「エルフィ、しっかりしろ！」
クレイネルがエルフィーナの肩を揺すりながら声をかけていく。
「――うっ、お父様。主様、一体どうしてここに？」
不明瞭な意識の中でエルフィーナが言葉を紡ぎだした。
「エルフィ、時間がない、一体何があったんだ？」
アレイが焦りながら、問いただすと、エルフィーナが記憶を遡（さかのぼ）るようにして考えてからゆっくりと口を開いた。
「そこに落ちてる本の通りに一体の人形を作りました。」
エルフィーナが指を指している本をクレイネルが拾い上げて読み始める。
読み始めるにつれ、クレイネルの顔色がどんどん悪くなっていく。
そして、本を閉じた後は真っ青になっていた。
「どうした？クレイネル何かあったのか？」
「アレイ様、この本は王都で禁止された禁書目録の一つです。内容

は反魂の魔流術です」
「反魂？それが今回の用途とどう関係があるのだ？」
「その前に、一つ聞いておきたい事があります。エルフィ、お前はこの本を読んでどんな用途で何をしたのだ？」
ようやく意識がはっきりしたエルフィーナは、父親の怒ってる理由がわからなかった。
「その本に、人に近い人形を作る事が出来ると書いてあったのでそれを真似て作ったのですけど？」
「それでその人形は誰を考えて作ったのだ？」
「正美様を考えてですけど？」
そのエルフィーナの答えに、クレイネルが肩を落としながら、説明を始めた。
「この禁書は、王都で作られた原書のレプリカの一冊です。この禁書に書いてある《都市伝説万葉集》と言うのは偽りの題名。
この禁書の本当の題名は、《死者の魂を利用した人形の開発書》」
その言葉を聞いた途端、その場にいたクレイネル以外の人間が驚きの声を上げていた。
国の法律により禁止された内容だったからだ。
禁止された内容としては、死者の魂は正者の魂を好み喰らう性質があるためだった。
その研究だけで一つの町が過去滅んだ事もあるくらい。だからこそ、法律で禁止し悪用しなくても使った者には例外なく極刑が下されていた。
「そ、そんな、わ、私、そんな事、し、知らなくて」
エルフィーナがこれから自分の身に降りかかる事を実感してうわ言のように呟きながら虚ろな眼差しで体を震わせていた。
「で、クレイネル、結果的にどういう事なんだ？」
「はい、正美様はまだ存命の為、恐らく正美様を殺してその魂を自分で喰らい正美様にとって代わろうとするはずです。
あの不可視の結界も我々に邪魔をされるのを防ぐ為に作り上げた物

でしょうな」
正美が殺される？俺の心臓が痛いくらい跳ね上がった。
思わず俺はクレイネルの両肩を力一杯握り締めていた。
「なんだって、どうするんだ？何か手はないのか？」
「一つだけあります。その人形に入っている正美様の髪の毛を抜き取り人形を焼くのです。そうすれば騒ぎは収まるはずでしょう。結界に関しては、幸いこの禁書に結界透過の術がかけられています。この本を持っていけば結界を潜り抜けるはずが出来るはずです」
クレイネルのその言葉に俺は、長剣を右手に、禁書を左手に持って部屋を飛び出した。
クレイネルはアレイを見送ったあと、エルフィーナに視線を移した。

俺は、悪寒で震えるそうになる体を必死に押さえながら、瞼を薄らと空けて周辺を確認した。
照明は全て消えていて、窓の外も黒い霧が渦巻いていて光が差し込んでこない。
なのに、俺の視界はこの部屋の中が手に取るように視る事が出来る。
そこでふと、俺は部屋の扉のドアが音を鳴らしながら少しづつ開いていくのを視てしまった。
扉が人一人が通れるくらいまで開いた所で、入って来たモノのを視て、小さな悲鳴をあげかけたがそれが言葉となる事がなかった。
なぜならば、どんなに力を込めても、体が動かない体がいう事を効かないから。

《―金縛り―》

それが俺の頭の中に浮かんだ事だった。
そいつは、血の滴る包丁を両手でもち、真っ赤にそまった白いウェディングドレスを着た私？悪霊？だった。
部屋の中に敷いてある絨毯の上に血をポタリポタリと水滴のように包丁から垂らしながら、ベットの上でもがいてる俺に一歩一歩それは近づいてきた。
その行動はすごく不気味に瞳に映った。
頭の中だけで思考することしか出来ない俺は、その悪霊を恐怖の眼差しで見つめていた。
ベットの側まで悪霊は来ると、赤い血を滴らせた瞳で俺を見つめて一言呟いてきた。
『契約の名の元に一つになりましょう。』
と。
両手の包丁を頭上まで上げたあと、包丁から零れた血が俺の唇の上に落ちて、咥内に侵入する。
咥内で甘いような蜜のような味がしてから体全体に広がっていった。
「甘い、何だこれ？」
右手を唇に持っていって俺はそこで自分が動けるようになった事に気がついた。
包丁が俺の腹部へ向けて振り下ろされてくる。
ベットの上で俺は、転がるようにして包丁をさけ、目標を失った包丁がベットに突き刺さり布団の中の羽毛が舞い上がった。
俺は、体を横たえたまま転がるようにしてベットから落ちた。
すぐに立ち上がろうとしたが、先日の無茶な行動で痛めていた四肢が悲鳴をあげて痛みを伝えてくる。
「くあああああああああ」
俺は、大声を上げながら痛みを堪えるようにして絨毯の上に両足で立ち上がった。
痛みのあまり、額からの脂汗が止まらない。
「お前、一体なんなんだ？」

俺が話しかけた途端、その悪霊は涙のように血を流しながら俺の方を見つめてきた。
『私は契約を執行する者ジェード。さあ、一つになりましょう』
そういうと、ジェードが俺の方へ駆けてきた。
――――ッ！転がるようにして首目掛けて振られてきた包丁を避けた。
転がりながら距離を取った後、立ち上がろうとすると足から力が抜けて、絨毯の上に背中から倒れてしまった。
腹部に軽い痺れを感じ、倒れたまま、腹部を見ると黒い包丁がわき腹に刺さっていた。
刃物は心臓のように脈動し、水を飲むように音を立てて血を吸い上げている。
そこまでで、俺の視界が段々とぼやけてきた、それと同時に血が吸い取られて体温が下がっていっているのか体がガタガタ震えだした。
俺は、どうにも出来ないまま、妙にあっさりと自分の死を認めていた。
そこで俺の意識が途絶えた。

俺は、エルフィーナの部屋から出て正美の居る部屋に向かう為、通路を駆け走った。
正美の部屋が近づくに連れて、生理的な恐怖で心臓が跳ねるように鼓動を早くする。
正美、無事でいてくれ。俺は心の中で祈りつつ、走る。
部屋まであと少しと言う所で、不可視の壁に弾き飛ばされて通路の床を転がった。
「くっ・・・・・・」
本があれば、通れるんじゃなかったのか？
俺は通路に落としてしまった本を拾い上げようとすると本が風もないのに開いていく。
ページが次々と破れ、不可視の壁に張りついていく。そして、ガラスが砕けるような音がしたと同時にページが燃え上がった。
これは？
俺は急いで先ほどまで不可視の壁があった場所へ飛び込むと抵抗もなくすんなりと通ることが出来た。
先にいける・・・・・・
正美のいる部屋にそのまま駆け込むと、正美が絨毯の上に倒れこんでいた。
倒れこんでいる正美の横に正美の形をした人形が立っていて、右手に持っているナイフを正美に向かって振り下ろそうとしていた。
「貴様、何をしているんだ！」
俺は、人形に向けて走りナイフを持っていた右手を握り締め、そのまま扉の方へ投げつけた。
正美の容態を見ると、腹部にナイフが刺さっており、白いワンピースが真っ赤に染まっていた。
「くそが」

俺は、怒りで理性が飛びそうになるのを唇を噛み締めて抑えていた。
『な・・・・・・ぜ・・・・・・・邪魔・・・・・・・を・・・・・・・する？』
俺は、その言葉を吐いた人形に長剣（バスターソード）を振るう事で答えた。
金属が打ちつけられる音が室内に響き渡る。
俺の剣をナイフで受け止めるだと？
ナイフで長剣を受け止めるなど、普通では出来るはずがない。
俺は一歩下がり相手の出方を見ようとすると、それに合わせたように俺へ向かって走ってくる。
横薙ぎに長剣を振るうと人形が跳躍し４ｍ近い天井を足場にしてから正美に向けて跳躍する。
俺は人形に体当たりして体勢を崩しながら人形と共に絨毯の上を転げた。
一回転したまま、反動をつけたまま、立ち上がりまだ絨毯の上に倒れていた人形の体に長剣を叩きつけた。
長剣が人の体を斬ったような感触を手に伝えてきた。
なんで、人形を斬ったのに人と同じ感触がするんだ？
俺が思考している間に、何事も無かったように、人形が立ち上がってきた。
それも、俺が斬り落とされた右腕を絨毯の上に落としまま・・・・・
同時に室内に正美の悲鳴が響き渡る。
「なっ？」
正美の方を見ると、人形と同じ右手の部分が斬り裂かれていた。
どういうことだ？
『くっくっくっ、ようやく。ようやく』
突然、人形が饒舌な言葉を吐いていた。
正美を俺が、傷つけたのか？一体どうなって？
俺が動揺した瞬間、何十本ものドス黒い触手が床から生み出されて俺の体中に巻きついてきた。

「くそ、貴様、一体何をしたんだ？」
俺は絨毯の上に叩きつけられて、身動きが取れなくなった。
その俺を冷ややかな目線で人形が見下ろしてる。
『私の名はジェード、そしてもうすぐ正美になる。すでに体は同化を終えた、お前が私を傷つければそれは正美を傷つける事になる。お前にはもう何も出来はしない。そこでゆっくりと見てるのだな。私が正美を侵食する様をな』

俺の見てる前でジェードが一歩一歩正美に近づいていく。
「焚き炎（ほのお）　我（わ）が意志（いし）をまま　命（めい）ずる者（もの）を焼（や）き尽（つく）せ」
俺が発動させた魔法が、俺ごと束縛していた触手を焼き払う。
自分が発動させた魔法とは言え、多少は熱かったが耐魔法が自動的に展開される為、死ぬほどの危険性はない。
正美の方を見ると、ジェードが咥内からドス黒い触手を作り出して正美の咥内を犯していた。
正美の体が時折、びくんと跳ね上がる。
「きさま！」
俺はそのままジェードを組み伏せた。
だが、これ以上はどうすればいい？
こいつを傷つければ正美が傷つく。
俺が考えてる間にも、腹部と右手から血が流れワンピースが吸収しきれなくなった血を絨毯が吸い取っていく。
それはまるで、食虫植物のように見える。
ジェードを組み伏せたまま、俺が「正美をすぐに元に戻せ！」と言うと、すでに手遅れのような顔をして俺を見つめてきた。
その顔は、人間のような表情をしていた。
『もう手遅れだよ、もうすぐ本物（まさみ）は死に、偽りの生であるこの体は実体となる、虚像が実体化する。もうこれは誰にも止められない。』
「なんだ・・・・・と？」
『くっくっくっ。人間と言うのは愚かな者だな、そうそう、いい事

を思いついた。
そんなに、この娘がご執心なら私がお前の女になってやろうか？体、そしてもうすぐ記憶も私は正美になる。不都合は何もないぞ？私ならば長い間生きてきたから、男を喜ばす術をたくさん心得ている。どうだ？死にかけのモノなどほっておいて私と契りを結ばないか？』
「ふざけるな！」
俺は、こんな風に人をバカにしたり、冷えたような目をしてるようなモノに興味はない。
すぐに顔を真っ赤にしたり、恥らうような態度や視線を投げかけてきたり、少しの事で笑うような正美が好きなんだ。
顔や体がどんなに似ていてもジェードと正美はまったく違う。
『くっくっくっ、いいのか？そんなに考えていて、どんなに考えても、死ぬことには変わりないがな』
俺は正美の容態を見ようと正美の方を見ると一人の男が立っていた。
その男の体は透けていて、体を通して背後の壁が見えた。
それでも不思議と怖い、敵という感じがしなかった。
なぜなら、正美を見るその男の眼差しはとてもやさしかったから・・・・・
男が、俺が抑えてるジェードを強い眼差しで見てきた。
『そんな簡単に私達の大事な子供をお前のようなモノにやるわけにはいかない』
男が決意のある強い口調で言うと同時に正美に刺さっていたナイフが砂になり腹部の傷と右手の傷が塞がり始める。
それを見ていた、ジェードが目から血を流しながら男を睨(にら)めつけた。
『き、き、貴様！け、契約を・・・・・・契約を解除したのかあああああ」
狂ったようにジェードが俺が押さえ込んでいたにも関らず暴れはじめた。

何もない空間に俺はいた。

ここはどこだ？

なんで俺はここにいるんだ？

俺は、誰なんだ？

俺は一体俺ってなんだ？

シャボン玉が俺の周囲に浮かんでは割れていく。

床から浮かび上がったきたシャボン玉を見ると、知ってるような懐かしいような風景が映っている。

その風景は、大きな建物がたくさん建っていて、夜の街を照らしている。

そして、そのシャボン玉が弾けると同時に俺の中で大事な物が消える。

同時に聞いた事があるようなやさしい声が鼓膜を揺さぶった。

『正美』

一人の女性が俺の前に立っていた。

俺を両手で抱しめて頭を撫でてきた。

とても、安心する匂い。

ずっと待っていた安らぎ。

「だ・・・・・・れ？・・・・・・」

それでも、思考に霧がかかったようにボーっとしてくる。

『こんな所で死んだらダメよ、私達の所に来るにはまだ早いわ』

「・・・・・・？」

『お父さんもお母さんもあなたを見守ってるから』

「・・・・・・・・・・・・」

「お、かあさん？」

「うん。お母さんよ」

ギュッと俺を抱しめてくれる。

「ごめんね、一緒にいられなくて・・・・・でもね、私もお父さんも貴方をずっと愛してるわ、だから簡単に死んだらダメよ。」
そういうと、おかあさんは光と共に消えた。

それと同時に俺の意識が鮮明になってくる。
『この戯(たわ)けが！何をしているのだ？』
いつも、俺の意見を一切聞かない高飛車な声が頭の中をかき回すように響いてくる。
いつも、いつも突然な奴だな。
俺は思わずイライラしてしまい、言い返した。
「うるせえ、俺だって好きでこんな事してるんじゃねえ」
『ふむ、少しは元気が出たようだな。呼んで来た甲斐があったというものじゃ』
「呼んで来た？訳の分からない事、言ってんなよ」
『ふふふ、どうやら今あった事を忘れてしまったようじゃな。まぁ、これはこれで面白いかもしれんな。』
相変わらず人を食ったような態度の奴だ。
「で、なんの用だ？」
『ふむ、用というほどのモノじゃないのじゃ』
「いま、立て込んでるんだが？」
『それは殺されかけてるという事か？』
「知ってるならどうにかしてくれよ」
『お前には使役獣を貸してやったろう？それを使えばいいのじゃ』
「まて、使役獣を使うって事はあの恥ずかしいセリフを言わないといけないんだろ？」
『ふむ、つまり正美、お主はボコボコにやられたまま尻尾を振る腰抜けという事か。まったく日本男児も堕ちたモノじゃな」
「なんだと？俺の中に寄生しているお前だけには言われたくないわ！」
『ほれ、よく言うじゃろう？聞くは一時の恥、知らぬは一生の恥と

それと一緒じゃ、それとも何か?うわーん、ママ怖いよータスケテーと私に泣きつくならば助けてやらんでもないぞ?』
「ああ?お前、今度絶対泣かすからな!」
『ふむ、なら行って来い』
「ちょっと、まっ・・・・・・」

俺が話しかけてる途中で、俺はこの空間から弾かれた。

空間に一人、残された私の前に、一組の男女が現れ、頭を下げて光と共に消えた。
『まったく、あの男はこれだけ両親に愛されてると言うのに、心の底では死にたがっているとは愚かな者じゃな』
何もない空間に一人の女性の声が木霊(こだま)した。

くっ・・・・・・

俺は、正美の父親が消える前に、俺に伝えてきた言葉に動揺してしまい、その隙をつかれて殴り飛ばされた。

正美の方へ絨毯の上を転がりながらすぐに立ち上がった。

とんでもない力だな。

抑えてる事すら出来ないとはな・・・・・・

俺は、長剣（バスターソード）を両手に握り締めて、正美を庇（かば）うようにジェードと対峙した。

ジェードが１０m近い距離をわずか数歩で詰めてくる。

ジェードは握っているナイフを俺に向けて突き出してくるが俺はそのナイフを持ってる手を長剣で切り落とした。

『くあああああああ』

人が発する事が困難なほどの音を口からジェードが紡ぎだしてくる。

俺は、長剣を構えたまま、相手の出方を伺（うかが）った。

『や、やっと、ここまで再生出来たのに、貴様が、邪魔をしたから、何もかもダメになった。』

「再生？何もかも？ふざけんなよ。お前達の価値観を人に押し付けてそれでうまく行かなかったら責任転換（せきにんてんかん）か？

それにな、俺の女に手を出した以上、只で済むと思うなよ。お前のような価値観を通す気はないからな」

俺の話しを聞いた途端、ジェードが走って部屋から飛び出した。

「しまった！」

まさか逃げるとは思わなかった。

正美を置いて追いかけるか？

くそ、そんな事出来るわけないだろうが！

俺は、正美の首元に手を当てて心拍を確認した。よかった、生きてる。

そのまま、正美を抱き抱えると正美が身動ぎしたあと、瞼を開けた。

「アレイ？」

俺が瞼を開けた後、瞳に映ったのはアレイだった。

「どうしてここにいるの？」

「お前を守る為に、急いで駆けつけたんだ。」

「そうなんだ、ありがとう」

自然とお礼が言えた事に驚いた。

そこで俺は気がついた。

刺された腹部が塞がっていた事に。

「アレイが治療してくれたの？」

「俺じゃないが別の人になるのか？」

「もう～はっきりしないなー」

そういえば、何でこんなにアレイの顔が近いのかな？

・・・・・・・・・・・・・・！

「アレイ、何、私を抱いてるのよ。下ろしてよ」

俺がジタバタするとアレイが少し残念そうな顔をして下ろしてくれた。

「もう大丈夫なのか？」

「う、うん。もう大丈夫みたい」

「そうか、よかったな」

アレイがそう言いながら俺の頭を撫でてくれる。

とってもくすぐったいけど、気持ちいい。

「もう、髪の毛ぽんぽん触らないでよね！」

「すまない。正美が無事だと思って安心したんだ」

そう言ってアレイが笑いながら、俺の瞳を覗き込んできた。

アレイの赤い瞳に見つめられた途端に、心臓がドキドキしてくる。

「ちょ、調子に乗らないでよね、別にアレイの事なんて何とも思っ

てないんだから」
「そうか？結構意識してるような気がするんだが？」
アレイがニヤニヤしながら俺を見てくる。
「自意識過剰なの、少しは直した方がいいと思うよ、それにさっきまで居たジェードはもう倒したの？」
「いや、逃げられた。」
え、それって危険なんじゃ？
「すぐ追わないとまずいでしょ。アレイ、私の事はほっといて探しにいって」
「わかった。正美はこの部屋から出るんじゃないぞ？」
「うん、わかった。」
俺がそう答えると、アレイは部屋の扉から走るようにして出ていった。

さてと・・・・・極力人には見られたく無いから人払いしたんだけど・・・・・・
やりますか。

ゴクリ・・・恥ずかしい・・・・・・

やるしかないんだよね・・・
よし、両手でほっぺを叩いて喝をいれる。
部屋の中央まで言ってから深呼吸をする。
さてと・・・・・・

「私の正義が」
俺の足元に緑色の魔法陣が展開される。
「悪を撃ち滅ぼす。」
魔法陣の文字が動き出して大気に積層円の魔法陣が書き込まれていく。
「こい、神の使者!」
強力な光が視界を覆い、煙が発生する。

まさか、本当に召喚が成功するなんて・・・・・・一体どんなのが来るんだろ。
ドラゴン?ユニコーン?ケンタウロス?
煙が少しづつ晴れていく。
同時に俺の期待感が膨らんでいく。
そして煙が晴れた所にいたのは、予想外の使役獣だった。

その使役獣は俺を見てこう言った。

「初めまして、ご主人たま!」

と・・・・・・

使役獣－初めての召還編（6）

・・・・・・・・・・・・・・・

ゴシゴシ（瞼を擦る音）

じーっ・・・・・・・

ゴシゴシゴシ（再度、瞼を擦る音）

「どうも私、まだ寝ているみたいだわ」

俺はそう言いつつベットに入ろうとすると、

小動物が俺の移動先であるベットの上に先回りして口を開いた。

「ひどいでち！ご主人たま、僕の存在を無かった事にしようとしてるでち」

俺は、ベットの上で戯言を言っている小動物を両手でむんずと掴むと床に置いてからベットに入った。

「やっぱり、疲れてるな・・・・・・」

布団をかけて寝ようとすると俺の顔の上に小動物が乗ってきた。

「ご主人たま、なんで意地悪するでちか？」

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

幻覚じゃないのか――。

俺は、ベットから上半身だけ上げると小動物は俺の膝の部分にちょこんと乗っかった。

小動物は、チンチラと呼ばれる猫だった。

少し違うのが耳がすごく長くてたぶん床に置いたら床につくと思う。

色は真っ白で眼の色はブルーで大きさは３０ｃｍ？くらい。

はぁ、あんな恥ずかしい言葉を言って召還したのがこんなモノなのか。

「ご主人たま、今、酷い事考えたでちね？」

エスパーか、こいつは・・・・・・

「ねえ？君、クーリングオフとか効くの？」

「くーりんぐおふ？ってなんでちか？」
「簡単に言えば、お帰りくださいって事かな？」
「ひどいでち！やっと呼んでもらったのにすぐに実家に帰れなんてあんまりでち！」
「私としても、召還したらこんな小動物が出るとは思わなかったから・・・・・・」
「僕だって、一応使役獣としての面子ってのがあるでちよ」
「そう、よかったね。じゃ私と話したって事にしてもう帰っていいよ」
「ううー。ご主人たま、とっても意地悪でち」
「だって小動物だとペットにしか出来ないし、一応ここにお世話になってるからペットはちょっとお願いしずらいんだよね」
「僕はペットじゃないでち！使役獣でち！」
俺を見ながら、うるうると蒼い瞳で見つめてくる。
なんかすごく罪悪感を感じるというか、なんというか・・・・・・
「仕方ないな～。じゃアレイに後で聞くからそれまで大人しくしてるんだよ？」
「分かったでち！そういえば、ご主人たま」
「ん？何？」
「僕を呼んだのは何をさせる予定だったでちか？」
俺がそれに答えようとした所で、ガラスが割れる音が聞えた。
急いで、表を見るとエルフィーナが庭を走ってるのが見えた。
エルフィーナの着ている白いエプロンが真っ赤に染まっている。
「い、一体どうなってるの？」
俺が動揺して言葉を紡ぐと、
いつの間にか俺の頭の上にのっていた小動物がエルフィーナを見て呟いた。
「あの女の人、精霊に取り付かれてるでち。早くしないと魂も肉体も食われちゃうでち」

小動物は重要な事をサラリを言ってのけてきた。
「ちょっと、どうすればいいの？」
「簡単でち、僕を使ってあの女の人の頭を殴ればいいでち」
俺の瞳で見ても、館の庭を走るエルフィーナの速度はスプリンター選手なみの速さだった。
この非力な体で追いつけるとは思えない。
「いくら、小動物って言っても殴られたら痛いでしょ？そんな事は出来ないよ。
それにあんなに早く走られてたら追いつけないよ」
俺は視線を足元に落としながら、言うと小動物が「その事なら、大丈夫でち」と言ってきた。
「どういう事？大丈夫って？」
「僕と契約すればいいでちよ」
「あー。どっかで聞いた事のあるセリフなんだけど・・・・・・キノセイだよね？」
「気にしたら負けでち！」
「普通気にすると思うけど・・・・・・？」
「でも、今回は特別サービスで契約なしで力を貸すでち！ちょっとだけ体がきついかも知れないでち」
「まあ、そのくらいならいいよ」
「了解でち！」
小動物が答えると同時に、締め切ってある部屋内に風が舞い起こる。
それが俺の体を包み込み、終ったあと俺は絶句してしまった。
窓ガラスに映るその姿は・・・・・・
白いふさふさしたネコミミに巫女装束をきてふさふさな尻尾を生やした、ネコミミ巫女だった。
髪の毛は両端がお団子になってツインテールのように垂れ下がって丁度いい長さになっている。
武器と言えば、一抱えあるほどの大きさのピコピコハンマーを持っていた。

俺は、自分が映った室内の窓ガラスを死んだ魚のような瞳をしたまま見て固まっていた。

使役獣ー初めての召還編（7）

・・・・・・・・・・・・。

《ご主人たま。しっかりしてくださいでち。あぶないでち。》

・・・・・・・？

《ご主人たま！》

ん？何かあったような気がするような・・・・・・？

《前、前を見てほしいでち》

「ん？」

何か、段々と、地面が向かってくるような感じが・・・・・・？

《そうなのでち、女の子を追おうと思って窓から飛び出したんでち。

そしたら、地面まで５ｍ以上もあってピンチでち》

「小動物、お前なんて無謀な事してるんだよ」

くっ。

俺は体を捻りながら足元から着陸した。

しかも、まったく足に衝撃を受けない。

《さすがご主人さまでち。それに話し方も元に直ってるでち》

「元に？どういう事だ？」

《さっきまで、ご主人たまは精霊の血を飲んだ影響で言葉使いが無意識的に女性になっていたでち》

「まじか？」

《まじでち！》

はぁ、俺、どこまでいっちまうんだ。

《ご主人たま、女の人はここから４ｋｍ所を走ってるでち》

「わかった。でも裸足（はだし）で走るのは痛そうだよな」

《大丈夫でち、きちんとオプションも完備してるでち》

小動物の声が頭の中で響くと同時に地面を踏んでた感触が変わった。

俺は、足元を見ると赤い袴が膝上２０ｃｍになっており、

膝から下がふさふさの毛がブーツのようになっていた。

足裏を見ると肉球があった・・・・・・
「あー。俺どこまでいっちゃうんだろうなー」
《ご主人たま、感激してる場合ではないでち。急いで追うでち》
「いや、感激してないから、黄昏てたんだよ」
俺は溜息をつきながらエルフィーナを追うため意識を切り替えた。
そして、地面を思いっきり蹴った。
地面が爆ぜるように爆発し、周辺の景色が一気に後ろに流れる。
「な！　」
俺が驚いてる間にもたった１０歩で館の外門までたどり着く。
バカな？門のところまで軽く３００m近くはあるのに・・・・・・
俺が驚いて、思案していると小動物の声が頭の中に響いた。
《女の人は、この門から出て４ｋｍの場所にいるでち》
突然、門前に現れた俺に警戒しつつ、数人の兵士が俺の方へ走ってくる。
前方を見ると門が閉まっている。兵士に事情を説明してる暇はないよな？
俺は、門を飛び越すために、地面を踏み込み跳躍した。
そして、俺はその跳躍力に驚いてしまっていた。
門を飛び越してさらに、１００m以上跳躍している。
館や門が遥か下に見える。
そして、遥か後方に門を置いて地面に降り立つ。
《ご主人たま、やばいでち。女の人が人の生命反応がたくさんいる方に向かってるでち》
「なんだって？それってやばいんじゃないのか？」
《やばいでち、今、あの精霊が人とあったら生命を喰らって力を取り戻してしまうでち》
「ちっ」
足元の地面が破裂するほどの力で地面を蹴りこみ、一気に加速していく。
同時に、体中の皮膚が、尋常ではない移動速度が起す空気の断層に

より浅く切り刻まれていく。
《ご主人たま、それ以上は体に負担がかかるでち》
「一度、係わっちまった人が人を殺したり、過ちを犯すのを黙って見ていられるほど大人じゃないんだよ！」
《でも、ご主人たまの体が・・・・・・・》
「俺はいいんだ。もう・・・・・・」（誰も待っている人はいないからな）後半は心の中で付け足す。
《ご主人たま・・・・・》
一歩地面を踏み込むごとに加速し、同時に体中、風で傷ついた傷跡から血が噴出す。
それが血飛沫となって空に舞い上がる。
そしてエルフィーナの姿を見つけることが出来た。
俺とエルフィーナの距離は、このスピードならあと2歩ほど。
町が前方に見えたが、まだまだ距離はある。
ピコピコハンマーを右手で握り締める。
一歩進む、地面に亀裂が入り砕ける。そして上空へ飛び上がり、両手でピコピコハンマーを上段に構える。
落下地点が丁度、エルフィーナの頭上に差し掛かった所で、頭に振り下ろした。
同時に、竹を割ったような音がして、エルフィーナが膝から崩れ落ち、
黒い霧がエルフィーナの体から、沸きあがってきた。
あれ？すごい音がしたんだけど死んでないよな？
俺が恐ろしい、想像をしていると小動物が脳内で叫んできた。
《ご主人たま、今でち。封印するでち》
良く見ると、エルフィーナの体から出た、黒い霧が辺りを漂っている。
放置してて良い物じゃないよな。
でも俺、封印の仕方しらないぞ？仕方ない、小動物に聞くか。
「封印はどうすればいいんだ？」

《僕の言ったとおりに言ってでち》
「わかった」
《聖なる巫女の名の元に》
・・・・・・・・・・・・・・・。
《さあ、ご主人たま、言ってでち》
・・・・・・・・・・・・・・・。
「なんというか、恥ずかしいというか罰ゲームな気がするんだが？」
《ご主人たま、あれを放置しておくと何人も死んでしまうでち。》
「くそ、わかったよ」
俺は、覚悟を決めると黒い霧に向けて視線を向けた。
《いくでち！》
《聖なる巫女の名の元に》
「聖なる巫女の名の元に」
《数多の神々の名の元に》
「数多の神々の名の元に」
《狂(くる)えし、御霊(みたま)、今ここに浄化を封印をおこなわん》
「狂(くる)えし、御霊(みたま)、今ここに浄化を封印をおこなわん」
ピコピコハンマーが急に金色に光り輝き、黒い霧を吸い込んだ。
《これで成功でち、ご主人たま？》
正美が虚ろな瞳をしたまま、そのまま倒れこんだ。
《ご主人たま、ご主人たま、ご主人たま！》
誰にも聞えないまま、使役獣の声が主の心の中で響いた。
霧を吸い込んだと同時に俺の意識が別の所に運ばれるような感じがする。
周りの景色がゆっくりと安定してくる。

俺の瞳の先に巨大な人工物が見える。
それは、半分壊れた偶像だった。
「何かの宗教的建物なのか？」
周りを見ても何もない。
唯一、存在する通路を歩いていく。手掘りというか、洞窟のような感じがする。
しばらく歩くと、一筋の光が暗い洞窟の先に見える。
俺は、洞窟を走っていくと、洞窟から出る事が出来た。
そこには、数十人の武器を持った兵士が一人の女性と女の子を引き離そうとしている所だった。
一人の兵士が女性に向けて叫んでいた。
「この異端者が、こんな所に礼拝堂などを作るなど！」
「やめて、ママを苛めないで」
女の子が必死に母親を助けようとしているが、５歳の女の子では、大人の男に叶うはずがない。
「申し訳ありません。娘は、ジェシカは関係ないのです。全ては私が」
「うるさい！異端の宗教の分際で我々の手を煩わせたばかりか意見を申すというのか」
母親に言葉を吐き出している兵士とは、別のもう一人の兵士が手に持っている槍を女性の背中に向けている。
俺はとっさに飛び出して槍を掴もうとすると手が擦り抜けた。
「なっ？どういうことだ？」
俺は、驚き、呟きながらも、違うモノを触ろうとするが、兵士にも女性にも触ることが出来ない。
俺がまごついていると女の子が泣きながら兵士達に懇願していた。
「誰か、ママを助けて、ママは悪い事してないの、だから助けて」
その声を聞きながら一人の兵士が女の子を押さえつけている兵士へ視線を向けた。
「おい、異端の女はいつもの所に連れていけ」

女性の後ろ姿を見たまま、女の子が男に押さえつけられたまま、自分の母親を泣き叫び呼んでいた。。

そこで景色が揺らぎ、別の景色が映りこんできた。
どうやら、どこかの建物のようだ。
煉瓦作りのしっかりとした４m近い壁に３m近い分厚い樫(かしの)の木で作られた扉が据え付けられている。
そこには、二人の兵士が話しをしていた。
「なあ？知ってるか？」
「ああ、例の黒の魔人ジェードの事だろう？」
もう一人の男がそう返すと、最初に話しを振った男が首を縦に振っていた。
「ああ、今年に入って、清教徒騎士が１００人近く殺されてるらしい。」
「まったく迷惑な話だな、俺達になんの恨みがあるのか分からないがな」
そこで二人の首が、黒い触手で跳ね飛ばされた。二人の頭はボールのように地面を転がり、体は力を失うようにして膝から前のめりに地面の上に倒れこんだ。

一人の生き物が近づいてくるのが見える。
良く見ると真っ黒な体をしていたが女の形をしていた。

そのまま、真っ直ぐ歩いて、立ち竦んでいた、俺と重なりあった瞬間にジェードの記憶が流れこんできた。
見るも無残に強姦され、虚ろな眼差しのまま事切れた女性とそれを見つけて泣き崩れてる女の子。
「ママ、ママ、嫌だよ、こんなの嫌だよ、なんで返事してくれない

の？なんでなんで？」
女の子の心が壊れるような痛みが、直接、俺の心を締め付けてくる。

いつのまにか、一人の男が、女の子に話しかけていた。
「ママが帰ってくる方法があるよ。」
その男の言葉は、５歳程度の女の子にはとても魅力的に映ったのだろう。
「ほんと？ママ。また話してくれる？」
「ああ、話してくれるよ」
「だから、ちょっと手伝ってくれるかな？」
「うん」
「いい子だ、これを飲んで感想を聞かせてほしいんだ」
男がそう言うと一つの瓶を取り出して女の子に渡した。

その後は、凄惨な一言に尽きた。
女の子の体が異形と化し、命を喰らい尽す。
対象は深い憎しみをもった、母親を殺した奴らの同胞。

一人殺すごとに、女の子の心が壊れていく。
男はそれを見ながらこう呟いていた。
「闇の精霊との融合に失敗したか。使えんモルモットだな」・・・とそして場面は切り替わり、辺りは大理石で作られた巨大な神殿だった。
一人の金色に光り輝く女性が辛い表情をしたまま、異形と化した女の子を封じていた。
「わるいのう、私にはこのくらいしか出来んのじゃ。本当にすまない。闇精霊（ジェード）いや、ジェシカゆっくりと眠るがいい。いつかお主を救ってくれる者が現れるまでな」

使役獣ー初めての召還編（8）

気がつくと俺は一寸先まで闇で見通しの利かない空間に浮いていた。
浮いていたというのもおかしい表現かもしれない。
全てが漆黒で塗り固められた空間の中では、自分の手すら見ることが出来ないのだから。
人は暗闇に根源的な恐怖を感じる。
それは、未知なるモノに対する無意識下の中における根源的な生物の本能による。
でも、俺はこの漆黒の空間の中にいても恐怖を感じる事は無かった。
それと、根源的（こんげんてき）に違うものを先ほどから感じている。
それは、さびしさ、悲しさといった感情だ。
俺が、親を無くした際に感じた感情に似ている。
偽善かも知れない。でも俺には、ほっておく事は出来ない感情だ。
確信は無かったが、何かに導かれるように暗闇（くらやみ）の中を一歩一歩進んでいく。
しばらくすると、漆黒の空間の中に淡くすぐにでも消え去りそうな淡（あわ）い光が見えた。
その光に近づくにつれ、輪郭（りんかく）がはっきりと見えてくる。
目の前までくると、淡い光を放っていたのは幼い5歳くらいの女の子だった。
女の子は俺が近づいてくるのに気がつくと、俺の顔を見上げてきた。
金色の髪に金色の瞳、淡い光を放つ髪が肩で切り揃えられており、若干ウェーブがかかっている。
「お姉ちゃん、ママがいないの。知らない？」
女の子が、泣きそうな顔で、否。ずっと泣いていたのだろう。
うっすらと瞳から流れている血が女の子が着ている淡い青色の服を紺色に染め上げている。
俺には、女の子にかける言葉を持ち合わせていなかった。

言葉なんかじゃいくら飾り立ててもそれは意味を成さない事を俺は知っているから・・・・・・
だから、俺は女の子を胸の中に抱いて、頭を撫でた。
少しでも、恐怖や悲しみを紛らわせる事が出来ればと。
俺にはそれしか出来ないから・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
「おねえちゃん？」
「うん？何？」
俺は、女の子を安心させるために意図的に女性の言葉使いをすることにした。
「私、たくさんの人を殺したの」
「そう」
「だから、もう私には人にやさしくしてもらう資格はないの」
「やさしくしてもらったり、するのに資格なんて必要ないよ。誰かを愛しく思う気持ちが重要なのだから」
「愛しく？」
「そう、誰かを愛したり愛されたり、そういう気持ちが重要なの。だから、誰かにやさしくしたり、やさしくされたり、そういうのに資格は必要ないんだよ」
「本当に？」
「うん」
「私も、誰かに愛される資格はある？」
「うん、私が愛してあげる。だから、もう一人で心を砕いて泣かなくていいから、さびしい時や悲しい時は遠慮なく頼っていいからね」
「うん、うん、うん。」
女の子が俺の胸に額を当てて、堰を切ったように泣き始めた。
その涙は、血の色ではなく透明な澄んだ涙だった。
慟哭が空間を震わせていく。
女の子が俺の服を掴んだまま泣き続ける。
きっとずっと我慢して心を壊して泣いていたのだろう。
体全体を震わせて、泣いている女の子は抱いているにも関らずとて

も儚(はかな)く壊れやすく脆く感じる。

気がつくと、漆黒の空間だった場所が辺り一面、色とりどりの花畑になっていた。

淡い光が降り注ぎ、俺と女の子をやさしく照らし出す。

そこで一人の女性がこちらを見て微笑んでいるのに気がついた。

俺はすぐに気がついた。その女性がこの女の子の母親という事に。

女の子の頭に手を置くと、女の子は、俺を見上げてきた。

そこで、俺は女性がいる方に指を指して教えてあげた。

女の子の顔が、花が咲いたように笑顔になる。

俺は女の子を立たせて、女性の方へ向かうように肩を軽く押してあげた。

女性の方へ女の子が走っていく。

そして、女性も走ってくる女の子の方へ走り駆け寄り二人が抱き合った。

「ジェシカ！」

「ママ！」

二人が涙を流しながら抱擁をかわしている。

それに伴い、花が散っていき、女性と女の子が光となって天へ上っていく。

俺は、それを見ながら少しうらやましく思い、同時にさびしい感情を抱いていた。

そして、女の子が母親に会えた事に嬉しさを感じてていた。

「よかったな・・・・・。ママに会えて」

自然とその言葉が口から出てきた。

その時、ふと気がつくと女の子を抱いていた女性が俺に頭を下げていた。

恐らくお礼なのだろう。

俺は、それに対して、笑顔で答え、手を振った。
さようならと言う意味合いを込めて。

そして、辺り一面が光に包まれると同時に俺の意識が薄らいでいった。

薄れいく、意識の中で、

―ありがとう、おねえちゃん―

という声を聞いた気がする。

その頃、倒れて意識を失った俺の瞼(まぶた)から一筋の涙が零れ落ちていた。

それを見ていた、使役獣がそれに気がついて呟いていた。

《ご主人たま?》

その時の正美の顔は、笑顔と悲しみを混ぜた表情をしていた。

意識が浮上すると同時に風が草の匂いを運んできてくれた。
同時に意識が一気に覚醒していく。
瞼(まぶた)をゆっくりと開けていくと視界内にエルフィーナが倒れているのが確認できた。
俺は倒れていた体を持ち上げると膝をついてしまった。
《ご主人たま、大丈夫でちか？》
小動物の俺を心配する声が頭の中で響く。
「ああ、大丈夫だ」
《ご主人たまは今、体と精神がボロボロになってるでち。動かない方がいいでち》
そうか、さっきから感じる疲労はそれが原因か。
俺は、震える足で立ち上がるとエルフィーナの方へ歩き、心拍を確かめようとすると小動物が大丈夫と言ってきた。
「そうか、なら……」
俺が、エルフィーナを背中に担いで、館の方へ向かった。

気がつくと、俺はベットの上で寝ていた。
部屋の中は真っ暗で、窓から外を見ると夜の帳がすでに下りていた。
《大丈夫でちか？ご主人たま》
俺の頭の中で、小動物の声が響く。
「ああ、大丈夫だ」
鈴の鳴るような美しい声に似合わない男口調で答えながら、俺は、ベットの上から体を起(おこ)した。
部屋の中を見ると、俺が公爵邸でお世話になっていた部屋だった。

絨毯についてる血も全て綺麗に消えている。
「もう夜か・・・・・・」
《違うでち、あれからもう3日立ってるでち》
「3日？俺はずっと寝ていたのか？」
《そうでち、皆、一生懸命看病してくれたでち》
「そうか、そういえば、エルフィーナはどうなったんだ？」
《あの女の人なら大丈夫でち、もう回復したはずでち》
「それなら良かった」
《・・・・・・ご主人たまは、人の事をばかり気にしてるでち》
「ん？そんな事ないぞ」
俺は、ベットから抜け出しながら小動物の意見に答える。
《・・・・・・・・・・・・。》
（ご主人たまは自分の体の事をどうでもいいように考えてるでち。まるで・・・・・・）

そういえば、よくこの耳と尻尾と巫女服の事を突っ込まれなかったな？
《不可視の術式を使ってるでち、だから一般の人に見ることは出来ないでち》
「すごいな、小動物のくせに」
《小動物じゃないでち、僕にはきちんとした由緒正しい名前があるでち》
「ほー。どんなのなんだ？」
「聞いて驚くでち。幻獣王（ルアカーゼ）と言う立派な名前があるでち」
そういいながら、俺と分離して猫の姿になって頭の上に乗っかってくる。
俺は、フッと笑った。
「名前負けしてる気がするのは気のせいか？」
俺はそう言いながら、頭の上に載った猫を両手で掴んで胸元に抱き

抱えた。
「ルアカーゼって名前だから略してルアでいっか。」
「いやでち、きちんと呼んでほしいでち」
「だが、断る！」
「うう、ご主人たま、相変わらずひどいでち」
「とりあえず、エルフィーナの容態を見にいこうぜ」
「もう大丈夫だと思うでち」
ルアの話しを聞きながら、部屋の扉に向かっていくと突然、扉が内側に開いた。
そこには、普段着を着込んだ、アレイとクレイネルが立っていた。

その後は、アレイとクレイネルに数日間寝ていたんだからとベットにリターンすることになった。
クレイネルは俺の体を診察しながら、信じられないと何度も首を捻っていた。
アレイに、聞いた話によると、ジェードが封印されていた禁書が何かの拍子で封印が解かれてる状態で売られて居た事を突き止めたらしい。
禁書は長い時をかけて、エルフィーナの精神を蝕み今回のような騒動を引き起したと教えてくれた。
そしてエルフィーナの処遇についてはしばらく謹慎を言い渡してるそうだ。
「さて、正美、エルフィーナの処遇については一番の被害者である正美に任せたいと思っているのだが？」
アレイが俺を瞳を見て言ってきた。
クレイネルの方を見ると肩を竦めていた。
普通の貴族ならば、これほどの大事を起したのだ。
職の解雇など生やしいだろう、下手をしなくても死刑が妥当なはずだ。
俺はそこまで考えた所で、二人を見てから発言した。別に誰も死ん

でないから、今までどおりでいいんじゃない？と・・・・・・・・・。

俺の言葉を聞いてクレイネルとアレイは肩の荷が下りたような様子だった。

学校で習ったり、小説で読んだ貴族とは違う事に俺は少し安心した。

そのあと、アレイとクレイネルに寝るように言われてからベットに入った。

改めて、自分の着ている服を見ると、扇情的な格好に顔を真っ赤に染め上げてしまった。

それは・・・・・・裸体が全部透けて見えるようなピンク色のネグリジェを着ていたから。

こんな格好で人前で立っていたのかと俺は、海より深く反省した。

二人が部屋から出ていってしばらくすると、体が熱くなって疼いて疼いて仕方なくなってきた。

ネグリジェの絹が太股に擦れるのが気持ちいい。

体がどんどん、敏感になっていく。

頭がぼーっとしてきて、無意識に手が胸に触れると所で、ルアが私の頭の上に乗ってきた。

「ご主人たま、気をしっかり持ってくださいでち」

「はぁはぁ、どうしたのルア？」

思考に霞がかかった状態でルアに答える。

「実はでち、ご主人たまの体を修復するのにたくさんの精を消費したでち。それで男の人から精を貰わないといけない状態になってるでち」

男の人？精？纏まらない思考で単語が脳内で再生される。

「それででちね、男の人と契りを結ぶ為に思考から言動から女の子になってるでち、それに猫の状態で長時間いたでちから、猫特有の発情期になってるでち」

発情・・・・・？
男、精、発情、契り・・・・・・・・・・・・・・・。
「それってまさか・・・・・・・・」
「そのまさかでち」
「だから気をしっかりもってほしいでち、食べ物からも補充できるでち。明日まで我慢するでち」
でちでちうるさい。
ん、はぁ、無意識に自分の胸を揉んでいた。
ダ・・・・・・メ・・・・・・・・
意識が・・・・・・・・・・・・・・・
そこで私の意識が、プツンと途切れた。

クレイネルと先ほど分かれて、今までどおりエルフィーナについては館で働いてもらう事になった。
本来の貴族の屋敷ならば、主や客人に手を出す時点ですぐに死刑なのだが、俺はそれをする気はなかった。
アレイクードの屋敷では貴族は俺しかいない。
父も母も既に他界しており、クレイネルは俺が幼い頃から魔法や知識を教えてくれた第二の父のような存在であり、一緒に育ってきたエルフィーナは妹のような存在だ。
だが、実際、他に働いてる者の手前、今回のような騒動を起されると俺としても擁護は出来ない。
そこで、正美に判断を依頼したのだ。
正美なら、一番被害を受けていて的確だと思ったからだ。
それに、正美はひどい仕打ちをする女の子ではない。
正美を利用する形になってしまって悪いと思ったが、仕方ないと諦めてもらうしかないな。
俺は、コーヒーを飲みながら領地内から届いた書類を見ていると、扉を叩く音が聞えた。

そして、ゆっくりと扉が開いていく。
ぶはっ、思わずコーヒーを噴出してしまった。

なんと、扉が開ききったそこには、

裸体を晒し、頬を薄く赤く染め扇情的な顔つきをした正美が立っていた。

安心安全設計でち。

俺は、噴出したコーヒーが床を汚した事も気にならないほどパニックに陥っていた。
何故、正美がここに来てるんだ？
それよりも、なぜ裸？
顔を背けて見ないようにしても、俺も健康な成人男性である。
気になる女性が裸体を晒していたらその誘惑には絶対に勝てないと言い訳しておきたい。
どんなに取り繕って見ないように顔を背けても、目線は正美の裸体を見てしまっている。
絶妙に配置された顔のパーツに絨毯まで届いている黒い髪の毛がランプの明りで星の瞬きのように光輝（ひかりかがや）いている。
体は、透明なピンクのネグリジェで隅々まで見ることが出来る。
身長１５０ｃｍだが、女性特有の成熟した体つきがほんのりと赤くそまっている。
瞳は少し垂れていて、熱にうなされたように瞳はトローンとして頬はピンク色に染まっている。

そこまで考えた所で、俺は何を考えてるんだー。と頭を左右に振るった。
いつも、あんなに美しく清楚で、憂いを帯びた瞳をしている女性がこんな事をするわけがないじゃないか。
俺がそう考えてる間にも、ゆっくりと確実に俺との距離を狭めてくる。
正美と距離を保つ為に俺も部屋の奥へ後ずさりする。
それにより、正美も一歩近づく。
それが交互に繰り返されて、俺はベットに足を引っ掛けてしまいベットの上に倒れこんだ。

「しまっ・・・・・・！」
声を上げたときはすでに遅かった。
正美が俺の上に、被さるようにその豊満な肉体を押し付けてきたから。
正美の体臭が鼻腔を揺さぶり、正美の妖艶な唇に視線がいってしまう。
とてもいい匂いがする・・・・・・じゃなくて！
「正美、落ち付け自分が何をしているのかわかってるのか？」
俺は抗議の声を上げながら正美の瞳を見る、そこには憂いを帯びた瞳が揺れていた。
段々と正美の瞳が俺の視界の中で大きくなっていく。
「んっ・・・・・・・！？」
気がついた時には、時すでに遅く、正美の唇が俺の唇に重ねられていた。
しっとりと柔らかく艶やかな正美の唇は俺の官能を呼び覚まそうとする。
唇を触れ合わせただけで、俺の頭の中は真っ白になった。
しばらくすると、俺の唇の隙間を通って、歯の間を通り正美の舌が咥内を蹂躙していく。
俺は、自分の舌を使って押し返そうとするが、逆に絡め取られてしまい、舌と舌を擦り合わせ快楽で力が入らなくなってしまった。
倒れてる俺の体の上に乗ったまま、正美はそのまま、俺とずっとキスを交わしていた。
部屋の中では、くぐもった男女の声が響き、水音が響き渡る。
しばらくしてから、正美は、納得したのか舌を引き抜き唇を離すと俺の上半身の上着を剥がし、
腹筋にそうように右手の人差し指を下の方へずらしていく。
「まて！それはまずい」
俺のその言葉に、正美は唇を舌で舐め見せる事で答えた。
そして・・・・・・。

鳥の鳴き声が、朝を告げる。
朝日が、ここの館の主、アレイの部屋の中に入ってくる。
「ん～っ」
男の部屋だと言うのに、伸びをした声は、とても美しい音を醸し出していた。
俺は、何かに寄り添うように寝ていた。
それは、自分より大きくて安心できる人の温もりを感じさせる。
夢うつろなまま、それに抱きつく。
抱きついた大きい手が裸の俺の胸の間に挟みこまれて太股の間に指が差し掛かる。
「・・・・・・・・・・・・。」
あれ、おかしいな?指?
というかなんで俺以外の人の体温を感じるんだ?
そっと布団を剥がしていくと、俺は何も身につけてない状態での右手を太股に挟んだまま抱きついていた。
「な、な、な、これってどうなって！」
部屋の中を見ると、家具からベットまで俺が滞在している部屋とはまるで違う事に気がついた。
「こ、これってアレイの部屋？」
「なんで俺、こ、こ、ここにいるんだ？」
そこで、俺は昨日の出来事を思い出した。
ルアが俺の体を修復する為に、大量の力を使い、それを補充する為に男と契らないと行けない事。
そして、発情したまま、制御が効かなくなって意識が飛んで・・・・・
そこまで、考えが言った所で、顔がカーッと真っ赤に染まった。

昨日の、アレイとの一部始終が、脳裏に記憶として浮かんできたから。
「うあああああああああ」
錯乱して部屋を裸のまま出て、自分が滞在している部屋に駆け込んで、ベットの中に入って布団を被った。
次々と浮かんでくる、アレイとの情事の記憶が俺の男たる尊厳を傷つけていく。
「死ぬ、俺、恥ずかしさで死んでしまう」
昨日、アレイとキスしたことや、その後の事。そのあと・・・・・・？俺最後どうなったんだ？
それでもあんな風に行動した事に自己嫌悪に陥った。
「うう、誰か俺を殺してくれ・・・・・・。」
ベットの中で悶えてると、布団の中で、変な手触りを感じてそれを手繰り寄せた。
そこにはシーツでグルグル巻きにされたルアがいた。
そもそも、こいつが一番の元凶なんじゃないのか？
俺は怒りに燃えた眼差しをしたまま、
シーツに巻かれていたルアを開放して両手でガシッと逃げられないように固定した。
「ありがとうでち、ご主人たま？」
クリッとした純粋な眼差しで俺を見つめてくる猫もどき小動物。
「ルア、お前のせいで俺はすごい恥辱を受けたんだぞ？どうしてくれるんだ！」
「だから、僕はご主人たまに言ったでち、耐えてくださいでちって」
うっ！そういえばそんな事を言われたような気がする・・・・・・。
「それに、ご主人たまの体を直す為、長時間憑依してたから自動的に契約になっちゃたでち」
「自動的じゃねぇえええ」
叫びならがルアをベットの天蓋を支えている柱に投げつけてしまった。

ルアがくるくる宙を舞いながらベチッと柱にぶつかる。
そして、鈍い音を立てて、ベットの上に落ちてきた。
俺はそれを見て、ハッとしてやりすぎたと思い、すぐにルアを胸元に抱き寄せた。
「すまない、大丈夫だったか？」
「大丈夫でち」
俺の問いかけに、どこも怪我がないように反応してくれた事に安心した瞬間、背中にすごい衝撃を受けて息が出来なくなる。
「カ・・・・・・ハッ。ど、どうなって・・・・・・？」
痛みで思考が麻痺してしまい、考える事が出来ない。
「ご主人たまは、僕と契約したから使役獣のダメージはご主人たまに１００％還元されるでち」
段々と痛みが引いてきた俺の頭にそんな言葉が入って来た。
「なんだと、なら俺が受けたダメージはルアが引き受けるのか？」
「そのへんは、大丈夫でち。安心安全設計でご主人たまが受けたダメージはご主人たまの物、使役獣が受けたダメージもご主人たまの物でち」
全然、安心安全設計じゃねえー。思わず心の中で盛大に突っ込んだ。

罪を憎んで人を憎まずだよ！

俺の名前はアレイクード・フォン・アーカルスドという。
ここの館の主であり、国に遣える公爵家の当主である。
早駆けの途中に、拾ってきた見目麗しく、清楚にて可憐な正美に一目惚れをしてしまい館に連れてきてしまってから退屈しない日々を送っている。
先日は、幼馴染であり、頭が上がらないメイド副長のエルフィーナの暴走により、手酷い事件が起きてしまった。
最後は、正美が一人で解決しエルフィーナと共に館の門前に倒れていたのを兵士が発見したのがつい3日前だ。
そして、昨日の夜に突然正美が俺の寝室に来て寝込みを襲ってきた。
まさか、逆夜這いをかけられるとは思わなかったこともあり、かなり動揺してしまった。
途中まで正美にキスもされ放題だったが、正美の手が俺のズボンの中に入ってきた時に、ベットの上で押さえこんだ。
しばらくは、
『ほしいよー。我慢できないの。ねえ？お願いだからしてー。』
と言っていたが、明らかに正常の精神状態では無い事は一目で理解できた為、ずっと押さえつけたままにしていたらいつの間にか正美が寝ていた。
俺の寝室には、女の寝巻きは無い為、しばらく様子を見ていたが俺も眠くなってしまい寝てしまった。
俺の眼が覚めたのは、正美が叫びながら俺の寝室から飛び出して行った時だった。
正美が顔を真っ赤にして裸で走っていったのを見て、普通に戻ったのかと思ったと同時に残念に思った。

俺だって、健康な一成人男性という事もあり、そういう知識も正美を抱きたい気持ちも無くは無いが・・・・・ああいう状態は良くないと思う。
王国の男の諺(ことわざ)で、求めてきたモノは丁重(ていちょう)に頂(いただ)けというのがあるが・・・・・。

そこまで考えて、俺は服に着替えて部屋を出た。
向かう先は、エルフィーナの部屋になる。
昨日決まった内容をエルフィーナに伝える事にある。

エルフィーナの部屋前につき、ドアをノックするとエルフィーナの声が聞えた。
中へ入る事を言った後、エルフィーナの部屋に入ると、所狭しと本が塔を作っていた。
これは、絶対、女の部屋じゃないだろと思いつつエルフィーナの部屋の椅子に座ると出された紅茶に口をつけた。
ローズマリーの香りが鼻腔をくすぐり落ち着く。
俺が彼女を見るとすっかり萎縮してしまっている。
あれだけの事をした後だ。普通なら手打ちでも問題ない。
「エルフィーナ」
「はい・・・・・・。」
怯えてしまっているな。
クレイネルが、エルフィーナから聞いた話によると、ジェードとエルフィーナの精神は繋がっていたらしい。
つまり、俺と正美を自分自身の手で傷つけたという事になる。
俺は、心の中で溜息をつく。
「お前の今回の犯した問題は、正美に判断を委ねた。この屋敷で一番、害を受けたのは正美だしな」
「はい・・・・・・。」

「正美からの答えは、今回の事に関しては不問にするという事だ」
俺の言葉を聞いて、エルフィーナが信じられないと言った表情をした。
まぁ俺も普通は信じられないがな。
自分を殺しかけた術者に何も求めずに無条件で許してしまうなど普通はありえない。
俺や、エルフィーナみたく幼馴染などでもなく、親戚や親族でもないのに、そんな事は普通はありえない。
特に王族、貴族は親族同士でも当主や王の座を手に入れる為に、暗殺などが日常的に存在するのに。

エルフィーナは以前、正美は高貴の出と言うのを報告してきた。
だがそれは違うと俺は思う。
一般市民でも無いと思う。

ジェードに取り憑かれたと言えど、クレイネルと俺を相手どり逃亡したエルフィーナをたった一人で正気に戻し、
捉えてくるなんて王宮煉研（おうきゅうれんけん）の十使徒に匹敵する。

そして、無条件で相手を信用し許すという事は恐らく平和な国から来たか、箱入り娘だと推測がつく。
だが、問題は、前者であれば平和な国だとエルフィーナを捕まえるほどの力があるのが気になる。
なぜならば、エルフィーナを捕まえる事が出来たのならば、最初あった時の魔物を一蹴できていたはずだからだ。
それに昨日の夜の正美の様子も普通ではなかった。
そこまで考えた所で言葉が聞えてきた。
「それでは、私をまだこのお屋敷に置いて頂けるのですか？」
「そうだ、また正美の専属という形を取らせてもらうが問題ないか？」

「は、はい。ぜひ、よろしくお願いします」
俺の前でエルフィーナがひさしぶりに涙を浮かべて笑っていた。
思わずその笑顔に眼が釘付けになってしまった。
「さて、俺はもう執務室に戻らなければならない、朝食の準備が出来たら俺の所へ報告にきてくれ」
「はい、わかりました」

俺はエルフィーナと話して、肩の荷が下りたのを感じて部屋を出た。
通路を歩いていると、クレイネルが立っていた。
「アレイ様、ありがとうございました。」
「礼なら正美に言ってくれ。今回は俺はあまり力になっていないしな」
軽く言葉を交わし執務室に入り、俺は書類に眼を通し始めた。

人物・世界観編集２

人物編集

《桂木正美（かつらぎ　まさみ）》

大学を出たが、彼女に振られしかも就職も決まらない典型的なダメな人。
すでに両親と祖父・祖母は他界、天涯孤独。
異世界へ飛ばされたと同時に体が女性化。
他の追従を許さないほどの美貌を手に入れる？
身長は１５０ｃｍほど。

《桂木正美（かつらぎ　まさみ）の使役獣》

幻獣王（ルアカーゼ）
正美（まさみ）の事を幻想大陸に飛ばした謎の声の主が正美を守る為に授けた使役獣（しえきじゅう）

《謎の声》

正美の中に寄生している人？とにかく人の話を聞かない。

《アレイ》

正式名　アレイクード・フォン・アーカルスド公爵　公爵領領主

《エルフィーナ》

アレイクード公爵邸のメイド副長。アレイの幼馴染

《クレイネル》

エルフィーナの父。王宮内でも屈指の医療技術を保有していた

《レイユーズ公爵》

貴族達から嫌われている。権力、お金大好き

《フィンナ》

レイユーズ公爵の娘

《ルフィン》

フィンナの母親であり、レイユーズの奥方。

世界観

《アレイクード公爵邸》

正美いわくバイオハザード1の洋館らしい？

《幻想大陸ルシアード》

桂木正美（かつらぎ まさみ）が謎の声により飛ばされた世界。

ルアの考察。

僕の名前はルアカーゼ。
ご主人たまの名前は正美(まさみ)って言うの。
猫の姿をしてるけど、一応昔は、幻獣王と呼ばれてました。
ご主人たまに言ったのに、信じてもらえずにルアって名前をつけられてとっても不服なの。
ご主人たまは、僕の事をいつもひどく扱うし、シーツでぐるぐる巻きにしたり柱に投げつけたり怖い眼でみたり言葉攻めしてきたりする。
僕は、Mっ子属性はないから困るの。
でも僕は知ってるの、ご主人たまは、誰にでも優しいことを自分の身の危険すら顧(かえり)みないで助けにいくことを。
ご主人たまの心はとっても強いけど、とっても脆いの。
あの方が言ってた通り。
でもあの方のおかげで僕が相手に話す内容は全部、語尾に《でち》がついちゃうの。
楽しいからいいって、あの方は言ってたけど・・・・・・幻獣王虐待だよね。

この幻想大陸ルシアードは、絶対的な階級制度で出来てる。
長い長い間、人の生活を僕は見てきたけど、たくさんの人たちが些細な事で貴族に殺されてきた。

だからご主人たまの考えはよくは分からないでちけど、きっとすばらしく発達した倫理観念をもった世界からきたと思う。

あ、ご主人たまが呼んでる。

俺は、ぽけーとしてたルアを呼んで近づいてきた所で、頭をガシッと鷲掴みにして持ち上げた。
《やめて、やめてください、ご主人たま》
「なるほど、どうやら致命的な痛みじゃない限りは中々フィードバックはしないよ・・・・・・う」
くあああああああ、頭が割れるように痛い。思わずルアを離してしまいベットの上に落としてしまった。
ベットの上で座ってる状態で、持ち上げたからからベットに落下してもそれほど衝撃がないと思っていたが、
胃の内容物が逆流してきそうな程の衝撃を受けた。
ルアを良く見ると、ベットの角にお腹をぶつけていた。
「お、ま、え・・・・・・な・・・・・・」（後半の絶対わざとぶつけただろう?）という言葉は心の中で吐きながら俺は、ベットの上で意識を失った。
次に眼が覚めた時、もう日が沈み部屋の中はランプの明りで照らされていた。
誰か人がいる気配がする。
ランプの明りが届かない場所から青色の髪をツインテールにしたエルフィーナが、
タオルを水でしぼっておでこにのせた。
「眼が覚めたのですね。倒れられていましたから、アレイ様も私もとても心配しました」
心配そうな顔をして俺の顔を覗き込んでくる。
「もう、大丈夫です。」
「そうですか・・・・・・」
俺は、そのまま体をベットの上で起すと、エルフィーナが俺の前でモジモジしているのが分かった。
だって視線が俺と自分の手元を交互にみているから。

俺は、話してくれるまでじっと待つことにしてベットの上でぐたーと寝ているルアを胸に抱き抱えた。
ルアは抱き抱えられると体をプルルと揺らしてから、首をくたっと倒して寝始めた。
こいつって本当に身を守ってくれるのかなーと疑問におもってしまった。

「えっと、正美様」
「は、はい！？」
余計な事を考えていたので、返事した声が上擦ってしまった。
「正美様が3日前の騒動を不問にしてくれるとアレイ様から聞きました」
俺はそこで、頭の中を整理していく。
そういえば、そんな事を聞かれた気がする・・・・・・。
「うん、そうだね」
俺の返答にエルフィーナが真剣な眼差しを向けてきた。
「何故、ご自分の命を危険に晒した者を助けたりするのですか？」
何故と言われても・・・・・・。
「だって、結果的にそうなっちゃっただけで、元々、命を狙おうとかしてた訳じゃないんだろ？
なら不可抗力じゃないか。あんまり深く気にする必要はないんじゃない？」

私は正美様の言葉に、不可抗力と言い切れるほど信用していてくれる事に感謝の言葉もなかった。
「そうですか・・・・・・。正美様、ありがとうございます。信用に答えられるようにより一層、正美様のお世話に力を入れて行きたいと思います」

なんか、エルフィーナさんの瞳が燃えてる気がするよ？

ここは一言言っておかないと大変な事になる気がした。
「え、エルフィーナさん?ほどほどにお願いします」
俺のその言葉に、エルフィーナは「はい!全身全霊でお答えします」
と答えてきた。
ここにも、人の話を聞かない人がいたと思い知った瞬間だった。

クレイネルのお仕事場なのじゃ

―アレイクード公爵邸・黎明庫(れいめい)―

一説によると、王家より古いとされる系譜をもつアーカルスド家の初代当主が発見した場所とされる。
ここの書物には、禁書など人に害を成すモノは存在はしないが、遥か昔の粘土板や石板に書かれた数多くの貴重な資料が眠っている。
大半は、遥か昔に失ってしまった文法や文字で書かれているため、読み解く術(すべ)がない。
黎明庫の多きさは地下にあるというだけあって半円のように広がっており、
直線にすると２００mを超える。
蔵書の数は数千に及ぶだろう。
ここを王家が徴収しないのは、文献に書かれてる内容の言葉が古すぎて解読ができないからである。
それでも、他国へは渡したくない王宮は、アーカルスド公爵家へ、ここの守番をするように通達していた。
それからずっと、守番をしているだけで特に黎明庫へは足を踏み入れる事を
代々当主はしてはこなかったが、一人の男が仕官する事により話は変わった。

クレイネル・ディストラード
クレイネルは幼少の頃、エルハンス王国首都イースバールには、隣国との戦争により多くの戦争孤児が存在していた。クレイネルもその中の一人だった。
戦争孤児であったクレイネルは、その膨大な魔流力を見込まれ、王宮に召抱(めしかか)えられた。

師事した師が良かったのか12歳で成人したときには、クレイネルの名前を王宮内部で知らない者は居ない程であった。

《卓越した治療技術》

《膨大な魔流力》

《制御する技術力》

そして、明晰な頭脳を使っての古代文字の解析能力。
古代文字の解析については、危険性が高いという事をクレイネル自身も理解していただけに知る者はいなかった。
一時期は、最年少にして王宮十使徒入りは確実ともされていたが、権力に無関心な気質を伴ってその話は何時の間にか流れていた。
しばらくしてから政変が置き、クレイネルは王権争いに巻き込まれた。
貴族や有力な候補はクレイネルを味方に引き入れようとしたが、クレイネルは無関心を通した。
その態度を気に入らなかった貴族達は、あらゆる手を使い、クレイネルを王宮から排除した。
その時に、手を差し伸べたのがアレイクードの父である前当主であった。
クレイネルがこの館に来てから、しばらくすると、遊び半分で先代当主はクレイネルに守番を任せていた。
長い間に、守番は形式(けいしき)だけになっており誰がついてもいい事になっていたからだ。
時には見習いのメイドがついていた事もあるくらい。
アーカルスド家に仕官したとはいえ、治療術師としてはそんなにいつも怪我をする人がいるわけでも無い事から、暇を持て余していたクレイネルにその仕事が回された事は必然であったと言える。

逆を言えば、メイドより暇だろ?という安易な考えにも取られるわけだが・・・・・・

だが、クレイネルにとってこの黎明庫は宝の宝庫であった。
子供が宝物を見つけたように瞳を輝かせて、古代文書を読み漁り砂が水を吸うように吸収していく。
アーカルスド公爵家に仕官してから１０年ほど経ったある日、
５歳になった娘のエルフィーナとアレイ様は、黎明庫で遊んでいた。
たくさんの珍しい書物や粘土板、通路があるここは、子供達にとって秘密の隠れ家みたいな物なのだろう。

アレイ様が父親の前当主に呼ばれて黎明庫を出て行った後、娘の方を見るとエルフィーナが一個の粘土板の文字を読んでいた。
私は思わず、立ち上がり、エルフィーナの方へ歩いていくとそれは私ですら解析できなかった古代文字で書かれた粘土板であった。
エルフィーナは未だ、５歳。
それなのに、文字を自然に読み解いていた。

その日の夜、娘のエルフィーナに私はどうして読めたのか?と聞いてみたところ、
「粘土板についてる光が教えてくれたの」と無邪気に話してくれていたが、
その危険性に私は気がついていた。
王宮に所蔵されてる禁書。
それは危険であるが読み解く事が私を含めていないからこそ、大きな争いに使われる事はない。
それをエルフィーナはもしかしたら読み解く事ができるかもしれないのだ。
だからこそ・・・・・・私はエルフィーナには極力、黎明庫には近づけないように教え、

魔流認識阻害魔法（アンイリュージョン）をかけて本からは遠ざける事にした。
その結果、娘は光を見ることはなくなったが、弊害としてこの世界では誰でも使える魔法が使えなくなってしまった。
エルフィーナは自分が何故、魔法が使えないかを独自で研究しだし怪しげな書物を買い漁り、その結果、先日の事件が起きてしまった。

正美様が、娘を助けてくれた事はいくらお礼を言っても言い足りないほどだ。
だからこそ、正美様のお力になれればと、私は寝食をここの黎明庫で行い、書物を調べていた。

顎鬚をさすりながら一冊の書物を読み解いていると一冊の本が棚から落ちてきた。
「なんじゃ？」
私はその本を、床から拾い上げると表紙を開いた。
中には書類を止めるバインダーがついてるだけの珍しい本であった。
タイトルには・・・・・・

「系譜原書（ノア）」

と書かれていた。

私はそのタイトルをどこかで見た事があった。
すぐに心辺りを探していくと、一冊の書物を見つけた。
「たしかこれに書いてあったと思うのじゃが」
一人事を呟きながら、歴史書に眼を走らせていく。
しばらくすると、一節の詩に系譜原書というのが書かれていた。

堕落した人間達を戒める為、系譜原書（ノア）を使い、数多の精霊を従えし

時の王は、世界を海の底へと沈め清めようとした。
生き物の死を悲しんだ、王妃は・・・・・・・・・・を作った。
最後の一節が虫食いになっており読み解くことができなかったが、歴史書に書かれてる事が本当ならばかなり危険な代物と言うのがわかる。
私は、系譜原書を唯一鍵がかけられる自分の私物が入っている机の中に入れ鍵をかけた。

「お父さん。」
娘が後ろに立っていた。
どうやら、集中しすぎて近くにいたのを気がつかなかったようだ。
娘は、夕食を机に上に置いた。
「エルフィーナ、正美様の容態はどうじゃ？」
「大丈夫みたい、でもお腹押さえて倒れてたからきっとどこかにぶつけたのかしら？」
「そうか」
我は会話しながらふと考えた事があった。
いつ結婚するのじゃろうと・・・・・・娘ながら、よく気がきくし、母親に似ていて器量も悪くはない。
それでも２０歳という行き遅れで、結婚が出来ないのは人の話を最後まで聞かずに暴走すると言うのが問題なのだろう。
よく、紹介した男がドン引きするほどの行動力を見せておるしの。
「お父さん、何か私の事で失礼な事、考えてなかった？」
「特に何も考えてはおらんぞ、正美様に謝ってくるのじゃろう？早くいってきなさい」
女性というのは鋭いものじゃな。
ますます最近、母親に似てきておる。
部屋を出ていく、私は、エルフィーナを見て感慨に浸っていた。

やさしいおやすみのお歌

気がつくと何もない白い空間に俺は立っていた。
俺は盛大に溜息をついた。
このパターンってあれだよな。
あの寄生虫が出てくるパターン。
俺は、声が聞えてくる事に対処する為、身構えていたがいつまでたっても変化は訪れなかった。
「おかしいな？いつもならここで頭の中で激痛が走るのに・・・・・・」
立っていても変化が無かった事から俺は、何もない空間を歩き始めた。

どのくらい歩いただろうか・・・・・・時間的感覚が狂って居るのかどれほどの距離を歩いたか分からない。
精神的に歩くのが辛くなって来た所で突然回りの景色が切り替わった。

辺り一面小金色の麦畑が風にやさしく撫でられていた。
「かあさま！」
一人の青色の髪の女の子が俺に抱きついてきた。
「もう、甘えん坊さんね」
俺の口から勝手に言葉が紡がれた。それと同時に、俺の意志に反して体が勝手に動き、
女の子を頭を撫でる。
女の子も気持ちいいのか、俺の胸に顔を埋めてグリグリしてる。
「かあさまの匂い大好き」
そう言っている女の子はとても幸せそうな顔をしていた。

「仕方ないわね」
俺の体が女の子を抱き抱えて、歌を歌いながら小麦畑を歩いていく。
知らない歌に俺は戸惑いながらもやさしい音色の歌に聞き入ってしまう。
女の子も歌を聞きながら瞼を閉じている。
小麦畑の中にある木作りの一軒屋に入っていくと、どこかで見たことがある男が一人の怪我人を治療していた。
その男は、俺の姿を見ると溜息をつくと「また表に言っていたのか、あまり無理はするなよ」と言ってきた。
「大丈夫よ、あなた。無理はしていないわ」
「それならばいいのだが・・・・・・」
「とうさま、けんかはいや～」
男は女の子を抱き上げると「けんかなんかしてないぞ」と言いながらやさしい顔で女の子と俺を交互に見つめていた。
「本当に無理はするなよ？娘を産んでからずっと体の調子が悪いのだから」
「ええ、大丈夫よ。今日はとっても調子がいいの」
「そうか」
男はそういうと納得したのか、次の患者を呼び診察を開始していた。

場面は変わり俺は、夕食の支度をしていた。
女の子が食事の支度をしてる間にテーブルの上に木のお皿を置いていく。
「かあさま、用意できたの～。えらい？えらい？」
「ええ」
そういうと、俺は女の子の頭を撫でていた。
「かあさま、今日のごはんは？」
「今日は絞りたてのヤギの牛乳を使ったお野菜のシチューとパンよ」
「かあさまのシチューすきー」
俺は出来たシチューを木のお皿に盛っていく。

そこで、先ほどの男性が部屋に入って来た。
「フィーナ、無理をしたらいけないとあれほど言ったのに、まったく仕方ないな」
「ごめんなさいね、あなた」
「お前が俺の話を聞かないのは前からだからな、もう慣れた」
「とうさま、かあさま、けんかしたらいやー」
大きな瞳に涙を湛えた女の子が二人に抗議してきた。
「あ。いや、その、なんだ?フィーナの作った料理が冷めてしまうから食べてしまおう」
男性がテンパってしどろもどろになりながら会話を変えた。
俺はその男性の態度にくすくすと笑っていた。
女の子は俺の笑った姿を見て、すぐに笑顔になってくれた。
「それでは、ご飯を食べましょうね」
椅子に俺が座ると女の子は膝(ひざ)の上に乗っかってきてから食事をした。
味覚が遮断されているのか、味が分からなかった。
味だけじゃなくて、言葉も体もまったく別の人が動かしてる気がする。
食事が終った後、女の子と二人でお風呂に入ってるときに、
髪の毛が腰まで届く青色だった事に初めて気がついた。
お風呂を出たあと、眠そうにしていた女の子を俺は抱き抱えたままベットに向かってる途中で胸が大きく鼓動を鳴らしたと思った途端に視界が暗く染まっていくのを感じ意識を失った。

気がつくと、ベットの上で俺は寝ていた。
「かあさま、かあさま、いや、かあさま、死んじゃいやぁ!」
俺は男の方を見ると辛そうな顔を俺に向けてきた。
俺にも分かる。この体はもう、死に掛けている。
死にかけの体を支えているのは俺じゃなくて、母親が娘を思う気持ちが支えているのだろう。

「エルフィ、ごめんね。とうさまの言う事を良く聞いてこれからは生きていくのよ」
「いやー。かあさま、いやー」
「クレイネル、ごめんなさいね。私はここまでみたい、あとはエルフィーナを立派に育ててあげてね」
俺の体そう言うとクレイネルはベットの中に入っていた俺の手を両手で握り締めてから「わかった」と呟いた。
「エルフィ、こちらへいっしゃい」
「かあさま・・・・・・」
震える手でエルフィの頭を撫でてあげると瞳に涙を蓄えながらも嬉しそうな顔をしてくれた。
そこで力尽き、エルフィの頭を撫でていた手が力を失ってベットの上に落ちた。
エルフィは瞳を虚ろにしたまま、「かあさま？かあさま？かあさま？」と何度もベットの上で冷たくなっていく母親の体を揺すりながら泣いていた。

場面が切り替わって、部屋の中で浮いてるような状態で俺は診療所の中を見ていた。
そこでは、クレイネルが今後の経過を説明していた。
産後、調子が悪い時は、絶対に無理をしないようにしてくださいと言って妊婦とその男性に説明してから診察を終らせていた。
そこの場面を、診療所の扉の隙間から１０歳近くまで成長したエルフィーナが覗いていた。
私は、父様の話を聞いて頭の中が真っ白になった。
母様は、私の記憶の中だとずっと体の調子が良く無かった。
産後、体の調子が悪いときは？それって私を生んだから母様は死んだの？私が殺したの？私が殺したんだ。わたしが・・・・・・
その日は、父様が食事を作って部屋まで持ってきてくれたけど食べる事が出来なかった。

父様は私が話しを聞いていたのを知っていたみたいで、一言だけ私に語りかけるように言ってくれた。
「お前の中のフィーナは、どんな顔をしている？」と・・・・・・私の中の母様はいつもやさしくて、おっちょこちょいで、人の話を聞かなくて強引な所があった。
でも、私を嫌っていなかった。私を愛してくれた。
そこまでで、父様は私の頭を撫でてから部屋を出て行った。
私の中ではまだ蟠り（わだかま）が残っていた。

その場面を俺は浮いて見ていたが突然視界がブラックアウトして眼が覚めた。
瞼を開けると、エルフィーナが横で寝ていた。
きっと俺の看病を引き続きしてくれていたのだろう。それでそのまま寝てしまったと・・・・・・。
「かあさ・・・・・・ま」
「ん？」
気になって、声が聞こえた方へ目線を向けるとエルフィーナが苦しそうな辛そうな表情をしてうわ言のように呟いていた。

ああ、そうか、あれはエルフィの夢の中の出来事だったのか。
俺はエルフィーナの母親フィーナが娘のエルフィーナに歌っていた歌を頭を撫でながら歌ってあげた。
しばらくすると、エルフィーナは幸せそうな顔をしながら、「かあさま」と瞼から幸せそうに涙を流していた。
エルフィーナと俺を窓から差し込んできている淡い月の光がやさしく照らしていた。

小動物は檻の中に入れないとイケナイと思う。

天蓋のついてるベットの上では、日の光により一人の少女が照らされていた。
ベットの上に広がる黒髪は日の光を反射して星の煌(きらめ)きのように光輝(ひかりかがや)く。
それはまるで湖面(こめん)が光(ひかり)を反射するようにキラキラと光っており幻想的ですらあった。
細く長い少女の眉毛が動くと、身動ぎしてからゆっくりと瞼を開けていった。
目を覚ますと、すでに日が昇っていた。
ベットで一緒に寝ていたエルフィが居なかった事から、気を使って部屋から出て行ってくれたのだろう。
「ん～っ」
自分で上げたとは思えない程、悩ましい声を上げながらベットの上で猫のように背伸びをした。

・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・。

猫のように背伸びした俺の視界には自分の手がモフモフの猫手になっていて足も膝から下がモフモフになっていた。
しかも、薄いネグリジュを着せられてるせいで体の線から何から何までばっちり見えてしまっている。
俺は一瞬放心したあと、すぐに現実に帰ってくることができた。

慣れっていう物は怖いものだ。それよりも・・・・・・。
「おい、ルア、どこにいる？」
《まだ眠いでち～ご主人たま～》
「眠いじゃねえ、お前の声が頭の中から聞こえてるって事は、また俺の体の中に入ってるのか？」
《ん～そうみたいでち》
「そうみたいでち～じゃないだろ。さっさと出ろ」
《分かったでち～。えい、あれ？えい、あれ？　》
「どうしたんだ？　」
《ご主人たま、ごめんなさいでち》
なんか嫌な予感がどんどん膨らんでくる。
まさか出られないとかそういう落ちか？
《ご主人たまの体から分離出来ないでち》
はい、予感的中。
「まじか？いつ出られるんだ？何か原因あるんだろ？」
《わからないでち、昨日、ご主人たまの胸の谷間でぬくぬく寝ていたらこんな事になっていたでち》
「あー。いやー。なんだ、その。俺さ、今、むしょうに、殺意が芽生えたんだが気のせいだよな？」
《キノセイでち！気にしたらまけでち！　》
「そうか、キノセイか、フフフフ」
《ご主人たま、笑い方がこわいでち！　》
「キノセイだよ、ルアカーゼくん」
《絶対気のせいじゃないでち、ご主人たまの体から絶対出ていかないでち、出たら危険な香りがするでち》
「大丈夫ダヨ。怒ってないから頑張って出てきなさい？　」（ニコッ）
《（ガクガク、出たら酷い事絶対する気でち、怖いでち、危険でち、きっとシーツでぐるぐる巻きにされるでち）》

そんな事をしていると、扉をノックする音がしてからエルフィーナが部屋の中に入って来た。
「正美様、もう起きられたのです・・・・・・か？」
俺を見て、エルフィーナが固まっていた。
そして・・・・・・。
「キャー。かわいいですー」
俺の方へ、獲物を見つけたチーターのように走ってきた。手が届く一歩手前の所で足を止めた。
「ううん、モフモフしたいのに、でもダメよ。私、耐えるの。あんなに正美様にきちんと仕えるって誓ったんだモノ」
「えー、エルフィーナさん？」
あまりのエルフィーナの剣幕に俺は完全に引いていた。それが言葉にも出てしまう。
「お耳に尻尾に両足のモフモフ、触って愛でて舌を這わせて甘噛みしてみたい」
俺の問いかけを完全にスルーしながら、自分の心の欲望を口に出しながら息を荒くして手を怪しげにニギニギしている。
もしかしなくても、これは俺の危機なのか？
エルフィーナが一歩俺に近づいてきた所で、鈍器が頭にぶつかる音がすると同時にエルフィーナが床に倒れた。
絨毯の上には、血が広がっていく。
じ、事件か？
俺はエルフィーナを倒した人を見ようとすると、エルフィーナより一回り小さいロングレイヤーの緑色の髪をした女性が銀色のお盆を持って立っていた。
「おはようございます、正美様、私の躾が行き届かないばかりにいつもご迷惑をおかけします。」
突然の事に頭がついていかない俺はそれは、「いえ」としか言い返す事が出来なかった。
その女性は部屋の外に向かって人を呼ぶと一人のメイドさんが入っ

て来た。
紫色の髪をポニーテールのようにしている。身長は俺より若干高いくらい１５５ｃｍくらい？
そのメイドさんは俺の方へ近づいてくると、ペコッと頭を下げてから口を開いた。
「私の名前は、イリシア・ローストと言います。しばらく正美さまのお世話を任されました。よろしくお願いします」
「あ、ああ。こちらこそ、よろしく」
俺は、事態の把握が出来ていない事もあり、中途半端な返事を返してしまっていた。
「それでは、私はこれを連れていきますね。しっかりやるのですよ？イリシア。」
「はい、わかりました。エメラスさん」
イリシアが返答を返すと、納得したのかエメラスと言われた人がエルフィーナの足首を持ってから床を引き摺るような形で部屋から退出していった。
なんか、床にこすり付けられて、エルフィーナの頭からゴリゴリ音がなっていたが気にしない事にした。

「えーと、イリシアさん？」
「はい、正美様なんでしょうか？」
「さっきの方は？」
俺の問いかけに一瞬考えたあと、教えてくれた。

アレイの母親であり、元公爵家の妻であり、現公爵家のメイド長のエメラスという事を。

えーあーそうなんだ。
エメラスさんってお母さんなんだ・・・・・・・・・・・・・・・
あの容姿で・・・？
身長なんて１４０ｃｍくらいしかなかったよ？しかも中学生くらいの容姿だったし・・・・・・・・
遺伝子の奇跡？というか突然変異？
いきなり言われた事に俺は動揺してしまい、思考が纏まらない。
俺が、思考を纏めてる間に、髪の毛の間に生えている白い猫耳がピコピコ動いて、ネグリジェを破いて飛び出している白い猫尻尾が左右に揺れる。
それをイリシアさんが興味深く観察していた。
俺の思考が纏まらない間にイリシアが左右に振られてる尻尾を「ぎゅっ」と掴んできた。

「ひゃあああああん」

俺自身、自分の口から出たと信じられない程の声を上げてしまった。
それと同時に、体中の力が抜けて、ベットの上で「へにゃ～」と倒れてしまう。

「正美さ・・・ま？」

イリシアが俺が突然声を上げて倒れた事に驚いて、尻尾から手を離して声をかけてきてくれた。

「大丈夫ですか？正美様」

「う、う・・・ん、だいじょう・・・・・・ぶ」

俺は、息を切らしながらも、イリシアの声に反応するが、体の奥が「じゅん」って熱く火照ってるみたいでモドカシイ感じの波が体中を駆け巡っている。

《ご主人たま！やばいでち。発情モードになっちゃたでち》

なっちゃたでちじゃねー。心の中で突込みながらも、俺は混濁してる意識の中で、この小動物をあとでジェノサイドする為のリストに書き加えることにした。

必死に俺は薄れ行く、意識を繋ぎとめながらイリシアさんを部屋から出す為に声をかけることにした。

「イリシアさん・・・」

私は名前を、正美様から呼ばれたので正美様を見ると、瞳を潤ませていました。

小さく形が整った真っ赤な花の様な口元からは、一筋の光る液体が流れ、正美様の透明なネグリジェを塗らしていました。

それは、とても扇情的でいて魅惑な色香を漂わせていて、同性でも虜にするくらい美しい。

私は、正美様の口元に自分の唇を無意識に近づけていきました。

俺は、イリシアさんがキスをしてこようとしてるのに驚き、離れようとしたが力が入らない事もあり、

ベットの上で覆いかぶさってキスをしようとしてるイリシアさんを見ている事しか出来ない。

あと数センチでキスされるところで、小動物がいきなり俺から分裂して、俺の変わりにイリシアさんとキスをしていた。

助かった・・・・・・俺は安心しながらも

同時に俺の体の中に、渦巻いていたもどかしい感じも消えうせていく。

そして、体を普通に動かす事が出来るようになった。

イリシアさんは小動物とキスした途端に、瞳を開けて俺を見てきた。

あれ？私ったら何をしようと・・・・・・気がついたら私は白い毛並みの動物とキスをしていました。

・・・・・・・・

・・・

かわいい～

私は思わず、その動物を「ぎゅーっ」と抱しめていました。

なんか「ぐへっ」って声が聞こえて来たとうな気がするけどキノセイにします。

私が動物を抱いていると、突然、正美様が動物の頭を片手で鷲づかみにしてきました。

「正美様？」

「うん？どうしたの？」

正美様は、笑顔で話して来てくれますけど、何故がすごい怒ってる気がします。

もしかしたら、私は何か粗相をしてしまったのかと思っていると

「イリシアさん、少し、目を瞑っておいてくれるかな？」

正美様は、私にそう告げてきたので、私は、瞼をすぐに閉じました。
しばらくするとベットから、正美様が降りる音が聞こえてきました。

俺は、ベットから降りると「やめてーご主人たまー」と抗議を上げてるルアを無視したまま、鷲掴みにした、ルアを空中にブラブラさせたまま、部屋に設けてある窓を開けた。
そして、ルアをベットのシーツと枕でグルグルに巻く。
これで、枕が緩衝材の役目になって俺には痛みは来ることはないだろう。
俺はそのまま、窓の外へ投擲のように庭へ向けて投げた。

「ご主人たま、ひどいでちー」
ルアは、そんな抗議をしながらも放射線状に庭に落ちていき、運がいいのか悪いのか木々の間に「スポッ」を見事に嵌った。

俺は、復讐を遂げた事に、満足しながらベットに戻った。

「イリシアさん、目を開けてもいいですよ」

俺の言葉に、ビクッと反応してからイリシアさんは瞼を開けて俺を見てきた。

「あれ？正美様、さっきまで白い動物がいたと思いますが？」

「キノセイじゃないのかな？俺はそんなの見なかったよ？」

「そ、そうですか・・・・・・」

しばらく、イリシアさんは考え込んでいたみたいだけど、朝食まで時間もありませんし、お風呂に入りませんか？と俺に聞いてきた。

え？お風呂？

混沌な朝食

廻り、廻る時の中、何もない中空に一粒の雫が突然降り注ぐ。
それにより、波紋が生まれ世界を構成している、混沌と言う白い空間を震わせていく。

浮きし善のモノは空へ
積もりし深きモノは地へ

生まれし浮きしモノは空へ浮かび上がる大陸と神と精霊なる。
地に積もりしモノは万物を総べる存在となる。

神々は空へ浮かべし大陸の名をいつか消えてしまうという思いを込め、幻想大陸ルシアードと呼んだ。

部屋の中で男は溜息をつきながら、一冊の本を書棚に戻していた。
俺は、過去の創生歴史から何か正美のヒントになるようなモノがあ

ればと幼少の子供に聞かせる本を読んでいた。
クレイネルの話によると、魔法が効かないのは正美で二人目という事だ。
一人は言わずとも知れず、大陸を消滅の危機から救った姫巫女であり、世界的に信仰されているもっとも人気の女神でもある。
扉をノックする音が室内に響き渡る。
「アレイ様、食事の準備が整いました」
どうやら、朝食の時間になってしまったようだった。
「わかった、すぐに向かうと伝えておいてくれ」
俺を呼びにきた、メイドは「分かりました」と言った後、すぐに食堂へ報告に向かったようだった。
まだ寝巻きのままだった事もあり、すぐに私服に着替え、食堂に向かうことにした。
食堂に入り、部屋を見渡すと、思わず一歩、下がってしまっていた。
俺の視線の先には、目を虚ろにして席に座っている正美の姿があった。
正美の隣では、イリシアが困った顔をしていた。
イリシアは、正美の両肩を両手で掴んで揺さぶっていた。
何かあった・・・の・・・・・・か？と思わず口に出しそうになるのを堪(こら)えて、心の中で呟いていた。
「イリシア」
俺のその言葉に、ビクッと体を揺らして俺の方を見てくる。

「お、おはようございます。アレイ様」

「何かあったのか？」

「いえ、特に問題は無かったと思います」

そのイリシアの返答には特に、何か問題があったような響きは感じられない。

だが、正美が虚ろな眼差しで何か呟いているのが聞こえた。

女と一緒にお風呂は、女と一緒にお風呂は、とうわ言のように呟いている。

どうやら、お風呂に入ったときに何か問題があったと考えるのが妥当だが、それは紳士として聞くべきなのか迷う所である。

今の食堂は、虚ろな瞳でブツブツと呟いている正美と、それをなんとかしようと肩を揺すってるイリシアと、それを観察している俺の3人

そして、朝食の準備をしている給仕達だけ。

朝食の風景としては、些か(いささ)赴(おもむ)きに問題があるような気がしないでもない。

そこで、俺は子供に良く聞かせる本の内容を思い出した。

それは、悪い魔物に呪いを掛けられ、眠らされた王女を男性が口付けで呪いを解くという内容であった。

もしかしたら、先日のジェードの問題もある。
正美の瞳が虚ろなのも何かの呪いなのかも知れないと俺は結論づけ、正美の方へ歩いていき正美の顎に手を添えると多少角度を調整した後、
口付けをした。
直後、右頬に痛みを感じた。

正美の右手が握られているのが見えた。
どうやら、グーで殴られたらしい。

正美は、顔を真っ赤にしたまま、体全体を震わせていた。

俺は、お風呂場で隅々まで体を強制的に洗わされてしまったことにずっとショックを受けていた。
女性経験が未だない、童貞な俺としては女性のしかも数人の裸を見るのは、はっきり言ってキャパオーバーだった。
そして意識が飛んでいる間に、自分の咥内を蹂躙してくる舌を感じて、良く見ればアレイが俺に口づけしていた。
それを、感じ取った瞬間に顔が真っ赤になって心臓がドキドキしてきて、思わず拳を握り締めて殴っていた。
アレイが俺の方を見て、呆気に取られた顔をしていたのが更にむかついて、
もう一発、殴ろうとした所で、振り上げた右手首がいとも容易く片手で抑えられた。
くっそ、男の時なら絶対抑えられないのに、心の中で悪態をついていると、
アレイが心配したような口調で話してきた。

「大丈夫か?正美、右の手の平が真っ赤になってるじゃないか」

アレイがそう言いながら、俺の右手を優しく触ってくる。同時に真っ赤に腫れ上がった所へアレイの手が差し掛かると、痛みが全身を突き抜けた。

思わず、眉間に皺を寄せてしまい、右手を引こうとしたがアレイが手首を固定してる為、引き抜く事ができなかった。

「やっぱりな、こんな小さい手で人を殴ろうなんて無茶な事をするもんじゃない。あとで腫れてくると思うからクレイネルに見てもらえ」

俺は、キスされた事と手を傷めた事。

そして、自分の体の情けなさとアレイの身勝手さにイラついて、席から立ち上がって自分の部屋に走っていった。

通路を走り、何度も角を曲がる、そして、気がつくと、迷子になっていた。

・・・・・・はぁ、俺何してるんだろ。

心の中で自分自身に突込みを入れる。

よくよく冷静になって考えて見れば、アレイがいるから俺は生きていたわけで、多少は仕方ないと思おう。その時、近くの部屋から物音が聞こえた。

部屋までの帰り方を聞こうと、驚かせないようにそっと近くの扉を開けた。

そこには、天井から吊り下げられているエルフィーナと黒い鞭を片手に持っているエメラスさんがいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

しばらく、俺は二人の後ろ姿を見たあと、音を立てないように扉を閉めた。

「ふう・・・・・・何か見たらイケナイモノを見た気がするぜ」

呟きながら額の汗を拭う動作をしながらも、ここに、これ以上居たら危険な感じを動物的本能から感じとって離れる事にした。

「どうかしたのですか？エメラスさん」

「いえ、誰か見ていたような気がしたのですけど」

「でも、エルフィーナさん。これが本当に体罰になるのですか？」

「ええ、間違いありませんわ、書物に書いてありましたもの」

エルフィーナが体をクネクネしながら発言する。
それを見ながら、エメラスは何でこんな風に育ちゃたんだろう？と疑問を自分に投げかけていた。

エルフィーナとエメラスのちょっと問題のあるシーンを見てから、しばらく歩いていると、何やら奇声が聞こえてきた。
ん？なんだ？
気になって奇声が聞こえて来た方へ歩いていくと、地下へ続く階段が視界に入った。

「こっちから変な声が聞こえたよな？」

自分自身に突込みを入れながらも音を立てないように階段を下りていく。
２分ほど階段を下りていくと、目の前に突然、高さ２ｍほどの石作りの扉が現れた。

この館には不釣合いすぎるほどの扉だ。
俺は思わず、唾を飲み込んでしまった。
唾が喉を通るとき、思ったより大きな音を響かせる。

扉は若干開いており、中を見ることが出来る。
そこには、クレイネルがいた。
俺が見る、クレイネルは普段とまったく違っていて、目の下に黒い化粧をしており髪がボサボサになっている。
そして、何百冊もの本に囲まれていて時々、奇声を発していた。

そしてクレイネルの視線が俺を捕らえたと思った瞬間、俺は思わず、石作りの扉から顔を離して逃げるように階段を駆け上がった。

「はて?誰か覗いていたような気がしたのじゃが?さすがに5日寝てないと辛いの、変なテンションになってしまう」

クレイネルはそう呟きながらも椅子に深く腰を下ろした。

その頃、正美は走りながら頭の中は混乱していた。

「な、なんなんだ?一体これはなんなんだ?」

「まさか、ここって怪しい系の宗教か何かしてるのか?」

アレイは突然キスしてくるし、エメラスさんとエルフィーナさんは変だし、クレイネルさんは何か怪しげな魔術師ぽいしここにいたらヤバイ気がする。

思案していると、ふと窓から見える位置に正門とは明らかに違う小さい門が視界に入った。
使用人用の門か？それにしても誰も兵士がいないのは気になるが・・・・・

俺は、窓を開けて身を乗り出して庭へ降りると兵士がいない門へ走った。
門までたどり着くと、人が本来待機してるであろう部屋があったが、誰もいなかった。
俺は門を開閉すると、門の扉と扉の間に体を滑り込ますようにして館の敷地内から出た。

なんだか、ずっと敷地内で軟禁されていたのですっごく新鮮に感じる。

ふと、アレイの話を思い出した。
館から南の方向へ進むとここの領地の町があるという事、そして魔物の領地からは離れている為モンスターが出る事はまず無いという事。

俺は、何か危なそうな館を出て、町に向かうことにした。

行き倒れました。

一台の幌馬車が街道を走っていた。
その幌馬車には、一人の男性が手綱を操り、馬を操作していた。
その幌馬車の中には、女性が乗っており、次の町で売る品物のチェックをしていた。
品物以外にその中には、明らかに痛んでいる家具が見受けられるのは何か事情があるのかもしれない。

「今日も暑いわね」

外の日差しから遮断されてると言っても、中はまったく風の動きが無い為、熱が篭ってしまっている。
手拭で、額の汗を女性が拭き取ると、水の入った皮袋を持って馬を操ってる男へ声をかけた。

「ユーエル」

「ん？どうした？ラン」

「外は暑いでしょう？お水でも飲んで一息つきましょう」

ユーエルはランに渡された、皮袋の水を口に含む。

「もうすぐ、町につくな」

「ええ」

二人は浮かない顔をしていたが、その間も、荷馬車は街道を疾走していく。

「ユーエル、待って！今、通り過ぎた道端に女の子が倒れていたわ」

「なに？」

ユーエルが荷馬車を止めたあと、ランとユーエルは急いで、倒れていた女の子の元へ向かった。

倒れていた女の子に近寄ると二人とも目を見張った。

倒れていたのはまだ幼さを残す可愛らしい顔つきの女の子だった。

漆黒の長い髪が日差しを反射して光輝き、白くきめ細かい肌がそれを更に引き立てている。

良く見ると女の子が着ている服は、貴族でもめったに着る事が出来ないほど上質なドレスだった。

淡い赤色のレースと刺繍を惜しげもなく使い、仕立てられたドレスはそれを売るだけで一般市民の家族一年分の食費に匹敵するだろう。

しかも、指輪、ネックレス、イヤリングとそれを売れば一財産に匹敵するほどの物である。

「ユーエル、いつまでぼーっとしてるの？こんな所で倒れたままにしてたら体を壊してしまうわ」

どうやら、この女の子のドレスと装飾品の価値に妻は気がつかなかったようだ。

俺は軽く返事をすると、女の子を抱き上げて馬車の中へ運んだ。

「ずいぶんと軽いな？まるでここにいないみたいだ。」

「そんなに軽いの？」

「ああ、ランより軽いとおも．．．．．．わないというか．．．．．．同じくらいじゃないのかな？」

途中から、機嫌を損ねたランの顔を見て、発言を訂正した。

「ねえ？ユーエル」

「ん？どうした？」

「この子って、私達の娘と同じくらいの歳よね？」

ランに言われて見ると、１６歳くらいに見える。

「ああ、そうだな」

「これを見て」

ランが、女の子の右手を見せてくる。何かを殴った後か？それにしてはずいぶん腫れているな？

薬草がここの棚にあったような．．．．．．

私は、薬草をすりつぶし女の子の右手を治療してあげた。

商人をしていると色々と物騒な事もある事から、こういう簡単な傷の手当てくらいなら誰でも出来るからだ。

「ねえ？ユーエル。この子って随分高そうな洋服とか装飾品つけてるけど何かの事件に巻きこまれた子なのかしら？」

「分からない、とりあえずドレスが汗を吸ってると思うから脱がせ

て他の服に着替えさせた方がいいな」

「わかったわ、あの子の服でいいわね」

「町までもう少しで着くと思うから、それまではその子が目覚めるまでついてあげてくれ。目を覚ましたら教えてくれ」

「ええ、わかったわ」

俺は妻がそう答えるのを背中越しに聞きながら荷馬車の中から出て、御者席に座り手綱を打ちつけ帆馬車を走らせた。

帆馬車の中では、ランが女の子のドレスを脱がして、装飾品を外していく。

そのあと、ランは手拭で体を拭いてあげてから淡い青色のワンピースを着せてから床に毛布を敷いてその上に女の子を寝かせた。

「少し熱があるみたいね、ずっと日差しを浴びていたからかしら？」

ランは、水を新しい手拭に掛けるとそれを女の子の額に当ててあげた。

こんな事をしたのって、あの子が風邪を引いた時以来かしら、心の中でランは呟きながらも女の子の様子を見ていた。

町につきました。

朝食の時間に正美を怒らせるという失態を犯したあと、俺は自責の念に囚われていた。
なんで、あんな事やっちまったんだ・・・・・・
これで当分、正美とは顔を合わせ辛いじゃないか・・・・・・

「はぁ」

俺は、溜息をつきながら執務室で王宮からの書類に目を通していた。
執務室にある机の上には厚さ３０ｃｍほど積もり重なった書類がある。

「これ、案件３００件くらいあるんじゃないのか？」

呟きながら、当分、正美に会えない事に少し心が痛んだ。
とりあえず書類を手に取ろうとした所で、普段ではありえない強さで執務室の扉がノックされた。

「どうした？何かあったのか？」

「す、すいません」

どうやら、イリシアが執務室の扉を叩いてるようであったが、かなり慌てているようだ。
俺はイリシアに執務室に入るように伝えると、入って来たイリシアは瞳に涙を浮かべていた。
かなり動揺しているのが俺の眼から見ても分かる。

「どうしたんだ?何かあったのか?」

「アレイさま、すいません。正美様の姿が朝から見当たらないのです」

なに?見当たらない?
館のどこかで迷子になってるのか?

「分かった、イリシア。取り合えず落ち着け。まずは朝食の準備をしてくれ」

「アレイ様?」

「そうか、まずは正美に会いに行かないとな」

「アレイ様、落ち着いてください」

その頃、アレイの母親のエメラスの指示により館全域に非常警戒態勢が敷かれており、正美捜索網が展開されていた。

幻想大陸ルシアードの街道は踏み固められただけの道であり、貴族が保有している高級馬車以外は衝撃が直接、伝わる為、お世辞にも乗り心地がいいとは言えない。
ランとユーエルが乗る帆馬車も例に漏れず中に加わる衝撃はかなりの物であった。
すでに、日は沈みかけ段々と空気が冷えてきており、帆馬車の中の

気温も下がり丁度過ごしやすい気温になっていた。

女の子が、震動の中でも寝て居られるのは、体の下に引いてある毛布とランの膝枕のおかげだろう。
ランは女の子の髪の毛を毛筋に沿って撫でてあげている。
とてもやわらかく、しっとりと濡れたような髪質だ。

ランはそのまま、女の子の頭を撫でていると、女の子の体が身動ぎしたあと、ゆっくりと瞼を開けていった。
女の子の瞳の色は漆黒の色をしているが、その中心部では白い光が沸きだすように光輝いていた。

「ここは・・・どこ・・・・・・・だ?俺は一体・・・・・・・?」

そこまで呟いた所で、女の子は瞳を閉じてまた眠りに入ってしまっていた。

ランは女の子が言った言葉に疑問を抱いていた。
自分の事を覚えてない?どういう事なのかしら?

確か辛い体験が合った時は、辛い出来事を忘れてしまう事があるって聞いた事があるけど、もしかしたらこの子もそうなのかしら?
ランは女の子を膝枕したまま、考えこんでいた。

気がつけば帆馬車は止まっており、外から複数の人の話し声が聞こえてくる。
ランも気になり表へ出ると、高さ５ｍもの城壁に守られた大きな門構えの町並が視界に入った。

城壁の兵士達もランに気がつくと頭を下げて挨拶をしてきた、ランもそれに釣られてつい挨拶を返してしまう。
夫のユーエルがランの元へ戻ってくると、一枚の手形を見せてきた。

「これって何なの？」

「これは、行商人手形って言って、商売をする人が一時的に住まいを借りられる制度がここの領地にはあるらしくて、そこを借りるのに使うみたいなんだ」

「すごいのね、だからここの領地ってこんなに豊かなのね」

「ああ、商人が集まれば、人が集まる、人が集まれば需要が増えるそうする事で供給の為に商人が増えると言う具合らしい。しかも税金はかなり安く抑えられている」

「すごいわね」

「ああ、今日は、借りられる家もあるからそちらへ移動しよう」

「そうね、そういえば、ユーエル。」

「ん？どうしたんだ？」

「あの女の子ね、どうも記憶が無いみたいなの」

「え？どういうことだ？」

「分からないわ、すぐに寝ちゃったし」

「そうか、一度、借家に行ってから今後の行動を考える事にしよう」

「そうね」

ランは帆馬車に乗ると女の子の頭を膝に乗せて、揺れが極力体に伝わらないようにした。

ユーエルも、町で手配された借家へ向けて夕暮れの中、荷馬車を走らせた。

記憶喪失になりました。

すでに日が沈み夜の帳が下りてきても、アレイクード邸では、厳重の警備の元で捜索活動が続けられていた。
館の一室にある執務室では、アレイは警備隊長より報告を受けていた。

「まだ、正美は見つからないのか？」

アレイはイラついた声で報告に来た警備隊長へ怒鳴りつける。
今のアレイは、いつもの温和な雰囲気がまったく感じられない。

「はい、まだ発見の報告は来ていません」

「ですが、一つに気になった報告があります。」

「気になった事？」

「はい、使用人の通行門ですが、衛兵達の交代時間の最中、人手が足りない時間を見計らったかのように、メイド長と副メイド長がおかしな事をしていたと報告を受けており、
その確認に兵士が向かった短時間、通行門の兵士が不在の時間があり、閉めていたはずの門が若干開いていたと報告が上がってきています」

なんだと・・・・・？
母上とエルフィーナがおかしな事をしていただと？
俺は思わず頭を抱えてしまった。

「それと一つ気になった点があります」

「なんだ？言ってくれ」

「使用人の通行門側の窓が開いており、館内から庭へ降りた跡が地面に残っていたそうです。
これは推測に過ぎませんがもしかしたら、正美様は公爵邸の敷地内から外へ連れ出された可能性が高いと思われます」

連れ出された？だが正美の素性や情報はこの館以外の者は知らないはずだ。
この館の情報を知りうる事が出来るとなれば、相手は国家クラスになる。
それならば、突然、正美が消えた事にも納得がいく。
国家クラスが相手となると、生半可な戦力では逆効果か・・・・・・
捜索はかなり大規模に行わなくてはならなくなるな・・・・・・

「わかった、領地内の全軍動かしても構わない。すぐに正美の捜索を領全域に広げてくれ」

「わかりました。それでは各町の有力者へ連絡をつけておきます」

どこの国の間者か知らんが、俺の女に手を出した以上、只で済むとは思うなよ。
アレイは殺気の篭った眼差しで執務室から外の風景を視界におさめていた。

その頃、正美と言えば、女性に頭を撫でられていた。

覚醒していく意識の中で、誰かが頭を撫でてくれるのが分かる。
やさしく頭を撫でてくれる手がとても気持ちいい・・・・・・

俺はゆっくりと瞼を開けると、女性に膝枕されたまま頭を撫でられていた。

「ここはどこなんだ?」

俺が、女性に話しかけると驚いたような顔をして俺の顔を覗き込んできた。

「もう、大丈夫みたいね」

「大丈夫?」

「そう、貴女は道端で倒れていたのよ?」

俺を助けてくれたのか・・・・・・

「助けてくれてありがとう」

「困った時は、お互い様。貴女お名前は?どこから来たの?」

「俺はの名前は・・・・・・誰・・・・・・なんだ?」

俺のその言葉に女性が顔を泣きそうに曇らせると俺を毛布の上に下ろす。

「無理に思い出さなくてもいいからね。今ね、旦那を呼んでくるからね、少し待っててね」

「はい」

俺は思ったより素直に答えていた。

女性は俺の言葉を聞き、一度だけ頷くと別の部屋に入っていった。

女性の姿が消えた後、部屋の中を見渡すと、広間の中央には囲炉裏があり、そこから3部屋ほどあるのが確認できる。

かなり大きな家のようだ。

女性の話によると、俺は道端で倒れていたようだが・・・・・・

記憶の糸を辿ろうとすると、奇声を発する魔物の映像や、思い出したらいけない映像がフラッシュバックのように脳裏を駆け巡って頭が割れるように痛くなる。

「うっ・・・・・・」

頭を抱えていると、先ほどの女性が俺の体を抱き寄せてやさしく包みこんでくれた。

「大丈夫?無理に思い出さなくてもいいのよ?大変な事があったのでしょう?」

そう言いながら、俺の背中をやさしく撫でてくれる。

それがとても心地よくて安心する。

気がつくと一人の男性が膝をついて、俺を見つめてきていた。
とてもやわらかい印象を受ける金色の瞳をしている。

「私の名前はユーエル。今、君を抱いているのが私の妻であり、名前はランと言う。
君は自身の名前を、覚えていないそうだが名前が無いと困るだろう？名無しと呼ぶわけにも行かないしな・・・・・・どうするか」

「ねえ？貴女」

「は、はい？」

俺は、思わずランさんより話を振られてしまって声がうわずってしまった。

「名前を思い出すまで、ミリルって名前でどうかしら？」

ミリル？まぁ名前が無いと困るしな、それでいいか。
俺は肯定の意志を込めて首を縦に振った。

「お・・・おい・・・・・・ラン、それは」

「それじゃ決まり！貴女の名前はミリルね。記憶が戻るまでは、一緒に暮らしましょう？」

俺も行く宛てもないし、記憶も無いわけだし、この二人はなんか懐かしい匂いがして安心する。
しばらく一緒にいてもいいかなと思ってしまっていた。

私は強引に話を進めるランを見て、仕方ないかと肩を落とした。
まだ、娘が死んでから2ヶ月も経っていないのだ。

「ミリル、今から食事なの、一緒に食べましょう」

「はい、すいません」

「お礼はいらないわ、一緒に暮らすんですもの」

その夜は、食事をしながらユーエルとラン夫妻の話を俺は聞いていた。
最近、戦争が起きた町から着の身着のまま逃げ出してきて生きる為に行商を行い、
定住できる町を探して旅をしてきたと話してくれた。

不良になりました。

・・・・・・・・・。

・・・・・・・み。

誰かが俺を呼ぶ声が聞こえる。

でも、誰かは、分からない。

懐かしいような忘れていたいような気持ちを思い起(おこ)させる。

声のした方へ進もうとすると、急に現実感が増してきて、風景が霧のように霧散する。

意識が覚醒すると、誰かが俺の頭を撫でている感じがする。

暖かい人の温もりが感じられる。

瞼をゆっくりと開けると、ランさんが俺を抱き寄せて、頭を撫でていてくれた。

俺の頭が丁度、ランさんの胸に抱かれるような状態になっているため、

ランさんの心地よい心臓の鼓動と匂いが香ってきて、とても落ちつく。

気持ちよさそうにしていると、ランさんは、俺が起きているのに気がついたのか床に敷いてある毛布の上に俺を横たえ、ランさんも俺の隣に一緒にそのまま寝てくれて、頭を撫でてくれている。

部屋の中を見渡すと、窓の外がまだ暗く日が昇るまで時間がかかりそう。

ランさんとユーエルさんと俺が寝ている所は２０畳ほどの広間で中央に囲炉裏がある。
囲炉裏には、薪が燃えているが、夜は体感的に冷える事もあり思わず、
体を震わせるとランさんが俺に毛布をかけてくれた。

「大丈夫？うなされていたけど、怖い夢でも見たの？」

「怖い夢？」

どんな夢か覚えて無い。だから、曖昧に返事を返すことしか出来ない。

「ランさん、すいません。迷惑をかけてしまって・・・・・・」

「いいえ、いいのよ。それとね・・・・・・」

言いかけたまま、ランさんが考えこんでいた。
言葉を区切るって事は、何か、言いづらい事でもあるのだろうか？

「えっとね、これから一緒に暮らすわけだしね、やっぱり周りに不審に思われないようにする必要もあるでしょ」

どうも、ランさんが何を言いたいのか要点が掴めないが、
俺が道端で倒れていた事から何か問題に関ってるといけないから何か対策をする必要があるって事なのか？

「そうですね、周りに不審に思われるとまずいですからね」

俺も、周りの人に不審に思われないようにする事には、反対する気

はない。
俺の言葉にランさんが顔を明るく輝かせる。
ランさんは、綺麗な青い瞳をしていて、一目では、２５歳くらいに見える。
腰まで届く金髪が、いまは毛布の上で広がっている。

「そうよね！それで、私、考えたんだけどね、私の事をお母さん、ユーエルの事はお父さんって呼ぶことにしてね」

なるほど、娘なら不審に思われないな。
問題は、ユーエルさんもランさんも金髪という点だ。
両親が金髪で子供が黒髪と言うのは常識的に考えてありえない。
親子理論がこれでは崩れてしまうと俺は気になっていた。

「でも、ランさん。髪色がまったく違うのでそれは無理があるのでは？」

「大丈夫よ。こういう時もあろうかと私は、髪の色を染める薬を売り物の中から一個くすねておいたの！」

あー。なんか、突っ込むポイントが今の会話から２つほど出来たんだけど、突っ込んでもいいんだよな？

「髪を染める薬ですか？それより、くすねてきたのはマズイのでは？」

「ええ、この白い薬に、同じ髪質になりたい人の血を一滴垂らして薬が朱色になったら飲むだけでいいのよ」

後半の問いかけはスルーですか・・・・・

ランさんは俺に解説しながらも、親指に少しだけ傷をつけてから垂れてきた血を薬に垂らして朱色になった物を俺の口に突っ込んできた。
一緒に横になっていた俺は、ランさんから繰り出されてきた薬を避ける事が出来ずにそのまま、飲み下してしまう。

「かはっ、ランさん、ひどいですよ！いきなり」

「ごめんね、実際に体験してもらった方が早いかな～って思ったのよね」

この強引さ、どこかで味わった気がするのは気のせいか・・・・・？
しばらくすると、漆黒の髪が、ランさんと同じ色の金髪に変化した。
俺は、それを見ながらスゲーと関心しているとランさんが俺の瞳を見て驚いていた。

「あら？瞳の色まで変わってるわ」

「瞳？」

「ええ、私と同じ青色になってるわ」

「それなら丁度いいかもしれませんね、余計に怪しまれにくくなりますし」

「そうね」

ランさんはしばらく、考えこんでいたようだったけど、気持ちを切

り替えたのか、
俺の両頬に両手で触ってくると、決心を込めた眼差しで俺に向って呟いてきた。

「ミリル、言葉の使い方がね、男の子みたいにガサツだから、明日からは、女の子の言葉を教えてあげるからきちんと覚えてね」

「え、別にこのままでも・・・・・・」

「ダメよ、ミリルはかわいいんだからきちんとした言葉使いを覚えないとダメよ。
明日からはビシバシ教えますからね」

なんだってー。と俺は心の中で突っ込んでいた。

イメチェンしました。

「ミリルー、そっちの人もお願いね」

「ラジャ！」

しゅたと手を上げると、ランさんが俺の方を見て睨んでくる。

「は、はい・・・・・・」

慌てて、俺は言いなおした。

それを聞き、ランさんもにっこりと笑うがあの微笑はあとで怒りますからねという意志が込められてる時の微笑みだ。

俺は、ランさんに任されたお客へ商品である丸薬（くすり）を渡す。

お客さんは俺の顔を見て、にっこりと笑うと俺の両手を包み込むようにして手を軽く引いてきた。

「ミリルさん、俺と結婚してくれませんか？」

「だが断る！」

即答した俺の言葉に、お客だった男性が撃沈した。

まったく飽きもせずに、よく求婚ばっかりしてくるもんだ。

ここの通りに、店を構えてからすでに一週間が経過しているが、その間に俺が求婚された人数は１００人を超える。

最初は戸惑っていたので、ランさんが助け舟を出してくれたが３日も立つとウザイと思うようになり、このような断り方をするのも仕方ないことだろう。

夕方になり、お客が減って俺も暇になったのでボーっと座って考え事をしていた。

一週間前・・・・・・

髪と瞳の色がランさんと同じ色に変わってから、足首まである髪だと動くのに支障が出ると思い朝になってから髪を腰の位置で揃えるようにしてランさんに切ってもらった。
本当はもっと短くして欲しかったのだが、ランさんに却下された。
髪を切った所で、ユーエルさんが家から出てきて、俺の方を見ると、驚いたような顔をしていた。
その後は、商品をくすねた事に関して、ランさんはユーエルさんに結構怒られていた。
どうやら、かなり高額の商品だったらしい。
しばらく話していたが、結局使ってしまった物は仕方ないと結論つけたようで、ユーエルさんは俺を手招きしてきた。
その後は、明日から開く商店の手伝いの事と、この世界の基礎知識を教えてもらった。

記憶喪失だったから良くは分からなかったが、この世界での通貨はユルドという。
最小単位は1ユルド　10ユルド　100ユルド　1000ユルド　10000ユルド　と通貨の価値が上がるみたいだ。
100ユルド硬貨までは、銅を使っているようだが、1000ユルドは銀が少し混ざっている。
10000ユルドになると金が混ざるようになる。
金・銀と銅の比重については国で決まっているらしく、製法は秘密らしい。

１００００ユルドの上にも硬貨があるらしいが金で作られるらしい。
一般的には流通していない。
かなり大きな商談で使われる硬貨らしい。
一般家庭で一日食費で使うお金は１０００ユルド付近。
そして、ランさんが、俺に使った丸薬は３０万ユルドする高価な丸薬という事。
ユーエルさんにそれを聞いた瞬間、俺は頭がクラッとするほど衝撃を受けた。
そして・・・・・ユーエルさんの肩に右手を置いて苦労してたんだね。と哀れみを込めて見つめてあげた。

朝食を取った後、俺とユーエルさん、ランさんの3人で商店を開く事が出来る商会通りへ下見に向かった。
住んでる家から、商会通りは徒歩で5分ほどだった。
遠いと不便という事なのだろう？
通りを歩いていると、色々なお店が両脇に並んでいる。
本来は１０m近い通りだと思うが、たくさんのお店が並んでいる為、間を縫うようにして歩かないと行けない。
きっと髪が長かったら大変な事になっていた。

手形に書いてあった出店許可書の場所を確認したあと、3人で町を見て回った。

興味を引いた建物が3つあった。

《魔流術師協会》《派遣勇者協会》《冒険者・傭兵派遣所》

俺は、それを見ながら勇者って派遣業なのかーと心の中で突っ込んでいた。

町を見て分かった事は、町は中心部に行政が設置されていてそこから東西南北に道が続いている。
俺達が住んでる家は南方に位置するらしく、商人や商店が多いようだ。
何も考えずに通りを歩いていると後ろからランさんが話しかけてきた。

「ミリル、明日からお仕事だけど大丈夫？」

「大丈夫です、ランさん」

俺がそう答えると、ランさんが少しムッとした顔で俺の方を見てきた。

「ミリル、違うでしょ。そういう時は、大丈夫よ、お母さんって言うの。さあ、言ってみて」

・・・・・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・・・。

「だ、大丈夫よ、お母さん？」

自分で言ってて違和感ありまくりなんだが・・・・・・・。

「えらい、えらい。良く出来たわね、ミリル」

ランさんが俺の頭をそう言いながら撫でてくる。

なんか、とっても犬扱いされてるのは気のせいだろうか？と密かに心の中で突っ込んでいた。

そこまで回想した所で突然、大声で名前を呼ばれた。

「ミリル！」

「ひゃ、ひゃい」

思いがけず、回想から引き戻された事もあり、中途半端に返事をしてしまう俺。

「今日はここまでにして帰りましょうね」

「はい、お母さん」

露店を畳んで、自宅に戻る頃にはすっかり日が沈んでいた。

料理のお手伝いしました。

アレイクード公爵邸執務室では、部屋の主たるアレイが苛立ちを隠そうともせずに部屋の中を歩き回っていた。

「くそ、もう一週間だぞ？一体どうなってるんだ」

正美を探す為に、公爵領全ての兵士のみならず、傭兵や冒険者まで動員し厳戒態勢の下、探していたが痕跡すら見つかっていない。国境の通過すら制限してるというのに一切情報が入ってこない。すでに政務にも支障をきたしており、その証拠に執務室の机の上には書類が山積みになっている。

アレイが執務机の椅子に座ると、丁度、執務室の扉をノックしてくる音が執務室内に響き渡った。
アレイが入出を許可すると一人のメイドが中に入って来た。

「何かようか？」

苛立ちを隠そうともしないアレイの言い方に、イリシアは、泣きそうになるのを堪えてから一つの白い布に巻かれたモノを差し出してきた。

「なんだこれは？」

「警備隊長が、先ほど見つけて渡してくれた物なのですが、これは正美様の部屋のシーツと枕になります。」

「なに？どういうことだ？どこで見つけた？」

「正美様の部屋にある窓の下の木々の間に、嵌っていたのを偶然見つけたそうなのですが、何か手がかりがあればとアレイ様の元へお持ちしました」

「そうか、よくやった」

アレイが、イリシアの持っていた荷物を受け取るとシーツを剥がしていく。

中には一匹の白いモフモフの縫い包みもとい小さい魔物が寝ていた。

「・・・・・・・・・・・」

アレイは思わず、額に手を当てて、溜息を吐いていた。

なんだ？この生き物は・・・・・・・？

見たことがないんだが・・・・・・

アレイが、猫の耳を持ってぶらーんと持つと、猫が身動ぎした後、ゆっくりと瞼（まぶた）を開けた。

《我に触（ふ）れるな、この幻想住民（フェルナーク）が！》

アレイとイリシアの頭の中に直接、言葉が降ってくる。

例えようの無い圧倒的な畏怖と恐怖が二人の体から一瞬で力を奪いさり、見えない重圧（プレッシャー）が二人の体を床に叩きつけた。

床に叩きつけられた衝撃と恐怖でイリシアは気を失ったようだ。

気を失ったのはイリシアとしては行幸だったのかもしれない、このまま意識を持ち続けていたならば恐らく精神が崩壊していただろう。

それほど、この小さい魔物から発せられる重圧は常識ではありえなかった。

勇者の最高峰である聖騎士（パラディン）の称号を受けているアレイですら、身動（みじろ）ぎすら出来ないのだ。

「な・・・・・なんだ？き・・・・・・貴様、い、一体何者だ？」

「幻想住民（フェルナーク）如（ごと）きが、我に質問か？」

たった一言で、力の差を本能が理解した、圧倒的なまでの力の差、否、力の差など生ぬるい、次元が違う、絶対的な捕食者を前にした《死》を感じさせる。それでも、アレイが体を起そうとすると、魔物はアレイを見ながらも愉快そうに口元を歪めた。

「いいだろう、我の名は幻獣王（ルアカーゼ）」

「幻獣王（ルアカーゼ）だと？神すら喰らいつくすと言われるそんな禁忌（きんき）の化け物がなぜこんな所に？アレイは、頭の中で、伝承にのみ出てくる神獣を思い出していた。その間も、魔物は一方的に話を進める。

「幻想住民（フェルナーク）、我が主はどこに行ったのだ？見当たらないが？」

主？こんな化け物を飼いならす奴がいるのか？一体どんな奴がこんな奴を使役しているんだ？

「どうやら、ここには居ないようだな。だが、そう離れてもいないな、魂の在り方が変わっているのか、正確な位置の確認できないな」

「お前の主の名前は、い・・・一体何と言う名前なんだ？」

「そういえば、我の主の名前をまだ言ってはいなかったな。我が主

の名前は正美と言う」

その頃、正美はと言うと・・・・・・

「お母さん～お風呂沸いたよー」

「は～い。貴方、先にお風呂に入ってきてね、夕食の準備しておくから」

「ああ、わかった。」

ユーエルが今日の売り上げの集計と、商品の在庫のチェックをしながら相槌を返した。
お風呂場にユーエルが向かうと、入れ替わりで正美が戻ってきた。

「ご苦労様、ミリル。今から夕食の用意しないと行けないから手伝ってね」

うっ・・・・・・めんどくさい。
俺の考えを読み取ったのか、ランさんが俺をニコニコした眼差しのまま見つめてきた。
やばい、あれは断ったら怒られる眼差しだ。
ランさんが持つ、包丁の柄の部分が震えているのが見える。
きっと内面ではかなり、ご立腹でいらっしゃる。
市場で、教え込まれてた女言葉を無視して男のようにお客に対応し

てた事にご立腹なのだろう。

「う・・・・・うん、何をしたらいいの？」

俺のその言葉に、ランさんが食器を並べてから料理を作る手伝いをしてねと言ってきた。
テーブルの上に食器とスプーン・フォークを並べていった後、包丁の使い方や野菜、お肉の切り方、炒め方、シチューの作り方をこと細かく説明された。

「うん、ミリル。明日の夕食は貴女が作るのよ？」

え？俺にそんな無理難題な課題は無理っす。と突込みを心の中で入れていた。
口に出せないわけは、口に出したら怒られそうな雰囲気があったからである。

「うん、わかった」

俺の返事に気を良くしたのか、ランさんは料理をお皿に盛り付けていく、当然、俺も手伝わされるわけだ。
一通り、用意が終ると、ユーエルさんがお風呂から出てきて3人で食事を摂った。

食事の後、食器を洗いお風呂に入っているとランさんが入って来た。
お風呂は結構広く出来ていて3人くらいは一緒に入れる。
ランさんの話によるとここまで福利厚生、住居まできちんとしている所は

他の領地や国では考えられないと言う。
ランさんもユーエルさんもこの町でずっと暮らして生きたいと言っていた。
俺は、二人の話を聞きながらも何故か疎外感を感じていた。
ランさんもユーエルさんも俺に家族のように接してくれる。
でも、何かが違う。
何が違うかは分からない。
でも、この世界は俺を必要としていない。
そんな漠然とした不安が日に日に強くなっていく。

お風呂の中に浸かりながら、そんな事を考えているとランさんも湯船に浸かってきた。

「ミリルは、ずいぶんと着痩せするタイプなのね」

「べ、別にいいでしょ」

俺は、恥ずかしくなってタオルで前を隠そうとするが、ランさんに剥ぎ取られてしまった。

「ふむふむ、形も色も悪くないから問題ないわね」

何が問題ないんだー。心の中で盛大に突込みをいれつつ、
ランさんの裸と比較すると俺の体より遥かに女性的な体をしている。
くっ、なんだこの敗北感は・・・・・・。

「べ、別にいいでしょ！これから成長するもん」

ランさんが俺の返答に笑っているといきなり真顔になった。

「ミリル、最近の貴女すごい人気があるのよ?男の人には、気をつけるようにね」

「そうなの?」

たしかに、一週間で１００人近くから求婚（プロポーズ）されてるわけだけど、あれって一種のイベントだと思ってたよ。
そういえば、最近しつこい人もいるなー。中々手を解いてくれない人とか、結構うざかったりする。
う～ん、ランさんに改めて言われると危機感が出てきた。

「わかったわ、気をつける事にするね」

その後、お風呂でランさんにみっちりと言葉使いと女の子としての考え方をレクチャーされた・・・・・・。

隠された才能開花しました。

お風呂から出た後、ランさんに髪の毛を結ってもらっているとユーエルさんが倉庫代わりに使っている部屋から出てきて、溜息をついてから肩を回して首を左右に振っていた。

「お父さん、どうかしたの？」

「ああ、少し肩が凝ってしまってな」

俺とユーエルさんの会話の最中に、ランさんは口を挟まずに俺の髪を三つ編みに結ってくれていた。

「さあ、出来たわよ」

「ありがとう、お母さん」

俺がそう言うとランさんは、頭を撫でてくれた。

「お父さん、肩を揉んであげる」

ランさんに頭を撫でてもらって気分を良くした俺は、ユーエルさんの肩を揉もうと背中に回りこんでユーエルさんの肩に手を置くと、ユーエルさんの肩から黒い霧みたいなのが立ち上って、俺の手に纏(まと)わりついてきた。

突然の事に俺は驚いて、背中から床に倒れこんだ。

ランさんとユーエルさんは俺の様子を呆然と見ていて、どうかしたの？って顔をしている。

「お父さん、お母さん。今の見た？」

「ええ、見たわ、ミリルが転ぶ所をね」

そう言いながら、ランさんは笑っている。ユーエルさんも怪訝な表情をしてるだけだった。

二人とも、未だに俺の手に纏わりついてる黒い霧が見えていない。

しばらくすると黒い霧は、俺の体の中に吸い込まれるようにして消えていった。

「お！体が軽くなったぞ？」

ユーエルさんが、突然そんな事を言い出した。

体調が良くなった要因は一つしか考えられない。

それはさっきの黒い霧が関係してるとしか・・・・・・

「本当に？ミリルってもしかして癒しの力が使えるのかしら？」

ランさんがそんな事を言いながら、期待の眼差しで俺の方を見てくる。

俺は思わず、サッとその眼差しから顔を背ける事に成功したが、次の瞬間には両頬を手の平で挟まれて無理矢理ランさんの方に向けさせられた。

ランさんが俺を見る眼差しがキラキラ光って、私もマッサージしてー。とジェスチャーしなくても手に取るように分かる。

これは、きっとマッサージしないと収まりがつかないんだろうなと諦めた。

ランさんが毛布の上に横になって、俺を手招きしている。

あー、なんというかこれって女性が男を誘うポーズなんじゃないの

かな～？と心の中で突込みつつランさんの側に寄って背中と肩を押していくとユーエルさんより遥かに濃くて黒い霧が俺の手の周りに纏わり付いてくる、それが消えたあとランさんが妙にスッキリとした顔で見つめてきた。

「すごいわ、ミリル。貴女すごい才能があるわ、この才能を生かしたお仕事を始めましょう」

えー。嫌だよ。なんかこれおかしな感じするし、めんどくさいよー。って思ってても口に出せませんでした。
だって、ランさんがとってもいい笑顔で笑ってきたから。
その笑顔には、逆らったら体にお仕置きよって書いてある雰囲気を醸し出していた。

「ねえ？貴方、いいでしょう？」

ランさんが甘えたような声でユーエルさんに同意を求めてる。
それに対して、ユーエルさんが、ランさんの一方通行的な態度に少し渋っている。
がんばれ！ユーエルさん、俺の未来は貴方にかかってるんだ！

「そうだな、ミリルが売り子をしてくれてるおかげで半年分の品物が一週間で売り切れてしまったからな。そういう仕事をするのもいいかもな」

はい、一瞬で撃沈。俺は売られましたー。

「え？貴方。もう売り物がないの？」

「ああ、ミリル見たさで若い連中がたくさん購入して行ってくれる

からな、しかもミリルにプロポーズできる権利をつけた品物はすぐに売り切れる。中にはダース単位で購入していく奴もいるくらいだ。アハハハハ」

アハハハハ、じゃねえええええ。

何？それって俺にプロポーズする奴らは皆、高額のアイテムを抱き合わせ販売されてたって訳？

悪徳商法じゃねえの？

商魂逞しいというかなんというか・・・・・・。

俺は呆れてしまっていた。

「よし、明日はミリルの仕事場の確保の為に住居を借りる事にするか」

「ええ、そうね。ミリル、がんばってね！」

ランさんが俺の頭を撫でながら激励してくれるが・・・・・・。

あれ？俺、何も発言していないのに話が勝手に先に進んでしまって決まっているんですがー。

俺の意見はスルーですね、わかります。

何か前もこんな事があったような無かったような気がする・・・・・・

一日２４食始めました。

朝食後、執務室に戻るとそこには、幻獣王（ルアカーゼ）が絨毯の上で寝ていた。
パッと見た目は、小さい小動物に見えるがこれは実は仮初の姿で、
本来は数百メートルの巨大な幻獣らしい。
今は、主の正美の制御範囲から離れている為に、力に制限が掛かっていない状態という事だった。
まったく、やっかい極まりない人間じゃなくて魔物が住み着いたもんだ。
しかもクレイネルと俺の母親と気が合い、正美を探すにも協力的な姿勢を見せてくれているが、
実際は、ここ数日こうして執務室の絨毯が気にいって寝てばかりいる。

俺は、幻獣王（ルアカーゼ）の気が悪くならないように遠巻きに執務机に座ると書類の整理を始めた。
幻獣王（ルアカーゼ）の話だと、ここからそう遠くない位置にここ１０日間潜伏しておりほとんど動くそぶりも見せないという事。
そして、体調管理も特に問題ないと言ってきた事、そしてしばらくは放置しておいた方がいいかもしれないと幻獣王（ルアカーゼ）の助言により領地内の兵士を解散し滞っていた書類を整理してるわけだが・・・・・・

《おい、アレイ。》

「なんだ？」

《食事はまだか？》

「ルアカーゼ、さっきまで食べていなかったか？」

《馬鹿をいうな！一体何時の話をお前はしているんだ？》

「つい３０分前の話だが？」

《これだから、幻想住民は愚かと言うんだ。何度も教えてやるが、我は一日２４食なのだ。わかったらさっさと食事の用意をしろ》

「ルアカーゼ、お前どんだけ喰うんだよ」

《仕方ないであろう？主が離れて一週間何も食していなかったのだ、エネルギー消費を抑える為に仮死状態になっていたと言うのにお前が無理矢理目覚めさせたのだ》

「分かった。分かったから、俺を食おうと殺気を放つのはやめてくれ」

《ふむ、わかったならいい》

そう言うと、幻獣王（ルアカーゼ）は絨毯の上に寝転がった。
その姿は誰がみても、幻獣王とは言えない堕落しきった姿だった。

ちなみにイリシアは意識が回復してからしばらくは、お暇を出されて近くの町へエルフィーナと共に休暇休みを取りに行く事になっていた。

「本当に頭きちゃう。どう見ても相場よりも２０％は高いわよね」

お母さんが、ぶつぶつ文句を言いながらも俺とお父さんの前を歩いている。

思い立ったがすぐという事で、今日は、マッサージ屋を開業する為の部屋を借りる為に

商工会所へユーエルさんとランさんと俺、３人で部屋を見て回っているのだ。

すでに朝から物件を回って２１件目。

すでに俺の体力は限界です。お母様・・・・・・。

「ここだわ」

疲れを感じさせない面持ちで、ランさんが指差した建物を見ると、そこは煉瓦作りの建物で入り口は人が並んで二人通れるくらいの大きさ。

中は３０畳ほどの広さだった。

今までで一番広いかもしれない。

床には木材が打ち付けられていて素足でも問題なさそう。少し掃除が必要かな？

というかもう疲れたからここの物件で手を打ちたい。

「お母さん～。もう疲れたよー」

「そうね、家までの帰り道は覚えてる？」

「うん、覚えてる」

「それなら、先に帰って休んでいてもいいわよ」

ランさんの言葉に俺は喜んだ。そしてユーエルさんも、もう帰りたいという顔をしていた。
俺はユーエルさんにがんばってっとジェスチャーすると建物から出て、通りを自宅の方に向かって歩きはじめた。

人通りの増えてきた通りを歩いているといい匂いがしてきた。
そういえば、御昼からご飯食べてないな・・・・・・
匂いの根源を探してウロウロしていると、一つの屋台が視界に入った。
焼いたお肉をタレにつけてパンで挟んである食べ物を売ってる。
とってもおいしそう・・・・・・丁度お腹がくーっとお腹空いたよという抗議の音を醸し出す。

「はぅぁ」

自分自身でも意味不明な言葉を発して周りを見渡す。
誰も俺のお腹が立てた抗議の音は聞いていないようだ。
俺は顔を真っ赤にしながらお腹を抑えていると、俺の視界に入っている屋台で買い物をした男の人が俺に近寄ってきた。

「金髪のお嬢さん、食べるかな?」

そう言って男の人が屋台で購入した、肉サンドを俺に差し出してきた。
俺は相手の顔を見る為に見上げると、身長が１９０近い紫の髪色の赤い瞳をした男性が俺を見下ろしていた。
俺が、その男性の瞳を見るとニコリと男性が笑いながら屋台で購入した物を再度、差し出してくる。

そこで俺はランさんにレクチャーされた内容を思い出していた。たしか、ランさんが男の人は、下心があるから物を上げるんだよ、だから物をもらったらイケナイって言ってたよな。

「いらないです。」

俺のその言葉に、男性は呆気に取られたような顔をしていた。

「さっきお腹から音が鳴っていたぞ？」

その言葉に、俺は顔を真っ赤にして睨みつけた。

「そういう事を言うのって紳士としてどうかと思います！」

「別に俺、紳士じゃなくて冒険者だからな・・・・・・」

ああ言えば、こう言う人だな。

それでも、俺に差し出してる肉サンドを手元に戻さないのは驚嘆に値する。

そして、お腹が空いてる俺としては当然、その匂いに負けてしまいそうになるわけで、くーっとお腹が俺の意思を無視して鳴る訳だ。

「ほら、やっぱり腹減ってるんじゃないか、遠慮しないで喰え」

「べ、べつにこれは生理現象であってお腹が空いてるわけじゃないし恵んでもらう訳にはいかないの！」

かなり支離滅裂な言い訳を俺はする。

大体、瞳を見たときにちょっとカッコイイかなって思ったけど、女の子に対して、お腹の音が鳴ったからとか、もう少し遠まわしに言

っても言いと思う。
私が今、耳まで真っ赤になってるのは、そういう配慮が欠けてる証拠だと自覚してほしい。
しかも、私がこういう状態になっていても、男の人は全然動じてないんだもん。
何？この人、すごいむかつくんだけど・・・・・・って誰でも思うと思う。

「なら、お金が出来た時にでも払ってくれればいいからさ、俺の名前はロムスって言うんだ。
勇者協会では少しは名の知れた冒険者だから、受付に渡してくれればいいさ」

「え、ちょっと・・・・・・」

ロムスは私が返事を返す前に、肉サンドの入った包みを渡して離れて行った。
追おうとしたが、通りには人が多くてすぐに見失ってしまった。

手元には、肉サンドだけが残った。

「はぁー仕方ないね」

私は、起きてしまったことは仕方ないと諦めて、肉サンドを頬張りながら家に帰った。
味は、なんか微妙な味だった。
まずくないけどおいしくもない微妙な味だった。

ロムスって変な男から、屋台の包みを貰って食べながら帰宅した頃には、
家の中から明りが漏れていた。
あっちゃー、もう二人は帰ってきてるのか・・・・・・
迷子になって思ったより時間が掛かったのが原因か？
ここの町ってすごい入り組んでて迷子になりやすんだよねと言い訳する事にしよう。
そう考えて、自宅の扉を開けると、言い訳をする前に、ランさんが俺にタックルするように抱きついてきた。

「ミリル、心配したのよ？」

お母さんが涙声で俺を抱いて頭を撫でている。

「お母さん、おおげさだよー。こんな街中で何かある訳ないじゃない？」

俺がそう言うと、ランさんが真剣な眼差しで俺を見つけてみた。

「ミリル、前にも貴女には注意したわよね？貴女は、ここの町の男性に人気があるの、もっと注意しないとダメよ、大切な体なんだからね」

ランさんに、少しおおげさすぎーと言おうとした所で、喉まで出かけた言葉を飲み込んでしまっていた。
だって、瞳に涙を讃えていたから・・・・・・

「ごめんなさい、今度から気をつけるね」

その後の夕食の時間はとても気まずかった。
まさか、こんなに心配されるとは思わなかったから。
だから、お風呂に入ったあとに迷惑をかけたお詫びに、
ユーエルさんとランさんの体の黒い霧を取り払った。
その黒い霧は昨日より、濃厚でなんとも言えない感情が流れてきたような感じがした。
その後は借りる物件が決まった事や必要な家具も手配が付き、
明日からでも開業できる手筈が整っていると聞いた。

その日は、何故かユーエルさん、ランさんと何かが終ってしまう気がして中々寝付く事が出来なかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・。

意識が覚醒していく。いつの間にか寝ていたようだった。
瞼(まぶた)を開けると、そこには凄惨な光景が視界一面に広がっていた。
辺り一面が炎で焼かれており、地面には普段、目にしないモノが転がっていた。

ー大量の死体ー

老若男女関係なく、たくさんの息絶えた人であったモノが横たわっている。

俺は、その光景に立ちすくんだまま、あたり一面を見渡した。
少し離れた所では、ランさんが血まみれの金髪の１６歳くらいの女の子を抱いたまま地面に座っていた。

「ミリル、ミリル、目を開けて、ミリルー」

必死に、俺の名前を叫びながら泣いている。
その女の子の容姿は俺にとてもよく似ている。
でも、この子は俺じゃない。
ならこの子は？疑問に思っていたところで声が聞こえた。

通りを挟んだ向こう側から、ユーエルさんがランさんの名前を叫びながら走ってきた。
ユーエルさんはランさんが抱えてる女の子を見ると、顔を真っ青にしてから地面に膝をつけて女の子の顔を撫でてこう呟いていた。

「すまない、ミリル。全ては、町に伝わっている命樹原書（ラクトオリジン）が原因でお前をこんな事に・・・・・・」

そのユーエルさんの言葉にランさんが恨みの篭ったような眼差しでユーエルさんを睨んだ。

「何？私達の娘はそんな物の為に殺されたの？そんな物の為に・・・・」

後半は言葉にならず、聞き取ることが出来ない。

「ラン、取り合えず今は、この町から逃げる事を優先にしよう、レイユーズ公爵が清教徒騎士本隊を連れてこの町を襲撃するまで時

間がない。
本隊が到着してからでは誰も生き残ることは出来ない、
それに命樹原書(ラクトオリジン)はレイユーズ公爵には渡してはいけない物なんだ」

ユーエルさんがランさんの手を引っ張り無理矢理立たせると、ミリルと呼ばれていた女の子が地面に軽い音を立てて落ちる。

「いや！ミリル一人をこんな所に置いていけないわ、私もここに残るわ」

「いい加減にしないか、私達の娘が親の死を望むとでも思っているのか？」

ユーエルさんは、ランさんに薬を飲ませて昏倒させるとそのまま帆馬車に載せた。

「ミリル、埋葬も出来ない私を許してくれ」

ユーエルさんはそう言うと、帆馬車の手綱を操り、町から逃げ出した。
街道を逃げるように走る帆馬車の後方には、空を焼き尽くさんばかりに燃え崩れ落ちる町の最期があった。

俺は、ユーエルさんとランさんに触れる事も出来ず、帆馬車に乗っていた。
2日程過ぎた頃に、ランさんは目を覚ますとユーエルさんへ食って掛かるように支離滅裂な言葉で罵(ののし)っていた。

ユーエルさんもここ2日間の強行軍でかなり疲れていたのだろう。
グッタリとしたまま、文句も言い返さずに罵られたまま帆馬車の中で座っていた。

「なんで、なんで、ミリルが死ななければいけなかったのよ！返して！ミリルを返してよ！」

ランさんがユーエルさんの襟首を掴んで泣きながら嗚咽している。

「一つだけ・・・・・・一つだけミリルを生き返らせる方法がある」

ユーエルさんが、疲れ切った目でランさんを見つめながら囁くようにして言葉を紡いでいた。
ランさんはその囁くような言葉を聞いて、掴んでいた襟首を離してユーエルさんから距離を置いた。

「ミリルを生き返らせる事が出来るの？」

ユーエルさんは自分が思わず呟いてしまった言葉に、後悔しながらも語り始めた。

町が襲われたのは、命樹原書（ラクトオリジン）と呼ばれる精神と拠り代を作り出す力を有する書物の事が原因だった事を、
レイユーズ公爵が自分の領地内にあるフェルの町を焼き払い手に入れようとしたのは、清教徒教会の兵士たるゴーレムを無尽蔵に作り出しそれを私兵に加えようと画策していたからだと。
そこまでランさんは、ユーエルさんの話を聞いた所で、ミリルを生き返らせる方法を聞いた。

ユーエルさんは瞼を閉じてから、額に手の平を当ててから話した。

「娘を・・・・・ミリルを生き返らせる為には、適合する人間が材料として必要になるんだ。
術を成功させる為には３つの条件が必要になる。

１つ目は名をもっていない同年齢の子に名前を付ける事。名前はその者の魂の在り方を現す。そこから魂を精製し作り変える事。

２つ目は容姿が似ていること。肉体を作り変える際の魔流力を最小限に抑えられる。

３つ目は絆を作る事。信頼を作り、術に掛かりやすくする、絆は強ければ強いほど好ましい

この３つの条件を揃えれば、作り変えることは、
命樹原書（ラクトオリジン）を使えばいくらでも作り直す事が出来る、
だが・・・・・これは禁忌、生贄になる人の尊厳を冒涜する行為になる。
それに適合者なんて居るわけがない、１６歳で名無しの子など存在するわけがない。
だから、娘を生き返らせるのは無理だ、それにミリルも誰かを犠牲にしてまで生き返りたいなど思ってはいないだろう」

崩れ落ちる思い

俺は、二人の話を帆馬車の中で聞きながら、頭の中が真っ白になっていた。
今さっき聞いた言葉を理解する事を頭が拒否していた。
それは、理解したら全てが崩れてしまうから・・・・・・
だが、時は無常に過ぎ、落ち着くと同時に聞いた事を強制的に整理していく。

同時に俺は、瞳から自然と涙を流しながら乾いた声で狂ったように笑っていた。

俺を助けたのも、

ミリルという名前をつけたのも

家族ごっこをしていたのも

全部、全部、全部、本当の娘を生き返らせる為の生贄にするためだった。

俺は、何もない空間を見上げた。

滑稽すぎて笑いがこみ上げてくる。

なんなんだよ、

これって、どうなってるんだよ、

俺が何をしたんだ?

俺が何したって言うんだよ!

誰か答えろよ、答えてくれよ。

正美の周辺の風景は帆馬車の風景ではなく、漆黒に塗り潰された空間に中に一人立っていた。

その頃、アレイクード邸では、執務室に一人の兵士が駆け込んできた。

「アレイ様、大変です」

「どうした?騒々しい。何か問題でも起きたのか?」

良く見ると駆け込んできたのは、国境守備を任せた兵士であった。
その取り乱しようから尋常では無い事が伺(うかが)いしれる。
兵士が落ちつき、報告を上げてくるのをアレイは待つことにした。

「本日、夕方に清教徒軍が国境に侵攻、国境は2時間で落ち、清教徒軍が現在、南方の商業都市フェルンに侵攻中です。
進軍速度から見て2日後には、フェルンに到着すると思われます。」

「清教徒軍の数と誰が指揮しているのか分かるのか?」

「清教徒軍の数は２０万　率いている者はフェルの町にて虐殺を指揮したイドバーン祭司です」

「そうか」

アレイは、短く呟き兵士を下がらせると、執務室の椅子に深く座り、両手を机の下に隠して握りこんでいた。
あまりにも強く握りこんだ事で、絨毯の上に深紅の血痕が広がっていく。
２ヶ月前、異教徒が反乱を企てていたからと、偽りの情報を流し、確証もなしに町を襲撃し女子供赤ん坊まで皆殺しにし、あまつさえ、その亡骸を亡者（アンデット）にして今尚（いまなお）、他の町を襲っている外道共が！

「クレイネル！」

いつの間にか執務室の扉の側に立っていたクレイネルに視線を移しながら名前を呼ぶ。

「なんでしょうか？アレイ様」

クレイネルも今回の情報を立ち聞きしていた事から、今後どのようになるか予想がついていた。
恐らく、アーカルスド公爵領と清教徒軍の全面的戦争になるだろう。
だが、国が関与してくる可能性は低い。
なぜならば、清教徒は世界中に支部を持ち、強大な力を有する。
この国のみならず、他国も清教徒に関しては不可侵を貫いてる。
前回、クレイネルの両親が殺された清教徒軍との戦いの後、この国は軍縮を行っていた。
それにより、同じ規模の戦いが起きた場合、恐らく支えきる事はできない。

領民を領地を有事の際に命を掛けて守る事こそが、王や貴族の矜持という物なのにだ。
だが、前に座っているアーカルスド公爵領の領主アレイクードは違う。
領民を第一に考える、貴族の中の貴族。

「至急、全兵団と集めろ！清教徒軍を一歩たりとも町へは近づけさせるな」

「心得ています」

返事を返したあと、クレイネルはすぐに執務室から出ていき、アーカルスド公爵領の全兵士を集める為に、各地に早馬を走らせた。
静かになった執務室の中に突然気配が現れた。

「母上、気配を消して部屋の中にいるのは心臓に悪いのでやめてください」

アレイは苦笑いしながら、気配がした方へ視線を向けるとそこにはメイド長が立っていた。

「あらら、アレイちゃんたら。私の方からは冒険者と傭兵を動員するように手筈を整えておくから、それとしばらくメイド達は戦闘に参加する為にお休みもらうわね」

「母上も出るのですか？」

「ええ、ひさしぶりに体を動かさないとね～。それに領地内の全部の兵士が集まるまで時間掛かるでしょう？私達が時間稼ぎをしてお

くわ」

《エメラス、何故、我の方に視線を向けて言うのだ?》

「いいじゃないの、ひさしぶりに集団戦なんだしきっと楽しいと思うわよ?」

《悪いが、我の主に今、問題が起きている。主を優先させてもらおう》

「あら、残念」

エメラスは舌を出しながら諦めた。

そのあと、ルシアードは部屋の窓を開けて南の方へ飛び去った。

魂の隷属と解放（1）

朝、眼が覚めると二人を起さないように、俺が意識を失って倒れていた時に身につけていたドレスを着て、貴金属を持ち出して家からそっと抜け出した。
町の中心部へ歩いていくと、まだ朝早いだけあって、町の通りは人通りが疎(まば)らだった。

町の中心部にほどなく到着し、大きめの建物の前に立った。
そこの建物には、《派遣勇者協会》と言う看板が掲げられていた。
赤い煉瓦作りの４Ｆ立ての建物だ、町の中では２Ｆ以下の建物が多いため必然的に目立つ。
扉を開けて、中に入っていくと女性と話をしている男性がいた。

「ロムス！」

思ったより大きな声で名前を呼んでしまった。
名前を呼ばれた男は、俺を方を見てから怪訝な顔をしていたが、すぐに何かを思い出したように笑いかけてきた。

「昨日の、お嬢ちゃんじゃないか！まったく違う格好をしていたから気がつかなかった」

「別に気がついてもらわなくて結構です。昨日のお礼をかねてこれを渡しにきただけだから」

俺は、そう言いながらロムスにイヤリングを含めた、貴金属を全部押し付けて建物から逃げるようにして出た。
しばらく通りを歩いていると、突然腕を掴まれた。

「おい、待てよ。いくらなんでもこんなに貰えねえよ」

ロムスが俺を追いかけて来て、律儀にもそんな事を口走ってきた。
俺には、必要の無い物。

「別に、相場しらないし、もらっておいてよ」

俺は、そう言って離れようとするとまた腕を掴まれた。
男の方を見ると赤い瞳が俺の瞳を真っ直ぐに見つめてくる。
それが妙に恥ずかしくて、今の自分自身を見透かされてるような気がして、掴まれてる腕を振り解こうとするけど振りほどく事ができない。

「離してよ！もう話は終ったでしょ」

「終ってねえよ、お前泣いてんじゃねえか？泣いてる女を一人にするほど男として落ちぶれていない」

「別に、泣いていても泣いてなくても、他人の貴方には関係ないでしょ」

「だからさ、他人とかじゃなくて泣いてる女を放っておくのは男としてはまずいだろ？」

しつこい男だな、さっさと俺から離れろっていうの！

「うるさい、貴方なんかに何が分かるっていうの？」

「何も分からないし、知らないが、泣く場所を貸すくらいは出来る

ぜ？」

はあ？こっちが赤面するような言葉を真顔で言われると俺の方が困るんだが・・・・・・

俺が、どうしたらいいか迷っているとロムスは、俺の腰に手を当てて自分の方へ抱き寄せてきた。

パニックになっていた俺の顔の前にロムスの鍛えられた胸板が視界一杯に広がる。

そのまま、ロムスが俺の後頭部を軽く叩きながら気負わないように軽く俺にだけ聞こえるように囁(ささや)いてきた。

「泣きたい時に泣けないといつか壊れちまう、だから少しは泣く事を覚えろ」

そこで初めて俺は、頬を伝っている涙に気がついた。

出会ったばかりでそんなに日数も立っていないのに自然とこうして抱かれていると安心する。

「なあ？お前の名前はなんて言うんだ？」

俺は、一瞬どう答えていいか迷ってしまった。

あんな夢を見た後なのだ。でも、俺には名前が一つしかないだから・・・・・・

「ミリルだよ」

俺のその言葉に、今度はロムスの表情が凍りついた。

俺は額をロムスの胸に当てていた形になっていたので、それに気がつく事が出来なかった。

正美の滞在するフェルンの町から、凡そ2日の距離の所では、イドバーン祭司が率いる２０万の清教徒軍が進軍していた。

「祭司様、アンデットというのは便利ですな」

「うむ、いくら死んでも代用が効くからな。フェンの町の住人全員をアンデットにしたのは正解だったな。」

そう言いながらイドバーンが後方を見ると白骨化した死体などが多数混ざりながらも異様な統率をもって前進していた。
比較的新しい死体は、先ほど落とした砦の兵士達の死体だ。
イドバーンが、後方を見ながら込み上げてくる笑いを堪えていると、斥候が戻ってきた。

「祭司さま、フェルンの町はこちらの行動にはまだ気がついていないようです」

「そうか、分かった」

フェルンの町の住人は確か３０万ほどだったか？全部足せばそのままこの王国も落せるかもしれんな。
この指輪　死霊原書（アブラスオリジン）の力はすばらしい。
近い将来、全ての国が私の足元に跪くことになる。
楽しみだ。アハハハハハ、声を出さずにイドバーンは心の内で笑っていた。

魂の隷属と解放（2）

「お姉さま、ずいぶん早くついてしまいましたね」

「そうね、思ったより道程が楽だったしね」

イリシアとエルフィーナは、商業都市フェルンに長期休暇を貰い、買い物に来ているのだった。

二人とも、普段の紺と白を基調しているメイド服ではなく、サマードレスに身を包んでいた。

話し方から身のこなしまで美しく洗練されている事もあり、朝早い時間帯にも関らず周辺の男性のみならず女性からも羨望の眼差しを向けられていた。

エルフィーナとイリシアは、そのような視線を意に介さず町並みを見ながら、

町の中心部に向かって歩いていく。

「イリシア、まずは宿を取る事にしましょう。そのあと、荷物を置いてから町を見て回りましょう」

「はい！おねえさ・・・・・・ま？」

突然、イリシアが言葉を濁した事に疑問をもったエルフィーナは、イリシアの視線が自分自身ではなく、その後方に注がれているのに気がつき、後ろを振り返った。

「っ！？」

エルフィーナは視界に入って来た光景に驚きを隠せなかった。
そこには、紫色の髪をした男性が、一人の少女を抱き抱えて町中を歩いている姿だった。
少女は金髪の髪を揺らしながら男の胸に寄りかかるようにして瞼を瞑っている。
それだけなら、特に気にする所ではなかったが、その少女は行方不明になった正美様と同じドレスを着ていた。
それによく見ると、顔つきも正美様に似ており、違うのは髪色だけだった。
エルフィーナは、すぐにでも飛び出したい気持ちを抑えて、事実関係を確認する為に二人を追うことに決めた。

「イリシア、正美様の後を追うわよ」

「はい、お姉さま」

イリシアとエルフィーナが男の後を追っていくと、３F建ての建物の中に入っていった。
そこにはこう書かれていた。宿屋「風見鳥（かざみどり）」と・・・・・・

二人が、しばらく時間を置いてから宿屋に入ると、やさしそうな５０歳くらいの女性がカウンターで立っていた。

「ようこそ、風見鶏へ。お泊り？」

特に不審がられていないと思ったエルフィーナはイリシアに指で合図を送った。
イリシアは時間稼ぎの合図を的確に理解すると、女性に話しかけた。
女性の視線と注意がイリシアに向かってる間にカウンターの中を視ていく。

埋まってる部屋は３Ｆの３０１号室だけ・・・・・・３０２号室は空いてる。

「ええ、そうなんですよ。お買い物で来たんです」

「そうなの、それは遠い所から来たのね。私は名前はユーネって呼んでね」

エルフィーナは二人の話から、女性の名前を聞きかじる。
そして３０２号室を借りる為に、二人の話に割って入る。

「ユーネさん、お部屋ですが、どこのお部屋も一緒なのですか？」

「いいえ、２Ｆからはお二人以上の方が止まれる部屋になっています」

「そうですか。どうせなら見晴らしのいい部屋がいいので３Ｆの部屋をお借りしたいのですが？」

その言葉に、ユーネはエルフィーナに３０２号室の鍵を渡した。
二人は、宿代を前払いし、木材で組まれた階段を上っていった。

「お姉さま、うまくいきましたね」

「ええ、泊り客の見える位置に宿帳を開いて、置いておくなんて襲撃してくださいって言ってるようなものだわ」

二人を知らない人から見れば、その言葉の意味は今から暗殺に行くんですか？と言われる内容の会話であった。

３０２号室に二人は入ると、イリシアは３０１号室の方の壁へ耳を当てて中の音を聞こうとしていたが、エルフィーナはカバンの中から黒いケースを取り出した。
黒いケースを開けるとそこには小型のナイフに、先端から少しづつ広がっているドリルの様な物など多種多様に入っていた。
イリシアは壁に耳を宛てながらも、なんでエルフィーナがそんな物まで持っているのか疑問が心の中で渦巻いていた。

「お姉さま、そ、それは一体？」

「ん？もしもの為に持ってきたの」

もしもって・・・・・どんな時を想定してもってきてるんですかー。とイリシアは心の中で突っ込んでいた。
イリシアが心の中で突っ込んでいる間にも、エルフィーナは道具を使って壁に小さい穴を空けていた。
さらに、そこの穴を鑢（やすり）を使って音を立てずに拡張していく。

お姉さま、普段から一体どういう生活をしてるんですか・・・・・・
イリシアは一人心の中でエルフィーナの後ろ姿を見ながら考えていた。

魂の隷属と解放（3）

目が覚めると、俺はベットの上で蓑虫（いもむし）のように縄で縛られていた。
周りを見渡しても、俺しかこの部屋にはいないようだった。
大声を出して助けを呼ぼうとしたが、口も縛られていてくぐもった声しか出せない。

そこで俺は思い出した。
俺が、自分の名前をロムスに言った途端、俺は首筋に痛みを感じたあと視界が暗転して気を失った事を・・・・・・
って事は、俺はロムスに捕まったという事か？
そう考えるのが妥当だが・・・・・・

そこまで考えた所で、瞳からポロポロ涙が零れた。
せっかくやさしくしてくれた人も、どんなにやさしくしてくれてもすぐに人は俺を裏切っていく。
そんな事をランさんとユーエルさんの時に気がついたはずじゃないか。
それなのに、また簡単に信じてしまってこんな状況になってしまっている。
こんな事なら、こんな思いをするくらいなら心なんかいらなかった。
嗚咽すら上げる事が出来ない俺は、涙を流す事しか出来なかった。

「ユーエル、起きて、ユーエル」

俺が、目を覚ますと妻のランが半狂乱になって俺を揺すっていた。
ランの瞳は真っ赤に染まっており、涙が頬を伝っている。
その状態から大変なことが起きていることに気がついた。

「ミリルが、ミリルがいないの！それにミリルと出会った時に来てたドレスと装飾品も無くなっているの！」

「なに？」

そこまで行くと、普通に居なくなっただけとは思えない。
ドレスと装飾品がなくなっていると言う事は、どこかに出かけるとも考えられない。
それに、私達と一緒に寝ていて起さずに出て行くという事は、なんらかの別の問題が原因と考えられる。

「ユーエル、私は、どうしたらいいの？」

少し落ちついて現状を把握しようと言いかけたところで、ランの右手薬指に嵌っている銀色の指輪を見て凍りついた。

「ラン、ま、まさかお前、それを使ったのか？」

「だって、あの子だって私達の事を家族のように呼んでくれたじゃないの！だからミリルを本当の家族にしたいと思って貴方が教えてくれた術を使ったの」

まずい、命樹原書（ラクトオリジン）の術式が起動した場合、魂から肉体の在り方まで全て組み変わってしまう。
あの子、ミリルが別のモノになってしまう。

「ラン、命樹原書（ラクトオリジン）を使ったのは何時頃なんだ？」

ランが、虚ろな眼差しで、私は悪くないと何度も呟いている。
くっ、術の反動が始まってきている。
原書（オリジン）を使う為には、術者にも膨大な力とそれを制御する器が必要になる。
下手に一般の人間が使うような事になれば心が砕け散り、魂そして肉体も崩壊する事になる。
術式を解除する方法はただ一つ、生贄となるミリルの本当の名前を本人に教える事だけだが、ここにはミリルはいない。
それに私達は、あの子ミリルの本当の名前を知らない。

思案してる所で、家の扉を無理矢理開け放って一人の男が入って来た。

私はその男に見覚えがあった。
男の名前はロムス、娘ミリルと結婚するはずの男であった。

「ロムス、生きていたのか」

「お久しぶりです、ユーエルさん。その様子だと命樹原書（ラクトオリジン）を使ったのですか？
いくら、ミリルを生き返らせる為だとは言え、他人の命を犠牲にして生き返るなど彼女が本当に望んでいると思うのですか？」

その言葉に、虚ろな眼差しをしたランが反応した。

「ロムス！貴方に何が分かるのですか？貴方が、仕官する為にレイユーズ公爵に与えた命樹原書（ラクトオリジン）の情報が原因で町も娘もたくさんの人が殺されたのですよ？貴方に、私達を責める権利があるのですか？

貴方がいなければ、娘は死なずにすんだの！
貴方がいなければミリルは今も生きていたの！ミリルだけじゃないわ、私の両親も妹も弟も死なずにすんだの、貴方は自分が仕官出来ればいいと町を売ったのよ！」

「俺だって、命樹原書（ラクトオリジン）を手に入れる為だけに町を滅ぼすなんて暴挙に出るなんて思わなかったんだ。」

ロムスが拳を握り締めて更に話を続けた。

「それでも、まったく無関係の人間を娘に仕立て上げようなんて間違ってると思わないのか？」

「思わないわ、だってあの子は私達の事を両親同然に慕ってくれているし本当の家族になれれば、無関係でもなくなるでしょう？それにね、もうすぐあの子は生まれ変わるの、誰にも邪魔なんかさせないわ」

ランがそういうと、指輪が光を放ちランの体を覆っていく。
光が消えたあとは、髪の色が緑に染まり背中から昆虫のような４枚の羽を生やしたランが立っていた。
ロムスはそれを見た瞬間、ユーエルを押し倒し自分自身も床を転げた。
同時に空気の刃が、家を真っ二つに切り裂く。
柱を切り裂かれた家が崩壊していく。その中をユーエルとロムスは走り、家の外へ飛び出した。
飛び出すと同時に家が崩壊する。その中から緑色の閃光が迸り全てを吹飛ばす。
光の中から現れたのは、何一つ身に纏っていないランであった。
その体は、すべて緑色に輝いており昆虫の翼、頭からは２本の触覚

が生えていた。

「命樹原書（ラクトオリジン）の精霊、生命と還元を司る命樹精霊（ラクトプリズム）・・・・・・」

《向こうに私と契約を交わした魂がいるわね》

ランだった命樹精霊（ラクトプリズム）は翼を羽ばたかせて空へ飛び立ち、正美の方へ向かった。

一部始終を見ていたユーエルとロムスは呆然としていた。

まさか、伝承の中のみに存在していた精霊が本当に出てくるとは思わなかったからだ。

一足先に、正気に戻ったロムスはユーエルの肩を掴んで揺さぶる。

ユーエルもすぐに正気に戻ったが、もはやどうしようも無い事に二人は気がついていた。

精霊に取り付かれた者を、生きて元通りに戻す事など不可能だからだ。

それでも、二人はミリルを助ける為に、風見鶏へ向かって走った。

魂の隷属と解放（4）

もうすぐよ、もうすぐミリルは私達の本当の子供になるのよ。
薄れていく、意識の中でその言葉だけが反響する。
私達と契約をしている波動を感じとり、上空から見下ろすとそこには3F建ての煉瓦作りの建物が視界に入って来た。
赤く染まり縦に開いた瞳孔で、見つめると娘に生まれ変わらせるミリルの波動を感じ取ることができる。
私達は上空に滞空したまま建物の上辺を風の刃を使い吹飛ばした。
鑢（やすり）で壁の穴を拡張しているエルフィーナとそれを見ていたイリシアは突然、屋根が吹き飛んだ事に驚いていた。

「お姉さま、一体これは？」

「どうやら、得体の知れない者が近づいてるようね」

そう言いながらエルフィーナは、カバンの中から一冊のジェードを封印していた本を取り出し、正美の部屋にイリシアと一緒に向かう。

ランだったモノ、命樹精霊（ラクトプリズム）が正美の近くへ降りてくる。
正美と言えば、疲れでそのまま気を失っていた。
命樹精霊（ラクトプリズム）は一歩づつ、正美へ近づき正美の体に触れようとした瞬間、正美を縛り付けていた縄が光り幾何学的な模様を浮かびあがらせ結界を作り上げた。
その結界に弾かれ、命樹精霊（ラクトプリズム）は壁まで後退する。

《こざかしい、結界など私の力で！》

命樹精霊（ラクトプリズム）の羽が共振し、周囲の物質が分子崩壊していく。
その分子を、くみ上げ数十本の槍にして結界を破壊する為に、正美に向かって放つ。
その時、力強い言葉が大気を震動させる。

「光の精霊ジェシカ！エルフィーナの名の元に盟約により汝の力を解放せん！」

正美と命樹精霊（ラクトプリズム）の間に光の壁が発生し殺到する槍を全て破壊する。

《誰だ？私の邪魔をする者は？》

「残念ですが、このような非常識な真似をする方に、名乗る名前はありませんわ」

命樹精霊（ラクトプリズム）は、声のした方を見ると一冊の本を広げているエルフィーナと黒一式の戦闘服に身を纏い2本の長刀を両手に携えたイリシアが立っていた。

《なるほどな、だがこれは私と娘のミリルの問題、部外者は引っ込んでおいてもらおう》

「あら、困ったわね」

「そうですね、お姉さま」

突然、近距離から聞こえた声に命樹精霊（ラクトプリズム）が驚き、声のした方向を見ると二本の刀が殺到してきていた。

バカな、一時も二人から目を離していなかったのだぞ、こやつ本当に人間か？

命樹精霊（ラクトプリズム）は分子崩壊結界を作りだすと、二本の刀から衝撃波が打ち出されてきた。

その衝撃により命樹精霊（ラクトプリズム）が部屋の壁を突き破り、隣の部屋へ姿を消す。

「お姉さま、あれどうしますか？」

「私達の正美様に害があると認定します。確実に仕留めます」

途端、寒気が体中を駆け巡る。

「イリシア、私の方へきて」

イリシアがエルフィーナの側に寄ると同時に光の壁が自動的に展開される。

そこに不可視の力が叩きつけられる。

光の壁を破る事は出来なかったが、二人の立っている床が戦闘の余波で崩れる。

崩落していく床に二人は巻き込まれ２Ｆへ落下していき、姿が消えた。

しばらくして、壁から這うようにして出てきた命樹精霊（ラクトプリズム）は体中から緑色の液体を垂らしながら正美の結界へ手を翳す。

結界が一瞬震えたあと、正美を縛っていた縄が燃えカスになって消えた。

正美を抱き抱えると、命樹精霊（ラクトプリズム）はお腹を大きく開き意識を失っている正美を飲み込もうとした所で地面に叩きつけられる。

なんだ、これは、物理的干渉などではない、凄まじいまでの殺気と畏怖、恐怖？

《カッ、ハッ、体が言う事をきかない・・・・・・なんだ？これは、何者だ？》

その途端、命樹精霊（ラクトプリズム）の魂に直接、声が降って来る。

《我が主を、愚弄する者よ、貴様には地獄（じごく）の業火（ごうか）で永劫尽（えいごうつ）きること無き、苦痛を与えてやろう》

命樹精霊（ラクトプリズム）が声が振ってきた上空を見るとそこには、空を喰らいつくさんばかりの強大な８つの頭を持つ、龍が空に鎮座していた。

魂の隷属と解放（5）

広大な白い空間が世界の作り出している。

そこに黒髪の少女が浮かんでいた。

・・・・・・お・・・・・・・み

・・・・・・・

《起きんか！正美》

突然、頭の中を掻き回されるような痛みを伴う声で覚醒した。

目覚めは最悪だった。

「うっせえええええええ」

《ようやく目覚めたか》

「ようやく？俺はずっと起きてたが？」

《まったくこれじゃから、お前は馬鹿じゃというのじゃ》

「うっせえな、何も用がないなら俺は戻るが？」

《ほう。どこに戻ると言うのじゃ？》

「だから自分の体にだよ」

《正美、前を見てみるのじゃ》

「なんだよ、何もないじゃねえか？」

《ふむ、お主何時の間に心が曇った？それとも心を閉ざしているのか？何時の間にそんなに他人を理解する事に対して怯えた？》

「何をお前言っているんだ？俺が怯えるだと、そんな事ある訳ないだろう？」

《くっくっくっ、本当にお前は愚かよのう、自らの立場すら理解できんとは》

「お前、俺に喧嘩売る為に、毎回、俺の前に姿を現してるのかよ？」

《姿は現してはおらぬが、声はだしておるな。のう、正美よ。人間というのは、心の底で思っている事と、行ってる事は密接な関係を持っておるじゃ。
それを全て理解する事は、人間程度の器では到底不可能じゃ、じゃが裏切られると思って人を最初から信じないよりかは人を信じて騙された方が面白いと思わないかの？》

「さっきから何を言ってるか分からないんだが？」

《そうか、さてもう見えるかの？》

突然、俺の意識の靄（もや）が晴れるように一人の金色の髪をした少女が空間に浮かんでいた。
それは、女性化した俺にとてもよく似ていた。

「どういう事だ？」

《正美、お前はこの世界で存在していく上で、使役獣の加護が無ければ幻想世界に異物として抹消されてしまうのじゃ》

「そんな事、聞いたの初耳なんだが」

《うむ、言うのを忘れておった》

「忘れておった。じゃねえー。そういう重要な項目は赤い線で引いて何度も教えるのがお前の仕事だろうがあ！ってもう頭いてー」

《そんなに気にする事はない、大事に至る前に正美の肉体と使役獣が会えたようだしの》

「お前は少しは気にしろよ！っていうかこの女の子は一体なんだよ？」

《この子は、お前の自我が眠ってる間に作り出されたもう一人の正美じゃ、じゃが名前をミリルと名づけられてまったく別の存在として独立しているのじゃ。
正美、お主がこのまま覚醒した場合、ミリルと名づけられた存在は消滅すると思うのじゃが、お主はどうするつもりじゃ？》

「どうするも何も出来ないじゃないのか？」

《ふむ、それではもう一人のお主、ミリルの感情と記憶を見て見るかの？》

次々と白い空間に浮かび上がってくる映像。

何度も何度も裏切られても人を信じてボロボロに傷ついていくミリルと呼ばれた俺自身。
ミリルを生贄に失った自分の娘を生き返らそうとするラン。
それを見て葛藤するユーエル。
そして、ロムスがミリルを裏切った事により、完全に心が壊れ人形のように倒れこんだ映像で閉めくくられた。

「ひでえな」

《そうじゃな、それでもこの悲劇を止める為には正美、お主意外には無理なのじゃ》

「おい、俺は一般人なんだぞ？そんな事が出来るわけないだろ。
そもそもこんな私利私欲に走ってる奴らをなんで俺が助けないといけないんだよ？
どう見ても俺は被害者だろうが！加害者を助けるなんて馬鹿げてる」

《じゃが、これはすれ違いが重なって起きた事なのじゃ、正美、お前も他の人間の表層部分だけを見て決めつけて逃げたではないか？》

「うるせえな、お前には関係ないだろう？」

《そうじゃな関係はないが、正美には関係あるのう、正美が館から消えて一週間もアレイクードは領地内をくまなく探しておったのじゃ、その間どれだけの人間にお前は迷惑をかけたか分かるのか？》

「勝手に俺を探しただけだろう？」

《ならば、お前は自分が保護した者がどこかに消えた場合、それを

知らん振りするのかの？》

「うっ！」

《さてと、これを見てみるのじゃ》

表示された映像には、エルフィーナさんとイリシアさんが、怪物と戦っている姿だった。

戦闘は、エルフィーナさんとイリシアさんが怪物を圧倒していた。

「あの二人、強かったんだな・・・・・・」

《正美、その二人と戦っておる怪物が何か分かるかの？》

怪物？誰かに似てるような・・・・・・これってまさか・・・・・・

《そうじゃ、精霊に喰らわれてる最中のランじゃ》

「これってまさか、エルフィーナの時と同じなのか？」

《そうじゃの、その時よりは若干悪いかの？どうするのじゃ？見捨てて逃げるか？意識の無かったお前を助けた者をお前は見捨てるのかの？》

分かっている、こいつがいう事は一々腹が立つが正論だってくらいは、それにランという女性だって最初から、生贄にする為に助けた訳じゃないってのは映像からも分かる。

だったら俺のする事は・・・・・・

「見捨てるだと？ふざけんなよ。俺が関った人間を見捨てるような

人間に見えるのか？」

《言葉だけでは、どうとでも言えるのう》

言ってくれるじゃないか・・・・・・

「なら見せてやるよ、男ってやつをな！」

魂の隷属と解放（6）

「大丈夫？イリシア」

「ええ、お姉さま。大丈夫ですわ」

エルフィーナとイリシアが落ちたのは運がいいのかベットの上であった。

二人はすぐに立ち上がると部屋の扉を開けて階段を昇り、正美の部屋へ向かう。

部屋へ近づくほど、二人の額から汗が噴出す。

エルフィーナの耳に、軽い音が聞こえた。

それはまるで人が倒れたような音・・・・・

エルフィーナが後ろを見ると、イリシアが通路に倒れていた。

「イリシア、どうかしたの？」

「お姉さま、これ以上はこの得体の知れない気配に近づくのは危険ですわ」

表情を死人のように白くしながらイリシアが語る。

エルフィーナも、正美の部屋の扉を見ながらも気がつくと体中が震えていた。

武者震いなどではない。その証拠に体中から冷たい汗が噴出している。

薄れてゆく意識を繋ぎとめるだけでイリシアもエルフィーナも精一杯であった。

何なの？一体この先では何が起きているの？

エルフィーナの問いかけに答えられる物などその場には存在しない。
もし、上空に鎮座している幻獣王（ルアカーゼ）の姿を見ていたならば一瞬で意識が吹き飛んでいた事だろう。それほど、幻獣王（ルアカーゼ）という圧倒的な存在により、生物が本来持つ恐怖という根源的なる意識で幻獣王（ルアカーゼ）を見ることを恐れていたのだった。

それは、世界の根源を司る１０８枚の原版の書編（ナンバーズ）を司る命樹精霊（ラクトプリズム）ですら例外ではなかった。
命樹精霊（ラクトプリズム）は地面に貼り付けられたまま、体を引き摺るようにして正美に向かっていく。
だが、それを許すほど、幻獣王（ルアカーゼ）は甘くはない。
幻獣王（ルアカーゼ）はたった一睨（ひとにら）みで、命樹精霊（ラクトプリズム）を正美から引き剥がすように視線に力を込める。命樹精霊（ラクトプリズム）は吹飛ばされながらいくつもの壁を貫通し、最後の部屋の壁に激突し倒れこんだ。
３Ｆにある部屋は全部で５つになるが、貫通した壁だけで２０枚に及ぶ。煉瓦作りの壁とはいえ、それを貫通した体が無事ですむ筈もなく、命樹精霊（ラクトプリズム）は起き上がる事すら出来なかった。

緑色の液体が命樹精霊（ラクトプリズム）を中心に広がっていく。
同時に、中で吸収されたランの生命の活動も薄れていく。

《ミリル、ミリル、ミリル》

すでに視覚も失い、肉体が崩壊を始めてるにも関らず、必死に手を伸ばして娘の名前を呼び続けている。
その姿はまるで、失ってしまった大事な半身を捜し求めてるようであった。
そこにまるで神の洗礼のごとく声が降ってくる。

《さあ、地獄の業火に永遠と焼かれ、我が主に手を出した事を悔い

るがいい！》

幻獣王（ルアカーゼ）が宣告すると、龍の顎を命樹精霊（ラクトプリズム）に向け、力を収束させていく。

原子同士を融合させ、巨大な熱量を生み出す。

俺が目を覚ますと、巨大な龍が、ランに止めを刺す所だった。

さっき降ってきた声はルアの声に似ていた。

いつもと雰囲気が違っていたが・・・・・・

っていうかあいつ、何してるんだ？

あんなのを打ったら町が消し飛ぶだろうが！

「おい、ルア！やめろ！この町ごと吹飛ばすつもりか！」

俺がルアに止める様に叫ぶと、ルアが俺を一瞥してから、すぐに命樹精霊（ラクトプリズム）へ視線を移した。

《主よ、問題ない。この程度の精霊など一瞬で殺せる。それに人間なぞ、いくらでも増える害虫のような存在だ。瞬きのような時間で同じくらいまで数は増える》

「てめえ、俺のいう事が聞けねえのか？」

《主よ、申し訳ないが主に無礼を働いた生物を生かしておいては私の沽券に関る。すぐに終る、待っていてくれ》

俺は、ルアの身勝手な理屈にムカついて来た。
沽券だと？マスターの沽券をてめえはどう思ってやがるんだ！
いいぜ、そこまでこの俺に反抗するならやってやろうじゃないか！

「私の正義が」
俺の足元に緑色の魔法陣が展開される。
「悪を撃ち滅ぼす。」
魔法陣の文字が動き出して大気に積層円の魔法陣が書き込まれていく。
「こい、神の使者！」
強力な光が視界を覆い、煙が発生する。

《なんだと！》

ルアが動揺し、その姿が空から消え失せた。
そして・・・・・・魔法陣から出現したのは、白い小動物のルアだった。

《ご主人たま！ひどいでち！》

そう抗議してくる小動物を片手でアイアンクローしながら持ち上げた。

《痛いでち、痛いでち、やめてほしいでち、》

「ルア、俺に力を貸せ！貸さなかったら布団にぐるぐる巻きにして1週間の刑だ！」

《ひどいでち！ご主人たま、横暴でち！》

「答えはＹｅｓかＮｏどっちだ？」

《あううう、手伝うでち・・・・・・》

「よし、なら力を貸せ！」

《わかったでち！》

部屋の中を蒼い風が巻き起こり俺の着ていたドレスが巫女服に変わり白い尻尾とネコミミが生まれ、右手に巨大な赤いピコピコハンマーが出現する。

さあ、いくか。

金髪から黒髪に変化した髪を風に靡(なび)かせながら、倒れこんでいる命樹精霊(ラクトプリズム)にピコピコハンマーを打ち下ろした。

ピコという音と同時に緑色の瘴気が、ランの体から吹き上がり空気中で一塊になってからハンマーに吸い込まれていった。

倒れこんでいたランの体をチェックしていくと、どこにも怪我は無く意識を失っているだけであった。

とりあえず、これで一段落かな？と周りを見渡すと２Ｆと３Ｆが廃墟になった宿屋が目に入った。

・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・。

あー。なんというかこれは・・・・・・

「全然、一段落ついてねえええええええええ」

俺の叫びが、活気付き始めた町に響き渡った。

魂の隷属と解放（7）

ユーエルさんと俺が宿屋、風見鳥についた時には、宿屋は廃墟と化していた。
俺とユーエルさんは急いで宿屋の入り口を開けて中に入ると、１Ｆのラウンジではミリルに良く似た少女が３人の女性を看病していた。
似ていたというのは、まず着ている服が見たこともない赤いスカートと言えばいいのだろうか？そのような服をきていて、極めつけは獣人族のように動物の尻尾と耳を生やして居た事だった。

ラウンジをよく見渡すと、ミリルと名乗った少女が瞳を虚ろにしたまま椅子に座っていた。
俺は、ミリルに近づくと肩を揺すって名前を呼び続けたが反応がない。
俺に気がついた、ネコミミの少女は俺の瞳を見て一言言って来た。
「俺の体に触るな！ボケ」と・・・・・・

そこで、少女が看病していた女性が誰なのか分かった。
ミリルの母親である、ランさんだった。
ユーエルさんはランさんの側へ行き、首筋に手を当てて脈をとっていた。
ユーエルさんの表情から見て、ランさんは無事なのだろう。
だが、あの状態のランさんを元に戻すなど、思いつかない。
多くの魔法を習い、銀騎士（シルバーナイト）の称号をもつ俺ですら知らないというのに・・・・・・

－１０分前－

ランさんを元に戻したあと、俺は１Ｆのカウンターまで来て、巨大な龍が宿屋の上を破壊した事を正直に伝えた所、嘘つき呼ばわりされて全部俺のせいにされた。
まぁ、普通は信じてくれないよな・・・・・・
賠償金もとんでもない額になりそうだ。

俺、賠償金全部払ったら旅に出るんだ・・・・・・と心の中で突っ込んでいたのは懐かしい思い出

その後、３Ｆに転がっているイリシアさんとエルフィーナさん、そしてランさんを１Ｆのラウンジまで運んだわけだが、イリシアさんとエルフィーナさんの荷物を運ぶ際に俺の体が転がっているのが見えた。
え？と一瞬放心してしまっていたが、ルアが教えてくれた。
俺という膨大な力を受け止める器が表層意識に現れた事により仮想意識である、ミリルという存在が実体として生み出されてしまった事を。
だが生み出されたのは器だけであって中身が無い状態であった。
仕方なく、俺は体を一階に運んだわけだがそこで、ユーエルさんとロムスさんが宿屋の中に入って来たわけだ。
俺自身で無くても、ミリルという名前の俺の心を決定的に壊したロムスと言う男が俺の体に触っているのを見た瞬間に視界が真っ白に染まった。

「俺の体に触るな！ボケ」

思わずその言葉を、ロムスに叩きつけていた。
ロムスを良く見ると、薄らと一人の少女が後ろに浮いていた。
その姿はまるで、俺の表層意識とまったく同じ姿であった。
そうか、この子はずっとロムスと一緒に居たのか。

この男は、俺の姿に失ったミリルの姿を重ねていたってわけだ。
しかもご丁寧に守護霊になったミリルさんの前で・・・・・・まったく最低な男だな。

《ご主人たま、今ならこの女の子をご主人たまの表層意識から生み出したミリルの体に入れる事が出来るでち》

「そうか、ならそれでいくか・・・・・・」

そこで、ルアが一言助言してきた。

《でも、ご主人たま。因果関係を変えることになるから、ミリルさんを含めて、ロムスさんもユーエルさんもランさんもご主人たまの事を忘れてしまうでち》

「別に俺は構わないが？」

《きっともう一人のご主人たまは、悲しむと思うでち・・・・・・》

「なら、それとミリルさんの霊魂を合成して居れる事は出来ないのか？」

《分からないでち、そんな事はやった事ないでち》

「ならやってみるしかないな・・・・・・」

《申し訳ありません、正美様》

頭の中に一人の女の子の声が聞こえてきた。

「まさか、これって・・・・・・ミリルさん？」

《はい、今回は両親もロムスも、正美様に大変ご迷惑をおかけしてすいませんでした》

「まぁ気にすんなよ、行き倒れていた所を助けてもらったしな、それより俺の表層意識であるミリルの精神を融合させてもいいか？どうも、俺の中の精神体であるミリルはあんた達と離れるのを嫌がってる気がするんだよ」

《ええ、構いません、私からもお願いしたいくらいですわ。だって私の両親を好きでいてくれているんですもの》

「そうか、それならいいか」

ロムスの後ろに浮いていたミリルさんが俺の側に寄ってきた。
俺の真正面には仮想意識が実体化したミリルが座っている。

「いくぞ！ルア！」

《はいでち、ご主人たま》

俺とルアの掛け声と同時に、赤いピコピコハンマーが緑色に変化していく。

《天より生み出されし全ての根源を司りし力　祝福の風　魂の隷属を解き放ち　夢の彼方の扉を開かん！》

ラウンジ全体に、白と金が混じったやわらかく暖かい風が吹き、消えた。

ラウンジには、俺とエルフィーナとイリシアと宿屋の女将さんだけが立っていた。

「起きて、ロムス」

もう聞くことも無いと諦めていた声が俺の鼓膜を揺さぶる。
瞼を開けるとそこには死んだはずのミリルが座って俺を見下ろしていた。
その顔は、２ヶ月前と変わっておらず、少し怒っているようだった。

「もう！ロムスもお父さんもお母さんも寝すぎだから！」

ユーエルさんもランさんも呆然とミリルを見詰めていた。

「ミリルなの？本当にミリルなの？」

ランさんが起き上がってミリルを両腕で胸の中に抱しめていた。

「痛いよ、お母さん」

ミリルが抗議の声を上げてもランさんは離そうとしない、強く抱しめてミリルの背中を摩（さす）っている。死んだ人間が生き返って前にいるのだ、無くした娘を放す母親などどこに居るだろうか？
だが、こんな事などありえるのか？こんなのまるで・・・・・・・
そこで俺は一つの推論にたどり着いた。

「ユーエルさん、まさかこれって・・・・・・命樹原書（ラクトオリジン）の影響でしょうか？」

「いや、これほど完全に成功させることなど人間には不可能だ。そ

れに、あの子だったらもっと顔つきが違うはずだ」

「あの子？」

俺がユーエルさんに聞き返すと、ユーエルさんも首を傾げた。

「いや、なんだ？あの子。もう一人女の子がいた気がするんだが、そこだけ記憶が虫食いのようにはっきりしないんだ」

そう、実は、正美が使役獣を行使し命樹原書（ラクトオリジン）を使ったため、ミリルの魂に引き摺られる形で肉体もミリルに構成し直されたのだった。そのため、ランもユーエルもロムスもそれに気がつくことが出来なかった。

「ユーエルさん、俺、意識を失う前に一人の少女に暴言を吐かれたんですよ、それにその子にひどい事をしてしまった気もします」

「君もか、私もあの子に酷い事をしてしまった気がする。」

「だが、酷い事をしてしまった子を思い出す事ができないのだ」

「俺もです。そこだけ記憶が抜け落ちたみたいで・・・・・・」

二人が、抜け落ちた記憶を一生懸命思い出そうとしていると、ミリルがランに向けて話しているのが聞こえてきた。

「お母さん、もう私はどこにも行かないから大丈夫よ」

ミリルはそう言いながら、母親から離れた。

「ごめんなさいね、私ね、ミリルにとってもひどい事をした気がするの、何度謝っても許されないくらい酷い事をした気がするの」

ランはそう言って、視線を足元に移した。
その姿はとても悲壮感に駆られていて、見るに耐えない姿だった。
そこに・・・・・風が言葉を運んできた。

《俺は大丈夫だよ、ランさん。だから、もう一度頭を撫でてくれるとうれしいな》

その声が聞こえた瞬間、ランの瞳から自然と涙が零れ落ちた。
ランはそれに気がつかずに涙で濡れた視界で周りを見回した。
周りには、草原と城壁しか見ることが出来ない。
それに、今の声はミリルに似ていたような・・・・・。

「ミリル、今何か言った？」

「ううん、何も言ってないよ？どうかしたの？」

今、聞こえた声はとても懐(なつ)かしくて、悲しくて、胸がとても締め付けられるけど、暖かい声だった。やさしく、壊れた心を包み込んでくれるような声。

「ううん、それならいいの」

私は、そう言いながら初めて涙を流してる事に気がついた。
その涙は不快ではなかった。何故が心が温かくなるような涙。私は娘を抱しめて頭を撫でてあげた。
いつも、あの子はこうするとうっとりと瞼を閉じて気持ちよさそうにしていたのを思い出して・・・・・

お母さんくすぐったいよー。とミリルは言いながらも気持ちよさそうに瞼を瞑って母親の胸に頭を押し付けていた。

それを見ていた、ユーエルとロムスはお互いに顔を見合わせてから空を見上げた。

正午を過ぎたばかりの空はどこまでも青く白い雲がゆっくりと流れている。

そして、商業都市フェルンの外縁に位置する草原の上に座っていた４人の周りをやわらかい風が祝福するように舞っていた。

絶たれた退路

暗く光も閉ざさぬ暗闇にソレは居た。
ソレの居る場所は暗闇だけではなく、生暖かく、湿気を多分に含んでおり、
決して清潔な場所とは言えない所であった。
牢獄が作られてから３０年近く立つが治安のいい、この領地内においてこの牢獄に犯罪者が入れられるのは初めてであった。
そこから、このモノがどれだけの罪を犯したか推し量る事が出来よう。

今、ソレに向かって一人の男が冷徹な眼差しで罪状を読み上げている。
罪状を薦めていくうちにソレは男に対して喰らい尽くさんばかりに言葉を発した。

「俺ではない！これは罠なんだ！信じてくれ！」

ソレの悲痛な叫びが、地下に設けられた牢獄と通路を震わすが男は冷徹な眼差しを変える事なく罪状を読み上げる。

器物破損　１万６９９７点
建物破壊（半壊・全壊含む）
公共施設破壊（公園・図書館・学校）の施設を含む
傷害罪　軽傷・建物から落下した重傷者含め　１８万９７８０人
町への損害額　８７６２億６６０９万ユルド

これに上記の怪我人の治療と保障を含め　２兆１９００億４４００万ユルド

そこまで、読み上げた途端に、男は令状を懐に入れ一言牢獄に入っているソレに話しかけた。

「自分が犯した罪を認められないとは・・・・・信じがたいほど愚かな者だな。せいぜい悔やむがいい」

男は牢獄に入っているソレに吐き捨てるように言うと通路を戻っていった。

「俺じゃないんだ！あいつが！あいつがやったんだ！全部、あいつがやったんだ！これは罠なんだ！信じてくれ」

牢獄の中に残されたソレは、格子に手を当てて何度も誰もいなくなった地下で一人叫び続けていた。

悲痛な叫びがいつまでも地下に響いていた。

エルフィーナとイリシアが目覚めるとあたり一面が更地になっていた。

「こ、これは一体？」

二人とも、周囲を見渡すがどこまでもその光景が広がるばかり・・・

・・・半壊した建物や、全壊した建物に下敷きになった人達。
そしてそれを救助する人たち、女性や子供の泣き声が辺り一面に広がっている。
まさしく、それは悪夢と言わないでなんと言うのだろうか？

「ひどい・・・・・なんて事を・・・・・・」

エルフィーナは、涙声で呟くながら地面に座り込んだ。
イリシアも呆然と見渡し、ふと足元を見ると白い小動物が落ちていた。

「これってたしか正美様の？」

どうやら、白い小動物は疲れきって寝ているようであった。
イリシアは白い小動物を抱き抱えると周りから声が聞こえてきた。

「これだけの大惨事なのに、死人が一人も出ないのは不思議だったな」

「ああ、一歩間違えばこの町ごと消えていたからな、恐ろしい事だ。
あれはきっと悪魔に違いない」

「聞いたか？町の上空に化け物が現れてそれが、町を焼き払ったって・・・・・・」

「ああ、聞いた、聞いた。なんでもそれを見たものはあまりの恐ろしさのあまりに意識を失って卒倒したんだろう？それで何人怪我人が出たことか」

「見た目だけでは、想像もつかないよな、アレがそんな危険な者だ

ったなんて」

「ああ、俺も警備部隊に捕まって連行されていく姿を見ても半身半疑だったが、この町をこんなにした化け物を手足のごとく使っていたのだろう？」

「何人も目撃したらしいぞ、怖い世の中になったもんだな」

そこで一人の男が走ってきてビラを撒いていた。

緊急時、ここの領地内で考案されている情報伝達手段の一つである。

ここの領地内の各町で危険な場合に撒かれる予報情報誌だ。

イリシアとエルフィーナはそれを手に取って読み出した。

ここ、商業都市フェルンから一日の距離の所に清教徒軍２０万がこの都市に向かって進軍していると書いてあった。

「お姉さま、これって」

イリシアが慌てるようにエルフィーナを見る

エルフィーナも深刻そうな顔をしている。

都市がこのような有様では、防衛すらままならないだろう。

そう考えると、今回の破壊工作もカルト集団の清教徒軍の仕業とも思える。

効率的な手法だ。

二人は苦虫を潰したように顔をしかめた。

予報情報誌の下の項目には、領主であるアレイクードは軍を率いてこの町に向かっていると書いてあったが、この町の状態では耐える事は不可能だろう。

軍が到着する前に、この町は略奪と虐殺が横行する場所と化す。

都市の人間もそれが分かっているのか全員が、死んだように立ち竦んでいる。
ここまで、巧妙な手段を取ってくるとは、優れた指揮官が清教徒軍を率いてると思われる。
もはや、この都市が存続できる手段は絶たれたと思ってもいい。
そこまで二人は考えた所で、重大な事を忘れている事に気がついた。

「お姉さま、そういえば・・・・・・正美様は？」

エルフィーナはイリシアの言葉を聞きながらも辺りを見渡す、でも正美様の姿を見つける事は出来ない。
宿屋・風見鳥の女将ユーリさんが座っているのを見かけたイリシアはユーリさんに話しかけた。
一体自分達が気絶していた間に何が起きたのかを聞くために・・・・・・

エルフィーナもイリシアとユーネの話を盗み聞きしながらもその内容は信じられない内容であった。

真実という名の罪状

あまりにも順調な進軍に、イドバーン祭司は上機嫌であった。

途中にあった村は、逃げ出した後なのか略奪を好き放題に行う事が出来た。

唯一問題は、死体を手に入れられない事くらいであったがそれは些細な事だ。

だが、斥候が届けた情報がイドバーン祭司の機嫌を損ねた。

「それは、本当の事なのか？」

「はい、斥候の話によれば、強大な魔物が現れ町を一瞬にして破壊し住民の大半に怪我を負わせたと・・・・・・」

我々以外に動いてる者がいるのか？

それに一瞬で３０万人を要する城砦商業都市を破壊するなど、どんな化け物なのだ・・・・・・。

「祭司様、斥候の届けた情報が本当ならばこのまま、商業都市フェルンに向かうのは危険かと思いますが」

側近の言葉も一理ある。

せっかくここまで肥大化させた軍がその謎の化け物に蹂躙されてはたまらない。

今まで、全てが順調に事が運んでいただけに、イドバーン祭司は冷や水を浴びせかけられた気分であった。

「それと祭司様、その魔物を操っていたと噂される容姿も斥候からの話によると・・・・・・」

それを聞きながら、イドバーン祭司は一瞬呆気に取られたあと黒い笑みを浮かべていた。

「ようやく、この時が来たのか」

清教徒教会の最高顧問団や上層部・法王様が聞いたらさぞがしお喜びになると思い、
その魔物を操るモノを迎えに行く事に決めた。
もはや、都市を陥落させる必要はない、交渉でそのモノを手に入れるだけでいい。
それだけで、自分は清教徒教会の中でも高い位置を確保できる。
そう考えると笑みが止まらなかった。

ようやく、ようやくだ。この傀儡原書（ウラウス・オリジン）を使う時が来た。
この原書を手に入れる為にどれだけの下等生物（にんげん）を殺してきた事か、
地道な努力がようやく報われるときが来たな・・・・・・

商業都市フェルンに向けて、嬉々として全軍に進軍するようにイドバーン祭司は命令を下した。

水滴が、牢獄の中に滴って落ちてくる。
この牢獄に入れられてからすでに一日が過ぎていた。

その間、食事も水も何も出されてはおらず、堅く粗末なベットの上で横になっていた。

「くそ、俺は何もしていないのに！」

俺は、そう言いながらも、このような状況下に陥った昨日の出来事を事を思い出していた。

―２４時間前の回想―

ミリルを命樹原書（ラクトオリジン）で助けたあと、宿屋・風見鳥のラウンジに残った俺は、女将さんのユーネさんに怒られてた。

２Ｆや３Ｆのみならずラウンジまで突風で破壊するつもりなのかと・・・・・

俺は、ユーネさんのお怒りもごもっとも思い、怒られていた。

その後、ユーネさんにこの宿屋は、直すより建て替えをした方が安いと言われた。

たしかに、ここまでボロボロになってしまっては下手に修繕するよりかは立て直した方が安く済むだろう。

だが、建て直しするだけのお金を俺が捻出できる訳がない。

俺が途方にくれていると、俺とユーネさんの話を聞いていた、疫病神である小動物のルアは提案してきた。

そう、全てはあのルアの提案に大した疑問を抱かずに乗ってしまった俺がいけなかった。

ルアの提案はこう言っていた。

「ご主人たま、僕だったら原子を構成することが出来るでち！このくらいの建物なら一瞬で再構成できるでち！」

その時、俺はルアもやれば出来る子なんだなと感慨に耽っていた。
そしてルアは俺と分離した後、上空に浮かびながら、宿屋の原子を変換させていく。

念の為、エルフィーナとイリシアと女将さんを外に退避させていた俺はそれを見て、一つ疑問に思っていた。
その疑問がどんどん膨らんでいき、疑問は疑惑に変わり、疑惑は危機的状況を想定させた。
これって・・・・・原子を弄るって事は何か問題が起きたらメルトダウンとか核爆発とかとんでも無い事が起きるんじゃねえの？と・・・・・・

その時、俺の顔は真っ青になっていたと思う。
そして、ルアの顔を見た瞬間、空に浮かんでるルアの顔に葉っぱが飛んできて纏わりついたのが見えた。

俺はそれを見た瞬間・・・・・終ったな・・・・・・・。

と心の中で冷静に第3者の視点で突込みを入れていた。

その後、ルアが盛大なクシャミをした途端、宿屋全体が原子融解を起しその巨大な運動エネルギーが周囲を吹飛ばそうと荒れ狂う。
ルアも一生懸命抑えようとしているようだが、力を制限されている姿では力の方向性を変える事しか出来ず、その破壊対象を無機物に変更するのがやっとであった。

そして、とてつもない爆発という名の暴風が去った後、城砦商業都市フェルンは町の機能の９９％を失う事になった。
俺は、その原因を作ったルアのご主人様って事で、後から来た警備隊の人たちに連行され牢獄にぶち込まれた。

そこまで回想をした所で、やっぱり納得いかなかった。
どう考えても俺って被害者なんじゃないのかと？

なんでこうなってるんだー。と心の中で突っ込んだ。
それに、俺が捕まって引き立てられる時、幸せそうにルアが寝ているのが視界に入った。
それを見た俺は殺意が芽生えた。
あとで絶対に、殺ったるリストに追加するのも忘れずに心の中のリストにカキコした。
とりあえず、俺は被害者なんだ！だから．．．．．．

「やったのは俺じゃないんだ！誰か信じてくれー。」

正美の声が地下牢獄の中で響いていた。

生贄として（1）

―城塞商業都市フェルン内の行政区域会議所―

今、ここではこの町の将来を左右する会議が行われていた。

清教徒軍総指揮官イドバーン祭司により、町を襲わない代わりに、町を壊滅させた主犯格を引き渡せと要請があったからだ。

徹底抗戦しか考えていなかった議会はその話を聞き、混乱した。

間者が忍び込んでいるのも気がかりであったが、

たった一人の人間を引き渡すだけで３０万人の人間を助ける事が出来るからだ。

しかも、その主犯格は今は魔物を従えてはおらず利用価値すら見出せない状況下にあり、

牢獄に繋いでるだけであった。

だからこそ、その人間を引き渡すだけで、無条件にこの町のみならずアーカルスド領地からも撤退するという話は信じがたい内容であった。

だが、送られてきた書状には、清教徒教会の神　インフェルノ　に誓って約束を違えないと記載されていた。

彼ら、清教徒が神の名を出して誓うという事はそれは教会全体の意志となり、

約束を違えた事はここ数百年一度もない。

だからこそ、送られてきた書状について、２時間近く議論が繰り広げられていたのだった。

「ですから、私は、あの女を清教徒軍に差し出すのがいいと思うのです！」

一人の男が会議室で、意見を述べている。
そしてその意見に対して反対意見を述べる者もいるわけで、

「だが、女性を差し出しておめおめと生き長らえるなど軍人として恥ずかしくないのか？
どんなに罪を犯したとしても、それを悔い改めさせるのが法ではないのか？
我々の力で国や民を守るのが使命ではないのか？」

「理想はいいんですよ！問題は一人、生贄にするだけで何十万人もの犠牲者を無くす事が出来る事なんです」

「だが、それは論理的に反するのではないのかね？」

「ですから言ってるじゃないですか！あの女は化け物なんですよ！
魔物を使役する化け物なんです！
そんな災いの種を生かしておくなど正気の沙汰とは思えません」

「女性を捕まえて、化け物呼ばわりはあまりにもひどい言い方だとは思わないのかね？」

「化け物を化け物と言って何が悪いのです？たしかに見た目は美しいですが、昔から言うでしょう？
見た目が麗しいのが実は化け物だったと！」

会議室にいるこの町の有力者達から、次々と意見が上がる。
商業都市フェルンの市長　ハーゼス・グラッカスは、正直迷っていた。

昨日の夜半に、一人の女性が宿屋・風見鳥の女性と一緒に上訴してきたのだった。
その女性は、アレイクード公爵の副メイド長であり、この町の基礎を作った先代市長であり、
現アドバイザーでもあるクレイネルの娘エルフィーナであった。
彼女の話を聞く限り、問題を起したのは、事実ではあるがそれは壊れた宿屋を直す際に、牢獄に入っている少女の使い魔が使った魔法が暴走してしまい、
その結果、このような事態を招いてしまった事を・・・・・
そしてすでに町を3回ほど立て直す事が出来るだけの資金を、アレイクード公爵よりクレイネル経由で振り込まれていた。
それでも、この場で事実を伝えても何も変わらない事は分かっていた。
もし事実を伝え、彼らが正面から戦う事になれば、この町の住民は全員死ぬ事になるだろう。
今、この町で編成できる兵士の数は傭兵と冒険者と含めても１万にも満たない。
それに大して清教徒軍の数は２０万にも及ぶ。
しかも大半が亡者で構成されており、こちらから一人でも死人が出ればそれは清教徒軍の強化に繋がってしまう。
この町が落とされる事があれば、倍以上に膨れ上がった清教徒軍により王都が蹂躙されかねない。

たった一人、生贄として差し出すだけで町や国が救われるのだ。
今は、私情を挟む時ではない。
そこまで思案した所で、ゆっくりとハーゼスは椅子から立ち上がり座っている有力者達を見回した。
ハーゼスが立ち上がった事により会議室は静まりかえる。

そして、会議室に明瞭に声が響いた。

内容は、正美を清教徒軍へ差し出すという内容であった。

エルフィーナとイリシアが目が覚めたのは、すでに御昼を過ぎていた頃であった。
ルアはまだ、眠そうにイリシアの膝の上で寝ており、
その毛並みをイリシアはブラッシングしてあげていた。

「お姉さま、正美様は大丈夫でしょうか？」

心配そうな顔をしてイリシアがエルフィーナに尋ねる。
エルフィーナもしばらく思案していたがすぐに笑顔になると「大丈夫よ」と答えた。

商業都市フェルンの市長　ハーゼス・グラッカスは有能な人物であり父クレイネルの友人でもある。
破壊した町の復興支援金は、クレイネルとアレイが肩代わりしてくれるはずだ。
不幸な偶然が重なってしまったけど、死人は、出ていないしそこまで重い罪にはならないはずだ。
だから、今日中には牢獄から解放されるはず。
そんな軽い気持ちでイリシアに答えたのだった。

生贄として（2）

エルフィーナがイリシアを連れて、正美を引き取りに商業都市中央行政区画へ歩いていくと、
前方に数十人の兵士が囚人の入れられる檻を警護してる姿が視界に映った。
二人とも、その光景を見て、歩みと止めてしまっていた。

「お、お姉さまあれって・・・・・・」

「ええ、あれは・・・・・・」

二人とも言い掛けた訳は、檻を警護していた数十人の兵士は、清教徒騎士団であったからである。
カルト宗教である清教徒は、人の弱みに付け込んだ宗教であると同時に情勢が不安定なこの世界ではそこら中に信者がおり、
どこから密告されるか分からないからだ。

エルフィーナは思ったより早く、到着し都市へ干渉してきた清教徒騎士団を疎ましく思っていた。
それより、檻に入れられているの人物の方が問題であった。

その人物の、夜空に煌く星のように光り輝く黒い髪が今は大量の血を吸って深紅に染まっていた。
着ている淡いピンクのドレスも体中からの血を吸い上げたように深紅のドレスになっており、それに反して顔は死人のように真っ白に彩られていた。
顔の中で唯一、唇だけが血を吸い上げたように赤く口紅を塗ったよ

うに艶かしく光っていた。

そして、檻の中では、体中に傷つけられた傷跡から血が少しづつ流れていた。
そしてその血を貪欲にドレスが吸い上げている。
まるで、着ている者の命を吸い上げるように・・・・・・

「お姉さま！」

イリシアの声でエルフィーナは意識を取り戻した。

「どうしますか？お姉さま。きっとこの町の市長達は何らかの取引をして、都市を守るために正美様を売ったと思います」

「そんな事、ありえないわ。私の父の友人なのよ？」

「お姉さま、今、目の前で起きてる事が全てですわ」

イリシアはそう言いながら、寝ているルアを近くにあったベンチに置いてから腰に差してあった2本の長刀の柄を左右の手でそれぞれ掴み抜き放とうとした。

「やめなさい、イリシア！」

エルフィーナの言葉に、イリシアは柄に手をかけたまま固まってしまう。

「何故ですか？お姉さま。正美様には治療術が効かないのですよ？早く助けて治療しないと命に関りますわ」

そんな事はイリシアに言われなくても分かっている。
それでも、清教徒騎士団に手を出せば向こうも黙ってはいない。
アレイ様の軍勢が到着していない今、報復されればこの町のみならず、国が危機に晒される事になる。
犠牲になるのは自分達だけでは済まないのだ。
それこそ何十万人以上もの人間が死ぬことになる。
だからこそ、迂闊な行動は出来ない。
イリシアを見ると、唇を血が滲むほど噛んでいるのが分かる。
きっと、イリシアがいなければ自分も自制が効かなかったかも知れない。
それほど、正美様が血だらけになっていたショックは大きかった。

二人は、何も出来ない無力感に苛まれながらも運ばれていく正美の後ろ姿を目に焼き付けていた。

イドバーン祭司は天幕の中で先行させていた清教徒騎士団の報告を待っていた。

「ずいぶんとご機嫌ですな、祭司様」

「ああ、そうだな。これでようやく願いに一歩近づけるのだからな。騎士団が戻ったら私の元へ、神の巫女を連れてくるように伝えろ」

「はい、わかりました。」

イドバーンは、立ち去っていく部下の後ろ姿を見ながら

「神の巫女か・・・・・・都合のいい解釈だな」

そう呟いた声は、どこまでも絶望に沈んでいた。

いつの間にか、寝てしまっていたのかイドバーンが目を覚ましたのは、部下が正美の到着を知らせにきた一報であった。

普段ならば、寝起きはかなり機嫌が悪い男であったがその時だけは違っていた。

嬉々として、報告のあった場所まで歩いていく。

そして、檻の中を見た瞬間、脳裏に焼きついた光景が浮かび上がってくる。

「貴様ら、何をした？この方へ何をしたんだ？」

「いえ、私達は何もしてません、商業都市の行政から引き渡された時にはすでにこのように傷だらけになっておりまして」

「わかった、すぐに巫女の治療と休息を与えろ、それとすぐに宗主国インフェルノへ帰国する。準備を急がせろ」

イドバーンはそれだけ言うと、檻を開けて中に入り、正美を抱き上げる。

微かに息をしてることに安堵すると、そのまま檻から出て、軍医に引渡し天幕へ向う。

忌々しい下等生物が！神の名の元に作った書状が無ければこの方を傷つけた奴らをすぐにでも殺したモノを！

イドバーンは心の中で吐き捨てていた。

世界観・人物編集

人物編集

《桂木正美（かつらぎ　まさみ）》

大学を出たが、彼女に振られしかも就職も決まらない典型的なダメな人。
すでに両親と祖父・祖母は他界、天涯孤独。
異世界へ飛ばされたと同時に体が女性化。
他の追従を許さないほどの美貌を手に入れる？
身長は１５０ｃｍほど。
主人公補正で常に不幸に見舞われる。

《桂木正美（かつらぎ　まさみ）の使役獣》

幻獣王（ルアカーゼ）
正美（まさみ）の事を幻想大陸に飛ばした謎の声の主が正美を守る為に授けた使役獣（しえきじゅう）

《謎の声》

正美の中に寄生している人？とにかく人の話を聞かない。

【幻想大陸住人】

＜アーカルスド領内＞

《アレイ》

正式名　アレイクード・フォン・アーカルスド公爵　公爵領領主

《エメラス・フォン・アーカルスド》

アレイクード公爵邸のメイド長でありアレイの実の母。
見た目がロリコンに見える。実際の年令は不明。
歴代最強の王宮十使徒で一人であり、その戦闘力は未知数。

《エルフィーナ》

アレイクード公爵邸のメイド副長。アレイの幼馴染
現在は、正美の手により浄化された光の精霊ジェードを操る世界唯一の精霊使い

《クレイネル》

エルフィーナの父。王宮内でも屈指の魔流術師であり、多くの医療技術を保有している。

《イリシア・ロースト》

アレイクード公爵邸の見習いメイド。
エルフィーナに妹として躾けられている。
戦闘力は、未知数

《ユーエル》

ミリルの父親。
命樹原書の管理者であり、商人。

《ラン》
ミリルの母親であり、２０歳前半でも通じるほどの美貌を誇る

《ミリル》
すでに他界。

《ロムス》
ミリルの婚約者であった。銀騎士の称号を持つ魔法勇者

《ハーゼス・グラッカス》
商業都市フェルンの市長であり、クレイネルの友人

【清教徒教会関係者】

《レイユーズ公爵》
貴族達から嫌われている。権力、お金大好き
裏で教会と繋がってるらしいが？

《フィンナ》
レイユーズ公爵の娘

《ルフィン》

フィンナの母親であり、レイユーズの奥方。

《イドバーン祭司》

冷徹で無慈悲な戦い方により、教会関係者からも恐れられている。

世界観

《アレイクード公爵邸》

正美いわくバイオハザード1の洋館らしい？

《幻想大陸ルシアード》

桂木正美（かつらぎ まさみ）が謎の声により飛ばされた世界。
5つの国より成り立っている。

【インフェルノ】　世界中に信者を持つ宗主国　カルト宗教の本拠地

【レクイエム】　世界最大の軍事国家

【エルハンス】　アレイクード公爵が使える国　王政

《首都イースバール》

人口２０万人の都市

《商業都市フェルン》

３０万人もの人間を抱える巨大都市。鉄壁な城壁から城砦都市とも呼ばれている。

《商業都市フェル》

商業都市フェルンの姉妹都市であったが２ヶ月前に、原書事件により滅びる。

【アルノート】　世界最大の資源輸出国

【レイゲン】　大地と大陸を救った女神を信仰する国。インフェルノとは敵対関係

生贄として（3）

「姉さま！姉さま！」

少年の声が冷たい回廊の中に響き渡る。
少年は連れ去られて行く黒髪の姉の元へ向かおうとするが、青い神官服を着込んだ数人の男達に押さえつけられて声を上げる事しか出来ない。
名前を呼ばれていた女性は、少年に振り向くと小さく口を動かしたが、その声が少年に届く事はなかった。

少年の姉が連れ去られた後、教会より神の御許（みもと）へ旅立ったと少年と家族に連絡があった。
この国では、神の御許（みもと）にて仕える事は大変な名誉とされている。
神は神々しく美しいとされていたからである。
だが少年は、大事な姉を奪われた事により心を病んでいった。
それは、姉の死を正当化するために、自分達の信じる神こそが唯一絶対の神であろうと思い込むように・・・・・・

時は流れ、少年も青年へ成長し教会へ入信する。
そして、祭司まで駆け上がったある日、近隣の村にて黒髪の女性が発見された。
黒髪の女性は神の御許へ送るのが教会の慣わしになっている。

男は祭司になったばかりだったが、教会を妄信していたこともあり自分自身でその女性を迎えに行く事にした。
一人で行こうとした理由は、神に仕える事が絶対的な名誉であり、それを前提にするならば抵抗するなど考えられない事だったからだ。
それが、この国に生まれた者の運命であるから・・・・・・

初日は、どのような村か女性の様子だけ伺おうとして町民の服で来たのが間違いだったのか、全ての歯車はそこで狂ってしまった。

男は、黒髪の女性を見た時、一目で心を奪われた。
美しく輝くその髪は光輝き、白い肌と相まってとても幻想的に見えた。
男がその時、神官服を着ていればまた変わっていたのかもしれない。
男は女性に最初に話した言葉は、「私と付き合ってほしいのですが？」であった。

突然、交際を申し込まれた女性は呆気に取られてしまい、そのあと笑った。
男は何故？笑われたのか理解が出来なかった。
女性を神殿へ連れて行くために付き合ってほしいと言ったのに何故笑われてしまうのか・・・・・・

「こんなに、男の人にストレートに交際を申し込まれる事なんて初めてで、驚いたわ」

その言葉に、男は混乱した。
交際？交際というのは、男女が付き合うと言う意味だ。
男は、何故このように話が進んでいるのか理解できなかった。

「えーと、貴方って見たことないんだけどどこから来たの？」

「ああ、私はヘーベンボルクの方から・・・・・・」

「ふ～ん、そうなの。ずいぶん遠くから来たのね～？旅をしてるの？」

「いや、仕事で立ち寄ったのだが・・・・・・」

「商人さん?冒険者さん?面白い話があったら聞きたいな～」

女性は男の方へ身を乗り出し懇願してきた。
男は神殿で多種多様の文献を読んでいた事もあり、多くの話を知っている。
そして・・・・・・

「今日はとっても面白かったわ、また明日ねー。」

女性が手を振って離れていくと、男もついそれに釣られて手を振っていた。
そして翌日も翌々日も、男は女性と話をし互いに思いを育んでいった。
いつしか男の心の中から、教会の事はすっかり抜けていた。

一ヶ月が過ぎたある日、行方不明になった祭司の捜索に数十人規模の清教徒騎士団が村に派遣された。
男と女性が歩いていた所を見かけた清教徒騎士団の一人の騎士が男に、ご無事でなによりです、祭司様と頭を下げていた。
その様子を見た、女性は信じられないような眼差しで男と騎士を交互に見比べていた。
男は、自分を見た女性の眼差しに驚愕(きょうがく)していた。
その瞳には、恐怖、怒り、疑心そして裏切られたという表情をしていた。

「ち、違うんだ」

男は自分で言っておいて、何が違うのか理解してはいない。
それを見ていた騎士も祭司の行動に疑問を抱き、そして・・・・・・

「祭司様、何をしているのですか？すぐにこの黒髪の巫女を捉えて神の御許へお送りしなければ」

騎士が言っている言葉がまったく異国の言語のように男の脳裏を駆け巡り、理解を拒む。
後ずさりする女性に、男が手を差し伸べると恐ろしい化け物を見るような眼差しで男の手を女性は振り払った。
そして・・・・・・

「この、人殺し！」

その言葉が、男の胸を貫いた。
それは、今までのどんな言葉よりも男の心に響き渡る。

「貴様！祭司様になんという暴言を！」

その後、男の指示により女性は取り押さえられ、ヘーベンボルグにある神殿へ連行された。
男は気がつくと神殿にある自分の部屋で横になっていた。
しばらくすると、部屋の戸が叩かれ一人の男性神官が入って報告を上げてきた。

「祭司様、そろそろ儀式の時間ですが、体調が芳しくないようでしたら出席せずともいいと思いますが」

「体調は大丈夫だ、それより儀式とは何のことだ？」

男が頭に手を当ててから、神官に聞き返す。

「え？黒髪の巫女を神の御許へ送る儀式の事ではないですか、そう言えば祭司様は今回の儀式立会いは初めてでしたね」

「ああ、そうだっ・・・・・・た・・・・・・な？」

男は、ベットから飛び跳ねるように立ち上がると祭司の外套を羽織る事もせず祭壇へ走った。

息を切らせて、祭壇の広間に走りこみ見たのは、元老祭司が女性の胸元に短剣を振り下ろす光景であった。

「アリシアあああああああ」

男が叫んだその名前に反応した女性は、小さく囁くように呟いた。

その言葉は少年の姉が呟いた時のように男に聞こえる事は無かった。

そして、アリシアと呼ばれた女性の胸元に短剣が深く刺さり、その血が祭壇を染め上げた。

儀式が終ったあと、アリシアの亡骸を抱しめて男は、慟哭した。

その瞳には黒い闇が渦巻いていた。

暗い天幕の中、イドバーンは息を切らせながら目を覚ましていた。

「はぁはぁはぁ、またあの夢か、やはりあの少女を見たからなのか？もうすぐだ、アリシアもうすぐだ、もうすぐ下等生物の住む世界を滅ぼす事が出来る。全て殺せる力を私は手にする事ができる。お前の仇を討つことが出来る。この世界を消す！待っていてくれ」

両手に嵌められた8個の指輪を見ながら男は壊れたように笑っていた。

メイド達の戦場（上）

闇夜に紛れて、丘の上で二人の女性は２０万もの清教徒軍を視界に納めていた。

「お姉さま、本当に襲撃をかけるのですか？」

「ええ、正美様を一度、手に入れたという事は向こうは約定を守らなければいけませんしね、
それにこの暗闇の中ではどこの陣営の者か特定は不可能でしょうしね」

清教徒は多くの人間から恨みを買っている。
暗闇の中で襲われては、どこの国の者か特定は不可能だろう。

イリシアは、エルフィーナの言葉を聞きながら、嬉々として腰に差してある2本の長刀を抜き放つ。
暗闇の中でも一際（ひときわ）、その刀は妖（あや）しく光る。
刀は漆黒（しっこく）の鉱石で作られており、光を映さないが独特の輝きを見せていた。

エルフィーナも、ジェードを封印していた複写原書を開く。

そして・・・・・・闇夜を巨大な閃光が切り裂いた。

夢から覚めたばかりの私は、夢うつつのまま寝床に座っていた。

そこに男が、天幕の中へ慌てて飛び込んできた。

「祭司様！大変です。敵襲です」

なんだと？この大軍に攻め込んでくる国があるというのか？

「どこの国の軍隊だ？」

「そ・・・・・・それが・・・・・・・たった二人です。たった二人の女が本陣に奇襲をかけてきています」

その報告に、イドバーンは立ちくらみを覚えた。

「冗談を報告してる暇があるならば、見回りでもしておけ」

まったく２０万の大群にたった二人で攻めてくる馬鹿などいるわけがないだろうが、子供でも分かる理屈だぞ？清教徒軍の質も落ちた物だな。

私の反応が気に喰わないのか、男はまだその場に立っていた。

まったく面倒な男だな、仕方ない冗談に付き合ってやるか・・・・・・

「わかった、清教徒騎士団を向かわせて殲滅しろ」

「そ、それが」

「なんだ！まだ聞きたい事があるのか？」

「すでに清教徒騎士団の半数は、二人に壊滅させられました。」

静まり返った本陣の天幕の中で、イドバーンは驚愕していた。
どこまで、この男は冗談を言うのかと・・・・・・

「貴様、いい加減にしておけよ？」

清教徒騎士団はそれなりに訓練を受けた者だ、しかも数は１０００人近く連れて来ている。それをたった二人で壊滅だと？
そんな馬鹿な事があるわけが・・・・・・。

私はすぐに立ち上がった。
そう何も起きていない事を確認する為にだ！
私は天幕から身を乗り出した時に聞こえた音に驚いた。
まさか、本当に攻めてくる馬鹿がいるのかと・・・・・・

そして、戦いの剣戟（けんげき）が響き渡る方へ目線を走らせた。
まだ距離はある。
すぐにそちらへ向かい走っていくと、巨大な閃光が、亡者の集団をぶち抜き吹飛ばしていた。
それを打ち出した女は光の粒子を体中に纏い青い髪を靡（なび）かせていた。
そしてその女に近寄ってくる亡者が一瞬で細切れにされる。

「な、なにが、一体起きているのだ？」

「イリシア、どうやらこの軍を統率してる方が見えたようですわ」

エルフィーナがイドバーンを見て言葉を紡いだ瞬間、イドバーン祭司を警護していた５人の騎士が同時に体中から血を噴出し倒れた。

私は倒れた騎士達を見ながら、いつのまにか紫色の髪をした女が目

の前に立っていたのに気がついた。
そして、その女は漆黒の刀を私の首に向けてきた。

ばかな・・・・・・一体いつの間に接近して・・・・・・

「貴方がこの軍の指揮官とお見受けしますが、少しお聞きしたい事があるのですがよろしいでしょうか？」

この私に、交渉だと？愚かな。殺しておけば良かったものを、これだから力を持つ者は気にくわない。
イドバーンが嵌めている指輪がどす黒く変色していき、それが指を覆っていく。

「イリシア！下がって」

エルフィーナの指示を受ける前に既に、イリシアはエルフィーナの側まで退避していた。
１００ｍ近くの距離を一足飛びしたのであった。

「お姉さま、あれは？」

「あれは・・・・・・まさか・・・・・・」

エルフィーナとイリシアが見てる間に、イドバーンは闇に喰われていき３０ｍ近い巨大な黒龍と変化した。

《くっくっくっ、お前が我の力を使うとは余程のモノなのかの？ふむ、もう意識が沈んでしまったのか。人間というのは脆弱だのう》

巨大な黒龍は、エルフィーナとイリシアを見ると口から炎を噴出し

た。

「《光の精霊ジェード、盟約により全てを退ける壁となならん》」

二人の前に、半円の高さ３ｍの光の壁が作りだされる。

《愚かよのう、複写原書程度で世界の根源を司る１０８枚の原版の一枚、闇の原書たる我に牙を向けるとはな》

そして、光の壁に黒龍の炎が降りかかる。
光の壁が軋みを上げ、砕け散り複写原書も炎により焼き尽くされる。
エルフィーナを纏っていた光も同時に消失し、力を失った反動により地面に倒れこむ。

「お姉さま！」

イリシアはエルフィーナを抱き抱えると、気絶をしているだけのようであった。
だが、戦場で気絶するという事は、死を意味する。
しかも前には、見たこともない怪物がいるのだ。

そして、黒龍は二人を見て、興味深そうにしていた。

最強の我を見ても、まったく揺るがない精神力そして胆力、
それは、いままで数多の戦士を見てきたがその中でも最上級に相当する。

少なくとも、我を呼び出すごとに発狂するこの男などより遥かに優秀。
この二人ならば、もっと優秀な生贄になっている事だろう。

それでも、契約を行ってる以上、この二人は我が焼き尽くす対象となる。

黒龍が炎を吐き出そうとした瞬間、残像を残すほどの速度で間合いを詰めてきたイリシアの双刀が黒龍の指に当たり砕けた。

「な！」

黒龍は巨体に見合わぬ俊敏さで空中で驚愕していたイリシアを叩き落とす。

地面に叩きつけられたイリシアは、内臓が傷ついたのか口から血を吐きながら数回、

地面を跳ねてから岩に叩きつけられて動かなくなる。

《やはり、人間は脆弱よのう、これで終わりにしてやろう》

赤い炎が咥内に貯められていき、それがエルフィーナとイリシアに打ち出され巨大な爆炎が周辺を焼き尽くさんばかりに燃え上がった。

意識が戻った時に、一番最初に感じたこと、それは痛みだった・・・・。

どうやら、俺は、ルアを使った反動に耐える事が出来たようだった。

ルアと融合するとその後、激しく異性を求めてしまうのはどうかしてほしい。

意識を保つ為に、体を傷つけてなんとか衝動が過ぎるのを待ったわ

けだが、
その甲斐があって今回は何とかなったようだ。

周りを見渡すと、天幕の中にいるようだった。
体中に包帯が巻かれている事もあり、治療されたのが一目で分かった。
それよりも先ほどから天幕の外から叫び声と轟音が聞こえてくる。

今いる場所も気になっていた事もあり天幕を開けると巨大な化け物にイリシアさんが切りつけ、
剣が折られて化け物に殴り飛ばされたのが見えた。
俺は急いでそちらへ向かおうとした所で、意識が一瞬飛んだ後、地面に倒れこんだ。
血を流しすぎたのか体に力が入らない。
力の入らない体を無理矢理起して、龍を見ると、イリシアさんが吹き飛んだ方へ巨大な炎を打ち出そうとしている。

まずい、あれは・・・・・。
立ち上がろうとしても足に力が入らない俺はまた地面に倒れる所で一人のメイドさんに体を支えられた。

「大丈夫ですわ、正美様」

「え？」

俺に声を掛けてくれた人を見ると、その人は着てる服はメイド服ではなかったが、俺を一番最初お風呂に入れたメイド達の一人だった。

「メイド長が、すでに向かっています。何も問題はありませんわ」

さも当然の如く俺にそのメイドさんは言ってのけた。

メイド達の戦場（下）

黒龍が放った炎が周辺を焼き尽くさんばかりに燃え広がっていく。
その炎が、突如発生した吹き荒れる暴風により消し飛ばされた。
巨大な岩盤が周辺に飛び散り、それにより亡者が押しつぶされる。

黒龍の肉体にも、重量１ｔ近い岩盤がぶつかりそのまま爆ぜる。

暴風が消えたあと黒龍とエルフィーナ・イリシアの間に一人の身長１４０ｃｍ程度の緑色の髪をしたメイド服を着た女の子が立っていた。
その足元には深さ５ｍ以上、幅２０ｍもの巨大なクレーターが出来ていた。
両手にはオタマとフライパンを携えている。

エルフィーナとイリシアを交互に見た後、エメラスはこの現況を作り出した黒龍を睨み呟く。

「調子に乗ってんじゃねーぞ、このクソ餓鬼が！」

正面に亡者の大軍を視界に納めながら、アレイは領土内からかき集めた兵士と騎士に命令を下す。

「これから、我らが領地に土足で踏み入った者達へ討伐する！全軍・・・・・・」

「突撃！」

アレイクード公爵を先頭に鶴翼の陣形にて5万に及ぶ軍が亡者の大軍へ側面から突っ込む。
一般市民を亡者に仕立て上げた軍は、正規の軍の敵ではなかった。
形勢は公爵軍に傾いていく。

それを、見ていたクレイネルが有する三千の義勇軍
派遣勇者と傭兵・冒険者で構成される者達も突撃を開始する。

数こそ、少ないが一人一人が通常の兵士を遥かに凌駕するほどの武芸者揃いの事もあり
魔法や剣術が戦場にて乱れ飛ぶ。
数千もの亡者が瞬殺されていく。

そして、自国の民を守る為に、各地から集まった貴族達もそこに加わる。

「アレイクード公爵様に遅れるな！正面から打ち崩す。貴様ら、恥ずかしい姿を見せるんじゃないぞ！全軍突撃！」

数十人の貴族が自国を守る為に従えた私兵４万が正面の亡者の大群に突っ込んでいく。

後方、前面、側面より同時に、攻め入るアレイクード公爵の軍に清教徒軍は浮き足だった。
これほどの抵抗を彼らは考えてはいなかった。

まさか、清教徒軍にここまで対抗してくるとは・・・・・・

「本陣に連絡は取れたのか？」

「そ、それが、本陣に向かわせた者が戻ってこないのです」

その間も、前線はアレイクード公爵と貴族連合軍により包囲されつつあった。

その頃、本陣も、アレイクード公爵邸のメイド部隊が獅子奮迅の戦いを見せ付けていた。

その動きは、清教徒軍には到底信じられる内容ではなかった。

布切れで剣を打ち砕き、雑巾で魔法を防ぎ、モップで亡者の体を切断しているのだ。

その姿は悪夢としか言えないだろう。

戦場の空気が、変わった事には黒龍も気がついていた。

このまま、ここに居れば自らも討滅される可能性が出てくる事に気がついたのだ。

すぐにでも、ここを離れる必要があるが・・・・・・その行動を黒龍が移す事が出来ない。

目の前に居る少女、否！化け物が逃亡を阻止しているのだ。

「あら～。どこに逃げようとしているのかしら？このクソ餓鬼さんは？」

突如、横から鈴の音が鳴り響くような声が聞こえてくる。
それと同時に３０m近い巨体が浮かび上がり地面の上を転がる。

《い、一体何が・・・・・・》

黒龍の視界には、オタマを刀のように振り切ったエメラスの姿と、
自分の右翼が千切れ空中で滞空してから地面に落ちるのが見えた。

《くあああああああああああ》

黒龍は莫大な闇の力を、エメラスの頭上に集めそれを打ち出す。
それを、エメラスは微動だにせず右手に持っていたフライパンを振
るっただけで消し飛ばす。

《ばかな?何が?》

「見せてあげましょうか?本当の技というモノを」

突然、体中に衝撃が走ったかと思うとその巨体が空中に浮かび上が
る。
そして、わずか数秒の滞空中の間に数千発に及ぶ、
５mもの岩盤を打ち破る打撃が黒龍に浴びせられる。

一撃ごとに鱗が吹き飛び、翼が千切れ、牙が折れる。
黒龍が反撃をしようにも、エメラスの姿が数十、数百に見えてしま
い実体が掴む事が出来ない。

《ばかな、こんなバカな事があるのか?人間がこんな力を有するな
ど信じられん。き、貴様は一体》

「私は、ただのメイドよ」

その声と同時に黒龍の頭が勝ち割られ地面に叩きつけられリバウンドした。

再度、地面に落下する頃には、黒竜は顕現（けんげん）する力を失い、イドバーンに戻っていた。

そして・・・・・地面に倒れたイドバーンが目覚めた時には、すでに戦場の大勢は決まっていた。

俺が、メイドさんに肩を貸してもらって黒龍がいた場所へついた時、視界の中には見知らぬ緑の神官服の男が地面に倒れ伏していた。

その男に向かってエメラスさんが近づいていくのが見える。

エメラスさん、何をするつもりなんだ?

俺が見てる前で、男の腹を蹴り飛ばして宙に浮かせると腕をオタマで切り飛ばしていた。

な!一体何をしているんだ?

切り飛ばした腕を拾い上げてその指に嵌っている指輪をエメラスさんは淡々と回収していく。

その行動に俺の頭の中は混乱していた。

何を、何を、何をしているんだ?

一体これは何なんだ?

これじゃ、まるで・・・・・・強者が弱者から採取するようなモノじゃないか。

こんなのダメだ!やめさせないと!

エメラスさんが男のもう片方の腕を切り飛ばそうとした所で俺は渾身の力を振り絞ってエメラスさんに抱きついた。

「やめてください、エメラスさん。こんなのは良くない、人が人を殺すなんてそんな事はしたらいけない」

俺が抱きついた事により出来た隙を見て、男が俺に向かって残った

右手を翳(かざ)してきた。

そして・・・・・・周囲が凍りついた。

時が止まったような、空間の中では俺と男だけが動けていた。

私は、黒髪の少女が私を助けた事に驚いていた。
そして、憑き物が落ちてしまったかのように穏やかになってしまった自分自身の心に驚いていた。
そうか、あの女が切り飛ばした腕に嵌っていた原書は、呪われた物だったな。
その原書が私の精神をも蝕んでいたのだろう。
どちらにせよ、自業自得としか言えないな。
それよりも今は、姉と好きな女性に似ているこの少女に言わなければ行けない事がある。

「初めまして、黒髪の巫女。私の名前はイドバーンと言います」

「イドバーン?」

「はい、貴方を探していたのですよ、偽者ではない本当の黒髪の巫女を・・・・・・」

本当の黒髪の巫女?何を言っているんだ?
突然、空間の景色が揺ぐ。

「思ったより時間がないようですね、これは早くしなければ・・・・・」

時間がない？どういう事だ？
その時、２つの白い影が現れた。
男の後ろには、二人の女性が、悲しみを讃えた目で男を見ている。

「本当の黒髪の巫女には、死者の魂と会話し因果関係を改変し
世界をあるべき姿へ返す力があると文献には書いてあります」

俺はその話を聞きながら、突込みどころ満載すぎるだろその文献！
と突込みを心の中で入れていた。
口に出したらいけない雰囲気があったからであるが・・・・・・

「それで、お前は何をしたいんだ？」

「何をですか、そうですね。望みを打ち砕かれ、しかも黒髪の少女
までにも助けてもらい
時間までもらってしまうとは、私は何をしたかったのでしょうか？
たくさんの命を奪ってまで最期にはこうして最期を迎えるとは、ま
ったく愚かとしか思えない。」

俺には、この男が何を言いたいのか理解できなかった。
それでも、側にいて男の懺悔とも言える言葉を聞かないといけない
気がする。

「私はですね、大好きだった姉を守る事も出来ず、好きだった女性
も守る事も出来ずにいた男でした。二人とも失ってから大切だった
と気がつきました。もう、今になっては遅いですがね」

男はそれと同時に、口から大量の血を吐き出した。
俺から見ても、この男の体はもう死にかけてるのが分かる。

その時、女性の声で俺に語りかけて来る者がいた。
そちらを見ると、男を見ていた二人の女性がそれぞれ言葉を俺に伝えてきた。

「おい、しっかりしろ、アリシアとユーメイスからの伝言だ」

俺の反応に、虚ろな眼差しをイドバーンは向けてきた。
恐らく、俺の声が聞こえた方向を見てきただけで、すでに見えてはいないのだろう。

「ユーメイスからは、イドくんのお姉さんで居られてよかった、でも貴方の心が傷ついていくのを見ていて、何も出来なかったのはとても苦しかった辛かったと言っている。
そして、アリシアからは、突然の事で驚いてごめんね、最期に貴方を見た時、私は貴方に言ったのよ、イドバーン、貴方と出会えて幸せだったって、でも貴方には私の言葉は届いていなかった。
本当にごめんなさいね、貴方一人がずっと傷ついていっても助けられなかった私を許してね、だそうだ」

ユーメイス、それは私の姉の名前・・・・・・

この少女は、本当の黒髪の巫女なのか・・・・・・

それでも思わず確かめずにはいられなかった。

「それは、本当ですか？」

「ああ、本当だ、お前もさっき俺に言ってただろうが、死者の魂と会話する事ができるって」

「そうですか、私は本当に愚かな選択ばかりしてきたのですね」

そこで、イドバーンが俺の方へ右手を見せてきた。そして、

「黒髪の巫女、この世界を作っている原書の名前は精神原書（レウルリーオリジン）と言います」

「精神原書（レウルリーオリジン）？」

「はい、本来は、黒髪の巫女が持っていた物です。貴女の持ち物です。

この空間が解けた後は、私の右手に嵌っている空色のリングを受け取ってください」

「わかった」

俺が、イドバーンという男に言葉を返すと同時に時が動き出した。

抱きついていたエメラスさんから、俺は離れると事切れていた男の残された右手から空色の指輪を外して右手に嵌めてみた。

その指輪は、俺の指の太さに変化すると綺麗に嵌った。

エメラスさんは俺を、興味深そうに見ながらもメイド達へ残りの亡者を処理するように命令をしていた。

清教徒騎士団２０万が全滅した頃には、既に日が昇り朝日が戦場を照らしていた。

そして、数週間後に宗主国インフェルノの議会には一つの報告が成されていた。

そこには、教会に無断でエルハンス王国へ侵攻した挙句、アーカルスド領内にてアレイクード・フォン・アーカルスド公爵が率いる公爵軍そして、貴族連合軍、義勇軍と交戦し全滅したという内容であった。

そして続く書簡にはこう記載されていた。

上級一等祭司の死亡、数十人の神官、清教徒騎士団１０００人、清教徒従軍部隊員１００００人の死亡

そこには原書を使って作り出した２０万の亡者は記載はされてはいなかった。

上司は部下の後始末をする為にいる？

「飽きた・・・・・・」

俺はベットの上でゴロゴロしながらそんな言葉を呟いていた。

今、俺がいるのはアレイクード公爵邸のアレイの寝室の隣の部屋に当たる。

何故こんな危険な部屋にいるかというと話は2週間前に遡（さかのぼ）る。

ー回想開始ー

戦いの後、体中を痛めた俺は、行く宛ても無くアレイクードの館に、しばらく逗留する事になった。

「すいません、エメラスさん。無理を言ってしまって」

「いえ、困った時はお互いさまですわ」

「体が完治しましたら、ギルドでお金を稼いで逗留代をお支払いしますね！」

「逗留代もいりませんわ、この金額をお支払い頂ければ問題ありませんわ」

エメラスさんは、そう言うと一枚の紙を俺に手渡してきた。
そこにはとんでもない金額が記載されていた。
0が1・・・・・・2・・・・・・5・・・・・・9・・・・・・
13・・・・・・
10兆円だとー。どこの反日国家の予算だよ！
日本円でウォンを買い支えられて、辛うじて国として体裁が維持できてる国が、払えないお金を個人が払えるわけないだろ！
「え、えっと・・・・・・エ、エメラスさん？こ、これは一体何の冗談です・・・・・・か？」
最後が疑問系になったのは、エメラスさんが真剣に見てきたから、冗談じゃないのか・・・・・・
というかこの金額って何の請求だよ！俺何もしてないぞ？
俺の反応を見て、納得して居ないのに気がついたエメラスさんはもう一枚の紙を出してきた。
そこにはルアの破壊した内容が詳細に表記されていた。
しかも、この国家銀行を通しての入金しましたプレートも証拠として添えられていた。
「エメラスさん、これはあの小動物じゃなくてルアに渡してください」
「ふふ、ダメよ。正美さん、ルアちゃんから聞いたけどね、正美さんはルアちゃんの主様なんでしょう？」

「え！」

「部下の不始末は、主が責任を持たないとね。大丈夫よ、無理は言わないからね」

無理は言わない？１０兆ユルドが？

「私の考えた返済計画を実行すれば一瞬で返せるわよ」

エメラスさんが自信マンマンに話してくる。
返済計画だと？っていうか理不尽すぎるだろ、この借金までの流れ。
それに嫌な予感しかしないんだが・・・・・・

「ど、どんな返済計画ですか？」

聞くだけ聞くことにした。

「アレイも貴女を気にいってるみたいだし婚約しちゃいなさい。結婚すれば妻の借金は、アレイの借金になるわけだしすぐに返済出来て円満解決ね」

いやいや、俺が円満解決じゃないですから・・・・・・
というか男同士が結婚とかありえないから！
非生産的すぎるだろ！

「きっと、正美ちゃんはかわいいから、息子のアレイと結婚したら子供はとってもかわいいと思うわ」

・・・・・・！？

そうだった今の俺、見た目は女じゃん。
だが、お金の為に、男としてのプライドを売るのか？
むしろこの体で男としてのプライドというのがアレなわけだが、だが！それでも！

「け、けっこんはむりです」

血を吐くように一文字づつ噛み締めるように、俺はエメラスさんに言い切った。

「あらあら、それって私の息子が結婚するに価しないって事なのかしら？」

ゾクッと体中の血栓が開いたように寒気が体中を駆け巡った。
こ、これが殺気と言う奴なのか？
体中が震えて言う事を効かない・・・・・・

「大体ね、息子が気にいってるから貴女の我が侭を聞いてあげてるんだけどね、
人の善意の上に胡坐（あぐら）を書いてる女は気に喰わないのよ。貴女にわかる？
どこの馬の骨か知らない女に大事な息子が誑（たぶら）かされる気持ちが！
こっちが下手に出ていれば増長しやがってこの餓鬼が、絞め殺すぞ」

あー。えー。やばい、やばいよ。めっちゃ怖いって！
エメラスさんキャラ崩壊してるって！
しかも周辺に真っ黒な気（オーラ）？が立ち上ってるのが見えるし。

そこで扉を数度叩く音がして、アレイが部屋の中に入って来た。

「正美、体の調子はどうだ？傷だらけと聞いたから驚いたぞ。あれ？母上いたんですか？」

「そうね、オホホホホ。今ね、正美ちゃんと今後の借金の返済の計画についてお話してたのよ」

ちゃんって・・・・・・

「そういう事でしたか」

「ええ、それでね、正美ちゃんと親交を深めていた所なの」

いや、深めてませんから！俺への殺意を深めてましたから！

俺の内面の葛藤（かっとう）に気がつかずアレイは俺が座ってるベットの側にくると、

頭の上に手を置いて話しかけてきた。

「正美、別に俺はお前の借金を建て替えた積もりはないぞ、

話を聞いた限りでは不可抗力だったんだろう？

幻獣王（ルアカーゼ）の力の暴走ならば仕方ない。むしろあの程度の被害で済んだほうが奇跡的だ。

だから、お前は、充分な休息を取っていればいいんだ、

もう以前のようにいきなり居なくなったり無理はしないでくれ」

そっか、心配かけてたのか・・・・・・

「アレイ、すまなかった」

その間も、アレイの後ろでは、エメラスさんが持っている銀製のお盆が、

チーズを割く様に綺麗に千切られていくのが見える。
怖い、怖いから、マジでやめて！その、虚ろな目でしかもお前コロスみたいな、
口の動かした方をするのはやめてください！

「アレイ、お願いがあるんだけど」

「なんだ？」

「貴方の寝室の隣の部屋に俺の寝室を作ってほしいんだけど」

離れて寝ていたらマジで殺されそう、アレイの近くに住んでとりあえず安全を確保せねば。

「いいが、どうかしたのか？」

「エメラスさんに殺・・・・・ひっ！け、けっこん前提に付き合ってみればと言われてですね・・・・・・・」

まじ、銀製のお盆が空気中で融解するとか何なの？もう嫌。

「ほ、本当か？そうか、分かった。すぐに用意させよう」

ー回想終了ー

ということもあり、俺は今、大変な危機的状況下に置かれてるわけ

だが、エメラスさんがあんな危険な人だとは知らなかった。

きっと今まで見てきた人の中で、エメラスさんほど見た目と中身が違う人は居ないと思うが、どちらにせよしばらくは部屋の中で、ゆっくりしてたほうが良さそうだ。

まずは、借金を返す為に金策をしないとな・・・・・・

動き出す歯車

―アレイクード公爵邸・黎明庫(れいめい)―

「どうやら、うまくいってるようじゃな」

「ええ、こちらの思ったとおり万全の体制で黒巫女を、アレイの近くで一緒に護衛する事ができる様になりました」

５つの銀色に光る指輪を男は取り出すとそれを系譜(ノア)原書へ近づけていく。

それぞれの指輪が、黎明庫(れいめい)を照らし、それぞれ縦３０ｃｍ横１０ｃｍ厚さ１ｍｍ程度の半透明の薄い板に変化する。

「思ったとおりじゃな」

５枚の半透明の薄い板を手に取り呟く。

「クレイネル、それが１０８枚の紀元原書の原版ですか？」

「そうなる、じゃが、系譜(ノア)原書を扱える者は書言の精霊を見る事が出来る者だけじゃが、

それがエルフィーナと言うのはこれも運命かの」

クレイネルは、手にもった原版を系譜(ノア)原書へ付けていく。

「これだけの数の原版が一度に、世界の表舞台に出て来るという事は、

彼らも暗躍し始めたのかもしれませんね」

「ああ、黒巫女だけはどんな犠牲を払ってでも守り抜かねばならない、来る時のためにな・・・・・・」

「ところで、クレイネル、気になった事があるのですけど」

「ふむ、めずらしいな。鮮血(エメ)の死神(ラス)と呼ばれてる者でも疑問に思った事があるとは」

クレイネルの言い方に、眉(まゆ)を少しエメラスは動かす。

「その名前は好きではありませんわ。それよりも黒巫女がイドバーンから抜き取った指輪ですが、あれは一体何なのですか？黒巫女が触った途端に、自動契約を行いそれによりあらゆる精神干渉が行えないように防御陣が黒巫女を覆ってます」

「恐らく、黒巫女が手に入れたモノは精神原書(レウルリーオリジン)じゃな」

「精神原書(レウルリーオリジン)？」

エメラスが疑問を投げかけると、クレイネルは一冊の石版をエメラスに放り投げた。

それを空中でエメラスが受け取ると、石版を読み始める。

「精神原書(レウルリーオリジン)、精神干渉操作を行う事が出来る原書。魔流力次第では、相手を支配下に置くことも廃人にする事も可能」

それを読み上げるエメラスの顔は、複雑な顔をしていた。

「クレイネル、これはとてつもなく危険な原書（オリジン）なのではないですか？」

緊迫しているエメラスの口調とは、対照的にクレイネルは説明を始めた。

「問題はない、何せ今回の黒巫女は魔流力が一切ないのだからな。どこで生まれたかは知らんが魔流力を与えられてもそれも分解してしまうとは・・・・・・」

その言葉を聞き、エメラスは目を丸くしていた。

「魔流力がない？一体どういう事ですか？」

その言葉に、クレイネルは不思議そうな顔をしてから、合点が言った様に頷くと話始めた。

「以前、アレイ様が黒巫女を連れて来た事があったのじゃが、その時、怪我をしていて、その際に魔法で治療しようとした事があるのじゃが、術が全て分解されてしまい、体に蓄積しなかった事があるのじゃ。そして、今回の体中の怪我に関しても治癒術は一切効果が見られなかった。
創生時代の黒巫女は、我々と違う術を使ったそうじゃが今回もそれと同じかも知れないのう」

「治癒術を分解？それは・・・・・・まさか・・・・・・」

「エメラスが今、思った事で大体合ってるはずじゃ」

「クレイネル、エルフィーナには本当の事を言わなくていいのですか？」

エメラスのその言葉に、石版を呼んでいたクレイネルの手が止まり、エメラスの方へ顔を向ける。
そして、エメラスとクレイネルの視線が絡まる。

「まだ、その時ではない」

「ですが、隠し通す事など出来ないでしょう？彼女の力は、絶対に必要になります。
それに、フィーナと言う本当の名前の意味も教えてあげなくていけませんし、彼女の母親が死んだ本当の理由も教えてあげないのは・・・・・」

「わかっている！エメラス、お前に言われなくてもそのくらいは分かっている。
じゃがな、真実は時に残酷な者なのじゃ、簡単に話せる訳がなかろう！」

「クレイネル、貴方は本当に残酷な人ですわ」

「ああ、そうじゃろうな。だが、もう動き出した時の流れを止める事は出来ない、それは私もエメラス、お前も同じじゃろう？」

エメラスは、クレイネルの言葉に沈黙していた。
それは肯定とも否定とも取れかねない内容であった。

日中の幻夢

―商業都市フェルン―

エルフィーナとイリシアは、市長のハーゼス・グラッカスにアレイクード公爵からの書簡を渡す為に、フェルンに訪れていた。

二人は都市の光景を目にして、驚きながらも行政区へ歩を進める。

都市壊滅からたった2週間で町のほぼ9割が再建されているのは驚嘆に値すると言えよう。

それも全て、アレイクード公爵からの多額な援助があったからであるが・・・・・・

「お姉さま、ずいぶんと早い復旧ですね、2週間前の壊滅した町とは思えませんわ」

「そうね、でも、アレイ様はかなりの圧力を行政担当者の市長にかけたみたいよ？」

「そうなんですか？」

「ええ、それに違約金も取ったそうよ」

「違約金ですか？」

「詳しくは知らないけど、お父さんからかなりエゲツナイ事をアレイ様はやったって聞いたわよ」

「へ～そうなんですか～」

しばらく、二人は話しながら歩いているとイリシアは一つの骨董店の前で立ち止まった。

「どうかしたの？イリシア」

「はい、この前の戦闘で壊れてしまった双刀の代わりになる物を頼んでいたんですよ」

二人はそのまま、建物の中に入っていく。

骨董店の中には多種多様の東西から集められた様々な物が並んでいた。

イリシアとエルフィーナは、ごった返している建物の中を進んでいき、カウンターの前にたどり着くと骨董店の主人にイリシアが話しかける。

エルフィーナはそれを横目に見ながら、特に欲しい物も無かった事から店舗内の商品を見ていくと突然、一塊になった物が視界に入って来た。

それは、この世界では本来存在しない物であるのだが、エルフィーナの探究心と好奇心はいたくソレを気にいってしまった。

そして・・・・・・。

「お姉さま、見てください！今回の双刀はすごいですよ。刃が燃えるように赤いです。《双炎刀》って言う名前らしいですよ」

「ふ～ん、そうなの」

「お姉さま、反応が薄いのです！そういえば何を買ったのですか？」

「私もよくは分からないんだけどね、ちょっと気になって買ってみたのよね」

エルフィーナはそんな事を言いながら、巨大な荷物を背負っていた。

重量としては５００ｋｇ近いだろうか？

エルフィーナはそれを平然と背負って歩いている。歩くと石畳にうっすらと足跡が残っていく。

イリシアもイリシアでその様子を平然と見ているが、周りの人達は化け物を見るような目で二人を見ていた。

「そういえば、お姉さま、本が燃えてしまいましたけど、もう精霊を使役出来ないのですか？」

「そうね、本が燃えて契約が消えちゃたから、今の私には何の力もないわね。何か新しい武器でも手に入れないと正美様をいざと言うときに守れないわ」

「そうですよね、お姉さまも私もアレイ様の館ですと戦力外通告受けてますものね」

「戦力外通告を受けてるのはイリシアだけですわ。それに、書状も渡しましたし、早く帰りましょう」

「はい、お姉さま！」

町を出てからしばらく歩いていると前方から5人の旅人と二人はすれ違った。

「え！」

すれ違った瞬間に二人は強制的に臨戦態勢へもっていかされた。
そして二人が同時に、旅人の方に視線を向けると忽然とその姿は消えていた。
まるで最初からそこには存在していなかったかのように・・・・・・

「なに？今の殺気は？違う、重圧（プレッシャー）？まるでエメラスさんみたいだった・・・・・・。」

呆然とエルフィーナは呟いていた。

くーりんぐおふ

今日も一日が終る。
少しづつ日が沈み、夜の帳が落ちてくる。

俺は、ベットの上で転がって今後の人生プランを立てていた。
まずは借金をどうにかしないといけない。
そのためには綿密な計画が必要になる。
まずは、借金の額から計算だ！

国家予算クラスの１０兆か・・・・・そんな額返せるわけないだろ。

自分で言った言葉に自分で突っ込むという高等技術を使いながら、
俺はベットの上でゴロゴロ転がった。
早く返済しないといけない。
なぜならば、アレイの寝室に扉一枚で繋がってるだけという事もあり、
最近はアレイからのアピールも酷くなってきている。

「はぁ、どうするか・・・・・」

とりあえず、ここは、経済大学を卒業した力を見せ付ける時が来たと思えばいい。
丁度、ほどよくミリルの時に蓄積した経験だけ俺の中にはある。
それを分析すれば、突破口は開けるはずだ！

ユーエルさんの一日の売り上げが、一日３０万ユルドくらいだったから、
これを１０兆ユルドで割ればいいんだ！

そうすれば、何日で目標に到達できるかわかるはずだ。
たしかこの世界の暦は３６０日で１年って言ってたからこれを計算すれば
・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・
「きゅ、９万年以上だと？」
９００回は余裕で転生できるな・・・・・・・。
って突込みいれてる場合じゃねー。
とりあえず張本人にどうにかさせるしかないな。
俺、エメラスさんに監視くらってて部屋から出られないし・・・・・・
というか・・・・・・ここ2週間、ルアって見かけてないんだけどどこ行ったんだ？
まぁいいか、呼べば出てくるしな。
どっかのランプの魔人みたく。
さてと・・・・・・。
「私の正義が」

俺の足元に緑色の魔法陣が展開される。

「悪を撃ち滅ぼす。」

魔法陣の文字が動き出して大気に積層円の魔法陣が書き込まれていく。

「こい、神の使者！」

強力な光が視界を覆い、煙が発生する。

そして、煙が晴れた所にいたのはミイラ化したルアだった。

「・・・・・・・・・・・・。」

俺は、とりあえず花瓶の中に入ってる水をルアにぶっかけてしばらく様子を見た。

3分後・・・・・・。

《ご主人たま、生き返ったでち！》

カップラーメンか・・・・・・・この小動物は・・・・・・・

「ルア、お前なんで干からびてたんだ？」

《僕が寝てる間に、町に置いてきぼりされてそのまま2週間も放置されたでち。それで干からびたでち》

そっか、もう何も突っ込むまい。

「ルア、お前にはやってもらいたい事がある！」

《ご主人たま、なんでちか？》

「うむ！お前たしか原子いじれるんだよな？」

《はいでち！》

「それなら希少金属とか伝説的な金属とか作れたりするよな？」

《無理でち！》

「そうか、それならさっそく金をつくってって、え？」

《僕は、ご主人たまの影響を受けるでち、ご主人たまが持った事の無い物を作る事は出来ないでち》

なんだと？つまり貧乏人は一生貧乏人でって事なのか？
この使役獣ツカエネー。
クーリングオフとかつけておけよな、もっときちんとした使役獣がほしかった。

《ご主人たまから今、何か酷い事考えなかったでちか？》

「別に、この使役獣ツカエネーとか、疫病神とかクーリングオフ効かないのかと考えてないぞ？」

《ご主人たま、わざと口に出してるでちね！ひどいでち！》

「酷いのはお前だ、お前のおかげで、借金返済に9万年もかかるんだぞ？そのへん分かってんのか？
しかもそれを盾にアレイと婚約させられそうなんだ、どう責任取るつもりなんだ？」

《公爵と結婚でちか？ご主人たま、おめでとうでち》

「おめでたくねー。一度、お前とはきちんと話し合う必要があるようだな？」

あれ？目の前が暗く・・・・・。

「ルア、お前何かしたのか？」

《何もしてないでち、ご主人たまから体力補充の為に力を分けてもらっただけでち》

ちからって・・・・・おま・・・・・・え。

俺はそのまま意識を失ってベットの上で倒れこんだ。

2度寝は危険な香り

静まり返る広間に旋律が鳴り響く。

《黒巫女は顕現したのか？》

《はい、ようやくこちらの要請に応じたようです》

《そうか、ようやく全てをあるべき姿に、戻すときが来たな》

《幻想大陸の住人は知られてはいないだろうな？》

《それが、一人の魔流術師と魔人には感づかれているようです》

《なるほどな、未だに監視者はこの世界に関与してくるという事か》

男の最後の言葉が消えると同時に、声は聞こえなくなり、あたり一面は静寂に支配される。

ってー。

俺は気がつくとベットの上で、寝ていた。

すでに日差しが窓から入ってきている。

なんで、俺こんな所で寝て・・・・・・。

そこまで、考えた所で昨日のことを思い出した。
当たりを見渡すがルアの姿が見えない。

毎度お決まりの償還魔法を唱えてルアを償還すると・・・・・・
そこには、たくさんの生肉を頬張っているルアがいた。

俺がルアを見ると、一生懸命何かを訴えようと口を動かしていた。

《もごもご、もごもごもごっくん》

「食べてから話せ！」

《ご主人たま！目が覚めてほっとしたでち！》

「ああ、そうだな、お前のおかげで俺は何度気絶させられたか分かんないな」

《ご主人たま、怒ってる気がするでち！》

「別におれは怒っていないぞ？そうだな、お前のその長い耳に釘を打ち込んで柱に貼り付けてやろうくらいしか考えていないぞ？」

《ご、ご、ごしゅじんたま、おちついてほしいでち》

「大丈夫だ、俺は充分に落ち着いている。あー、人間ってのは怒りすぎると逆に冷静になるって事を始めて知ったよ」

俺は、抗議を上げているルアの耳をむんずと掴むと枕の中の羽毛を全部抜き取って変わりにルアを押し込んで縛ってから花瓶の中に詰めた。

《やめてほしいでち！使役獣侵害でち！使役獣愛護団体に訴えられるでち！》

という言い分を無視して分厚い本を花瓶の上に載せた。

ふう、すっきりした。

そして、俺は2度寝をする為に布団に入り・・・・・・。

その後、イリシアが来る前に一人でさっさとお風呂に入り、髪と体を拭いたあと、恒例の男用の服を手に入れる為に、アレイの部屋に繋がってる扉を通るとそこには起きたばかりのアレイが立っていた・・・・・・。

しまった、ここ2週間ずっとアレイは部屋から早く出て行ってたからまさか、まだ部屋の中にいるとは思わなかったヨ。

そして、アレイも俺の方を見ていて、唖然としている。

それはそうだろう、俺はお風呂を出たばかりで、はだ・・・・・・か・・・・・・。

「いやあああああ、」

私は一瞬で、異性に体を見られたショックで顔を真っ赤にして自分の部屋に戻ってベットの中にもぐりこんだ。

見られた、見られた、見られた、私の裸を、アレイに?胸がドキドキして止まらない。何これ?

「大丈夫か?正美」

突然、声をかけられて心臓が早鐘のように鳴り出す。
なに?一体どうなってるの?

そのまま、アレイが俺の体の上に圧し掛かってくる。

「お前がそこまでアプローチしてくるまで気がつかないなんて男として失格だな、悪かったな」

そう言うと、私が被っていた布団を剥ぎ取ると裸の体を見てやさしく触ってきた。

「いや、やめて、アレイ。やめて!」

俺が何度抗議してもアレイの愛撫は止まらず、俺の頭の中はすでに夢心地になっていた。
そして、アレイが中に入って来た所から意識が無くなった。

「ハッ!」

ガバッとベットから起き上がると俺は、さっき2度寝したままの服装で寝ていた。

「夢落ちか・・・・・・」

えらく危険な夢見てしまった。あんなのが実際起きないようにさっさと借金返して館から逃げないとな。

動き出す歯車　2

今、二人の目の前には見慣れた大きな門が立っている。

「お姉さま、やっとつきましたね」

紫色の髪を翻し、後方を歩いているエルフィーナの方を振り返りながらイリシアは声をかけた。

「ええ、そうね。長かったわ」

軽快な足取りのイリシアと打って変わってエルフィーナは、５００ｋｇに近い荷物を背負って2日近く歩いてきた事もありかなり疲れ果てていた。

それでも馬車で数日かかる距離を、徒歩でしかも超重量の荷物を背負って馬車より早く移動しているエルフィーナの身体能力の高さは異常とも言えよう。

二人は館に通じる使用人専用の裏門を抜けていくと前方にツインテールの少女が立っていた。

「おかえりなさい、エルフィーナ、イリシア。それぞれ成果はあったようね？」

「はい、逸品の双剣を購入できました！」

イリシアが自信ありげに発言するが、エルフィーナとしては何故、メイド長たるエメラスが自分達を迎えに来ているのか想像がつかなかった。

メイド長の話によると、現在はしばらく様子見という事で、正美様とアレイ様の警護をメイド長とその周辺のメイド警護隊が行ってるはずだからだ。

エルフィーナの思案顔を見て取った、エメラスは少し困った顔をしていた。

少しは、エルフィーナも不測の事態に対応する力がついてきたのかも知れないわね。
それでも、まだまだ甘いわね・・・・・・

「ふぅ、エルフィーナ。貴方、そんな荷物をどこに運ぶつもりなのかしら？」

「え？」

「え？じゃないわよ。そんな地面がめり込むような重量のある物を屋敷の中に入れる訳にはいかないの！わかる？
まったく、館の中から貴女達を見て急いで出て来たんですからね。
エルフィーナ、貴女の持っている荷物については裏庭の倉庫に入れて置きなさい、わかりましたね？」

「はい、わかりました」

エルフィーナは、釈然としないまま返答し荷物を背負ったまま裏庭に一人向かって歩いていった。
その後ろ姿を見ながら、エメラスが嘆息していると

「エメラスさん、帰り道におかしな事がありました」

「おかしな事？」

エメラスはイリシアが話して来た事に関して、相槌を打つ

「はい、すごい殺気を感じ振り返った瞬間にその人達の姿は霞のようにに消えていたんです」

エメラスは話を聞きながらも考えていた。
人が霞みのように？たしか町から館に戻ってくる間の街道は見渡す限り平野だったはず、それなのに姿が霞のように消える？
しかも、動体視力だけなら館の警護部隊にも入れるこの二人の視覚を誤魔化すほどの使い手？しかも殺気を出して手を出してこないと言う事は試した？

「そう、わかったわ。相手の人数は何人だったの？」

「5人です」

「そう、分かったわ、イリシアも今日はゆっくり休んで明日からお仕事お願いね」

「はい、エメラスさん」

イリシアの後ろ姿を確認せずに、エメラスはすぐに館に戻り通路を歩き、地下への階段を下りていく。
両開きの扉を開くと、クレイネルがエメラスの顔を見て驚いていた。

「エメラス、そんなに慌ててどうかしたのかの？」

「ええ、イリシアからさっき5人の不可視な者を遭遇したと報告を

受けたの」

「ふむ、まさかとは思うが、軍事大国レクイエムの五星将かもしれんな」

「私もそう思ったからこそ、急いで来たのですけど、まさか彼らが直接出張ってくる事は無いと思いたいのですけどね」

「そうじゃな、まずは警護を強化する他はあるまい、そうじゃこれをエルフィーナに渡しておいてくれるかの？」

クレイネルはそう言いながら、エメラスに向けて一冊の本を差し出してきた。

エメラスはその本の表紙を読んでいく。

その本にはこう書いてあった。

《閃光原書（ステイルオリジン）》

と・・・・・・

「クレイネル、これは一体？」

「前回、娘は、原書と戦って大怪我を負ったのだろう？それは複写原書を使ったからと聞いている。

原書に対抗できるのは同じ原書のみじゃからな、これが在れば身を守る事は出来るじゃろう」

「クレイネル、原書（オリジン）は本来、人には過ぎた力と言うのは貴方も理解しているのでしょう？

私の親友（フィーナ）だった娘のエルフィーナまで、私達の計画に巻き込むつも

りなのですか？」

「わかっておる！フィーナの力は封印したままにしてある。この原書は光の精霊と契約を交わしたフィーナしか使う事は出来ない。それに副作用が無いようにきちんと手を入れてある。」

クレイネルの言い方に、エメラスは唖然としていた。

「貴方、正気なのですか？実の娘にこんな力を！力を得るという事は、それだけの責任を背負うという事になるのですよ？」

「何度も言わせないでくれ。全ての責任は私が背負う、それに本当にレクイエムが動きだしたとなると力が無ければ身を守る事すらできない。
それと五星将については私も調べておこう」

クレイネルはそこで話が終ったとかと言う様にエメラスから視線を外して、空中を見て手を走らせていた。
それを見た、エメラスもこれ以上は話をしても無駄だと思い、閃光（ステイル）原書（オリジン）を握り締めてから黎明図書館を出て行った。

動き出す歯車　3

「はぁ、とっても憂鬱(ゆううつ)だ・・・・・・」

俺は、宛(あて)がわれた部屋に設置されている、やたらと精巧な作りの椅子に腰を掛けながらガラス越しに空を見上げて呟いていた。

今、俺が着ている服は、動きやすい簡易ドレスだが今日からメイドさん達につけられたコルセットにより体の制限がかけられ息が詰まりそう。

たしかに、今の俺の体はかなりバランスが取れてると思うが、それでもこの締め付け方は問題があると思う。

たしか以前、彼女に教えてもらったマメ知識では、コルセットで無理矢理痩せたり括(くび)れを作るのは体に良くないと聞いた覚えがある。

それでも、あのエメラスさんと借金を返すまでの約束の中に、このコルセットをつけるという条項があったのだから仕方なくつけてるわけであるが・・・・・・

俺は、殆ど体を曲げる事も出来ず、椅子の上でボーっと朝食まで時間を潰すしか時間がない。

ボーっとしてると言うと誤解を招いてしまうが、これでも今後の身の振り方を考えてる所である。

国家予算クラスの借金を返済出来ない場合、間違いなく俺はアレイの妻になる事は決定事項になってるわけであってそのお金を返済する術が思いつかない。

ルアに希少金属を作ってもらって一攫千金でお金を返済しようとし

た案も絶たれたし・・・・・・んっ？

《俺、何か大事な事を忘れてないか？》

なんで、俺、この世界で生きて行く事を前提に物事を考えてるんだ？
よく考えたら、俺、この世界の住人でもないしさっさと元の世界へ帰れば問題解決じゃないのか？

そうだよ！俺、何をこの世界基準で物事考えてるんだよ。

となると、どうやって元の世界へ帰るかだが、ルアに聞くのが一番手っ取り早いか・・・・・

俺はそこまで考えて、ルアを花瓶から解放する。
枕から取り出したルアを見た俺は一瞬、呆然とした。

なぜなら・・・・・幸せそうな顔をして寝ていたからだ。
俺は、ルアの長い耳を掴んで枕から引き出して抱き抱えるとルアの額にデコピンをお見舞いしてやった。
その反応はすぐにかえってくる。

「イタイでち！ご主人たま。ひどいでち」

相変わらず、喚(わめ)く小動物を俺は見ながら膝のスカートの上にルアを下ろした。
俺の態度に不審に思いながらもルアはちょこんと膝の上で座っている。

「おい、ルア。一つ聞きたい事がある。」

「なんでちか？」

「俺が元の世界へ帰る方法を知りたいんだ。」

「元の世界でちか？」

俺の言葉に、ルアは疑問を投げ返してくる。

こいつ、もしかして俺がこの世界の人間じゃないって事を知らないのか？

「ああ、そうだ。お前を俺につけてくれた変な奴に聞いてないのか？」

「聞いてるでち。でも、ご主人たまは、この世界の食物を胎内に取り入れてるから帰る事は出来ないでちよ。」

なんだと・・・・・？それは初耳なんだが・・・・・・

「ご主人たまも、聞いた事あると思うでちけど、冥界に行った者が冥界の食物を口にしたら帰れなくなるという話があるでちよね？」

そういえばそんな昔話を聞いた事があるような・・・・・・？

「ああ、そう言えば、そんな話もあったような・・・・・・って！お前それってもしかして俺にこの世界でずっと暮らせって事なのか？」

「ご主人たま、一つ聞いてほしいでち。たぶん、ご主人たまは以前よりは元の世界へ帰りたいって望んでいなくなってると思うでち。それはこの世界に心と魂と体が順応し始めてるからでち」

なるほど、だからこの土壇場になるまで、この世界を基準に考えていたのか。

「きっと、ご主人たまを連れてきた、あの方は数日で戻る予定だったはずでち。それが何らかの障害にあって未だに戻れない状況下に置かれてるでち」

つまり、本来は数日で戻るはずが、結果的に数ヶ月滞在してる原因は全てのその何らかの障害が原因なのか。

っていうか無責任すぎるだろ。

強引に連れてきておいて、本人は未だに出てこないでこんな欠陥小動物一匹だけとか・・・・・・。

「OK、わかった。つまりだ、俺がその障害ってのを取り除かない限り現状を打破する事は出来ないって事だな？」

「さすが、ご主人たまでち！」

ルアは俺が理解していた事を喜んでいたが、俺の方としては大変困った。

借金を返すまでは、淑女としての立ち振る舞いから、公爵家に嫁ぐ女性に相応しい教育が目白押しになっていて、とてもじゃないがそんな暇はないのだ。

まだ、朝食前の午前８時だが、朝食後は貴族としての嗜(たしな)みや行儀作法やマナーやルールそしてこの国が出来てからの神学や歴史、そして言語習得など寝るまで組まれている。

しかも、専属教師付きと・・・・・・。

「なあ、ルア。お前の力でなんとか借金返済出来ないのか？」

「無理でち！使役獣の力はご主人たまに異存するでち。ご主人たまが無能だと使役獣も無能になるでち」

お前、それ安易に自分が無能なのは主人である俺が無能だと言ってるようなもんだぞ。

俺が恨みと殺気を込めてルアを見ると、ルアが俺の気を取り成そうとしばらく考えたあとに一言発してきた。

「ご主人たまがこの世界の希少金属に触れる事が出来れば、そこから複製する事も可能でち！」

天啓のごとくルアがひさしぶりにいい事を言った。

つまり、この世界でもっとも高価な物を俺が触れさえすればそこから複製する事が出来るって事か？

「ふっ、ルア。お前もひさしぶりにいい事を言うな」

「僕はいつも良い事しかしないでち！」

とりあえず、ルアの戯言（たわごと）はスルーしておくとして・・・・・・。

今後の対応としては如何にしてその高価な物を手に入れるかだが、恐らくエメラスさんへ頼んでも却下されるのは目に見えている。

そうするとやはり、アレイに頼むのが一番いいのか？

なんか嫌な予感しかしないがそれが堅実か。

夜の時間にこっそり、アレイの部屋に行って頼むのがいいな。
俺はその時失念していた、この体が女の体という事を、そして夜の時間帯に男の部屋に行くというのはどう言う事なのかを・・・・・・。

動き出す歯車　4

―アレイクード公爵邸執務室―

部屋の中は、書類が飛び散らないように閉め切られてはいる事もあり、
インクと書類の匂いが立ち込めている。
そして一人の男が、年代モノの机の前に座り、書類整理に忙殺されていた。

「これは、大変な事になってきたな」

執務室の主である、アレイクード公爵はここ数日間の間に、
王宮より届けられた書類に眼を通しながら呟いていた。
書類には、こう記載されていた。

王都の禁書図書館が襲撃され、封印されていた原書（オリジン）が数冊盗み出されたという事。
その際、警護をしていた王宮十使徒の一人エスペラードが死亡していた事、
そして同じく警護についていた一般兵士数十人が同時に殺されていた事。
その事から複数人の犯人がいると推測される。
王宮十使徒を屠った事から相手の実力はかなり高いと推測される。

そして・・・・・・。

禁書図書館よりフードを被った5人組の不審人物が目撃されている事。

その5人組みが向かったとされる街道先はアレイクード公爵の領地を通る可能性が非常に高い為、
不審人物を発見した際には王宮権限において如何なる人物であっても捕縛していいと記載されていた。

アレイは書類を読み終えると、眉間を指先で押さえながら椅子に深く腰を掛けながら天井を見上げた。
そして、先日発生した商業都市フェルンの崩壊の復旧に関る作業そしてその際、
上空に現れたという巨大な龍の報告を思い返していた。

その龍の大きさは数百メートルもあり、八つの頭を持つ龍であった事。
そのようなモノに心当たりなど一つしかない。

黎明庫の書物にすら記されていない神話クラスの魔物であり神獣でもある幻獣王(ルアカーゼ)。

本来、本性を解き放った幻獣を再度、元の姿に戻す為にはそれ相応の代価が必要とされる。
それは、再契約に他ならない。
以前、正美の事を、幻獣王(ルアカーゼ)は主と呼んでいた。
正美が主とすれば、元の姿に戻した力の代償はどのくらい必要だったのだろうか？

そして、何よりも、正美が体中に負っていた傷の完治速度の方が問題であった。

以前、正美を魔物から助けた際、怪我をしていた手足の完治までかなりの時間を有していた。

それが、今回の怪我が完治、否。修復に必要した時間はほんの一時間ほどであった。
まるで、肉体が自動的に回復術を使っているかのよう。
それは、まるで伝説の中に存在していた黒の巫女のようではないか・・・・・・。

神話では、こう語られている。

再度、巫女降臨する時、世界は滅び有るべき姿へ戻るだろうと・・・・。

世界を滅びから救う為に、巫女を抹殺する教団もあるくらいだ。
だが、どう考えても正美が世界を滅ぼすような人には見えない。

「ふう、俺は何を考えているんだろうな、疲れてるようだな」

アレイはそう言うと執務机に立てかけてある魔流術で投影された画像に視線を移した。

「ルニア、お前が生きていれば正美と同じように成長していたのだろうか？」

そう呟いたアレイの声は、普段聞けないような声色を含んでいた。

―商業都市フェルン―

その外れにある、朽ちかけた建物の中でフードを被った者達が思い

思いに座っていた。

そして、一人の小柄の体格をした者が、大柄な男へ声をかけた。

「ガイアス、アレイクード公爵邸の襲撃はいつ行うの？」

ガイアスと名前を呼ばれた男は、小柄な体格をした者を見て溜息をつきながらも声を発した。

「お前、昼間の二人組みの女を見たか？」

「うん、見たけどそれがどうかしたの？」

「由香里（ゆかり）、あの二人はそれなりの使い手だった。
間違いなく彼女達クラスの使い手がアレイクード公爵邸を警護してるとガイアスは言いたいんだ。」

由香里と呼ばれた小柄な体格をした者は、納得いかなかった。
自身が見た、あの二人組は確かにある程度の使い手というのは理解してはいたが、それだけ。

私がその気になれば、あの程度ならば殺す事は容易。
それが、由香里がエルフィーナとイリシアから感じた実力差であった。

「でも、あのくらいの実力なら私達の力を持ってすれば殺すなんて簡単よ！
それに早く、私は元の世界へ帰りたいの！早く帰らないといけないの！」

ガイアスは悲しい眼をして、由香里の発言を聞いていた。

由香里がこの世界に、現れてから1年が既に経過していた。
その間、由香里が殺してきた命の数はかなりの数に及ぶ。
最初は、多少の罪悪感があった。
だけどそれも、自分の命が危険に晒された時、そんな道徳など一瞬で消え失せた。
その後は、自身の命を守る為、そして元の世界へ帰る為だけに剣をそして力を振るってきた。

そして、元の世界へ帰る手がかりを見つけたのは今から4ヶ月前。
古来より、アーカルスド領地内には数々の古の遺産(いにしえ)が眠っており、その中の一つに古代の知恵の泉である《黎明庫》なるモノが存在している事。
そして黎明庫を現在管理しているのが領主であり公爵でもあるアレイクード公爵という事であった。

「黎明庫なら、私が元の世界へ帰る術が見つかるかも知れないの！だからどんな手を使ってもやり遂げてみせるわ」

由香里の決意の眼差しがフード越しにガイアスを射抜いていた。

動き出す歯車　5

翌日、アレイクード邸より時間的に2時間ほどの距離のある町ルエルにて、
由香里(ゆかり)達一行はある準備をしていた。

「ガイアス！正気なの？私は嫌よ！」

由香里(ゆかり)が、ガイアスに向かって抗議の声を上げていた。。
その声は、仲間の一人が事前に沈黙魔流術(サイレンス)を使用していなければ、町に一件しかない宿屋に響き渡るほどであった。

ガイアスは、由香里(ゆかり)の抗議の声を右から左へ聞き流すと再度説明を始めた。

「いいか？由香里(ゆかり)。
アレイクード公爵邸には、あの王宮歴代最強と言われた鮮血の死神(エメラス)がいるんだ。
それに、若くして王宮十使徒に選ばれるほどの実力者であった、魔流術最高導師(アークウィザード)のクレイネルもいる。
さらに、冒険者ギルドと勇者派遣協会で１０人しかいない聖騎士(パラディン)の称号を持つアレイクード公爵もいるんだ。
そんな所に我々5人が強襲したとしても成功率が低いことは理解できるだろう？」

「だからって！なんで、私がメイドの仕事をしないといけないのよ？」

ルエルの町のギルドで受けてきた臨時メイドの依頼書を見ながら、由香里は納得いかない顔でガイアスを睨む。
だが、由香里の今の格好は明日に向けて、アレイクード公爵邸のメイド達の標準的な仕事着をしている為、普段ならば、大の男ですらひるませる事の出来る眼力は、ガイアスとの３０ｃｍ以上もの身長差も手伝い、上目ずかいに媚びているように見えてしまう。

「由香里、相手の懐に入り信頼を勝ち取ってから情報を集めるのは密偵としては初歩だぞ？とにかく、今は始原原書の情報を手に入れる事に集中しろ。いいな？」

「いいな？じゃないわよ。第一ね、私、そんな情報を集めたりした事ないし、密偵でもないからね」

由香里はガイアスの言葉に的確に突っ込むも当の本人ガイアスはまったく意に介さない面持ちであった。

由香里自身、ガイアスの言い方に納得できずとも、他に代案が無い以上、頷く事しか出来なかった。

その夜・・・・・・

明日から、始まるメイドの仕事に憂鬱になりながら、由香里は何故こんな事になってしまったのか思い返していた。

―１年前―

思いを寄せていた男性を、姉に取られてから精神が不安定になっていた。
しばらくしてから、姉の素行が悪くなって行く事に気がついた由香里は偶然、
思いを寄せていた男性と違う男が姉と付き合っている現場を目撃した。
気になった由香里は、二人の後を追っていくと大手チェーン店に入って行くのを見て、二人の近くに席を取った。

そして、男と姉の話を聞いた。

思いを寄せていた男性の両親を殺したのは、男の両親でありその財産を姉が狙っているという事を・・・・・・。
由香里は、姉に騙されている男性に事情を説明しようと走り出した途端、歩道から足を踏み外した。
否！踏み外したというより歩道の一部が消えており、そこは真っ黒な暗闇のようであった。
そして、その中に由香里は落ちていった。

目を覚ますと、巨大な柱が立ち並びたくさんの人が、祭壇の上から起き上がった由香里に視線を向けていた。
突然、見知らぬ場所へ連れて来られた由香里はパニックに陥った。
そして、その時に由香里を宥めて世話をしてくれたのが、冒険者ギルドから派遣されていた召還術の使い手のガイアスであった。

ガイアスから、召還術の目的を達成する事が出来れば自動的に送還されるかも知れないという事を教えてもらった。

すぐにでも元の世界へ帰りたかったが、方法がないのでは仕方がない。
目的をガイアスに聞き出した所、この召還のゲートは１００年に１回の割合で自動的に起動すると言う話であった。

自分の不運さに嘆(なげ)きながらも、この世界で生き抜く為にガイアスからたくさんの知識や戦闘技術を学んだ。
由香里(ゆかり)には、異界からの召還ゲートを潜った影響もあり、身体強化そして心の中で思い描いた内容がそのまま力になる幻想技術(フィーナエルガント)という特殊能力を得ていた。
その力により、ギルドへ加入後は一気に上層ギルドメンバーに抜擢された。
加入後わずか３ヶ月でギルドＳランクまで駆け上がったのは由香里の力である幻想技術(フィーナエルガント)の部分が大半を占める。

そして、ギルドの討伐依頼で古代竜の一種である、水龍王ハイドラを討伐した際に一冊の古代王国期の本を手にする事が出来た。
そこには異世界人を元の世界へ還(かえ)す手立てが記(しる)されていた。

その為に、必要な物が《始原原書(ノア)》であると。

始原原書の在り処を見つけるために、由香里(ゆかり)達一行は、冒険者ギルドの伝手(つて)を使い王国エルハンスに在るという禁書目録を調べる事にした。
高ギルドランクの由香里(ゆかり)の申請と言う事もあり、閲覧だけならと目録で調べた所、アイレクード公爵邸にある黎明庫に現存する可能性が高いと分かった。

眉唾物かも知れないが、いくつかの書庫でアレイクード公爵邸の情報が魔流術で改竄されている部分がありそこを読み解いた結果かな

り確立は高いと言う事だった。

アレイクード公爵邸の情報改竄の魔流術はかなりの上級者が行ったと、
ガイアスの仲間も指摘しておりそれが本当ならば素直にこちらの求めに応じる可能性はとても低い。

そのため、一度、裏を取ってから正規の申請を行い言い逃れが出来ないようにするのがガイアス達の考えであった。

・・・・・・。

「はぁ、明日からメイドさんのお仕事なのね。がんばらなきゃ！」

ベッドで横になりながら暗くなってきた夜空を宿屋の窓越しに見上げながら由香里（ゆかり）は夢の中へ旅立った。

はぁ、困ったわ。
まさかあの可愛らしくて、恥かしがりで、女同士なのにドキドキしてきちゃう仕草をする
正美様の御付(おつ)きから外されてしまうなんて・・・・・・。
私の、薔薇色メイド生活はどうなっちゃうのー。
と、エルフィーナはそんなくだらない事を考えながらも、入ってきたばかりのメイド達が行う窓拭きを行っていた。
その時、遠くからエコーの掛かった声が聞こえてくる。

「おねーさーまー。」

何やら、この原因を作った主の声。
エルフィーナは、無意識的に濯(すす)いでいる窓を拭いていた雑巾を絞って絞って絞ってそのまま、捻じ切った。
それを見たイリシアは、何かエルフィーナお姉さますごい怒ってる！
近くにいたらきっと殺されてしまうと本能が警鐘を盛大に鳴らす。
そのまま、両足で急ブレーキをかけながら体を反転させようとするが、
そこでエルフィーナに首を捕まれて逃亡を阻止されてしまう。

「なにかしら？イリシアさん？」

冷静でいて静かにそれでいて、嵐の前の静けさのような怒りの篭もった声で
エルフィーナはイリシアに声をかけた。
だが、首を絞められてるイリシアの口から漏れる声は、「はうあう」という言葉にしかならない。

万力のような身体能力を持つエルフィーナに首を絞められてるのだから仕方ないとも言えるが・・・・・。

イリシアはジタバタしながらも逃げようとするが少しずつ意識た遠のきはじめ、

そして、そのままイリシアの意識が飛ぶ寸前で２Ｆの窓から一人の女性が使用人専用門から入ってくるのがエルフィーナの視界に映った。

その女性をエルフィーナは見ると片手で吊るし上げていたイリシアを床に落とすと、その女性の姿に釘付けになった。

特別美しい、かわいいと言う訳ではない。

どこでもいる、町娘と大差はないだろう。

それでも、釘付けになったのは、副メイド長たる自分が知らない人間が使用人の格好をして入ってきてるからだった。

「新人さん？でも、新しい人が入ってくるなんて聞いてないけど？」

エルフィーナは、アレイクード公爵邸に仕えてすでに１０年以上過ぎており古参に入る。

そのエルフィーナが見た事のない使用人などいるはずがないのだが・・・・・。

「ケホッケホッ、エルフィーナお姉さま、ひどいです。死んだおばあちゃんに一瞬再会しちゃいましたよ」

「そう、良かったわね。なんならもう一度逝っておく？」

「遠慮させていただきます。」とイリシアは気持ちいいくらいに即答しつつもエルフィーナが自分を見てない事に気がつくと、エルフィーナが見ている窓の外へ視線を移す。

そこには、銀色の髪と瞳をした１８歳くらいの女性が立ってこちらを見ている。
横で、エルフィーナがその女性の事をイリシアに聞いてくる。
イリシアも記憶の糸を辿っていくと先ほど使用人集りの際に一人新人が入ってくる事の説明があった事を思い出す。

「そういえば、問題ばっかり起しているお姉さまの代わりに正美様が退屈しないように冒険者協会の方から一人メイドを期限付きで雇うって話がありました」

「まって！私がいつ？どこで？問題を起したっていうの？かなり侵害だわ！」
そう言ってエルフィーナが力説してるのを見ながらもイリシアは自覚ないんですか？と溜息をついていた。

「イリシア！」と切羽詰った声でエルフィーナがイリシアに声をかけてくる。

「なんですか？お姉さま？」
すごーくやる気のない生返事をイリシアはエルフィーナに返すが、エルフィーナの顔を見た瞬間に盛大な溜息をついた。
そこには、何か絶対問題を起しそうな顔をしたエルフィーナがいたからであった。

その頃、幻想技術（フィーナエルガント）を使い髪の色と瞳の色を変化させていた由香里（ゆかり）は、エルフィーナとイリシアを下から見上げながら値踏みしていた。

「やっぱり、門の守衛もあの２人も大した力は持ってないじゃないの。これなら私一人でどうにか出来そうよね。」

由香里は小さく呟くと、冒険者協会で支給されたメイド服のポケットから一枚の洋紙を取り出す。
そこには、仕事を始める前にアレイクード公爵邸の主とメイド長のエメラスとの顔合わせの日時と場所が書かれている。

由香里は、使用人の門から石畳沿いに公爵邸の裏口へ向かうと一人の少女が立っているのが見えてきた。
話しかける事が可能な距離まで近づいた所で、その少女の佇まいからさっきまで見上げていた2人の女性より遥かに強い力をもっていると一瞬で理解した。
そして、幻想技術を使う事が出来る由香里だけが感じ取れるモノ・・・・。

この世界には、本来存在しない力を感じ取ることが出来た。
それと同時に、この少女の危険性も・・・・・・。

「こんにちわ、貴女が冒険者協会から派遣されてきた方ですか？」

由香里が思考の迷宮に入ってる所で、エメラスが機先を制してくる。
それに由香里も戸惑いながらもルエルの町の冒険者協会から受け取った承諾書をエメラスに渡す。

「そう、ユカリさんと言うのね。私の名前は、エメラス。ここの公爵邸のメイド長をしています。これから、よろしくね」

１３歳くらいにしか見えない幼女がメイド長だと知り、由香里は違う意味で心の中で驚いていた。
ここの主って、まさかロリコンなの？ロリコン好きなの？変態さんなの？
そう言えば、貴族って昔から変態が多いって何かの書物で読んだ事

があるわ、きっと変態さんなのね。
そうよね、貴族でまともな人なんて物語の中でも少ないし、きっとすごい肥満で変態でロリコンなんだわ。
凄まじいまでの偏見である。
その後、アレイクード公爵邸執務室へメイド長のエメラスにエスコートされながら移動してる訳なのだが・・・・・・

5分歩いても執務室に到着しない屋敷の中を見ながら、どれだけこの屋敷広いのよーと由香里(ゆかり)は頭を抱えていた。

動き出す歯車　7

由香里（ゆかり）とエメラスが執務室へ向かってる時、執務室内では、とてつもなく重い空気が立ち込めていた。
その空気の重さと言ったら、会社で言えば左遷を宣告され、学校では、抜き打ちテストのような空気である。

「はぁーっ」

本日、何度目か分からない程の溜息が執務室の主たるアレイクード公爵から発せられた。
よく見ると、アレイクード公爵の顔は寝てないのか眼の下に若干の隈（くま）が出来ている。
そして、この執務室の主たるアレイクードは普段の仕事の出きる男と行った風貌からは遠く離れた姿をしていた。
執務室の机の上に倒れこむように力尽きているだけなのだが・・・・。
そして、その姿をひさしぶりに黎明庫から出てきたクレイネルが珍しげに見ている。

「珍しいですな、アレイ様がそんなに塞ぎこんでいるとは。何か問題でもありましたか？」

クレイネルなりに心配をしてアレイクードに声をかけるが、アレイはクレイネルの方を一瞥しただけで今度は考える人のポーズをとってしまう。
それを見た、クレイネルは放置しておく事にし王宮からの調査報告書に視線を落とす。

そこには、大体予想通りの内容が書いてあったが一つだけ気がかりな内容が記載されていた。
軍事国家レクイエム周辺において、謎の人型ゴーレムが多数発見されていた事。
そしてそのゴーレムが通ったあとは、夥(おびただ)しい魔物と人の死体が区別なく転がっている事。
生き残った者の話では、何かを探していた素振りが伺えるなど不審な部分もあると記載されていた。
そこまで読み耽(ふけ)った所で、アレイクード公爵から突然声をかけられた。

「クレイネル、昨晩、俺の部屋に正美が来たんだが・・・・・・・・・」

その話を聞いた途端、クレイネルはアレイクー度公爵の方へ視線を向けた。
夜中に女性が男の寝室に来ると言う事は、それは・・・・・・・・。
だが、クレイネルから見る限りアレイが現在、纏ってる雰囲気はうまく行ったという感じには見えない。

クレイネルから見た、アレイクードは恋愛には奥手であり好きと言う言葉を出すだけでも命懸けなほどのヘタレである。
恐らく、戦場で戦うのと意中の女性に愛を語るのかどっちか選べと言われたら即、前者を選ぶのは分かり切った事だ。
そこまで、クレイネルは考えた所でどうやら正美とアレイの間で何か問題があったのかと推測する。
正美に関しても、恋愛にはかなり疎く見える。
しかも、男勝りな部分もあり時より周りを意識しない振る舞いなど見る事からアレイと正美が両思いになるのは時間がかかるというのが

クレイネルの考察した所である。

「その時、ワインを飲んでいたのだが、かなり疲れてる事もあって酔っていたんだ。それで、何か正美が俺に話しかけていたのだが、つい・・・・・・ベットに押し倒してしまってな・・・・・。」

そこまで、聞いた所でクレイネルは頭が痛くなった。
正美にも夜、男の寝室に入った点で非はあるが、いくらなんでも、無理矢理ベットに押し倒すのはマズいだろうと・・・・・・。

「それで、そのなんだ・・・・・正美の唇にキスをした所で少し抵抗された事もあって・・・・・・今、考えても俺もやりすぎだとは思ったんだ。
まさか、あんなに瞳に涙を浮かべて抗議されるなんて想像もつかなくてな」

「そうですか、それで正美様は何と言って部屋から出て行ったのですか？」

「そうだな・・・・・「アレイ、信じてたのに！アレイなんて大嫌い！もう顔も見たくない！」って言われた。」

「それは致命的ですな、最後までやってしまったのですか？」

「どうだろう？その辺の記憶が曖昧でよく覚えてないんだ」

クレイネルはその言葉を聴いて盛大に溜息をついた。
そして、心の中でエメラスに前途多難じゃと告げ口をしていた。

アレイとクレイネルが、正美の機嫌を取るための策を考えていた所

で執務室のドアが叩かれた。

扉が開くとそこにはエメラスと銀髪・銀の瞳をした少女が公爵邸のメイド服を着て、エメラスの横に立っていた。

動き出す歯車　8

今、公爵邸の執務室には、現在ここの館の主であるアレイクード公爵そしてクレイネルの2人にたった今、入室して来たばかりのメイド長のエメラス、冒険者協会より派遣されてきた由香里（ゆかり）の4人が居る。

「エメラス、そちらは？」とクレイネルが尋（たず）ねる。

「冒険者協会から期限付きで雇ったメイドです」

クレイネルの問い掛けに、坦々（たんたん）とエメラスは答えながら冒険者協会からの証明書と雇った理由について説明を始める。

「ふむ、そうか。なるほど、たしかに最近の正美（まさみ）様は、元気がないからのう。
冒険者の方から珍しい話を聞くのも気分転換になるかもしれないのう」

とクレイネルは呟いているが実際の所は、アレイと話しても正美の機嫌をうまく取る方法が思いつかない2人にとっては渡りに舟だったりするわけで、エメラスの提案を却下する理由はない。
エメラスにとっても、息子のアレイクードが好意を持っており他家どころかこの世界との間になんら繋がりがない正美がアレイの妻になる事は唯でさえ問題の多い貴族にとっても良物件である。
多少、言葉使いが乱暴な所はあるが、そこを抜かせば自分で出来る事は自分で行うという性質の持ち主は貴族の中では希少である。
だからこそ、エメラスも礼儀やマナーを無理矢理覚えさせる為に、

正美の護衛という大義名分を使ってクレイネルを騙し、正美には借金をチラつかせて教育をしているわけなのだが、最近はそれが仇になってきたのか、以前のように正美に元気が見られない為に気分転換にと
冒険者協会から人を雇ったわけだ。
問題は、正美に執着しているエルフィーナを如何にして離すかが問題であったが、また訳のわからない物を購入したとイリシアに持たせた物、クレイネルが研究の結果作りだした広域探知術式を埋め込んだイヤリングから報告が来た事で行動に移す事が出来たわけだが・・・・・・

そんな理由があり、特に由香里（ゆかり）に関しては追及も無くあっさりと正美付の期限付きメイドとして採用された訳だが・・・・・・

由香里（ゆかり）としては、部屋に入ってからずっと緊張していた。
思ってたよりずっと若く、イケメンに属する部類の顔つきに高い身長そして均整のとれた肉体、どれをとっても由香里（ゆかり）の中では彼氏にするなら及第点であった。
そんな、男性が自分を一使用人としてでも見つめて来ているのだから、緊張するなというのは無理と言うもの。
由香里（ゆかり）はボーっとアレイクード公爵の顔を見ていた事もあり、声を掛けられていた事に気がつくのが遅れた。

「ユカリさん！」と強めにエメラスに声を掛けられてしまい思わず、
「は、はひっ」と思わず舌を噛みながら答えた・

それを見た、アレイクード公爵とクレイネルは、笑みを零していたがひそかに痴態をさらした由香里（ゆかり）は内心落ち込んでいた。
エメラスは話という顔合わせは終わったとみて、由香里（ゆかり）の手を引いて執務室を出て行った。

執務室に残されたアレイクード公爵とクレイネルはこれで正美の機嫌が少しでも良くなればとお互い目で語りあっていた。

執務室から廊下へ出た、由香里(ゆかり)はエメラスの背中を追いながら考え事をしていた。

誰よ！貴族は太っていて油ギタギタのロリコン変態オヤジって言ってたのは！

第3者が聞けばお前だろ！と突っ込みを入れる場面だが、心の中で呟いてる由香里に突っ込みを入れる者はいなかった。

「ユカリさん、貴女にはここの部屋の女性のお世話をしてもらいます。ですが、身の回りの世話は必要ありません。

貴女が冒険をしてきた体験談を聞かせてもらえばいいです。」

由香里(ゆかり)としても一般的な家庭で育ってきた以上、メイドの仕事は何をしたらいいのか皆目見当もつかない。

それが、話をするだけならば、簡単な事。

由香里(ゆかり)としても異論は無い、すぐにエメラスの言葉に頷くと、エメラスも納得したのか一つの扉の前に立ちノックをした後、

入室の確認を部屋の主に取っていた。

「エメラスです。よろしいでしょうか？」

「は、はい」と中から聞こえてきた声は、鈴を鳴らしたようなとても綺麗な音色の声色であった。

そして、エメラスが扉を開けるとベットの上には１６歳くらいの黒髪の少女が涙に濡れた瞳でエメラスと由香里を見つめていた。

ルアなナレーション!?

エメラスが正美の部屋に入る数時間前のお話・・・・・・。

「うあああああああ」

大声を上げながら、隣の部屋と唯一繋がる高さ2m程の扉を壊れそうな勢いで開けると一人の少女が開いた扉から飛び出してきた。
そして、扉を片手で音を立てて閉めると扉に背中に押し付けながらズルズルとその場に座りこむ。

少女は正美といい、この部屋の主でもあるが今宵は希少金属や宝石を貸してもらおうとアレイクードの部屋に向かったわけだが・・・・・。

何やら複雑な事情があったようで、詳細は不明である。

「って!何ナレーションしてんの!?」

正美が、ナレーションをしていた使役獣ルアに突っ込みを入れた。
ルアは、主たる正美の突っ込みにナレーションを止めて顔を向けた。

「だって、ご主人たま!最近、僕の出番がめっきり減ってきっと読者様に忘れられてると思うでち!」

読者って一体なんの読者だよ。と心の中で正美は突っ込んでいた。
そして正美自身、ルアの言葉を聴きながらもそう言えば俺も最近影薄いんじゃね?とか心の中で突っ込んでいたが、それを知るものは誰もいない。

正美が自分自身に突っ込みを入れてる間にも、ルアは熱心に弁論をしていたがそれはまたのお話。

1時間経過・・・・・・。

「で！僕はそう思うでちよ！」

長い長い、あまりにも長い熱弁を語っていたルアは自分の言葉に酔っていて正美がベットの上で、話の途中から寝ているのに気がついていなかった。
ルアの話が一段落つく頃に、正美も目を覚ましてから何かまずい事でも思い出したのか顔を真っ赤にしてから真っ青にしてベットの上で反省のポーズを取っていた。
それはまるで、人生が終わったかのような雰囲気を醸し出している。
ルアもさすがにその事に気がついたようで？

「ご主人たま、どうかしたでちか？」

そのルアの言葉に顔を真っ青にして正美は頷いていた。
さすがに、いくらかなりの美貌を持っている正美とは言え、そういう雰囲気と空気を纏っているとルアも感づいたのか少し引き気味だったが、そこはやはり腐っても獣と言う事もあり、聞き難い事すらサラッと聞いてしまうのが獣たる所以である。

「ああ、実はな・・・・・・。」

正美がそこで話を区切った事からかなりの重大な事が起きたとさすがのルアも身構えると同時に、主たる正美に危害を加えたならばアレイという小僧をくびり殺してやろうとまで考えていた。

だが、その考えは・・・・・・。

「・・・・・・た。」

「ご主人たま?」

あまりにも声が小さかった事もあり、ルアでも聞き取る事が出来なかった。
再度、ルアは急かす。

「・・・・・・された。」

「・・・・・・?」

「だから!男にキスされたんだ!」

最後は、部屋中に響き渡るような声で正美は、アレイクードにキスされた事を告白していた。
その言葉に、ルアは違う方向で考えを改めた。

「ご主人たま、男というのは好きな女性にキスをしたいものでち」

ルアの一言に、正美はグッと堪えて考えた。
たしかに、今の自分は容姿端麗でありスタイル抜群である。
男ならまずは放っておかないと思う。
でも、それは自分が男としての立場の時であって、自分が女になってる時の立場ではない!
それに、性格や人格は男なのだから男にキスされるって事は同性同士でキスするって事であり、簡単に言えば男同士でキスしたって事になるわけであり、そのショックは計り知れない。

結局、その夜に正美は、アレイクードに借金返済のために希少金属や希少宝石を借りに行った所で酔っていたアレイに押し倒されてキスをされた所で、火事場のなんとやらでアレイクードの鳩尾を殴り昏倒させて急いで戻ってきたのが一連の騒動だったのだが、昏倒させられていたアレイクードはキスをした後の記憶が無いのではなく気絶してたから無かった！のだが、律儀なアレイクードは何があったのが考え込んでしまっている。
自業自得と言えば自業自得と言える。

一連の話をルアにした後、正美はベットの上で男にキスされた。と落ち込んで瞳に涙を湛えていた。

そこで扉がノックされ、正美がそのノックに答えると、今！もっとも会いたくない人Ｎｏ２のエメラスと見知らぬ女性が部屋に入ってきたのであった。

交差する思惑

私が最初見た、その少女は涙に濡れた瞳で私とエメラスさんを見ていた。

エメラスさんを見てる瞳は違和感があった。
怯えてる？ううん、違う。苦手意識があるように私は感じた。
そして、私の方を見ると、一瞬あれ？って顔をしてからエメラスさんへ視線を戻していた。
私は一瞬、会った事があったのか気になってしまったけど、どれだけ記憶の糸を辿っても彼女のような美少女に会った事はない。
まず、間違いなくこんな女の子にあったら脳のメモリーをフル回転してでも覚えてるはず。
私が思考を終わらせると、目をキラキラ輝かせてと言うのは比喩かも知れないけど、そのくらい期待の篭もった眼差しで私を見てきた。
あれ？エメラスさん何か余計な事言ってませんよね？
少し心配になりつつ、エメラスさんを見ると、口の端が歪んでいるのが分かった。
同性じゃないと分からないくらいの変化。
私は、それを見たときにどっと疲れが出た。
きっと、たくさんの冒険譚を話すハメになる。
こういう刺激の無い貴族的な生活を送ってる少女や女性は外からの刺激に対してとっても敏感なのだ。
以前も、このパターンで永遠と話相手をさせられた事がある。
その頃の事を思い出して、心の中で思わず頭を抱えた。
その事で、次の大事な話の内容を私は聞き逃してしまった。

「それでは、正美（まさみ）様。くれぐれもこの部屋からは出ないようにお願いします。」

エメラスさんがそんな事を言ってくるが最初の方は聞き取れなかった。
恐らく、この少女の名前を言っていたのだろう。
すでに、頭を抱えていた私にはどうでもいい事だったけど・・・・・。
それでも、部屋から出ないようにって言葉には少し引っかかりを感じた。
確かにこの部屋は学校で言うと教室くらいの広さはある。
それでも、ここの部屋にずっと閉じ込めておくと言う事は何らかの要因が考えられる。
警護の依頼を受けた時も依頼人が部屋に閉じ篭って出て来ない時があったけど、それと同じなのだろうか？
でも、こんな屋敷の中で危険な事など起きる事は無いと思う。
身内が余程、暴走する人で無い限りそんな事は有りえない。
でも、私が担当するこの女性を見る限りなにか問題を起しそうな印象は受けない。
それと、話相手をさせる為だけに、態々（わざわざ）大金を使ってまで冒険者を一時的に雇い入れる事など普通は考えられない。
考えられる線としては、どこかの貴族のご令嬢と言う線があるけど、冒険者みたいな人と接触させる危険性を考えない訳が無い。
其れでなくても、この世界の貴族は毒殺とか日常にあるし・・・・・。
そう考えると、貴族のご令嬢という線は消える。
問題は、これだけの大きな部屋を宛がって、身柄を監禁？に近い事して冒険者を話し相手として雇い入れるのは何故か？
そこまで、私は考えた所で、一つの結論に達した。

よく分かんないって事に！

そもそも、私って知識使う依頼（クエスト）を受ける時って基本、ガイアスとかに丸投げだったんだよね。

なんでも力任せに解決してたし・・・・・・。

はぁ、私ってこういう潜入捜査とか本当は向いてないのよね。

でもパーティメンバーだと私しか女いないし・・・・・・。

「それでは、ユカリさん。きちんと話相手になってあげてくださいね」

思考中に突然、エメラスさんから声を掛けられて、内心ドキドキしながら頷いていた。

我ながら、反射的行動としても頷けたのは上出来だと思い、視線を少女へ移した。

私が視線を移すと同時に扉が閉まる音が聞こえてきた。

思わず、私は、後ろを振り返った。

冒険者風情と大事にしてるご令嬢を一人にさせていいのか！？と扉越しに突っ込みを入れそうになってしまった。

そこで、「えっと、貴女は冒険者の方ですか？」と鈴を鳴らすようなそれでいて聞き心地の言い音色のような声が聞こえてきた。

それを聞きながら、私が振り向くと少女はニッコリと笑った。

その笑顔を見た途端に私はこの人、歌手になったら元の世界だと一瞬でミリオンにランクインするんじゃない？って考えながらも「はい、そうです」

と私は、普通に答えた。

「そう、よかったわ」

少女が顔をニンマリ?させながら私の方を見つめてきた。
その、笑顔は明らかに整いすぎた少女の顔に合わない笑顔だった。
そう、何かを企んでるような笑顔。

「えっと、そうね。私の名前は正美って言うの。よろしくね」

「あ、えっと、私は、由香里って言います。」

シドロモドロになりながら、挨拶を交わした。
原因はマサミって名前。今までたくさんの依頼人や人と接してきたけど、英国人ぽいカタカナ表記の名前ばっかりで日本人ぽい名前は今まで無かった。
それが行き成り飛び出して来て、私は驚いた。
数年ぶりに聞いた日本語表記の名前。
さすがに異世界で、同じ日本人に会う訳はないけど、それでも同郷に近い名前を持つ人には親近感は沸く。
私は、正美と言う少女を再度見ると、その少女も固まったままじーっと私を見つめ返していた。
とっても澄んだ、湖底のような黒いクリッとした瞳をしている。
何故かこの世界に来てからたくさんの命を奪って生きてきた私はすごい居心地は悪くなった。

しばらく、私を凝視して思案をしていた正美と言う少女は、確固たる視線で私を見つめてきた。

そして、「あの、日本って国をご存知ですか?」と

絶対に耳にしないと思った、言葉が私の鼓膜を揺さぶった。

交差する思惑　2

「え？」

思わず、私の口からそんな言葉が漏れた。
それは、無意識に出た言葉だった。
なんで？という感情が一番先に先行していた。
そんな、混乱してる私を見て、正美という少女はきょとんとしていた。

そして、一言呟いてきた。「どうして泣いているの？」と。

私は、言われて初めて気がついた。
瞳から次々と涙が頬を伝って流れていく事に・・・・・・。

何度、拭っても涙が溢れてきて止まらない。
そんな私を、少女は困った顔をしながらも一枚のタオルを差し出してきた。
私がそれを受け取ると

「ごめんなさい。私の言った事で泣かせてしまって・・・・・・。」

少女は、申し訳なさそうに私に頭を下げてきてくれた。

「ううん、違うの」

そう、私が泣いていたのはきっと同郷を知ってる人がいたからだ。
この異世界では、私は異質な存在であると同時に異分子でもある。
そんな中での孤独感はどれだけのモノなのだろう？

今まで、必死に生きてきて、生きるために他者を殺して明日への糧として日々生きてきた私は知らない内に、その孤独感を貯めていたのだろう。

そして、この少女が日本人ならば人殺しが日常茶飯事なこの世界と違って平和な日本では、絶対的なタブーである人を殺す必要はない。

そこまで考えた所で、少女の瞳を見ると真っ直ぐに私を見ていた。
その瞳には、無条件で人を心から信じ人に信じられると言った日本人特有の甘い考えをもった感情と共に人に安心感を与える暖かさを感じた。

そこで、私はハッとした。
そう、だから、私はきっと最初、この少女の瞳を見た時に動揺したんだ。
きっと、私もこの世界に来る前はこんな瞳をしていたかも知れない。
でも、今は・・・・・・。
きっと、酷い顔をしている。

自分の国を知ってる人と会っただけで、何でこんなに動揺してしまうんだろう?
この世界に来て、一人でも生きていけるように強くなるってあの時、誓ったのに。

そんな私を心配そうに見上げるように私を正美という少女は見ている。

私から見ても、その少女はとても小さく映った。
きっと私よりずっと幼い年齢なのだろう。
私が部屋に入ってきた時に泣いていたのも、元の世界への恋慕かも

知れない。

そう思ってしまうととても、愛しくなってしまう。

私は、ベットの上に座っている少女を抱きしめると、少女は特に抵抗もしなかった。

私は、すでに十分動揺して取り乱していたけど、安心させるように「なんでもないの。」と何度も繰り返し自分に言い聞かせるように呟いた。

そして、少女の髪の毛を手櫛しようとした所で、白い猫みたいなのが私の頭の上に乗ってきた。

「なっ！？」

雰囲気ぶち壊しの声を思わず私は上げてしまっていた。

それもそのはず、その白い猫ぽいのが人の言葉を話してきたからだ。

「ご主人たまに、馴れ馴れしくしないでほしいでち！」

「喋った？魔物？」

喋ってきた白い猫を左手を振るってベットと反対側に弾くと、一本の刀を右手の中に作り出す。

そしてそのまま叩きつけるように白い猫を斬りつけようととした所で、「やめて！ルアを斬らないで！」と後ろから、切羽詰った声が聞こえてきた。

それと同時に、私の腰の部分に、白く細い手を絡めて抱きついてきた。

ここまでの動作を無意識に行っていた私は、その声を聞くが長年、冒険者をしてきた私が、すでに振り下ろした刀を止める事は出来な

い。

何故なら、魔物は狩るものと体と心に深く刻み付けてるからだ。
魔物は存在するだけで人に害を及ぼす。
それは、この世界では共通の認識であり絶対の真理だから。

真っ二つになる場面を想像していた私は目の前の光景を見て驚いていた。
私が作り出した刀は白い猫の体毛で止まっていたからだ。

「そんな!?」

私は、驚いた。
龍の鱗ですら切り裂く私の刀を受け止められるとは思わなかったから。

『やれやれ、ずいぶんな歓迎ぶりだな。当代の原書よ』

そんな声が威圧感と共に、私の中に降ってきた。

交差する思惑　3

正美と言う少女にルアと呼ばれていた、白い猫のような魔物と睨みあった所で、部屋の外で待機していたエメラスを筆頭とする数人のメイド達の介入によりその場は有耶無耶にされた。

そして、今、部屋の中では正美が一人ベットの上で横になっていた。

「なぁ、ルア。お前がご主人たまと同じ匂いがするでちー。とか言ってたから元の世界の情報を出して反応を見たけど、どう考えても痛い子に思われたぞ」

そう言いながらも、正美は先ほどまでの由香里との会話を思い出していた。

たしかに由香里と言う女性は顔の輪郭を見る限り、果てしなく日本人に近かった。

それでも、髪の色と瞳の色は元の世界では考えられない色だった事から日本人では無いと思い、エメラスとの会話に集中したのだった。

お互いに名前を名乗りあった後、元の世界への帰還の方法に望みをかけてこちらから、元の世界の情報を出して反応を試してみたが、哀れみの涙を誘っただけで後は、ルアを魔物と勘違いし殺そうとしたくらいだった。

これだけでは、いくら名前が由香里という日本人に近い名前でも日本人というのは特定は出来ない。

それにこの世界へ連れて来たのは尊大な態度で話す女だった。

「はぁ、どうするか」

ベットの上で正美は、上向きになり天井を見つめた。

正美のお腹の位置にルアが走ってきてスカイジャンプを決めてくると、その衝撃で正美の口から吐息が出る。

「ルア、いい加減、人のお腹の上で寝るのやめろよな」

「使役獣は、ご主人たまと一緒にいないと死んじゃうでち！スキンシップは大事でち」

俺は、思わずお前は青い兎かよ？っと心の中で突っ込みながらもこれからの事について考えた。

借金を完済しない限り、間違いなく男と結婚させられる事は目に見えている。
体は女でも心は男な俺にとって、それは拷問以外の何者でもない。
それを回避する為には、何とかしてこの監禁状態から抜け出して逃げ出すしか方法がない。
前回、この館から逃げ出した時には、記憶喪失というトンデモ状態に陥ってしまい、色々とゴタゴタに巻き込まれて一つの商業都市を丸ごと吹き飛ばしてしまった。

吹き飛ばしたのは、ルアだったけど・・・・・。

そう言う事から考えると、外で生きる為の絶対的情報が足りてないのが分かる。
今日のアレイの部屋から出てきたあと、情報を得る方法をずっと考えていた。

そして、丁度良く外の情報を得られる冒険者が話し相手として雇われた。
その冒険者から外の情報の話と普段の私生活の体験を聞けば何とか

なるかも知れない。
そう考えて、エメラスから話を聞いた時にこの窮屈な生活から抜け出せるかもと期待を込めた眼差しで冒険者たる由香里を見ていたのであった。

「でも、ご主人たま。あんまりあの由香里って人とは仲良くしない方がいい気がするでち」

知ってか知らずかルアが正美に忠告をしてくるが、当然それを正美はスルーする。

「そうだな、問題は一人で生きて生けるように情報を由香里って人から得るのが大事だよな！」

「ご主人たま、僕の意見はスルーでちか？スルーなんでちか？」

ルアが喚いて何か言ってるが当然スルーする。

「この際、同じ日本人かも？って言う幻想は捨てて、外で生きる為の知識を頂く事にするか！」

その考えがとても良案だと正美自身は思い、明日からは公爵邸脱出プロジェクトを開始する事を心の中で固めていた。

（ルア）実際は声に出していたのはいつもの事である。

「だ・か・ら、ナレーションしなくていいからな？」

正美はそう言いながらルアのコメカミをグリグリする。
ルアの痛い！痛いでち！という声が部屋に響き渡っていた。

神様も忙しいのですっ！

日の明かりが消え、暗き帳が世界を支配する時刻。
人はそれを夜という。
夜は不可思議な現象を起すと古今東西で文献にて語られている。
それは、人が持ちえる原始的な恐怖により空想的に書き立てられた物語も含まれる。

夜の帳は、全ての生きとし生けるもの存在する全てのモノに等しく降り落ちる。
それは、必ず死という最後が全てのモノに降りかかるように・・・・・。

正美の中に存在するもう一人の妾にも、いつの日か終わりが来るのだろうか？

普通の人間では、持ち得ない程の容量（キャパシティ）の中を妾は漂（ただよ）いながら思考していた。

この世界へ、戻る為とは言え、神たる妾が一時的とは言え、人間の力を借りてしまうとは・・・・・・。

だが、それは仕方の無い事であった。

上位神であっても、別の世界への規律を乱す異世界干渉を簡単に行える程、世界と世界の狭間にある壁は緩くはない。

地球という、星に飛ばされてから数百年、この世界へ戻る為に力を行使する場所を星中周り探したが、すでに神が絶えた土地ばかりで

神域は存在しなかった。
多数の宗教は存在していたが、それは全て、偽りの神ばかりであり神域と名がついてる場所には低級霊が闊歩してるだけであった。

長い長い旅の果てに辿りついたのが、日本という小さな国であった。
そこにたどり着いたのは本当に偶然と言える。

日本に興味を持ったのは、遠くインドという国に居た時であった。
上位神である妾をも遥かに凌駕する力の衝突。
それを感じたからであった。
そして、急いで極東の島国に着いたときには、全てが終わっており戦いの残滓が残っているだけであった。

否、その残滓ですら本来、存在するはずの無いほどの力を内包していた。

そして、その残滓を吸収したあと、一時的に力を回復させ、元の世界への門（ゲート）を開こうと心みたが、それは失敗に終わってしまう。

しばらく、極東の日本という国を観察していると気がついた点があった。
それは、世界では数えるほどしか存在しなかった力を持つ者が、それなりに存在していた事であった。
その中で異世界への扉を開く力を持つ者が居ないのか、妾は探した。

そして・・・・・一人の男を見つけ出した。

その男は、人には有り得ないはずの術式が体に組み込まれており膨大な力を有していた。

妾は歓喜した。
これで、元の世界へ帰れると！
世界に侵攻してきた異形の船と魔物を滅ぼす事が出来ると！
だが、男には妾の姿、声は一切届く事はなかった。
妾は、信じられなかった。
これだけの力を内包するものが上位神である妾の声を聞くことが出来ないことに・・・・・・。

そこで、妾は自らが意識を失い夢を見ていた事に気がついた。
そして、ふと前を向くと一人の少女がこちらを見つめてきているのが見えた。

「また、来たのか？いい加減、この世界から出て行ってくれるとうれしいのだが？」

そう言って少女が本当に嫌そうな顔をして妾に話しかけてきた。

「残念ながらそうはいかんのう。妾にも目的があるのでな」

妾の言葉に、その少女はほんの少し楽しそうに笑っていた。

交差する思惑　4

いろいろあって、翌日―

部屋で朝食をとった後、沐浴をし着替えさせられた後。

今、正美が居る部屋には、この部屋の主たる正美と由香里がベットの上で座っていた。

お互いに何か思うことがあるのだろう。

正美の場合は、外に出た時に生きる為の技術であるが・・・・・。

だが、それを部屋の中に漂う現在の圧力（プレッシャー）の中で聞くことは、少しは空気嫁とまで言われる正美でも出来なかった。

正美と由香里の間には、ルアがちょこんと座って由香里と対峙している。

しかも無言でだ！

その空気の張りつめ方と言ったら、東京駅で校歌を一人大声で歌えと言うくらいの難易度である。

実際は、テレパシーぽいので一人と一匹は会話していた訳なのだが・・・・・。

『おい、当代の原書（オリジン）。2度は言わないぞ？さっさと屋敷から出ていけ』

『はい？貴方にそんな事言われる云われはないんだけど？』

『ほう、我が主によからぬ事を吹き込もうとするのを事前に食い止めるのは私の仕事だ。』

『ふ～ん、でもお生憎様。貴方のご主人様は私との話を望んでるみたいよ?それに私を解雇した原因は貴方って言えばまた、グリグリされちゃうわよ!ぷっ」

由香里はテレパシーをしながらも、相手を小馬鹿にする。

『貴様、何故昨日あった事を知っているのだ?』

そう、ルアが頭をグリグリされた時、部屋には2人しかいなかったのだ。
それを、由香里は正確に察知している。
ルアはそれが不思議でたまらない。
何故なら、ルアは五感が人のそれと比べて遥かに発達しているために侵入者やそういった者を見極める力はとても高い。
それを掻い潜って情報収集するなどまず不可能なはず。
由香里としては、自身の能力である幻想技術(フィーナエルガント)を利用して、空気中に無数の受発信をもったカメラを作って覗いていただけなのだが。

それを素直に言うほど、由香里は馬鹿ではない。
むしろそれってストーカーじゃないの?とか人権侵害だとか日本だと訴えられそうだが・・・・。

『女の子には、秘密が多いものなのよ?それに小動物に言ってもね～。理解出来ないでしょ?ぷっぷっぷっー』

そのテレパシーを受け取ると同時に、ルアの額に血管が浮き出る。

それを見ていた正美は、何をしているか知らないけどこれ以上放置してたら部屋がとんでもない事に！むしろまた借金加算されるんじゃ？と思いルアを持ち上げて胸の位置に抱っこすると頭を撫でた。

「ご主人たま、やめてほしいでち。」

ルアはそう言いながらジタバタと短い手足を動かすがガッチリと正美の細い両腕にホールドされた体はその程度では外すことは出来なかった。

「ダ～メ。せっかくの貴重な情報じゃなくてめずらしいお話してくれる方なんだからそういう態度はダメ」

思わず、ポロリと本音が出てしまっていたが、今までルアと一触即発の戦い？をしていた由香里は、その事に気がつくことはなかった。それでも、ルアと由香里がこの部屋で他者から見たら無言の戦いを繰り広げてからかなりの時間が立っていた。

正美が、由香里に冒険者というのはどう言う事をするのか聞こうとした所で、部屋の扉がノックされた。

本題に入ろうとしていた正美としては、面白く無いわけなのだが、エメラスからの命令で由香里に接してる間は極力、女性として接するように言われていた為、それを表情に出すわけにはいかない。

「はい、どうぞ」

正美がそう答えると、ティーセットを用意したワゴン車を押してエルフィーナとイリシアが部屋の中に入ってきた。

予兆

エルフィーナとイリシアがお茶の用意をした後、２人はすぐに部屋を出ていったように正美の目には映っていたが実際は、二人が部屋を出て行く際、由香里は一人の女性に睨まれていた。

部屋の外では、イリシアとエルフィーナが廊下を歩きながら正美と由香里の事に関して話をしていた。

「エルフィーナお姉さま、ルアカーゼ殿とどうやら由香里っていう新人は仲が悪いようですね！」

そう、２人は短い時間で部屋内の不穏な空気に気がついていた。
ルアカーゼの普段はボーっとしてる丸い瞳が、細められてそれが由香里を射抜くように見つめていたからだった。
あれならば何か問題が起きることは無いだろうとエルフィーナは安心する。
むしろ、周りから見たらエルフィーナがいつも騒動を起してるわけなのだが・・・・・。

「ええ、そうね。特に不審な点もないようですし、一週間の滞在の間だけの辛抱ね」

その言葉に、イリシアは正美の専属のお付を外されてる自分達が口にするモノを持っていくのが一番不審なんですけどねっ！とひそかに突っ込みを入れていた。
それでもその事を言えば、要らぬ雷が落ちてくる事を知ってるだけに余計な事を言うのを控えてるあたりイリシアはきちんと成長してるのかもしれない。

その頃、アレイクード公爵邸の執務室では問題が起きていた。

「クレイネル、これを見てくれ」

アレイが書簡をクレイネルに渡す。
その書簡は黒く塗られており、独自のルートで手に入れた情報であった。

「これは!?」

クレイネルが書簡に目を通していくのを待つ事もなく、アレイが口を開く。

「ああ、軍事国家レクイエムが女神信仰国レイゲンと宗教国家インフェルノへ同時に宣戦布告を出した。」

アレイも自分でその事を言いながらも信じがたい心持であった。
そもそもこの大陸の国家間の力は絶妙にバランスが取れており、ほとんどの国のパワーバランスは均衡に保たれている。
アレイクードが仕える国家エルハンスは弱小国家と言えど、アレイクード公爵が保有する軍事力やエメラス、クレイネルなどと言った核兵器に近い人材が抑止力となっている。

女神信仰国家レイゲンそして宗教国家インフェルノに至っては膨大な信者を世界各地に抱えている為、これらの国に宣戦布告をすると言う事は自国内にいる信者も敵に回す事になる。
だからこそ、この2国を同時に相手にするなど本来は考えられない

事であった。

「なるほど、だからこそここ数年、レクイエムで不審な動きがあったのですな」

クレイネルが妙に納得した顔で呟いていたが、アレイとしてはその言葉に不審を持った。

公爵クラスの情報網ですら手に入れる事が出来なかった不審な動きをクレイネルが感知していたからであった。

「数年前？俺には情報は上がってきてはいないが？」

アレイの疑問に、クレイネルは少し思案すると「いえ、まさかこの様な事態になるとは思いませんでしたので」と言葉を濁していた。

アレイはクレイネルにどうやって知ったかなど、問い詰めたい事があったがそれをひとまず置いておくことにした。

「それで、レクイエムがこの2国と戦って勝てる可能性はあるのか？」

誰でも疑問に思うことをアレイはクレイネルに尋ねるとクレイネルはしばらく思案した後、分かりませんと答えた。

「ですが、一つだけ言える事があります。レクイエムには何らかのこの戦争の勝敗を決定づける物を手に入れたと考えられます。モノによってはかつての大戦を超える戦いになるかも知れません。」

その言葉にアレイはしばらく思案した後に、物資の調達を含む書簡をいくつも仕上げて領地内の各都市・町・村の長そして王宮への伝令を送ることに決める。

そして、これは幻想大陸のみならず本来の世界すらも巻き込む事になろうとは誰にも神にすら予想は出来るものでは無かった。

首都イースバール

軍事国家レクイエムが宗教国家二国へ宣戦布告し、国境を侵犯し戦争が始まりすでに一週間が経過していた。

エルハンス王国の首都イースバールでは、多くの難民が押しかけており、城下町にある門を閉ざす事で進入を防いでる状況であった。
難民を受け入れれば、自国の民との温度差により問題が多発するのは明らかであった。
事実、先の大戦では多くの難民を受け入れてしまった為に、治安などが著しく低下してしまい国内の治安維持を優先してしまった結果、他国からの侵攻を許してしまい、
王宮が陥落の憂き目に合った事もある。
その事から、難民の受け入れに関しては城壁の築かれている町においては戦時中も平時も受け入れないのがこの国の暗黙のルールであった。
そのような背景もあり、この国にエルハンス王国に住む大半の人間は難民を心良く思ってはいない。
それは、国と利権の強く結びついてる貴族においては最も顕著であり、自らの領内に難民が来るものならば兵を出して追い返すか過激な貴族ならば手打ちも已む無しという行動を取る者もいた。
エルハンス王国が難民の受け入れを拒んでいる事は、他国の国民にも周知の事実として知られてはいたが大陸に存在する五国のうち女神を信仰する国家レイゲンと宗主国インフェルノが軍事国家レイクエムと戦争を始めた為に、安全な国は、エルハンス王国と軍事国家レクイエムを挟んだ先にある資源国アルノートしかない。
戦時中の敵対国を超えていくなど、自殺願望者以外行う者などいないだろう。

そのような理由によりエルハンス王国へ難民が流れてくるのは必然と言えた。
すでに難民の数は数万人規模に達しており、首都に入れない不安と着の身着のまま非難してきた事からの不安からいつ暴動が起きても仕方のない状態であった。
そして、難民達を連れ立った兵士達を使い進む貴族の一団があった。

「もう、汚らしいですわ、お父様」

場違いな程、煌びやかに装飾された馬車に乗ったレイユーズ公爵家の娘フィンナが愚痴を零す。
だが、その事をまったく気に留めた様子もなく、馬車から遠くを見るようにレイユーズ・フォン・ベリアス公爵は考え込んでいた。

エルハンス王国を内部から瓦解させる為に多額の資金を宗主国インフェルノから渡されてこの地位まで上り詰めたと言うのに、今度はその最大のクライアントが戦争を仕掛けられて危機に陥っているからだ。
宗主国インフェルノより、今後のエルハンス王国の動向を決める際の会議において、クライアントの有利になるように事を運ぶように打診が来ている。
その事に、レイユーズは頭を抱えていた。
何も無ければ、多くの信者の事を表に出し、根回しした王宮内の重鎮と貴族を利用し会議である程度の物資支援を取り付ける事も出来たはずであった。
そう、数ヶ月前にイドバーン祭司が暴走し、レイユーズ公爵領内の資金源である貿易都市を滅ぼしさらにアレイクード公爵と戦い殲滅させられていなければ・・・・・・。

レイユーズ公爵の中には一切の愛国心は存在していなかったが、それでも今回のクライアントである宗主国インフェルノの打診を通す事は、無理がありすぎた。
その事が、レイユーズ公爵が領内よりずっと頭を悩ませる一因であった。
あまりにも強く会議で言い過ぎれば、自らの進退を危うくしてしまう可能性もある。
それに、最初は計略で婚約をしただけの妻であるルフィンをレイユーズは愛してしまっていた。
ルフィンは現在、二人目を生んでからずっと体調が悪く動かす事の出来ない状態が続いている。
そして、レイユーズ公爵の中では宗主国インフェルノとの決別も少しづつ視野に入れていた。

そう、自分の家族を守るために・・・・・・。

「お父様っ！」

フィンナの大きな声で、レイユーズは現実に戻された。
かなりの時間、考え込んでいたようであった。
娘のフィンナはかなりの剣幕で怒っている。
馬車の窓から表を見るとどうやら、城下町を走っており王宮へ向かっているようであった。
レイユーズ公爵の娘のフィンナも、久しぶりに通る城下町が気になったのか外を見ている。
いつも屋敷の中にいるからか、めずらしいのだろう。
顔を見る限り機嫌は直っているようであった。
「まったく、ルフィンに似て喜怒哀楽が激しいな」
そう呟きつつ、レイユーズは如何にして王宮会議をうまく立ち回るかを考えていた。

王宮への召集を受け、レイユーズ公爵の到着から二日後、アレイクード公爵が率いる従軍がイースバールの城下門外、避難民が集ってる場所に到着していた。
従軍と言うのは、その規模であった。
数は見渡す限り数千、否。１万に達しよう。

「思ったとおりだったな。クレイネル！」

名前を呼ばれると、白い法衣をビシッと着込んだクレイネルがアレイクード公爵の下へ向かってくる。

「はい、やはり先の大戦と同じように避難民が多数流れてきてるようですな。大量の物資を確保しておいて正解でしたな」

その言葉に、アレイは頷くと城下町へ入る門へ目線を走らせる。
そして、エメラスに合図し、近くに来るのにと同時にクレイネルへ後は任せるとばかりに口を開く。

「クレイネル、俺は先に王宮にエメラスと二人で出向く。後の事は任せたぞ」

そう言うと、アレイとエメラスは徒歩で城下へ続く門を向かう。
それを慌てて従者が引き止める。
いくらなんでも、王宮に向かうのに公爵が歩きで城下を闊歩するなど考えられないからだ。
むしろ、常識では有り得ない。
だが、さらに従者と避難に集っていた他国の国民をも驚かせる発言

が飛び出した。

「今、一番馬車を必要としているのは病気などで身動きが取れない避難してきている者ではないのか？俺には、必要ないし王宮に行くだけなら歩ける足がある」

それでも、従者は反論しようとしていたがエメラスが首を振り、無理ですよと従者に教える。

「そうですな。若いうちの苦労は死んでもしろと言いますしな」

死んだら苦労出来ないジャンと正美がこの場にいたら突っ込みを入れていただろう。

クレイネルが従者を納得させている間に、アレイとエメラスは二人で城下町へ通じる門を通過してしまっていた。

「クレイネル様、公爵様とメイドのお二人だけで王宮に行かせてしまっていいのでしょうか？」

恐る恐ると言った感じで従者は、クレイネルの顔色を伺いながらも聞いてくる。

その様子に、クレイネルは少し思案した後、従者に意地悪ぽく言った。

「そうじゃな。幻獣王クラスが出てこない限りあの二人を何とかする事は出来んじゃろうな」

その言葉に、従者は「へっ？」と言いながら呆け、それを見てクレイネルは苦笑しながらも指示を出していく。

する事はたくさんある。
アレイクード公爵内の全ての都市、町、村には避難民の受け入れをするように打診しており、その用意もここ１０年ほどで完璧に済ませてある。
はっきり言えば、一国丸ごと避難民が来ても受け入れる程の準備をしてきたのであった。
そして、それは幼少期にクレイネルが悲惨な体験をしてきたからであり、民を守る事を最優先にしてきたアレイクードの父と共に進めてきた結果でもある。
これから、避難民はもっと増えてくる。
それを如何に処理し振り分けるかはどんな学問より難題であろう。
だからこそ、クレイネル以外がこの仕事をこなす事は出来ないだろう。

「さて、始めるかのう」

クレイネルは、そう言うとすでに受付を開始しているテントへ歩を進めた。

王宮での一コマ

城下町へ入った二人は、レイユーズ公爵が通った王宮まで続く石畳の道を、歩いている。
レイユーズ公爵達が通った時に、開いていた多くの商店などはここ二日の間に出された伝達により閉まっており、通りは閑散としていた。
そして、アレイは、人の姿が疎らな通りを見て眉を潜めていた。
それに気がついたエメラスは、通りを見てある事に気がつく。

「アレイ様、城下町に配備されている兵士の数が常時より少ないです。」

そう、他国同士の戦争とは言え、いつ戦時になるか分からない現時点で常時より配備されてる兵士が少ないと言うのは明らかにおかしい。
それに先ほどから疎らとはいえ、見かけるのは女性や老人そして子供ばかりであった。

「ああ、嫌な予感がする。まさかとは思うが・・・・・・。」

その頃、アレイクード公爵より二日前に到着していたレイユーズ公爵は、会議を行う前に少しでも有利な状況下を築こうと画策し水面下で動き回っていた。
そして、そのために多額の賄賂も持参していたが・・・・・・。
今、レイユーズ公爵が宛がわれた部屋で、苛立ちを隠さない、いや、隠す事が出来ない程の衝撃を受けていた。
自らが、賄賂を贈っていた重鎮が軒並みに不審な死を遂げており、

聞いた事も無い名前の者達がその役についていたからであった。

そして、裏に手を回して手に入れた書類が部屋に設置されていたテーブルの上に広げられていた。
そこには、こう書かれていた。

女神を信仰する国家レイゲンへ戦を仕掛け、領土を拡大を新国王が画策していると・・・・・・。
前国王は何者かの手によって崩御しており第一王子が国王になっていると書いてある。
さらに、怪しい者を何人も抱えており何かを行っているとも書いてあり、すぐにでも王都よりの脱出を優先するようにとも報告がされている。

レイユーズ公爵でなくとも、国王が不審な死を遂げさらに重鎮もその後を追い、国王が代わった途端に戦争を始めるなど、どう見ても毒殺して王位を奪いましたとしか思えない。さらに国王が崩御し新国王になった情報すら公爵へ届けられていない。
つまり、公爵家が軽んじられていると言っても間違いではい。
いや、むしろ、公爵家が干渉してきた際、問題の発覚を抑えるために秘密裏に事を進めたと言う所だろうか？
それにレイユーズにとって、女神を信仰する国家レイゲンへの宣戦布告は、宗主国インフェルノとレイゲンを同時に攻略している軍事国家レクイエムへの援護になりかねない為、それも頭が痛い課題であった。
今は、自分の力が及ぶ王宮内の重鎮が軒並み暗殺された以上、何とかして戦争を回避しなければならない。

「まったく、民を引き合いに出して戦争回避を訴えるなど、ガラではないのだがな」

レイユーズは、アレイクード公爵が王宮へ到着した事を使いの者から聞くと、これから始まる王宮会議へ向けて部屋を後にした。

一方、王宮へ到着したアレイクード公爵とエメラスは王宮内の回廊を歩きながらも不信感を募らせていた。

「やはりおかしいな」

「はい、王宮内とは言えど警備の者が少なすぎます。それに、王宮十使徒の気配も感じません」

王を守る、最高守護隊王宮十使徒すら居ないと言うのは明らかにおかしい。
そこまで考えた所で、そのシリアスな空気（ムード）を壊すように、一人の女性が駆け寄ってきて、アレイに抱きついた。

「アーくん、ずいぶんと男らしく育ったわね！」

その女性は、紫色の腰まである髪を背中で束ねて露出の高い青いドレスを着ている。
アレイは、抱きついてる女性を拳を握り締めてボディを殴りつけ、女性がお腹を抑えてる間に引き剥がして廊下に打ち捨てた。

「いったーい、何するの？子供埋めなくなったら責任取れるの？ねー。ねー。」

女性が、豊満な胸を強調するようにアレイに近づいていく。

それをアレイは避けずに、顔を殴りつけた。
その反動で女性が壁まで吹き飛ぶ。

「ひど！アーくん。ひどいよ！お父様にも殴られたことないのに！」

「うるさい！ヴェルド。いい加減、女の格好するのをやめろ！」

ヴェルドと呼ばれた女性？は立ち上がると殴られた頬を押さえながら笑う。

「残念ね！アーくん。私のコレは魔法で女性になってるのよ！つまり正真正銘の女性って事なの！わ・か・る？てへ」

ビキッという音が聞こえてくると同時に、ヴェルドが吹き飛び大理石の壁にめり込む。
そして、何事も無かったかのようにヴェルドが大理石の壁から這い出してきた。
それを見て、アレイは盛大な溜息をつき、突っ込みを入れる。

「ったく、大理石の壁に頭から突っ込んで、無傷のくせに正真正銘の女性なの～は無理があるんじゃないか？それより、ヴェルド。お前も一応公爵ならそれなりの格好をしろ。」

アレイの言ってる事は至極まっとうな意見であったが、女装癖のあるヴェルドには意味がなかった。

「アーくん。失礼ね！私は体は男だったけど、心は女なのよ！ヴェルドじゃなくてベルって呼んでね。その方がかわいいし。」

よく分からない言い回しをしながら、ヴェルドは体をくねらせてい

る。

「だから、そう言う事をするなと言ってるんだが・・・・・・。」

違う意味でアレイは疲れを感じていた。

まったくどうして、俺の同世代の公爵家の連中は変な奴が多いんだ。

その変な連中の中にレイユーズ公爵の娘も含まれていた。

アレイが、ヴェルドを殴るのを我慢していると誰かがアレイの肩を軽く叩いてきた。

こういう叩き方をする奴は一人しかいない。

「まったく、ベルカストールまで来るとはな」

アレイは肩を叩いてきた張本人を見るために振り返ると１０歳くらいの女の子が宙に浮いていた。

そして、アレイと目を合わせるとニッコリと笑う。

それはまるで天使のような微笑であった。

そう、ベルカストールという公爵を知らない人から見れば・・・・・。

「アレイ、お前相変わらず領地運営のために引き篭もりしてるのか？もう少し他人と交流持たないと友達できないぞ」

そう、この天使のような微笑を持つベルカストール公爵は毒舌であった。

「ベルカストールなんて友達のとの文字もないじゃないの？」

横から、ヴェルドは、ベルカストールに突っ込みを入れるがその問

いにニッコリとベルカストールは笑う。

「女装癖の変態の対人恐怖症の女性恐怖症の年間ＴＯＰを独占してるゴミルドに言われたくないな」

クハッ、という何かを吐血した声を吐き出してヴェルドが床に土下座ポーズを行った。
かなりの精神的ダメージを負った？ようだ。

その不毛な会話に釘を刺したのはエメラスであった。

「三方ともそろそろ会議の時間のようです。急ぎましょう。」

エメラスを先頭に、アレイ、ベルカストールの順に続き、その場から離れるとヴェルドも急いでアレイ達の後を追った。

王宮会議

「アーくん。」

ヴェルドが小さい声で、アレイクードへ話しかけた。
アレイがそれに反応し、振り向こうとすると、「振り向かないで聞いて！」と小さめながらも強い口調で注意される。
注意してきた声色が先ほどまでの砕けた物から真剣な眼差しに反映されるように緊張した雰囲気に包まれていた。
アレイもそれを察し、先ほどまでのは芝居だったのかと自分を納得させた。

「分かった。それで何かあるのか？」

アレイが、ヴェルドの声の大きさに合わせて話の先を促す。

「うん、今ね王宮は、第一王子が黒いローブを着た男に誑かされて王を毒殺し仕えていた重鎮を暗殺して得体の知れない連中を王国の主な役職につけたの」

その話にアレイは耳を傾けているが、内心では信じられないと言った心持ちであった。
馬鹿と評判であったが、第一王子のファルウェルは少なくとも父であるファルナーク王を尊敬しており毒殺を企てるような人柄では無かった。

「どういう事だ？何かに操られているのか？」

そう、一番分かりやすいのは催眠、暗示などで自我を操作され毒殺

に及ぶというのが一番確率が高い。が

「ううん、分かんない。特に何かに操られてるとかそういった感じは受けなかったけど・・・・・・。」

ヴェルドは自信なさげに声を窄めてしまう。
そして横から、ベルカストールが話に混ざってくる。

「アレイ、ヴェルド。今、沈黙魔法を展開した。声だけを通さない優れものだ。これで話を聞かれることはない。」

それに、ヴェルドは安心すると歩きながら話を再開する。

「でもね、アーくん。今回の侯爵以上の召集は罠だと思うの。だって、侯爵以上と詠っているのに実際集ってるのは私達とレイユーズだけだもの」

たしかに罠という線は捨て切れないが、三侯爵とエメラスを止める為には王宮十使徒の力を持ってしても不可能と言わざるえない。
それなのに、王宮には十使徒どころか、兵士の数も疎らである。
これでは、自分達を止めることなど、到底・・・・・・。
そこまで、アレイクードが考えた所で、ハッと気がつく。

「エメラス、ヴェルド、ベルカストール。今回の召集は間違いなく罠だ。」

アレイクードの言葉に、三人は怪訝な顔をする。
自分達を止めることなど、不可能に近いからだが。
それを察した、アレイが言葉を続ける。

「狙いは俺達じゃない。俺達の領民を人質に交渉をしてくるつもりだ。」

その言葉に三人とも驚きを隠せずにいる。

まさか、自国の民を人質に交渉などするほど愚かな王がいるはずが・・・・・・。

だが、本来居るはずの王宮守護隊そして、常備より遥かに少ない兵士の数など不審な点を上げていくとそれだけの戦力をどこで必要とするのか？となる。

つまり、今回の召集は名ばかりの話合いではなく一方的な命令の場となる可能性が非常に高いと言う事になる

「だが、これはあくまで俺の推論。まさか自国民を人質に交渉するほど愚かでないと思いたいな」

アレイが最後にそう締めくくると、高さ３ｍほどの会議堂の扉の前に立つ。

扉の両脇に控えていた兵士が扉を左右に開けると中へ入る。

会議堂はかなり広く、レイユーズ公爵を含め、１０人ほどの見たこともない人間が本来、重鎮が座っているはずの席についている。

そしてそれを見た途端、アレイを含めの残り二人の公爵も先ほどまでのだらけた雰囲気から一転し荘厳な空気を纏った公爵として席についたのだった。

胎動

エルハンス王国の会議堂はとても広く作られている。
それは、軍事・政治など多くの高官との意見が交わせるようにと、初代の国王が命じて作らせたからである。
しかし、今、この場にいるのは、アレイクード公爵を含む四公と名も顔も知らぬ１２人の人間が会議堂に存在していた。

これだけの人数で、国のこれからの将来を決めるなど本来はあっては成らないはずなのだが・・・・・・・。
緊張感を孕んだ空気の中に扉を開けて一人の男が入ってくる。

アレイがそちらへ視線だけを移すと、黒いフードで顔を隠し本来、王族が立つ位置まで進むとアレイと他の三公を見て口元を歪めていた。

「貴公は、何故その位置に立っているのかね？」

いつの間にか、男に戻っているヴェルドの冷ややかな声が会議堂に響く。
その声にフードで顔を隠していた者は反応せずに、ローブの中から３０ｃｍ程の丸い鉄球を取り出し台の上に固定する。
そして、男はヴェルドの方を見るとフードを取り払った。
髪はブロンド、年齢は２０歳前後、多少掘りは深いが何度見ても忘れてしまうほど特徴の無い顔であった。
そう、特徴が無いのが特徴と言えば良いだろうか？

男は、顔を愉快そうに歪めるとヴェルドの言葉に応じずにどこか物語りを語るように話だした。

その頃、アレイクード公爵邸では戦争が始まった事に対して、アレイクード、お目付け役のエメラス、クレイネルが不在になった為に正美は自由に羽を伸ばしていた。
今は、元の世界へ帰るために黎明庫で由香里と一緒に書物を読み漁ってる所であった。
正美が文字が読めるのも、エメラスの徹底した花嫁教育の産物であるが・・・・・・。
それでも個々１００年ほどの文字しか読めない為に、読めない書物にスルーしていく。

「それにしても、中々元の世界に戻る方法が書いてある書物がないよな」

正美の男言葉も解禁されている。
由香里も最初は、正美の男言葉に驚いていたが気にしない事にしていた。
自身にもすでに時間が無く、些細な事を気にしてる場合ではないからだ。
由香里が情報収集を開始する前に、戦争の事で館の警備が手薄になった事や正美の異世界から来たと言う話から、黎明庫の話を出していた。
黎明庫ならば、元の世界へ帰る方法もあるかもしれないと・・・・・・。

その話に、最初は正美はしっくりと来ていなかったが、巷では誰でも知ってますよ?とそんな言葉に、ああそうなのか?と引き篭り気味な正美は由香里にあっさりと言い包められてしまっていた。

そして、そんな二人を本来止めないといけない役周りの副メイド長のエルフィーナは主が不在中に届く書簡の中で重要機密以外の物資や人材派遣などの書類を代行して処理していた為、執務室から出る事は出来ないでいた。

イリシアと言えば、手練の使い手であるメイドや執事達がアレイクード公爵と同行している為に、人手不足である館の中を駆け回って仕事をこなしている。

つまり、由香里とパーティを組んでいるガイアス達が襲撃を掛けるには打ってつけのチャンスなのだが、情が移ってしまっている正美を仲間と館の警備の者達の戦闘に巻き込みたくない由香里は仲間からの打診を断っている状態であった。
それでも、今日中に見つける事が出来ないのならば、今日の深夜には襲撃を実行に移すと打診が来ている。

「ないですね」

正美の言葉に相槌を打ちながらも、自身の指に嵌めている指輪である原書（オリジン）を前方に翳し反応がないか確認していく。
反応が芳しくない事から、由香里が苛立っていると離れた所にいた正美が驚いたような声をあげた。
由香里は思わず、そちらへ駆け寄り指輪を翳すが反応は無かった事にガッカリしながらも正美が広げた書物に目を通した。
その文字は、由香里がこの世界に来てから見た文字とは違っており、読み解く事は出来なかったが・・・・・・。

正美はその文字を見て、驚いていた。
なんでだ？この文字だけは分かる。

そう、この文字は・・・・・・。
正美は無意識の内に、物語を読み始めた。

それを聞いた、由香里はそれほど気にはしていなかったが、少し休憩も兼ねて正美が読む物語に耳を傾けるために近くの床に腰を落とした。
そして、巨大な図書館の中に声が鳴り響き始めた。

「遥か昔、この世界は何もありませんでした。空も大地も空気も人も動物も植物も何も存在しませんでした。」

「けれど、長い長い年月の果てに、異界から来た翼を持つ者がこの世界に一つの種子を放ちます。」

「その種子は長い年月を経て、世界に魔術の根源たる力を広げて行きました。」

「さらに月日が経ち、世界の根源たる力は正と負の力に分かれます。正は神々に成り、負は幻獣に成りました。」

「神々と幻獣は互いに力を合わせ、一つの大陸を作ります。そして、その大陸を支えるかのように幻獣は柱となりて、大陸を支え、神々は自らの力を振るい多くの生物を作りだしました。」

「最初に作り出したのは巨人でした。それは作り出した世界を理想の形にするために。次に作り出したるは知恵と優しさを備え自然を愛するエルフです。次に作り出したのは創造を司るドワーフでした。そして神々は最後に、世界を守護するために協調性と探究心を持つ人間を作り出します。」

「長い長い年月をかけ、巨人とエルフとドワーフと人々は互いに力を合わせ大陸を緑多き楽園へと変えました。」

「そしてある時、世界を脅かす者が現れました。翼をもつ４人の男は不可視な力を使い、多くの命を無作為に奪い楽園を自らのモノにしようとしました。」

「世界は数多の犠牲を払い、異界から来た翼を持つ者を退ける事に成功しました。ですが多くの犠牲も払ってしまいます。」

「世界の根源たる創世の種子がその戦いの最中に消滅してしまったのです。」

「そして・・・・・・」

由香里が、そこまで聞いた所で正美が床に倒れこむ。
急いで正美を抱き上げるとアレイと弱弱しく言葉を発しながら正美は閉じた瞼から涙を流していた。

同時刻　エルハンス王国歴　２１１年７月１１日　ＰＭ１７時

王都イースバールは巨大な閃光と爆発により大陸の版図から消滅した。

襲撃

「正美様！」

名前を呼びながらも由香里が何度も、正美の体を揺するが苦悶の呻きを上げ聞きなれない言葉を発してるだけで目を覚ます気配がなかった。

その頃、アレイクード公爵を5時間後に襲撃する手はずを取っていたガイアスを含む4人はアレイクード公爵邸を近くの岩場に身を隠しながら様子を伺っていた。
そこで一人の男がガイアスに声を発した。

「なぁ、なんで由香里は俺達が襲撃するって事に対して反対するんだ？何か予想外の事態があったのか？」

男は言うのは尤もな意見であった。
ここ一年、由香里が元の世界へ帰るために取った手段は、狂気に近いものがあった。
殺し合いも何もない日本人が、異世界で、しかも冒険者の中で最高ランクのSランクになる為には、それなりの事をする必要がある。

そして、今、ここにいる4人は一分でも一秒でも元の世界へ帰りたいと言っていた由香里を知っている。
だからこそ、元の世界へ戻る術が書かれている可能性が高い始原原書（アノ）を手に入れる為の襲撃を延期している由香里に疑問を抱いたのであった。

その二人の会話を遮る者がいた。

「待って、ガイアス、イスピル。」

「どうしたんだ?リメラ」

フードを深く被っていた、リメラと呼ばれた者がフードを取り払う。
年齢は２５歳くらいだろうか?白い肌に金色のストレートの髪、そして両目は青と茶色のオッドアイである。
町を歩けば同性でも振り向くほどの美人である。
だが、ガイアスとイスピルはその事に、特に反応せずにリメラが魔術を発動させるのを待っている。

「ガイアス、まずいわ。何だか分からないけど、禍々しいモノが多数、私達の方に近づいてきてるわ。」

ガイアスは、リメラの話を聞きながらも自分達と背後にはアレイクード公爵邸があることに気がつく。

「リメラ、恐らくだが、そのお客さん達は俺達じゃなくて公爵邸を狙って来てるかも知れないな」

「おいおい、ガイアス、いくら普段より警備が手薄とは言え、公爵邸を襲うってのは俺達以外には考えられ「ウーネイ、リメラすぐに気配消しと姿を一時的に隠す術を展開しろ!急げ!」

イスピルが言い終わる前に、ガイアスが自分達の前方を見ながら指示を出す。
その危機的な言葉にウーネイと呼ばれた男が、気配消しの術を展開

し、姿を一時的に知覚出来なくする術をリメラが展開する。
そして、その直後、ガイアスだけでなく、歴戦の冒険者であるイスピル、魔流術師であるリメラ、高位神官のウーネイまでもが息を呑んだ。

見渡す限り、そう、大地を黒く染め上げるような大群が４人の視界に入ってきたからだ。

「おい、おい、おい。な、な、なんなんだよ、あれは!?。一体なんなんだよ!?」

イスピルが、驚き体を硬直させたまま、その言葉だけを言い切った。
リメラは何も反応を示さない、恐らく、現実離れした光景に頭の処理が追いついてないのだろう。
そして・・・・・・。
ウーネイと呼ばれた者が腰を抜かしてその場に座りこむ。
そして、恐怖が張り付いた顔でガイアスと二人に聞こえるように声を絞り出した

「ガ、ガイアス。あ、あれは、闇の魔人ジェードだ」

闇の魔人ジェード。その噂は、ガイアスも聞いた事があった。
数百年前に実在した、不死身にして冷酷な殺戮者である魔人。
女神信仰国家レイゲンの清教徒騎士団を１００年以上に渡り１万人以上惨殺した魔人と・・・・・・。
一人の魔人ですら、それだけの被害が出て結局、倒す事が出来なかったと聞かされていた。
そして、冒険者協会では、魔人ジェードと会った場合、即逃げるようにと最初に教育を受ける。
だが、実際、教育と実践はまったくの別物だ。

事実、ガイアス以外は放心状態に陥ってしまっている。
だが、放心していたのが良かったのか、気配と姿を隠していたからなのか、黒の魔人ジェードは全て、ガイアス達を通り過ぎアレイクード公爵邸へ向かっていく。
それを、見てるだけしか出来ない４人は自然と理解した。
アレイクード公爵邸は、いや、自分達を含めエルハンス王国は終わると・・・・・・。

そして、闇の魔人ジェードが公爵邸へ向かう、光景を見ていたローブを纏った男は愉快そうに笑っていた。
その男は、エルハンス王国の王宮にいた男であった。
そして正美が見れば分かってただろう、ジェードを作り出した男であることに・・・・・・。

「ククククッ、我が主が警戒する化け物があの館にいるとは思えませんがこれだけの数を向かわせれば十分でしょう。」

男がそこまで言い切ると、数万に及ぶジェードが公爵邸の壁を抜ける前に全て弾かれ吹き飛んだのであった。

「バカな!?」

男が、驚くと同時にアレイクード公爵邸の屋根の上には、臨戦態勢の幻獣王ルアカーゼが小さい体で、ちょこんと座って男を見下し、男が先ほど取った仕草を真似るように愉快そうに笑っていた。

幻獣王ルアカーゼ

魔人と恐れられ、冒険者達の恐怖の象徴となっている魔人が木の葉のように舞い散る。
そしてその都度、地面には赤黒い血痕が刻まれていく。

すでに、アレイクード公爵邸を護衛する兵士だけではなく、館に勤める人間が全てがその光景を目の辺りにしている。
多くの人間が、吹き荒れる竜巻そして降り落ちる氷槍を驚愕の眼差しで見ていた。
そして、その中にはエルフィーナとイリシアも含まれていた。
イリシアはこの一方的な殺戮が始まった直後、ルアカーゼが館を守るために戦闘に入ったと一瞬で悟っていた。
そして、すぐにエルフィーナの詰める執務室に飛び込む。

「エルフィーナお姉さま！」

イリシアが飛び込み、声を上げるとすでにエルフィーナは執務室の窓から外で起きてる光景を椅子から立ち上がり見ていた。
エルフィーナはイリシアの声に反応し、目線だけをイリシアに向けた。

「イリシア、今、正美様はどうしてるの？」

そう、正美を常に護衛しているのが幻獣王ルアカーゼだからこそ、冒険者と二人きりにしていたのだ。
そのルアカーゼが矢面に立っていると言う事は護衛が居ない状況に置かれている。
もし、アレイクード公爵が不在の時に、正美の身に何かあれば取り

返しのつかない失態となる。
だからこそ、エルフィーナは正美が今、どこで、何をしているのかイリシアに確認をしたのだが・・・・・・。

「はい、今、部屋を見てきたのですが、不在でした。おそらく館の中を歩き回ってるかと思います。」

そのイリシアの回答に、エルフィーナは立ちくらみを覚えた。
いくら、人手が足りないとは言え、正美の護衛を冒険者風情一人に任せる形になっているからだ。
エルフィーナが、館に残ってる人間を使い、正美を探すように指示を出そうとした所で、由香里が正美を背中に抱えたまま執務室に入ってきた。

それを見た途端に、エルフィーナは安堵の表情を浮かべたがすぐに表情を硬くする。
正美の顔色が真っ白になっており、生気をほとんど感じる事が出来ないからだ。
イリシアもそれに気がつき、執務室に備え付けてあるソファーに正美を寝かせるのを手伝う。

エルフィーナは、顔色を真っ青にしながらも、この場にクレイネルが居ない事を恨みつつ、由香里に事の顛末を聞くが、地下にある黎明庫で調べ物をしている時に、突然倒れた以外にはこれと言った理由を聞き出す事が出来なかった。
父である、クレイネルが医療術を使っていたのを見ていたエルフィーナは、肉体の細胞を活性化させ回復を促す治療術を展開するが全ての術が正美に浸透する前に消えてしまう。

「っつ！一体どうなってるの？なんで、回復術を受け付けないのよ

？」

すでに、正美の顔は死人のようになっており息をしているのが不思議な状態であった。

そして、アレイクード公爵邸の外での戦いはすでに一区切りを迎えようとしていた。

ルアカーゼは館の屋根上に座りながら館全域を防御結界術でドーム状に覆い魔人を寄せつげずに、一方的に竜巻を引き起こし、それにより発生するダウンバーストと雷そして氷槍にて魔人達を殲滅していた。

結果は、魔人シェード数万の大部隊は何も出来ずに一方的に惨殺されたと言って過言はない。

だが、実際、そんな事が出来る人間がいるのかと言えば全員がＮｏと言うだろう。

事実、ルアカーゼが魔術を展開し一方的な殺戮をしていた範囲の外から見ていたガイアス達は、数万の魔人を見た時以上のショックを受けているのか全員が立ったまま呆けている。

そして、それはローブを来て笑っていた男も例外ではなかった。

「ば、ばかな。た、たった数分で私が、数百年も実験を重ねて完成させ王都の人間達を素材に作った最高の人形が結界ごときに殲滅させられたと言うのか?そ、そんな馬鹿な事があっていいわけが・・・・。」

そう、ルアカーゼは一切姿を現さずに魔術のみで一方的に殺戮を行ったため、クレイネルが館を出る時に敷いた結界と男は誤認していたのだった。
恐らく、ルアカーゼが最初から姿を現しておけば適度に注意を引きつつ逃げていただろう。
だが、結界という固定的なトラップと誤認してしまったからこそ、逃亡という道を男は閉ざしてしまっていた。

ブッ。

と言う音が男の耳に聞こえてきた途端に、男の視界が上下逆さまになる。
そして、ルアカーゼが咥えた頭を其のまま咥えていると男が驚愕の眼差しで喚き始める。

「な、何者だ、貴様！私を誰だと思って・・・・・・・（グシャッ）」

男が途中で何かを話す前に、１０m程の白狼（シルバーウルフ）に変化したルアカーゼは男を噛み潰すがそれが霧となり、切り離された胴体と一体化し、元通りに戻る。
そして、男はルアカーゼを見ると少し驚く。

「ほう、まさか絶滅していたと思っていた月の狼の一族が残っていたとは。さすがは、大陸最強と名を馳せた邪魔者（クレイネル）だけの事はありますね、こんな化け物を使役していたとは・・・・・・・。ですが、ご主人様亡き後、生きてても仕方ないでしょう？このエウルレイス様が引導を渡してあげましょう。貴方のご主人様や王都を消した方法と同じやり方でね！」

エウルレイスと名乗った男が、服の中から黒い鉄球を取り出しそれを宙に投げ術式を展開する。
同時に鉄球が共振し、周りの空間を喰らいつくし始める。

「この鉄球はですね、周りの空間を喰らいつくしこの世界を構成している物質とはまったく異なる物質をを作り出してそれを既存の周囲にある物質に混ざり合わせる事で莫大的なエネルギーを生むんですよ。このくらいの大きさの物でも、王都一つを潰すのは訳がないんですよ！分かりますか？理解出来ないでしょう？確かに月の狼は神の眷属で気象を操るとは聞いていましたが、これだけの力を保有していても貴方如きではこれを止める事は出来ないでしょう？
私の可愛い、人形達を壊した償いは貴方が守ろうとした館ごと消滅して償ってください・・・・・・。ククククク」

そして、エウルレイスが、大声で笑い始めた途端に、世界を光が埋め尽くし其のまま何事も無く消え去った。

「い、一体どういう事ですか？」

起きるはずの爆発が起きない事に、エウルレイスが狼狽する。
そして、先ほどルアカーゼが居た所に目線を移すが、すでにそこには、ルアカーゼの姿は存在していなかった。

『くだらん手品だな』

圧倒的な死という圧力（プレッシャー）が、声に乗せられ空から降り注ぐ。

そう、全ての生きとし生けるもの全てに・・・・・・。

そして、その空に滞空するルアカーゼを、エウルレイスは驚愕を含んだ表情で自失呆然と呟いた。

「げ、幻獣王ルアカーゼが・・・・・・な、なぜ、ここに・・・・・・」

戦いの終局

アレイクード公爵邸の上空に鎮座している巨大な姿は畏怖と同時に絶対的な死を連想させる。
エウルレイス以外は、上空を直視する事すら出来ずに空から降って来る声に体の自由を奪われていた。

「何故!何故!?何故こんな所に幻獣王がいるのですか?」

エウルレイスは、信じられないと言った表情でルアカーゼを見上げている。
そして、狼狽しきっているエウルレイスを嘲笑うかのように空から声が降り落ちる。

「そのような問いかけを我にしてきても、貴様の死は変わらんぞ?我が主の身を狙いに来た償いはしてもらおう。貴様の命でな」

その言葉に、エウルレイスが瞳を限界まで見開く。

「主?幻獣王とも在ろう者が使役されているのですか?それほどの化け物が此処にいるので・・・・・・」

言葉の途中で、エウルレイスが大地に叩きつけられる。
その際に、叩きつけられた場所を中心に大地が割れ、深さ3mほどのクレーターとなる。

「我が主の愚弄は許さん、貴様を逃がす気もないがな。先ほど、貴様は面白い事を言っていたな?王都を破壊したと、貴様は誰の命令で動いている?」

一体、どれほどの力の差が、私と幻獣王の間にあると言うのだ・・・・・。

エウルレイスが、疑問に思う事は仕方の無い事であった。
何せ、ルアカーゼはまだ、何の攻撃すらして来ていないからだ。

殺気、そう只、貴様を殺すといった意思だけで大地を砕きエウルレイスを地面に這い蹲らせている。
そして、突如エウルレイスの右腕が吹き飛び塵と化す。
信じられないと言った顔つきで右肩口を見る。
エウルレイスの体は、どのような事があっても塵まで分解しても再生するように作られている。
それが一切、再生する気配を見せない。
それがどれほど異常な事か・・・・・・。

「少しは話す気になったか？矮小なる存在よ。そしてこれが本来の対消滅だ。貴様がさっき使ったモノとは次元が違うというのが理解出来るか？」

エウルレイスにも、ルアカーゼの言ってる事は理解できる。
が、理解は出来ても信じられないと言うのがその顔から考察する事が出来た。
だが、確実に一つ分かる事があった。
それは、戦うどころか逃げる事すら不可能だという事。
本来ならば、想定外どころか計画を根底から覆すほどのイレギュラーが出てきた時点で主へ報告に戻らないと行けない訳なのだがそれすら許されない。
ならば・・・・・・。

「ええ、理解出来ました。そして・・・・・・」

エウルレイスを構成していた精霊力が共振し、世界を構成する魔力と融合し魔力の溶鉱炉となり全てを飲み干そうと暴走を始める。

「ルアカーゼ、貴方だけでも道連れにしていきます」

そう告げた後、エウルレイスの体が分解し周囲を喰らい始める。
それをルアカーゼは面白く無さそうに見て、片腕を振るい暴走を始めた周囲の空間ごと削り取り消滅させた。

「くだらんな。こんなゴミが我が主に手を出そうなどとは。なんだと？」

契約が消失しかけてる事に驚いたルアカーゼが一瞬で、その場から消え去る。

ーアレイクード公爵邸　執務室ー

「なんで？なんでなの？なんで治療術が一切、効かないの？なんでなの？」

涙で顔を腫らしながらエルフィーナは、クレイネルに習ったあらゆる治療術を施していた。
それが一切効かず、最初の頃に蒼白だった正美の顔が土気色になっていた。
すでに呼吸も絶え絶えになっている。

その痛々しい姿に、イリシアも声を上げる事が出来ずにいた。
そこに、小動物サイズになったルアカーゼが何もない空間から現れた。

「ご主人たま！」

ルアカーゼが、走ってソファーの上に寝かされていた正美の近くに近寄るが同時に、契約が解除されてしまう。
そして、エルフィーナが握っていた正美の手もエルフィーナの手からすり抜けてソファーの上に力無く落ちた。

「ご主人たま！？」

「そ、そんな・・・・・・。なんで？何ですか？なんでこんな事が・・・・・・。」

由香里も、正美が死んだ事にショックを受けて執務室の床の上に座り込む。

執務室の中には、ルアカーゼの主を呼ぶ声が響き渡っていた。

戦いの終局（後書き）

正美）あれ？何か俺、死んでないか？
一応主人公なのに？
主人公が死んで物語続くのか？おーい。作者！どうなんだ？
作者）次回からは、由香里の幻想冒険がスタートしますミ☆
由香里）そんな話聞いてませんよ！？
作者）だって言って無いから．．．．．。
ルアカーゼ）ネタが無くなったからって主を殺したなら作者貴様を（ガルル
作者）ひっ！そ、そんな事ないですよ。きちんと考えて計算してるはず？
フィーナ）あらあら、そんなに攻めたら可愛そうですよ～。
エルフィーナ）お母さん！？なんでここに？
フィーナ）なんとなく？
作者）まって、フィーナ。貴女が出てくるのはまだ、さ（ｒｙ
正美）だからー。主人公どうなっちゃうのー？

真実と虚像

俺の意識が、際限なく深い場所へ向かって、どこまでも落ちていく。
その都度、俺に誰かが語りかけてくる気がするが、意識が朦朧としてて感じ取る事が出来ない。
少しづつ、自らの存在が、消えていくのが分かる。

そのうち、チャンネルが切り替わるように、異世界の記憶を遡っていき、次々と記憶が現れては消えていく。
大学を卒業してからの記憶が現れ、それが消え、高校時代の俺が現れそれも消える。

そして、しばらくすると腰まである黒い髪の5歳くらいの少女が突然、俺の前に現れた。
少女は、今にも泣きそうな瞳で俺を見ると、俺から距離をおいて走っていく。

「お、おい。一体は誰なんだ?それにここはどこなんだ?」

突然、俺は意識がはっきりし周囲を見渡す事が出来た。
そこはまるで、そう俺が最初、この異世界に飛ばされて来た場所であった。
只一つ違う事は、今回は俺だけではなく子供が二人仲良く草原に座って話しをしていた。

一人は赤い髪に、現代日本に合わないような服を着ている男の子だった。
そして、もう一人は先ほどの少女がサマードレスを来て座って話を

している。

二人の真横にいるのに、その会話がまったく耳に入ってこない。
分かる事は、この少女と少年はとても仲がいいと言う事が分かる。
距離としては１mにも満たないのに俺にまったく気がついた様子もなく二人は話を続けている。

そこで少年が時を止めたように凍りつき停止した。
そして少女が、突然俺の方を振り返った。

「正美、ようやく、貴女に会えたわね。」

少女が俺の方を見て笑う。
それはとても楽しそうに。
だが、俺は素直に微笑み返す事は出来なかった。
そう、例えるならば何か、大事な物事がこれから告げられるような感じを受けているだった。
それでも、何かを問わなければ先に進めないと言うのは本能が理解した。
そう、ここにこれ以上いたら取り戻せなくなるという感覚。

「お、お前は一体誰なんだ?そ、それに一体俺はどうなったんだ?、ここは一体どこなんだ?」

俺自身、最後に記憶が残ってるのは黎明庫で本を読んでる所までだ。
その後の記憶が一切ない。
脈絡もなくこんな世界に放り出され、すでに俺は精神的に余裕がなかった。
どんな情報でもほしかった。そして・・・・・。そんな俺の様子と矢継ぎ早に質問に、少女は少し驚いたような顔をして俺の背後を

指差した。
俺は思わず、後ろを振り返ると、先ほどまで少年と話していた少女が血を流して倒れていた。
その横では先ほどまでの少年が泣きじゃくり、少女を励ましているが腹部からの流血を見る限り助からないというのは素人の俺でも理解できた。

その時、突然周囲の音が耳に入ってきた。
風がざわめく音、緑の匂い、そして少女が倒れている川岸とその横に座って手を握ってる少年の息遣いまで聞こえてくる。
俺は思わず近づこうとしたが体が、石になってしまったように身じろぎする事が出来ない。

「ムダよ、今の貴女では何も出来ないわ。」

辛うじて声のする方へ視線を向けると、異世界に来てからのもう一人の俺、そう黒い髪の少女が腕を後ろに組んで前かがみになって俺を見上げていた。
そして、気がつくと俺はこの世界に来る前の男の体に戻っていた。

「俺が何も出来ない？どういう事だ？」

少女が俺の疑問に、笑う。楽しそうに何度も笑う。
俺は、自由に体が動かせない事もあり、「何が面白いんだ？」と少女に大声で怒鳴ってしまっていた。

そんな俺の剣幕に少女は、キョトンとした後、悪戯ぽく微笑む

「だって、貴女、自分の事すらまったく理解出来てないじゃないの？貴女自身の事すら満足に理解出来てないのに何かできる訳ないで

しょう？」

「何を言ってるんだ？俺が自分自身の事が分かってない？」

「ええ、そうよ。だって、私から見たら貴女は本当に何も理解していないわ。いいえ、知りたがってすらいない。自分の都合の良い事しか、聞かないし、信じないし、見ようとはしないじゃないの？そうね、一つ例を上げましょうか？貴女の恋人の結城奈津実さんだっけ？」

その名前に、俺は忘れかけていた記憶が穿り返されれるような痛みを受けた。

そして、「お前には、関係ないだろうが！」と思わず怒鳴ってしまう。

俺の、怒鳴り声も少女は何食わぬ顔で受け流す。

「ねえ？貴女。まさか本当に彼女が裏切ったと思ってるの？」

そんな言葉を俺に、少女は投げ掛けてくる。

だが、俺は見たんだ。そして聞いたんだ。

結城奈津実が、大学で何と言われてるかを！そして俺になんと言ったのかを、そしてホテルから出てきたのも目撃したんだ！

だから、だから・・・・・・。

俺の心の中の葛藤を少女は、見透かすかのように目を細めて見て来ているが、怒りが再燃した俺がそれに気がつく事は出来なかった。

「うるさい、うるさい、うるさい。あいつは、奈津実は俺を裏切ったんだ！それに俺が両親から受け継いだ財産を狙っていたと言っていたんだ！」

「貴様に何が分かる？お前に何が理解出来る？俺は婚約の約束までしていたんだ。それを一方的に破ったのは向こうからだ！なのに、なんで俺が攻められないといけないんだ！！」

「そう、本当に愚かよね、見てて耐えないわ。今の貴女は・・・・・。」

俺を見て、本当に哀れみを込めた眼差しでそう告げてくる。

そして、少女が指を振るう。

空間上に一つの風景が現れた。

そこは、リビングであった。

あったというのは原型を止めない程に荒らされていたからだ。

そして、俺には、そこがどこの家か分かった。

「な、な、なんで俺の家が？」

まったく要領を得ない。

家宅捜索でもここまでは荒らしたりはしない。

そもそも、今、風景に映ってる奴らは人間じゃない？

そして、一人の見知った男が風景に映る。

「おい、見つかったか？」

「いえ、ありません。ですが、正美という男がこの家から出て行ってはいないと見張りからも報告が来ています」

黒いスーツを着てる男がその男に、そう報告を上げている。

「ちっ、まったく使えん人間め！あと少しだった所を！最後の理性を絞り邪魔をしおって。最後まで騙しておけばいいものを・・・・・

・・。」

男が、気分を晴らすようにリビングの壁を魔術を使い破壊する。

「エウルユニス様、あまり問題を起しますと兄上のエウルレイス様に我々が叱られてしまいます。」

「分かっておる。こちらの世界では秘密裏に事を進めろと言う事だろう？」

男が怒りに満ちた目で、正美の家を出ると一人の女性、結城奈津実が瞳に光を無くしたままで人形のように立っていた。
それを見て、エウルユニスが結城奈津実の顔を殴りつけると、家の前に止まっていた黒塗りの車に乗り込んでいく。
背後から追いついてきたエウルユニスの部下が、急いで車にかけつけるとゆっくり窓が降りていく。

「あの女、結城奈津実の処遇はどういたしましょうか？」

と追いついてきた部下が聞くとエウルユニスは、すでに関心を無くしたのか無表情のまま「いつものように処理をしておけ」とだけ言い窓を閉めた。
そして車内で、ワインを一口飲むと、運転手に出発するように合図を出す。

「まったく、転移した創世の種を見つけたが良いが、まさか桂木博士が裏切るとは・・・・・・。」

そう車内で愚痴を零していた。

そして、それを見ていた正美は驚きのあまり凍りついていた。
桂木博士？なんだ？どういう事なんだ？俺の両親は普通の企業に勤めてるはずじゃ？そんな困惑してる俺を愉快そうに少女は見て取ると、男達がいた風景を手を振るい消した。

「どう？少しは言ってる意味が理解できたかしら？」

少女の言葉に正美は、困惑した顔で俯いてしまっている。

「だからって・・・・・・なんで俺に相談しないんだ・・・・・・。」

少女は溜息をつきながらも本人に直接聞けばいいと正美に問おうとした所で、待ち人が近づいてくるのに気がつき、正美の肩を叩き、少女が倒れてる方を見るように促した。

俺は、たった今見たばかりの現実が受け入れる事が出来ないまま、少女に示された方を見ると見た事のある女性が少年と少女の元へ歩いてくるのが見て取れた。

「あ、あれは、まさか・・・・・・。」

その女性は、腰まである青い髪を靡（なび）かせ長い耳を持った女性であった。

黒の巫女姫

この話は、エルハンス王国が建国される前の話。

「お待ちください、姫様！」

数人の侍女が、青いドレスに身を纏った青い髪の少女を追いかける。
歳の頃は１７歳程だろうか？
１５０ｃｍ程の身長の為に実際より若く見える。

「お待ちを！姫様」

侍女達が必死に少女の前に立ち塞がるが、意に介さず回廊を進んでいく。
そこは、大理石で組まれ作られた神殿のようであった。
通路の両端に大の男が一抱え出来るほどの巨大な柱が永遠と続いており、柱には繊細な彫刻が施されている。
そして回廊には、踝（くるぶし）まで沈み込むような青い絨毯が永遠と引かれている。
本来は、暗い回廊はだが、今は少女の周りに浮かぶ数十に及ぶ精霊達により幻想的に照らされている。

少女は、進めている足を止めないまま、一つの扉の前に立つ。
扉には華美な彫刻が施され、表面には金が貼られ光輝いている。

「おやめください、姫様！」

その静止の声に耳を傾ける事なく、少女が扉に手を当てると音も無く扉が開いていく。
開いた扉を進んでいくと、突然、視界が開く。
人がゆうに１０００人は入れそうな巨大なドーム状の広場の中央には大理石の台座が鎮座しており、その台座を取り囲むように背丈の高い、
緑色の服を着た数十人もの男女が台座を中心にして床に書き込まれている魔法陣に力を注ぎ込んでいる。
力を注ぎ込まれると、呼応するように魔法陣の光が増していく。

そして、その集団から離れていた男が少女が入ってくるのを見ると眉を吊り上げた。

「フィーナ！何故、こんな所に来ているのだ！」

「お父様、いつまでこのような事を続けるおつもりなのですか？この世界の問題は、私達自身が解決しなければいけないはずです！」

「また、エメラスに何かを言われたのか？いい加減、お前も少しは王族としての自覚を持て！」

「民を守り慈しむのが王族ではないのですか？異界の者とは言え、そのような者達に私達が本来負うはずの責を負わせるなど間違っています」

「奇麗事だけでは国は回らん。それに世界の崩壊を食い止める為には、異界の者の心と魂と力が必要なのだ。」

フィーナと呼ばれた少女は、両手を強く握り締める。
たしかにより多くの人々を守るためには小さい犠牲はやむを得ない

と言える。
そして、その決断を取る者こそ、指導者としては相応しい。
だが、フィーナの年齢では、頭では理解していたが心では納得出来なかった。
フィーナは、４００年近く生きているが、人間の年齢で換算すれば未だに１４歳という若さであった。
だからこそ、理想を追い求めていた。
それが、とても難しいと分かっていても・・・・・・。

そして、二人が言い争ってる間にも、異界の人間を召喚する魔法陣が完成してしまう。
あとは、王族である国王が宣言し召喚すればいいだけである。

フィーナは、召喚を食い止めようと台座まで走り寄る。
突然の事に、周りが反応出来ないでいると台座の上に設置されていた光り輝く宝玉（オーブ）に手を伸ばし掴み取る。

「やめるのだ、フィーナ。自分が何をしているのか分かっているのか？」

「分かっています！お父様達は、異界の者の魂と心をこの宝玉に喰わせて成長させるつもりなのでしょう？そしてこれを使って世界の再生を考えているのでしょう？」

フィーナは、叩きつけるように自らの父親の前でその宝玉（オーブ）を床に叩きつけて砕いてしまっていた。

「な、何をしているのだ？数千年続いてきた儀式を・・・・・・なんということを・・・・・・。」

余りの突然の事態に周囲が凍りつき、男は怒りのあまりに言葉を無くしていた。
その中で、砕けた宝玉（オーブ）から立ち昇る光がフィーナを中心に集っていく。

「大丈夫です、お父様。私が、このフィーナが最後の黒の姫巫女としてこの世界を守って見せます！これでこの世界中に作られた魔法陣が起動して関係の無い方々を召喚する事はなくなります。」

フィーナがそういい切ると同時に、光が全てフィーナの中に流れ込んでいく。
その様子を、男は目を見開き見ていた。

翌日、トントンと扉を叩かれその音でフィーナは目を覚ました。
返事をすると一人の少女が入ってくる。

「エメラス？どうかしたの？」

「フィーナ様、昨日の事は聞きましたよ。なんであんな事をしたんですか？ゼブル様はあの後、ショックのあまり倒れられてしまったのですよ？」

そんな口調に、フィーナはムッとする。

「だって、いつもエメラスだって言ってるじゃないの？よく考えたら後は行動するだけだって！」

その良く考えたらが、フィーナ様は抜けているのですけど・・・・

・と突っ込むのをエメラスは我慢した。
どうせ、今更言っても聞かないのだから。
エメラスが何も言い返さない事に、フィーナはプーッと膨れ面をするが次のエメラスの言葉でその表情が氷ついた。

「フィーナ様、私も人魔改造（オベリスク）の契約を受けてみたいと考えています。」

人魔改造、この世界の生物と神話大戦時に異界より侵攻してきた際、手に入れた魔物を合成させる事により強大な力と長命な寿命を得る事が出来る法。
だが、成功確率はとても低く、１０００人の兵士がそれに志願したが成功例は只の一例のみ。
それでも、わずか１０００年程で死んでいた。
フィーナ達、エルフの平均寿命は２０００年程である。
無理に、そんな危険な事をしなくてもいい。

「ダメよ、そんな危険な事、させられないわ。絶対許可は出さないわ」

「フィーナ様が黒の姫巫女と成られたのでしたら、お付の私も出来る限りフィーナ様に仕えたいと考えています。」

「でも、私は嫌なの！友達がそんな危険な事をするなんて認められないわ。」

「私は人間です。幼い頃よりフィーナ様と一緒に過ごして来ました。でも、先月、ゼブル様から言われたのです。もう私の体を維持しておくことは無理だと・・・・・・」

「そ、そんな・・・・・・。」

フィーナはその言葉に、自失呆然とし、床に座り込んでしまう。
たしかに人間は、フィーナ達が瞬きするほどの間で生まれ、そして死んでしまう。
エルフ達の出産率は、長命であるがゆえに恐ろしいほどに低い。
数十年に一人生まれればいい方だ。
そして王族となれば、年頃で一緒に遊べる子供など入るはずもない。
だからこそ、王であるゼブルは他国の王族に外交的に圧力をかけ一人の王族の年頃の娘を人質同然に手に入れ、
娘であるフィーナの遊び相手としてエルフが誇る延命技術を使いフィーナ付の侍女にしたのだった。
だが、その延命技術も万全ではなく、少しづつ細胞が死んでいく。
そして、最後には・・・・・・。
本来、エメラスは其のまま死ぬつもりであった。
だが、事態は変わってしまう。

エルフ達の間ではこう言われていた。

創世の種子

それを作り上げるために、魂と命と心を喰らい成長する事を目的に上級神ユーゼイによって作られた生贄の宝玉。
そして、本来であれば、生贄はこの世界の者が行うはずであった。
だが、残念な事にこの世界で生贄の宝玉に力を与えられる程、力を持つ者はいなかった。
だからこそ、異界から力ある者を召喚しそれを生贄とする事によって宝玉を成長させてきた。
実際、生贄と言っても簡単なモノだ。
召喚は上級神ユーゼイが世界各地に作り上げた魔法陣が何百年に一

回の割合で召喚を執り行う。
何百年に一回の割合と言っても世界中にそれは点在してる為に、百年一回のペースで異界より住民を召喚する。
そして、召喚された者にはその者の心に呼応し固有した特殊な力が付随される。
この世界で生き抜くための力が・・・・・・。
だが、その力を振るえば振るうほどこの世界に肉体のみならず全てが侵食され最後には、力だけを残し全てを召喚された魔方陣に喰い尽くされる。
そして魔方陣が得た力は、宝玉（オーブ）を成長させる贄とされていく。
そして、力は、その者のもっとも強い残留思念を元に組み替えられ一冊の力ある原書（オリジン）となる。

と・・・・・・。

そして、何故か召喚される者は黒い瞳に黒い髪をした者だけであった。
だからこそ、この世界の人々は生贄となる者に哀れみの感情を込めてこう呟いた。

【黒の巫女姫】と・・・・・・。

召喚自体されていない、フィーナが魔方陣に喰われるかはまだ不確定だが、
それでも、いつもエメラスに姉妹のように接してくれたフィーナが、力を使いきり、魔方陣に喰われるのは見たくない。
だからこそ、少しでも長く生きられるように力を使わずに居られるようにとエメラスは、人魔改造を受けフィーナを守る決意を固めた

のだった。

失われたエルフの都　前編

―王都イースバールが壊滅した直後―

辺り一面は暗闇で覆われており、目を凝らしても周囲を伺う事は容易ではなかった。
暗闇に閉ざされた空間で数人の呼吸音が感じられた。

「うっ・・・・・・ここは一体・・・・・・。」

一人の紫色の髪をした２５歳程の青年が立ち上がり周囲を見渡すと、白い法衣に身を包んだ男がおぼろげに視界に映った。
男が青年が目を覚ましたのに気がつくと近寄ってきて青年の腕をとり脈拍を測る。

「ふむ、もう大丈夫そうじゃな。しばらく体を休めておけば問題なく動けるようになるじゃろう」

青年は男に見覚えがあった。
一度だけ王宮で父親にアレイクードの父と共に紹介された男であった。

「まってください、クレイネル殿。一体、何がどうなったのですか？」

青年の言葉を聞きながらクレイネルは他の倒れている者の容態も見

ていく。
そして、只一人を除いてとくに異常はないと判断すると、異常が認められた青年に近づいていく。
クレイネルから見て、それはもう手の施しようが無い。満身創痍の状態であった。
おそらく、もうすぐ・・・・・・。

「クレイネル！アレイは？」

何時起きたのかエメラスが、アレイクードの近くに駆け寄りその変わり果てた姿を見て座り込んでしまう。
いつも、感情を表さないエメラスであったが、この時ばかりには顔を伏せて嗚咽を噛締めている。

「クレイネル、アレイを助けることはもう出来ないのですか？」

エメラスの問いかけに、クレイネルは首を横に振り答えた。
むしろ、この状態で生きてる方が不思議なのだ。
だからこそ、エメラスはどうにも出来ない自分の無力に打ちのめされた。
これでは、フィーナとの約束を守る事が出来ないから・・・・・・。
何の為に、今まで生きてきたのか。

「お、お父様はどこですか？お父様はどちらにいるのですか？」

どうやら、もう一人も起きて父親を探してるようであった。
そして、もう一人も起きて、クレイネルとエメラスとアレイクード公爵が横たわっている場所まで歩いてくる。
そして、変わり果てたアレイクード公爵の姿を見るとフィンナは、凄惨な姿を始めて見たのか嘔吐し、他の公爵達は信じられない面持

ちで見ていた。

「クレイネル殿、一体どうやって、私達はあの場から脱出する事が出来たのですか？」

ヴェルドが疑問に思った事を口にした。

そしてクレイネルは説明をした。

今、クレイネル達が居るのは滅亡したエルフの都の転送陣跡地であり、自分達が助かったのはクレイネルが非常用に持たせていた転送呪文を刻み込んだイヤリングのおかげだと・・・・・・。

だが、転送呪文の発動には人一人を運ぶだけでも膨大な魔流力が必要であり、今回はエメラスを始めとする６人で会った為、その力を無理やり行使してしまった為、肉体を構成してるはずの生体エネルギーまで力に変換、さらには肉体にも欠損を生じさせ今のような事態になっていると・・・・・。

「ふざけんなよ！何してんだよ。俺の魔力を使えば支え切れたのに、アレイ！貴様なんでいつも一人で解決しようとしてるんだよ！」

事情を聞いたベルカストールが苛立ちを隠さずにアレイに毒を吐くが、その瞳には薄っすらと涙が貯まっている。

「アーくん。なんで、こんな事を・・・・・。」

ヴェルドも座り込みながら呟いている。

「こ、ここは一体どこなのだ？」

どうやら、最後の一人が起きたようであった。

クレイネル達に気がついたのかこちらへ向かってくる。

「フィンナ！無事か？」

男が、娘に気がつき走ってきて娘を抱きしめる。

「お、お父様。アレイ様が、アレイ様が皆を助けようとしてご自分の犠牲に・・・・・・」

後半は掠れて聞こえては居なかったが、レイユーズがアレイの横たわった姿を見ると痛々しい者を見るように眉を潜めていた。

クレイネルはその光景を見るとこれからどうすればいいのか考え込んだ。

ここの転送陣は、エルハンス王国の王宮の最深部に位置しており、ここまで余波が届いているという事は相手は戦略級の魔流術を短時間で構築しそれを発動させたという事になる。

ここは、王宮の最深部とは言え、地下2百メートルに位置している。

まさしく相手がどのような術を使ったのか皆目検討もつかないというのがクレイネルの考えである。

そして、相手がそのような術を使用したのならば、おそらく王都とその住民、そして避難民にアレイクードが救済のために組織した従軍は壊滅したと見て間違いなかった。

そして、これだけの事を躊躇なく行う勢力はあの者達しか思いつかない。

かつて世界を支配していたあの者達しか。

そして・・・・・・。

「まずいぞ！」

思わず、クレイネルは声を上げてしまっていた。
自分達を邪魔者として、都市ごと消そうとしてきたならば、アレイクード公爵邸にいるフィーナの忘れ形見であるエルフィーナも危険に晒される可能性が高い。
あの者達に対抗できる力を有しているのは、歴史上最高の天才と言われたフィーナの才能を受け継ぐエルフィーナしかいないからだ。
考えすぎかも知れないが、本来の目的は、公爵邸を襲う為だけに自分達を引き離すのが目的で戦争を起した可能性も・・・・・・。

「クレイネル、以前にフィーナが言ってました。エルフの王家には死に掛けた者の肉体を再生させる術があると・・・・・・。」

突然、声をかけられたクレイネルは、その言葉に反応し頷きつつ、自分はアレイの延命を行い、エメラスや公爵達へ王家の再生術を探しだすように指示を出す。
そして、全員が、部屋から出て行ったのを見るとクレイネルは空間上に多数の回復術の陣を展開していく。

「アレイ様、がんばってくだされ。皆が、戻ってくるまでどうか・・・・・。」

カツーン、カツーンと大理石で作られている回廊には、人が歩く靴音が鳴り響いている。
転送陣が存在していた大広間を出てから全員無言であったがしびれを切らした一人が口を開く。

「でも、本当にここってエルフの遺跡なのか？エルフなんて空想上の生物じゃないのか？」

ベルカストールが、独り言を愚痴る。
だが、内心は皆、同じ気持ちであった。
自分達が習ってきた歴史の中にはエルフは、伝説上の生き物と書かれているからだ。
神話時代、人が誕生し今まで、人がずっと世界を支配してきたと各国では教えている。

先頭を歩いているエメラスは、後ろを振り向かずに回廊行き止まりにある壁を押す。
押した途端、周囲に青い魔方陣が展開され、壁が両側に開いていく。

「隠し扉なの？」

ヴェルドの問いに、エメラスは反応せずにそのまま、開いた空間の中に入っていく。
中に入ると、突如、日の光に照らされ全員が一瞬視界を失ったあと、数度瞬きするとそこは広場になっていた。
直径１００ｍ程の空間の中の中央には、噴水があり水が一定の間隔で形を変え、吹き上がる。

そして、天井には白いシャンデリアが光輝いており、一定の光で周囲を照らしている。
それを見た瞬間、エメラス以外は固まってしまう。

「これは一体なんですの？魔流術？それでもこんなに安定した光を生む事は出来ないはずですわ！」

フィンナが興奮しながら全員の意見を代行するように声をあげた。
他の者も、王宮で噴水などを見たことはあったが、一定の間隔でテンポを取り、形を変えて噴出す噴水などではない。
王宮にあるのは、高低差を利用した噴水であり、今、自分達が見てる物とはまったく違う技術が使われてるのが分かる。

「皆さん、こちらへ」

エメラスが、先に進み全員を誘導していく。
そして噴水を回り込み、入ってきた入り口と反対側にある扉の隣にあるパネルに近づき、エメラスは手を翳した。

「指紋パターン解析・・・・・・。魔力照合開始・・・・・・・。網膜パターンを解析・・・・・・・。」

突然、周囲に合成音が流れる。

「な、なんだ？敵か？」

ベルカストールとヴェルドが臨戦態勢に入り周りを見渡す。
周囲には何も気配を感じ取る事が出来ない事に二人は困惑する。
フィンナとレイユーズも周囲を警戒するが、何も見つける事が出来ない。

「戦術級人形（トライデルオベリスク）エメラスと確認。第2アクセス権限まで認証を許可します。ゲートを開放します。」

合成音が再度流れると同時に、パネルの隣に位置していた扉が音も無く開いていく。
そして、その情景を全員が呆気に取られて見ていた。
エメラスは気にかける事なく、開いた扉を進んでいく。
未知なる場所に置かれる不安からか全員もエメラスの後を追っていく。

「まってください、エメラスさん、ここは一体何なのですか？それにさっきの声も、戦術級人形（トライデルオベリスク）って一体、どういう事なのですか？エメラスさん、一体貴女は、何者なんですか？」

ヴェルドの問いかけに、足を止める事なくエメラスは、通路を進んでいく。
他の者も、理由（わけ）を説明されないままついていくしかない事もあり、突然理解できない事が続き、苛立ちが募っていく。
そこで、エメラスは仕方無さそうに子供に教えるように言葉を紡ぐ。
その声は、靴音しか響かない通路に響き渡り全員が聞き取れる音量であった。

「昔、そう、とっても古い時代に、この世界には巨人とエルフと人間とドワーフが手を取り合って文化を村を町を国を都市を作っていました。ある時、異界からの侵略者達と戦いが始まりました。長い長い戦いの末、疲弊していた人間達は自分達だけでも助かろうと、他の種族を裏切り侵略者達に寝返ってしまいます。
劣勢に立たされた、巨人、エルフ、ドワーフは上級神である煉獄（れんごく）の審判神（しんばんしん）エウメディアに助けを求めます。

エウメディアは、己の力を１０８枚の原書（オリジン）に変え、３種族に与えます。
そして、その力を使い、巨人、エルフ、ドワーフは最後の決戦に赴（おもむ）き、多大な犠牲を払い異界の侵略者達を大陸の遥か下方に封じる事に成功しました。
ですが、最後の戦いの際に神々の力を削ぐ為に、人間達は世界の根源たる力を司る、創世の種子を別世界へと飛ばしてしまいます。
創世の種子を無くした後、世界は崩壊を始めました。
そして、その崩壊を食い止める唯一の方法を見つけたのが、エルフ族の中であってもっとも身分が低い男でした。
そして、世界崩壊を食い止める為に、創世の種子の代替物、生贄となる為に、異世界から召喚され人柱とされたのが黒の巫女姫だったのです。」

話がそこまで進んだ所でフィーナが顔を真っ赤にして反論した。

「そ、そんな・・・・・。そんな話聞いた事ありませんわ。どこの国の教会や教団だって黒の巫女姫は世界の危機の際に現れて、この世界を救い報酬を受け取らず元の世界へ帰還したと言ってますもの！人柱とか生贄とかそんな事あるわけないじゃないですの！それに、エウメディアなんて聞いた事もありませんわ」

その反論に、エメラスは溜息をつきながら、報酬や、世界の危機に都合よく現れ世界を救うなど、どこの物語なの？とエメラスは心の中で突っ込みながらも尚も足を止めずに歩く。
ベルカストール、ヴェルドは、その話を聞いて黙ってしまっていた。

「なるほどな、そう言う事か。つまり、ここの遺跡も、権力者達が隠した真実の一つと言う事か」

レイユーズが一人得心を得たかのようにのように呟く。
やはり、レイユーズも元、商人と言う事だけあり、多角方面的に物事を見る癖が抜け気っていない為に、目の前にある現実と照らし合わせ、結論をだしているのだった。
だが、レイユーズの娘であるフィンナは、多角方面的に物事を見る術を学んでいない事、そして熱心なインフェルノの信者でもある為に、教え込まれた経典と違う歴史を認める事が出来ずにいた。
そんな中・・・・・・

「たしかにね。こんなすごい遺跡を残すくらい発展してた国なら、自国の内情を考えちゃうと隠したくなっちゃうわよねー。」

ヴェルドも、エメラスの話とレイユーズの独り言に妙に納得したように周囲を見渡す。
そして、全員が通路を歩いてると前方に高さ３ｍほどの扉が見えてきた。
一向が扉の前に立ち止まる、

「皆さん、ここに求める物があります」

エメラスが一同を見渡すと、扉の隣に設置されていたパネルに手を伸ばした。

エメラスが扉のパネルに手を触れようとした所で、暗闇の中から光り輝く物が飛来してくる。

『構成よ、我が身を脅かすモノから身を守れ！』

エメラス達の周辺を、魔流術の防御障壁が展開し、飛来したモノと火花を散らし双方ともに消滅する。

「そ、そんな馬鹿な！？」

ベルカストールが、自身が展開した防御障壁がたった一度の攻撃を受けただけで消滅してしまった事に驚いていた。
今、ベルカストールが展開した障壁は、本来であれば戦争時に数人の高位魔流術師達が展開する戦術クラスの魔法に対抗するための防御障壁であった。
そのような術を一人で唱える事が出来るのは、ベルカストールがクレイネルに匹敵する程の天才と王宮で言われていたからであったのだが・・・・・。
エメラスが、攻撃術が飛んできた方向を見据えて身構え、ベルカストールとヴェルドもいつでも戦闘に入れるように術式を編んでいく。
レイユーズ公爵とフィンナに至っては、三人の影に隠れて事の成り行きを見守っている。

「ほう？低級魔術であったが私の魔術を防げる者がいるとはな」

攻撃術が飛んできた方から男の声が聞こえる。

コツ、コツと床を踏み近づいてくる音が通路に反響する。
そして、男の輪郭が見えてくる。

「え？まさか！？」

エメラスが驚きのあまり普段、出さないような声色で驚きのあまりその男を見つめていた。

その頃、クレイネルとアレイクードが居る転送陣の広場では、突然殺気を向けられたクレイネルがアレイクードを背にし、一人の男と対峙していた。

「ひさしいな、クレイネル。２０年ぶりか？ずいぶん歳をとったな。」

相手の男はクレイネルと一定の間を開けて、気安くクレイネルに声をかけている。
クレイネルは、反対に緊張した面持ちで男を見ている。

「エドルガルド、何故生きて・・・・・・？」

「おいおい、ひさしぶりに会った兄弟子にそれはないだろう？」

エドルガルドは、３０歳前後、クレイネルと比べても父と子程の年齢差があるように見える。

「エドルガルド！あの時に死んだはずでは？」

その言葉に、エドルガルドは愉快そうに口元を歪める。

「そうだな、お前にあの時殺されたからなぁ。でもな？別にお前を今、どうこうしようなど考えてない。」

「なんじゃと！？」

「まぁ本当はな、王都を破壊する可能性のある部下を引き取りに来たんだが。」

エドルガルドは、そう言うとアレイクード公爵の体を見る。

「クレイネル、お前、この程度の怪我すら治せる術をまだ覚えてないのか？あいつに貸しでも作っておくのもいいな？」

エドルガルドは、寝かされているアレイクードに近づいていくが、

「エドルガルド！アレイクード様に近寄るでない」とクレイネルが空かさず進行方向を遮るように両手を広げて進行を阻止する。

「おいおい、クレイネル。俺は、今、一緒にきてる奴の息子だから助けてやろうとしてるだけだぞ？邪魔をするなよな」

「なんじゃと？ウエスクード様が？」

クレイネルが動揺すると同時にエドルガルドは、クレイネルに人差し指を向ける。

そして『現睡（ナルア）魔術』と声を紡ぐ。

「瞬間発動？馬鹿な！」クレイネルが驚愕の眼差しのまま、抵抗できずに膝から崩れ落ちる。

エドルガルドはそれを見てクレイネルが寝たのを確認すると、アレ

イクードに手を翳した。

場所は替わり、エメラス達一行は、男と距離を取っていた。

「ほ、本当にウエスなの？」

エメラスが、男を見て信じられないといった表情で呆然と立ち尽くしている。

そして、フィンナ以外の公爵達も亡霊を見ているように視線を投げ掛けていた。

「ひさしいな、エメラス。アレイは元気にしているか？」

「え！？あっ！」

エメラスは問いかけられて、自分が何故急いでこの場に来たのかを思い出すと、顔色をサッと変えた。

その様子に、ウエスと言われた男が気がつくと、エメラスに何があったのか問いかける。

「アレイが怪我をしてしまってて、瀕死の重傷を．．．．．。」

その話を聞くと、ウエスクードは頷くと、空間に手を走らせる。

それと同時に空間上に魔方陣が展開され、一つの光景が表示される。

丁度、エドルガルドがアレイを治療し終わった場面が表示されており、一切の傷らしい傷が見当たらない。そして、側にはクレイネル

が倒れている。

「クレイネル殿！」

ヴェルドが声を上げると同時に、画面上に一人の男が映りこんでくる。

金髪に、青い瞳をした痩せ型の１８０ｃｍほどの青年であった。

「おいおい、ウエス。覗きとは趣味わりーな。まぁ丁度いいか。お前の息子を治療しておいてやったから、貸し一つな！」

「ああ、分かった。あの方がこの遺跡を消せと言っている。そちらの二人は公爵邸へ転送しておいてくれ。こちらは私がやっておこう。」

二人の会話を聞いていた、エメラスはハッとするとウエスクードと距離を詰めようとする。

「来るな！エメラス」

エメラスは、信じられないといった心境で踏み出しかけた足を振り下ろす事が出来なかった。

エメラスの瞳からは涙が貯まり、少づつ頬を伝って流れ始めている。

「なんで？なんでなの？ウエス！どうしてずっと姿を隠していたの？」

「今はまだ何も話せない。すまないな、エメラス。もう少ししたら世界はあるべき姿に戻る。それまで、アレイの事を頼んだ。」

ウエスクードはそれだけ言うと、エメラスを含む全員に手を振う。
それと同時に全員が光に包まれてその場から消え去った。

「ウエス、そっちは終わったのか？」

「ああ、丁度転送が終わった所だ。私は先に、あの方の元へ戻る」

「あいよ、後は任せておけ」

ウエスクードが通信を切るのを確認すると、エドルガルドは転送陣に空中に作り出した魔法陣を重ねる。

「さてと、これで任務完了っと。あの方も自分の過去を消し去りたいのかねぇ？さて、そろそろ戻らないと．．．．．．」

エドルガルドが呟くと一瞬でその場から消え去った。
そして、男が消え去ると同時に、エルフの都は白い閃光に包まれ、王都イースバールのあった周辺地域を巻き込み崩壊し地の底へ崩落していった。

青い髪の女性が、長い髪を揺らしながら倒れている少女に近寄っていく。
女性と倒れてる少女との距離が、あと数歩という距離まで近づいた所で、少女の手を握っていた少年が気配に気がつき女性を見てからすぐに少女を庇うように両手を広げて進路上に立ち塞がる。
女性は、その様子に特に驚きもせずに少年の頭の上に手を置いて撫でて宥めようとするが、少年はその手を払って女性を睨みつけた。
その様子から、少年が守ろうとしてるのはとても大切な人なのだろうと女性は推測する。

「大丈夫よ、その女の子は怪我をしているのでしょう?早く手当てをしないとね」

少年が自分の事を警戒してると知った女性は、少年を不安にさせないようにしながらやさしく声をかける。
手当てと言う言葉を聞いて、少年は少女の怪我を見てもらえるかもしれない。そんな考えが浮かび、「お姉ちゃんは、治療術師なの?」と聞いていた。

「ええ、そうよ。だからね、ちょっと見せてもらえる?」

ハッキリと肯定された事で、少年の顔がみるみる希望に満ちたそれに変わる。
女性はそのまま、少女の体を見ていくがそれはひどい傷跡であった。
顔を曇らせた事に気がついた少年は、涙を浮かべながらもじっと様子を見ている。

「ねえ？この子はここの周辺で怪我をしたの？」

女性が聞くと、少年は震える口で経緯を語った。

女の子はいつも、決まった時間に近くの草原に現れては男の子と一緒に話をして決まった時間に何時の間に消えてしまうと・・・・・・。

そして、その草原の場所を聞いた途端、女性は表情を曇らせた。

そこは、最近になって姿を現したリザードマン達が縄張りとしていた場所であった。

彼らはそれほどの強さを持っているわけではないが、一番問題視されてるのは刃に塗られていた毒にあった。

かなり強い猛毒を塗っているため、掠めただけでも命に関わる。

そのため、冒険者になったばかりの新人が一番気をつけなければいけない怪物（モンスター）と言える。

事実、毎月何人もの人間がその刃にかかって命を落としている。

この世界に存在する、人間が使用する魔流術は、大気に存在している魔力の流れを制御する。

そのために治癒は、生物が持つ治癒力を最大限まで活性化させ傷口を再生させると言うもので毒を除去できるものではない。

すでに、女の子の傷口は紫色に変色し始めていてほっとけば後、数分で生命活動を停止してしまうだろう。

「お姉ちゃん、僕、どんな事でもするから！助けて！！お願いだから・・・・・・。」

今、女性が使える術の中で助ける方法は一つしかない。

それを使うためには・・・・・・。

「わかったわ。それじゃ私と約束出来る？」

「どんな約束だって約束するよ！だから、だから助けて！」

落とす命を助ける為には、運命を改変する事になる。
そして、その代償はそれなりの物が必要とされる。

「そう。貴方のお名前はなんて言うの？」

少年は少し考えた後、「僕の名前は、アレイクード。」と答える。

「お姉ちゃんはね、フィーナって言うの。」

「フィーナおねえちゃん？」

もう、お姉ちゃんって年齢じゃないんだけどね。と心の中で呟きながらも悪い気はしていなかった。
女の子はいつまでたっても若く見られると嬉しいモノなのだ。

「それじゃ、アレイちゃん。」

「は、はい」

フィーナの綺麗な瞳に、真正面から見つめられてアレイは思わず今が緊急事態な事も忘れて呆けてしまっていた。
だが、それも次の言葉で現実に戻される。

「アレイちゃん、この女の子を助ける為の代償は貴方の寿命を共有する事とこの娘に対する名前と記憶。そして、この女の子が払う代償は存在の損失と記憶になるの。」

アレイと言う少年は、女性の言っていた意味の半分も理解出来なかった。
それでも、自分の命を二人で共有すると言うのは理解出来た。
そして、この女の子の事を忘れてしまうと言う事も・・・・・・。

「おねえちゃん、存在の損失と記憶ってどういう意味なの？」

少年が思ったよりも自分が言った言葉を理解してる事にフィーナは驚きながらも、それなりの教育を受けてる子供と言う事を理解する。
そして・・・・・・。

「一度、死ぬと決まった命の灯火を拾う為にはね、膨大なほどの対価が必要なの。この女の子は一度、存在を再構築される事になると思うの。きっとその時に貴方の事を全部忘れてしまうわ。それとね、もし貴方が死んだら、この子も命を共有してるから死ぬ事になるからね」

「う、うん。でも、僕は、絶対、正美を忘れたりしない。きっと次にあったら絶対、守れるくらい強い男になってみせる！だから、助けて」

幼いながらも、アレイの瞳の決意が揺るがない事をフィーナは確認しつつ、頷く。

・・・・・・。

・・・・。

日が暮れ始め、森の中でアレイは目を覚ました。

「あれ?僕は一体なんでここにいるのかな?」

そう言って、立ち上がった少年の手の平には、フィーナが作った少女の姿を映した絵が大切そうに握られていた。

「あれ?これって・・・・・・。一体何だろう?誰なのかな?」

ポタッ、ポタッと絵の上に雫が落ちる。

「あれ?あれ?あれ?なんで・・・・・・なんで?」

何度拭いても涙が零れて止まらない。

アレイは、意味も理解出来ないまま泣き続けた。

俺は、その姿を見ながら、一言も発する事が出来なかった。

その頃、アレイ達がいた場所から、少し離れた所では・・・・・・。

「どちらに行ってらっしゃたのですか?」

宿泊していた屋敷に、突然現れたフィーナの姿に特に驚きもせずにエメラスは言い切った。
声は、かなり落ち着いているがそれは怒ってるからだとフィーナは一瞬で察する。

「えっと、エメラス？」

そう、声を出した途端に、足元がふらつき、エメラスに倒れ掛かった。
エメラスは、そっとフィーナを支えるとその衰弱具合から顔をしかめた。

「また、魔術を使ったのですか？エルフが使う魔術は肉体に負担をかけるとあれほど．．．．．．。」

エメラスの言葉にフィーナは夕焼けに染まった空を見上げると目を細める。

「エメラス、種子に食われるまで後、数ヶ月の命でしたが、しばらくは生きられそうです。」

その言葉にエメラスは、驚きと困惑の眼差しをフィーナに向けた。

「本当ですか？フィーナ様。ですけど何故？」

「わからないわ。でも突然ね．．．．．．。ふふふっ、これでやっと黒の姫巫女っていう偶像から解き放たれたのね」

フィーナは、そう言いながらも、少女に魔術を使っていた時の事を思い出していた。

魔術を使い、少女の運命を引き戻す際に、根こそぎ魔力ではなく、体を犯していた膨大な呪われた力である創生の種子の代替物を全て奪われたことを。
それにより、フィーナは残り数ヶ月の命を延命する事が出来たのだった。
そして、気がつけば少女はその場から消えていた。
魔術が成功した事はすぐに理解出来ていたが、自分の命を永らえさせてくれた事への感謝として一つのタブーをフィーナは犯してしまう。
それは、少年に、少女の姿を映した絵を作り握らせた事であった。

俺は、正美と呼ばれた少女が消えていった空間を見ながら、金縛りにあったように動く事が出来なかった。

「どう？少しは自分が何なのか理解出来た？」

先ほどまでいた少女が俺に話しかけてきた。
俺はその言葉に頷いた。

「ああ、まさか、同名の人間がアレイと幼い頃に会ってるとは思わなかったな。おどろいた。」

俺が、そう答えると少女は何も分かってないのね。と残念な人を見るようにジェスチャーする。

「ねえ？貴女、馬鹿なの？それとも現実が見れないの？それとも理解力が足りないだけなの？」

そう言いながら、俺に詰め寄ってくる。
まったくひどい言われ方である。
見ず知らずの子供にここまで言われる言われはない。

「お前には関係ないだろ。それに、一体お前は何者なんだよ？それにここは一体どこなんだ？」

「ここは、貴女の深層世界。よくあるでしょ？死ぬ間際に見る走馬灯って。それを見る場所なんだよね」

「えっ!?そ、走馬灯って・・・・・・。お、俺、死んだのか?」

俺の反応に、少女はニッコリと毒気ある笑顔を向けてくる。

あー。本当にいい笑顔だね。

「ええ、だって、さっき見てたでしょ。貴女は本当はとっくの昔に死んでたの。それをアレイ君の寿命を共有する事で生きてたのよね。でも、良かったじゃない!だって貴女ずっと死にたいって思ってたんでしょ?」

「そ、そんな事は・・・・・・。」ない!と言おうとした言葉を俺は飲み込んでしまっていた。何故なら・・・・・・。

「そんな事は?何?私には、分かるのよ。だって貴女は私なんだもの。毎日、同じ日が続いて生きる事に疲れちゃたんでしょう?さらに人間不信に陥って生きてる意味が見出せないんでしょう?貴女は気がついてないかも知れないけどね、何度も・・・・・・。ううん、何十、何百回も死にたい、死にたい、死にたいってずーっと心の中で無意識的に思ってたのよね。

でも、貴女はその度に、自分を騙して死ねずに惰性で生きてたのよね。

でも、アレイ君が死んだ事で、貴女も死ねるんだから良かったじゃないの」

な、アレイが死んだ?どういう・・・・・・。

「へー。まだ、そんな顔が出来るのね。」

俺の顔を見て愉快そうに少女が微笑む。

「うるさい！どう言う事だ？アレイが死んだ？何でだ？」

「もう貴女は死んでるのに、貴女の問いかける事に意味があるのかしら？」

こいつの言ってる事は的を得すぎていてイラつく。
この少女が言ってる事が本当なら、俺は死にかけてる。もしくは死んでる可能性が高い、だけど、心の中の奥の部分がざわめく。
何かをしろと訴えかけてくる。

「意味が有るのか、無いのかは俺が決める！答えろ！」

俺の啖呵に、少女が本当に面白そうに笑う。

「アレイ君はね、瀕死の重傷を負ってるみたいね。」

なっ！？瀕死？ってことは危険な状況って事なのか？
あいつには、俺がこの世界に来てから助けてもらった恩がある。
それを返さないまま死ぬ訳には・・・・・。
俺は、思わず少女と俺しかいない森の中を駆け出そうとするが。

「どこにいくの？ううん、何をしようとしてるの？」そう言いながら少女が、いつの間にか俺の目の前に立っている。

「アレイを助けに行くに決まってるだろ！そこを退け！」

「無理よ、何度も言ってるでしょう？貴女はもう死んでるの。死んでる人間が世界に干渉する事は出来ないの。
それに、もう貴女が壊れていくのを見るのは、「うるさい！退けと

言ってるんだ！」

同時に周囲の風景が薄れて消えていく。

「そ、そんな・・・・・・。こんな事が有りえるの？一度、死が確定したモノを自己の意志だけでねじ伏せて戻るなんてそんな馬鹿な事が・・・・・・・。」

少女が驚いているが、俺は周囲の消え去っていく景色を見ながら直感していた。

何か暖かいモノが俺の中に流れ込んできてそれが、俺に力を与えてくれてる事を・・・・・・。

そして、まだ、死ねないって事も同時に理解する。

「悪いな、俺はまだ！死ねないんだ！やらないといけない事が出来たんだ！奈津美を助け出す。そしてアレイも助けないといけないんだ！」

俺の言葉に少女はフッと笑うと俺の手首を掴んでくる。

「やっぱり面白いわね。日本人は・・・・・・。自分の事になると本当に臆病で救いようも無い程、愚かなのに、他人の事になると、自分自身が持つ力を超えた力を発揮するんだもの。

いいわ、貴女の力になってあげる。

そして貴女がどうなるのか見極めてあげる。

私の名前は、幼い頃の貴女（まさみ）。

そして、現存する最後の黒の巫女姫。

貴女はこれからもっと大変な事に巻き込まれると思うわ。

本当はね、貴女にはここで死んでほしかったの。

だって、これから貴女はもっとつらい思いをするから・・・・・・。

でも、もう引き止めないわ。
だから、私が貴女に使わせなかった貴女の本来の力を返すわね。
でも、忘れないで、私は、どんな時でも貴女の味方だと言う事を・・・・・・。」

「お前・・・・・・。」

俺がそう、声を掛けた途端、少女は霧散して消えてしまっていた。

『少しは日本男児らしくなったではないか。』

唐突に頭の中に声が響いてくる。
これは・・・・・・まさか・・・・・・。

「寄生虫か!?」

思わず大声で叫んでしまっていた。

『寄生虫じゃと?妾(わらわ)を捕まえて失礼じゃのう」

失礼どころかお前がこの世界に連れてきたからこんな事に巻き込まれてるんだろうがー。と突っ込みを居れたかったが今はそれ所ではない。

「おい、自称神様!元の世界へ戻りたい。なんとかしてくれ」

『自称・・・・・・。』

何かショックを受けてるようだがスルーしておこう。

『まぁよいか・・・・・・。』

立ち直り早！

『妾には無理じゃが、正美、お前ならそれが可能じゃ』

「い、一体何を言って？」

『あの女から受け取ったのだろう？お前の本来の力の一部を、それを使えばいい。
さてそろそろ、戻るがいいじゃろう。また後でな』

その言葉に、俺は引っかかりを覚えながらも意識が覚醒していくのがわかった。

失われた記憶

王都イースバールより１０日程の距離にあるアレイクード公爵邸内の庭園に、唐突に眩い青い光が出現した。
光が消えた後、その場所にはヴェルド公爵、ベルカストール公爵、レイユーズ公爵とその娘のフィンナが気を失って倒れていた。
唯一立っていたのはエメラスだけであった。

「こ、ここは・・・・・・。公爵邸？この人数を王都から転送させたの？」

エメラスの考えを中断するかのように、眩い光が再度灯る。
そこには、アレイクード公爵とクレイネルが倒れていた。

「アレイ！」

エメラスは声を上げると、アレイクードに走って近づくと脈そして体を見ていく。
やはりウエスクードと、エドルガルドが話してた内容どおり、アレイクードの体にはどこにも異常は見られなかった。
そこから、エメラスは空を見上げた。
すでに空は、真っ赤に染まっておりまるで血の色のようであった。

「ウエス、エド。あなた達は一体何をしようとしてるの？」

エメラスは普段誰にも見せない顔をして空を見上げていた。

「うっ・・・・・・。」

うめき声に気がついたクレイネルは、アレイクード公爵への治癒魔流術を止めた。
それに呼応するかのように、うっすらとアレイクードは瞼を開けていく。
アレイの視界に入ってきたのは、見慣れた天井であった。

「アレイ様、お気がづきになりましたか。」

アレイクードは瞳の焦点が合うと、声のした方向を見ると、そこにはクレイネルが立っていた。
アレイは一瞬、頭の中で現状を整理していた。
クレイネルには、避難民の対応を、そして自分は王宮での会議堂で・・・・・・。
そこまで、考えた所で王宮の会議堂で何があったのかアレイは思い出す。

そう、あの黒いローブを着ていた男がフードを取り外し、この世界の真実の歴史を語りだし、自分達を抹殺すると言った途端、あの男が設置した黒い鉄球が周囲の光を喰らい爆発した所で全員を、クレイネルに渡されていたイヤリングを使った事に・・・・・・。
ほんの一瞬であったが、爆発した際、その光が届くほんの刹那、黒いローブの男がその場から消えるのが見えた。

「クレイネル、俺は何故?ここにいる?」

アレイは、クレイネルに声をかけながら、ベットから体を起すとクレイネルは複雑な顔を浮かべた。

そして、王宮から今までの経緯を説明していく。

「そうか・・・・・・。このイヤリングは、フィーナさんが作った魔道具だったのか。」

「はい、何かあった時に使うようにと…　…」

そこで、アレイはふと何かを失ってしまった。そんな損失感を受けた。

まるで、ずっと繋がっていた側に居たモノを失ってしまったような損失感。

意識すればするほど、心が落ちつかなくなっていく。

そして、クレイネルの表情。

自分に何か大事な事を隠してる表情。

「クレイネル！他に、他には何かなかったのか？何を隠してる？」

・・・・・・。

・・・・。

大きな音を立てて、アレイの部屋の扉が開け放たれた。

「アレイ様！まだ安静していなければ！」

クレイネルの声が通路に響き渡るがアレイは構わず、正美が居る部屋の扉を開け放った。

「正美！」

正美が寝かされてるベットまで、アレイは走りよるとその姿を見て凍ったように動く事が出来ずにいた。

整った輪郭、そして今で尚、光を失わない黒い髪が陽光に照らされて光輝いている。

だが、いつも活発な表情を見せていた顔は、作られた人形のように生気が感じられない。

動く事が出来るようになったアレイは絨毯の上に膝をつけると正美の傍らに立ち、冷たくなっている手を握り締めた。

「何故だ、何故だ、俺はまた守れなかったのか？」

また守れない？俺は何を言ってるんだ？

何故？またなど・・・・・・？

なんだ、この状況、この感じ、前もこんな事があった気がする。

そうだ、以前もこんな事が・・・・・・。

―その頃、アレイクード公爵邸執務室―

「私達がしっかりしていなかったから、正美様を死なせてしまった。私に出来ることはもうこのくらいしか…　…」

独り言を呟きつつ、エルフィーナが必死に書類を、潤んだ涙を拭きながら片付けていた。

すでに、正美が死んでから二日が経過している。

突然、帰還したアレイクードと他公爵はエメラスの指示により客室に寝かされている。

そして昨日起きたクレイネルに、正美の事を相談した所、すでに手の施しようがないと言われてしまっていた。

考え事をしながら書類を整理しているといつの間にかインクが切れていた。

エルフィーナは、執務室の机の中からインク瓶を取り出そうとすると、小さい額縁が視界に入った。

気になり、手にとって入っている絵を見るとそれは魔流術で精巧に書き写された１０歳くらいのアレイともう一人、見たこともない女の子が映っていた。

「この女の子は？」

エルフィーナは考え込むが、こんな女の子を見た事がない。

それに、黒い瞳に黒い髪という女の子はこの世界では特徴的すぎて忘れたくても忘れられない。

だが、心のどこかでこの女の子を見た事がある気がする。

「こ、この子ってまさか・・・・・・。」

そう、エルフィーナの中で、この女の子は正美を小さくすると似てると思ったのだった。

封印された記憶　前編

何時の頃からだったろうか？
それは唐突に現れた。
そして、それが彼女と分かれる切っ掛けになった。

「アレイはまだ見つからないのか？」

赤い髪をした３０歳ほどの男性が、周囲に控えている執事に聞くが執事はまだ見つからない事を報告をすると手の余ってる者達へ探索をするように指示をする。

「まったく、公爵家の跡継ぎともあろう者がこのくらいで音をあげるとは…　…。」

男が独り言を言っていると、後ろから女性が歩いてくる。

「貴方（ウエス）、アレイにまた剣術を教えてるの？あの子はまだ８歳なのよ？まだ、早いわ」

「エメラス。アレイには間違いなく、剣術には関して天賦の才がある。それはお前も言っていたではないか。それに、貴族という地位にいる限り、いつ何時命を狙われるかわからん。お前も、時間がないのだろう？私も、いつまでもアレイを守れるかわからん。」

エメラスは、ウエスのその言葉に暗い影を表情に落とした。

「でも、まだアレイは遊びたい盛りなのです。それなのに、無理に

剣や勉学を押し付けるのはいい事なの？」

「エメラス。貴族と言うのはハッキリ言えば、必要の無いものだ。だが、国がこのような体制を取っている以上、領民が少しでも安心して暮らせるように上に立つものは優秀でなければならない。無能な支配者ほど害の無いものはない。それに、貴族そして王族は領民の納める税で生活を支えられている。そこに私情を挟むわけにはいかないのだよ。」

「それでも、あの子（アレイ）には、少しでも幸せになってほしいの」

「ああ、だが時代がそれを認めてはくれないだろうな。」

その頃、アレイは屋敷からかなり離れた草原の川原でボーっと川を見ていた。

「父上はきっと僕の事が嫌いなんだ。僕は、人を傷つける剣術なんて嫌いなのに、なんでなんで無理やり…え？」

アレイは突然、目の前の光景に唖然としてしまっていた。
数百に及ぶ見たこともない幾何学的な魔法陣が、寄り添うようにして空間上に瞬時に出現すると同時に積層型の魔法陣になっていく。
そして、その魔法陣の中心が白く光ると同時に一人の女の子が通り抜けてくる。
その女の子は気を失っているのか瞳を閉ざしたままであった。
女の子が魔法陣から完全に抜け出ると同時に魔法陣も自動的に消滅

してしまっていた。

そして、意識を失ったままの女の子が川原に倒れそうになった所をアレイは辛うじて倒れないように支える事が出来た。
アレイは、女の子を川原にある大きめの石にマントを折り枕のようにしてから寝かせて様子を見ることにした。

アレイは、女の子の容態を見ると父親に教えてもらっていた事を思い出しながら、どこかに怪我がないか見ていくが特に怪我らしい物は見つける事が出来なかった。
しばらくすると、女の子はゆっくりと瞼を開けた。
丁度、アレイが覗き込んでる体制だった事もあり女の子は驚いて上半身を上げるとアレイの額と女の子の額が当ってしまう。

「あ！」

アレイは思わず、女の子が痛みで泣き出すと思い身構えてしまっていた。
貴族の同年代の女の子と遊んだことがあるアレイにとって、泣き出すと手がつけられなくなる女の子というのは恐怖の象徴としてトラウマだったからのだが…　…。
アレイの想像とはまったく違う行動を女の子は見せたのだった。

這う様にアレイから距離を取ると、女の子は自分の肩を抱いて怯えた表情でアレイに向かって何度もごめんなさいと呟いてきたのだった。
怯えた瞳と表情で見られた事の無いアレイはショックを受けながらもどうにかしようと思案してると、父親から先日習った、魔流術を思い出した。

アレイは女の子から視線を逸らさないように術を発動させる。
同時に、火で編まれた鳥が何羽も空に向かって羽ばたいていく。
魔流術の中では初歩の術であり、大道芸でも使われる術なのだが女の子の機嫌の取り方を知らないアレイに取ってこれが一世一代の大技だった。
はたして・・・・・・。
アレイは女の子の方を見ると、呆気に取られたような顔でアレイを見ていた。
そこにはすでに怯えや恐怖と言ったものが見られなかった。

「私と同じ？」

突然、女の子がそんな言葉をアレイに向けて発してきた。

「えっ！？」

アレイもその言葉に驚いてしまっていた。
いくら初歩の魔流術でも、ある程度素質がある者ではないと仕えないと父親に言われていたからであったが・・・・・・。

「お前も出来るのか？」

アレイは素直に女の子に聞いてしまう。

「私は、正美。正美って呼んでくれる？」

そう言うと正美と言った女の子は初めて、アレイに向けてニッコリと微笑んだ。

「あ、あの、ぼ、ぼくは、え、えっと・・・・・・。」

アレイは、その微笑に顔を真っ赤にしてしどろもどろになってしまう。
そしてアレイのその様子を見た、正美は楽しそうに微笑んだ。
アレイはそれを見て、心臓がドキドキしてきて考えが纏まらくなってしまう。
よく見ると、正美という女の子は多少どこかで転んだのか薄汚れてはいるが、黒い綺麗な瞳とやさしげな表情に腰まである黒髪が光輝いてとても幻想的にアレイの瞳には映った。
そして、あまりのテンパりぷりに・・・・・・。

「好きです。僕と婚約してください！」

とある意味いろいろ、途中経過を吹っ飛ばして告白をしてしまっていた。

封印された記憶　中編

私は生まれてから小学校に上がるまでは普通の子供だった。
そう思っていた。
でも、違った。
私には、他の人には見えない世界の構成が見ることが出来た。
何故だかは知らない。
でも、私は特に気にしなかった。
黙っていれば、誰にも迷惑もかけないから・・・・・。
でも、それは一つの事件が切っ掛けで変わってしまった。
私を含めて三人で帰宅途中に、小学生低学年を狙った犯罪者に私達は拉致された。
車の中に無理矢理、入れられて怒鳴り声とナイフで一人の男性が静かにしろと命令してきた。
私達は一瞬何の事が理解出来なかった。
その直後、不安から私の友達の由香里が泣き出し、中々、泣き止まない事に痺れを切らした一人の大人の男性が由香里を殴っていた。
大の男に殴られた由香里は、後部のシートでぐったりとして意識を失っていた。
私は、目の前が真っ赤になり・・・・・・。

気がつくと私は、病院のベットで寝ていた。
目を覚ますと、お父さんとお母さんが黒いスーツを着た数人の男の人と暗い顔をして話をしていた。
私は、何気なく何を話しているのかと思った途端に声が聞こえてきた。

「ええ、ですから、あなた達のお子様は私達が責任をもってお預か

りします。」

「お断りします。娘はまだ6歳になったばかりなんです。」

正美の母親が、毅然とした表情で男の申し出を断る。

「ですが、これは政府としての決定なのです。あなた達のお子様は三人の人間を消しているんですよ?そんな危険なモノを国としては放置しておくわけにはいかないでしょう?それにあんな化け物を側においておいたら（バシッ）」

途中で男の声が、正美の母親のビンタで止められる。

「私の、大事な娘を化け物?貴方達は何様のつもりなんですか?一体何なんですか?あの子は被害者なんですよ?」

「ええ、分かってます。たしかに被害者ですね。拉致をしようとした成人男性を殺してさえいなければね…　…。それに、あの子のお友達の一人もそれに巻き込まれて死んでいますしね。そうですね、たしか厳島呉羽（いつくしまくれは）さんと言いましたね。」

え?くれはちゃんを私が殺した…　…?どう言う事?なんで?どうして?どうして?

「お・・・か・・・あ・・・・・・・さ・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

その声と同時に両親と黒いスーツを着た男達は怯えと恐怖を顔に貼り付けて正美の方を見た。

正美が寝ているベットの周辺には強化アクリルが何重にも組まれており、音を遮断しているからだ。
それが、まるで正美の両親とスーツを着込んだ男達の脳裏に直接声が降って来たのだった。

「ま、まさ・・・か。ＰＳＩ能力なのか?そんな話は聞いてない！」

スーツを着た男達が途端に狼狽し出す。
そして、その様子と顔を見た途端に、記憶が断片的に浮かび上がってくる。

そう、あれは・・・。

「ゆかりに何をするの！」

私は、由香里を殴った男に文句を言うと、男がナイフを私の前でチラつかせてきた。

『…　…。』

その言葉を最後に私の意識は闇に飲まれた。
私は、自分が行ってる事をまるで他人事のように見ていた。
唐突に私が、目の前でチラつかせていたナイフを掴む。
驚いた男がナイフの動きを止めるが、すでに私の手からは血が一筋流れていた。
男が驚いたように私を見た途端、その顔が恐怖の色に染まり、そのままワンボックスカーの一部が男と共に不可視の圧力を掛けられた

かのように潰れた。
幸運だったのかまだ車は走ってはいなかった。
もう、走ろうとしても車の一部がプレス機にかけられたように?ぎ取られてる状況では走る事も出来ないが・・・・・・。

運転席にいたもう一人の男性が私の事を見て、引き攣ったような顔をすると逃げようとした。
私は血がまだ止まっていない右手を男の人へ向かって振るった。
その途端、車のドアを開けようとした男の人が力を失いゆっくりとハンドルに倒れこんだ。
それと同時にパアアアアアアと車特有の音が鳴り響く。

「ま、ま、まさみちゃん?」

声が聞こえてくる。
誰だろう?どこかで効いた声?
私は薄れ行く意識の中で声のした方に視線を向けると、男達と同じように恐怖に彩られた顔で私を見てるモノがいた。
ちが・・・・・・う・・・・・・。
あれは、友達の呉羽(くれは)ちゃん。
私が見てる前で、私の体は私の意志を無視して呉羽ちゃんへ手を伸ばしていく。
私はそれを見てゾッとした。
男の人達みたく、私が私が殺してしまう。
そんなのは嫌だ、嫌だ、嫌だ。
誰か助けて、助けて、助けて!
心の中で何度も何度も叫ぶ。
そして、私の右手が呉羽ちゃんの首にかかる。
私の口元は笑っていた。

そう、貪欲に何かを貪るように笑っている。
ダメ。ダメ。ダメ。
何がダメか分からない、そのうち体中が熱くなってくるのが感じられた。
ハッと気がつくと呉羽ちゃんの体の大半が石になっていた。
呉羽ちゃんの体が石になるにつれ、体が熱くなる。
それに連れて呉羽ちゃんが石になっていく。
私が気が狂いそうになった。
大事な友達を自分で殺す事に対して、恐怖と愉悦が綯交ぜになった感覚を得ていたから・・・・・・。

動いて、動いて、動いて！
こんなの嫌。こんなの嫌だよ！なんでこんな事になってるの？
夢なら覚めて、誰か助けてよ！
そして・・・・・・。

「い、いやあああああああああ」

私の絶叫と同時に、呉羽ちゃんは石となって砕け散った。
そして、私は記憶を失ってここにいるの？それじゃ私は・・・・・・。

そこまで考えた所で病室にガスが充満してくる。
そしてその構成すら、私には視る事が出来た。
私はその瞬間理解した。
私は生きてたらいけない存在なんだと・・・・・・。

封印された記憶　後編

赤い髪をした少年が私の瞳を真っ直ぐに見て、告白をしてきた。
婚約と言う言葉は、研究施設にいる間、人の言葉を聞いて理解してるつもりだった。
その言葉が私に向けられるまでは・・・・・・。
私は、少年の瞳を見返すと、そこには恐れや怯えなどと言った光は見受けられない。
とても強く、どこまでも真っ直ぐでいて炎のような力強さが感じられる。
その瞬間、私は理解した。
きっと彼だけは私を・・・・・・。
だから私は一つのお願いを彼にした。

「ねえ？貴方は私を・・・・・・。」

・・・・・・。

・・・。

そこで私は目を覚ました。
私の寝顔を、いつもの者が覗き込んでいた。

「人の寝顔を見るなんて、煉獄（エウ）の審判神（メディア）ともあろう者がずいぶんと悪趣味なのね？」

私の言葉に、紅の髪をした妙齢の女性がその表情に影を落とした。

「そうやって、汝は全てを一人で抱え込むつもりなのか？」

私は、その言葉に虫唾が走った。

偽善もいい所だ。こいつがこいつが全てを・・・・・・。

「一人で抱え込む？貴女に今更そんな事を言える権利があるというの？

貴女だけには言われたくないわ！全ては貴女が原因なのに！」

私の言葉に、エウメディアは一言も反論しない。

それが余計に私を苛立たせた。

その頃、アレイクードは、正美のベットの上で倒れこんでいた。

丁度、正美に覆いかぶさるように・・・・・・。

そして、そのアレイの顔は丁度、正美の胸に埋もれるような形で心臓の動く鼓動を聞いていた。

とくん・・・とくん・・・。

弱弱しいがそれは確実に動いている。

そして・・・・・・。

「んっ。」

正美が一瞬、悩ましい声を上げてからゆっくりと瞼を上げていくと、

アレイクードの顔がドアップで視界に入ってきた。

へっ？

一瞬、正美自身何が起きたのか理解出来なかった。

理解出来た途端、顔が真っ赤になってしまっていた。

おい、なんで俺、こんなに胸がドキドキしてるんだ？
ま、まさか何かの病気か？
自問自答しながらも、アレイの寝顔から視線を外せない。
良く視ると、いつもは大人ぶった印象を受ける顔からは想像が出来ない程の顔をしていた。
泣きそうな表情と言えば分かるだろうか？
その表情に胸の奥がキュンとした正美は気がつくとアレイの後頭部に両手を回すとそのまま、後頭部を撫でていた。

「はっ！俺何してるんだ。男相手にこんな事をするなんて。」

まぁ悪くは無い撫で心地だよな。
正美は自分の心の変化を素直に感じていたのだが・・・・・・。

「お姉さま！お姉さま！正美様が！正美様が！」

と騒ぎ立てる声が聞こえてきた。
ギギギギギと油が切れたロボットのように声のした方向を見るとイリシアが口元に掌を当てているのが見える。
そして、その後ろでは怒りと安堵と心配の綯交ぜとなったエルフィーナが立っていた。

俺は、それを見た途端に今、俺は自分自身でアレイの顔を自分の胸に当ててる事に気がつく、カーッと羞恥心から顔を真っ赤にしてしまった。
そして、アレイを見ても、気持ちよさそうにぐっすりと熟睡モードに入っていてフォローを期待する事は出来ない。
どうやって、二人に説明しようと試行錯誤してるところで、突然、

一つの影がエルフィーナとイリシアの後ろから飛び出してきた。
そして、アレイがそのまま、その影にお腹を蹴られてゴロゴロとベットから落ちるのが視界内で確認できた。

「正美ちゃん！」

俺の名前を呼んできたのは、過剰なスキンシップがちょっと問題な由香里さんだった。
良く見ると、由香里さんの瞳は充血して赤くなっていた。
それってどこの魔眼？っていうくらい赤くなってる。
たぶん、俺が死んでた間に一杯心配を掛けたんだろうなと思った。
きっとすごい怒られると半ば、予想していたのだがまったく違う言葉を掛けられた。

「ごめんね。私がしっかりしてれば・・・・・。もう絶対に離さないからね！正美ちゃん専属のメイドになるから！」

は、はい？専属メイド？ちょっと何を言ってるか良く分かりませんねー。
と心の中で俺は突っ込んでいたが、扉の所で立っていたエルフィーナは俺の方へツカツカ部屋の中を歩いてくると俺を由香里さんから奪い取った。

「正美様、申し訳ありませんでした。ですけど、アレイ様もお目覚めになられたと父（クレイネル）に聞きましたので、私も本来の正美様専属メイドとして仕える事ができます」

イリシアはそのエルフィーナの言葉に、２週間前に解雇されたばかりなのに先輩どういう頭の構造してるんですかー？と心の中で突っ込みを入れていた。

そして、その様子をルアカーゼは静かに部屋の隅で座って見ていた。

封印された記憶　後編（後書き）

ちょっとシリアス展開が多かったので少し息抜してみました。

試練　前編

いま、正美が寝ていた部屋は混沌としていた。

「由香里さん！貴女はもう雇用期間は過ぎてるはずですよ？」とエルフィーナが由香里に向けて言い放つ。

「私は、エメラスさんに正美様の面倒を見るようにと言われてますし、延長許可ももらっています！
貴女こそ、問題ばっかり起して左遷されたのに何を言ってるんですか？」

由香里のその言いように、エルフィーナは眉がピクッと動く。

「由香里さん、一度貴女とは正美様を掛けて白黒つけないと行けないと思っていました。」

「奇遇ですね、私もそう思っていました。」

買い言葉に売り言葉状態でさらにヒートアップする現状を見て、正美とイリシアは止める事も出来ずにいたが…　…。

『うるさいぞ、人間ども。しばらく静かにしていろ。』

全員の脳裏に直接、声が降る。

全員が、声の主の方へ視線を向けると白い小動物であるルアカーゼ

が部屋の隅に座っている。
正美もルアカーゼの方を見るが、何かが違ってる事に眉を寄せていた。
そして、それを見たルアカーゼもその事に気がつく。

『正美、汝との契約は汝が一度死んだ事により破棄された。
それにより、すでに肉体を失っている我は日が立つ毎に力が失われている。
我としては、汝と再契約をしたいと思っているが汝はどうだ?』

契約が消えた?
力が日が経つごとに失われていく?

「ルア、もし俺と再契約をしない場合、お前はどうなるんだ?」

『我と契約をするに価する者が現れるまで眠りにつくことになる。
契約をしない状態で汝を守るほど、我も余裕はない』

つまり、俺のボディーカード役がいなくなるって事になるわけか…。
奈津美を助ける為には、少しでも戦力があったほうがいいし…。

「わかった、ルア。再契約をしたいんだが、どうすれば?」

俺のその言葉に、ルアカーゼが分かったという風に首を縦に動かす。

『正美、古来より我々、幻獣は強い者に忠誠を近い、契約を交わす。
汝が我と戦い勝てばそれで契約は成立する。』

その言葉に部屋の空気が凍りついた。

「ルアカーゼ殿、それは無理です。無謀すぎます。正美様に死ねと言うのですか？」

「そうです、正美ちゃんが怪我したらどうするんですか！」

エルフィーナと由香里が、ルアカーゼに詰め寄る。

その行動がルアカーゼが視線を向けただけで止められてしまっていた。

『我の力が減衰したと言っても、異界から召喚された当代の原書（オリジン）と混血のエルフ如きがどうにか出来ると思ったか？

さて、正美、汝の力を見せてもらおうとしよう。』

俺も、ルアのその言葉に顔を真っ青にしていた。

どこかのアニメみたいに軽く契約出来ると思っていたのだが、まさか、戦って従わせろと言うとは思わなかったからだ。

「ま、まて、ルア。一応、俺は今は女なわけであって戦いは知らな…『正美くるぞ！』」

俺が、話してる途中で、いつもの寄生虫の声が聞こえたと思った途端、突然横から圧力をかけられて、部屋の壁が外に向けて爆ぜる。

同時にベットに乗ったまま、外に放りだされていた

部屋は2階に位置しており、慣性に従って1階の庭にベットが叩きつけられ、そのまま俺はベットから放りだされ…　…。

「あのやろう」

俺は悪態をつきながら、着地に失敗してしまい地面に背中から叩きつけられる。

そして正面を見ると白い長髪とタキシードを着た男の姿にルアカーゼはその身を変化させていた。

『ここならば、問題ないな。さて、正美、汝の力を示してもらおうか？』

そういうと、ルアカーゼが、大地に手を当てて一本の白く輝く剣を作り出し俺の方へ走ってくる。

「ま、まって。落ち着け！話せばわかる！むしろ話さないと俺が死ぬ！」

当然の事ながら俺の言い分はスルーしてルアが目前まで迫ってくる。恐怖のあまり、俺は後ろを向いて逃げ出すと、ルアの持つ剣は、残像を残し運よく避けた俺のいた場所へ突き刺さり地面が爆発した。走りながら見ると、直径数メートルのクレーターが出来てる。

「ううお、あれ受けたら死ぬだろ！っていうか絶対死ぬ。無理、絶対無理。日本人の一般成人男性の俺がなんとか出来るレベルじゃないって！」

その頃、エルフィーナ達は、地面が爆ぜた音で由香里とエルフィーナがは目を覚ましていた。
すでに二人は、正美を助けようと部屋に張られている結界を壊そうとしていた。

「なんなの？これ？こんな強度の結界なんて見た事も聞いた事もな

いわ」

エルフィーナが、結界を素手で壊しに掛かっているが、まったく揺らぎもしない。それればかりか…　…。

「なっ！？幻想技術（フィーナエルガント）が発動しない？一体どうして？」

由香里の慌てた様子にエルフィーナは周囲を見渡して、ハッと気がつく。

「やられたわね。由香里、この結界は中には、魔流術を使うための力が排除されてるみたいなの。だから一切、魔流術も固有能力も発動させる事ができないわ。」

その言葉に由香里の顔は暗い影を落とした。
この世界の力の源である魔流術を使うための根源が封じられているならば、それはまるで普通の人間と代わりがないからだ。

「由香里、イリシアを起して！彼女ならなんとか出来るかも知れ無いから！私は今の現状を維持させておくの精一杯だから。」

「えっ？」

良く見ると、エルフィーナが素手で殴ってる部分と、その他の部分の結界の色の濃さが違う。
それを見ていると、切羽詰った声が聞こえてくる。

「由香里！早くして！早くしないと正美様が殺されちゃう。」

その言葉に由香里は周囲を見渡すと反対側の廊下側の扉付近までイ

リシアとアレイが吹き飛ばされて転がってるのが見えた。

試練　中編

由香里が二人の側に近寄りイリシアを抱き上げた。
気を失ってるだけでどこにも傷跡は見られない。

「イリシア、イリシア起きて！」

何度も声を掛けながら揺するが起きる気配を感じられない。

「一体どうしたんだ？何が起きた？」

アレイが目を覚まし周囲を見回している。
そして、エルフィーナが結界と見られるモノを破壊しようとしたのが視界に入った所で、アレイは立ち上がりエルフィーナの側に歩いていく。
後ろから近づいてくる靴音で、エルフィーナもアレイが目を覚まし近づいてくるのに気がつく。

「アレイ様、大丈夫でしたか？」

アレイの方を見ずにエルフィーナは言葉を紡ぐ。

「ああ、どうやら寝てしまっていたらしいな。何故か腹が痛いのだが、これだけ部屋が壊されてるんだ。何かぶつかったんだろうな」

「え、ええ」

エルフィーナは、由香里がアレイの腹を蹴り飛ばした事は、今伏せておく事にした。

あとで脅迫できるかもと考えたからなのだが…　…。
エルフィーナの返答を聞きながら、結界の中から外を見るとアレイの視界に見慣れない銀髪の男が正美に斬りかかって行くのが映る。

「なっ！」

アレイは驚きのあまり叫び声を上げ一歩踏みだそうとするが結界に阻まれ吹き飛ばされてしまう。

「い、一体どう言う事になっているんだ？」

アレイは疑問を口にする。
その事に、エルフィーナは銀髪の男がルアカーゼと言う事、そして幻獣契約の為に、現在戦ってる事をアレイに説明するが、説明の途中からアレイの顔色が青くなっていくのが手に取るようにエルフィーナにもわかった。

「バカな！一体、一体、何を考えてるんだ！幻獣と契約だと？最下級の幻獣と契約する事すら困難だと言うのに！相手は幻獣王なんだぞ！分かってるのか？最下級の幻獣でも王宮十使徒クラスの実力者ですら契約は無理なんだぞ？自分が何をしてるのか理解しているのか？」

「アレイ様、恐らく正美様は知らなかったと思います。」

「それなら…　…。本来は、契約中に他者が割り入ってはいけないのだが、今回、正美は知らなかったのだろう？なら、今回の契約儀式は無効化できるはずだ。」

アレイがそう返すと、首に掛かっているネックレスを外し体内に流れる力だけをネックレスに流していく。
それと同時にネックレスが２ｍ程の長剣に変化する。

「アレイ様、それは？」

エルフィーナは横目で突然、アレイの手の中に現れた剣を見て疑問を口にした。

「これは、グラムって言う原書（オリジン）だ。どんな結界ですら切り裂く力がある。エルフィーナ下がっていろ」

アレイの言葉に、エルフィーナは自分がいた場所から数歩下がる。
それと同時に、アレイが結界へ剣を袈裟切りに叩きつける。
脳内に直接響き渡る雑音が発生した後、音を立てて結界が砕け散った。

「ふむ、我を結界を打ち破るとはあの人間達め、なかなかの力だな。ならば正美！戯れもこのくらいしてそろそろ本気でいくぞ！」

その言葉に正美は目を見開いた。
すでに来ていた服は、何度も起きた爆風による散弾してきた石と地面を転がっている為、ボロボロになっている。

「はぁはぁ、冗談じゃない…。今までが戯れだって言うの『正美！左へ飛べ！』」

頭の中で声がした途端に左へ正美は飛ぶ。
それと同時に、自分がいた所を衝撃波が駆け抜ける。

「こ、今度は衝撃波かよ。いい加減にしろよな…　…。こんなの一発でも喰らったら死亡じゃないかよ。」

『愚痴を言ってる暇があるなら、精神を集中させろ！相手の次の動きを読め！フォースを感じるんじゃ！』

最初はなんとなく分かるが、最後はわかんねー。

『後ろに飛べ！しゃがめ！右へ避けるのじゃ！』

うお、くは、はあ！
頭上から１ｍ程の氷で出来た槍が降り注ぎ、不可視の刃が頭上を通り過ぎ、右へ避けた瞬間、地面から岩で出来た槍が生えて突き出てくる。

「もうなんなんだよ！もう無理だって！絶対無理！避けてるだけでも手一杯だって！どうやって力を示すんだよ！」

途端に、足が何かに掴まれる。

「なっ！『まずい、正美！』」

俺の動きが止まった瞬間に、上空から巨大な気流が叩きつけられた。
煙が立ち昇り、晴れた時、そこには３０ｍ程まで巨大化した剣が俺を守るように盾となっていた。

片足を地面に縫い付けられた事もあり、倒れかけた所で後ろから支えられた。

「大丈夫か、正美。」

その言葉を聞いて、死んでた間に見てきた光景がフラッシュバックする。
同時に胸の奥が締め付けられるように痛くなった。

「う、うん。大丈夫…。」

って俺、何を顔真っ赤にして俯いてるんだー。
思わず、心の中で自分に突っ込みを入れてしまった。
あ、そうだ、聞くことがあったんだった。

「あ、アレイ…。体はもう大丈夫なの?痛い所はもうないの?」

って何、乙女言葉で話してるんだー。

「ああ、もう大丈夫だ。それよりもいつもとずいぶん違うな?どうかしたのか?」

アレイが、心配して俺の瞳を見てくると、俺は思わず瞳を挙動不審に動かしてしまう。

「なんでも無いの!べ、別に心配なんかしてないんだから!」

そして、二人の会話をエルフィーナと由香里は、呆然と見ていた。

「あれって一体…？」

「ツンデレって奴？」

正美がアレイに対する態度のあまりの代わりように思わず呆然と呟くとそれに対して由香里はオウム返しのように言葉を返す。

「まったく、幻獣契約の際に、他者介入は禁忌とされているのを知らぬわけでもあるまい？」

煙の中から現れた、ルアカーゼは銀色の長髪を風になびかせながら正美とアレイに声をかける。

「ああ、だが、それはきちんとした契約内容を知ってる場合だろう？お前は、正美にきちんと説明をしたのか？説明していないなら悪いが破棄させてもらう」

巨大化してた剣が２ｍほどの長剣へ変化するとアレイの手元に収まる。

それを見た、ルアカーゼが口元に笑みを浮かべる。

「面白い、外の世界から持ち込まれた聖剣グラムか！久方見ないと思っていたらこんな場所にあったとはな。

いいだろう、お前が我に勝てたなら今回の契約儀式は辞めてやろう、いや、お前が我に勝つ事が出来たなら正美と契約を結んでやろうではないか」

「ずいぶんと大判振るまいだな？後悔すると思うが？」

アレイがそう言った途端、アレイは俺を突き飛ばす。
そして何時の間にか移動してきたルアカーゼが振り下ろした斬撃を長剣を巧みに扱い、威力を受け流しながら懐に入る。

「ちっ、小ざかしい。」

そう言った途端、ルアカーゼの姿がその場が消え数メートル後方へ瞬時に現れる。

『あれでは、勝ち目は薄いのう』

そこで突然、頭の中で声が聞こえてくる。

「どう言う事だ？ルアカーゼが引いたじゃないか？」

『よく見てみるといい。アレイという小僧、今の一撃で勝負をつけるべきだったのだが、それが失敗してああ言う事になっておる。』

アレイを見ると、本来、剣の柄に添えられているはずの左手が力なく垂れ下がっている。

「肩を脱臼した？でも一体なんで？」

『お前を庇ったからに決まってるじゃろうが！あのような体勢では避ける事は不可能、明らかにルアカーゼは正美、お前を狙いにきておる。
お前を守るために不安定な姿勢で受け流した結果、左肩を脱臼したと言う所じゃろうな』

「なんで、俺なんかを守るんだ！俺には守られる価値なんて『正美、いいかげんにするのじゃ、自分を卑下にするのは正美、お主の勝手じゃが、それは、お主を思ってる誰かを貶す行為になると言う事にまだ気がつかないのか？』

「…　…。」

『正美、後悔は終わった後にするのじゃ、お前はあの女から力を返してもらったのだろう？それを使えばいい。』

あの女？俺そっくりのもう一人の俺。
力、そう、力を返すと言われた。
だがそれはどうやって使えば・・・。
早くしないと、アレイが！アレイが！

「どうやればいいんだ？使い方を教えてくれ！」

『ようやく決心がついたか。ならば一度目を閉じろ、そして自分が何を望んでいるのか、本当は何をどうしたいのか、そしてどのような力を欲しているのか心の中で思い描くのじゃ』

正美は言われた通りに、瞼を閉じていく。

そしてそれを見た、由香里が息を呑んだ。

「あ、あれは…。まさかこんな状態で発現させようというの？異界から来た者達だけが持つという心具を。なら、少しでも時間を！」

由香里が、開いた壁から飛び出すと同時に数十に及ぶ、日本刀を空中に作り出しそれを全てルアカーゼに向かって打ち出した。
それと同時に、体中を覆っていた術を解除する。
銀髪の髪が黒い髪にそして、銀色の瞳が黒い瞳に変わる。
同時に、体にフィットするように鎧が構成され、両手には１ｍ５０ｃｍほどの日本刀が再構築される。
刀身は黒く光っている。
そのまま、アレイの前に降り立つと、降り注いだ日本刀を全て弾いたルアカーゼが突っ込んでくる。
そして振り下ろされた白い剣が、アレイに到着する前に由香里の２本の日本刀がその刀身を挟みこみそのまま刀身半ばから切り飛ばした。
同時に由香里の日本刀も耐久力を失い消失する。

「ほう、当代の原書（オリジン）までもが契約の邪魔をしてくるとは思わなかったぞ？」

「別に正美ちゃんのためじゃないから！それにね、同郷の人間を守るのに特に理由なんていらないでしょ？」

二人が話してる間に、突然、ルアカーゼがその場から離れる、同時に土煙が立ち上がりその場から２本の赤い日本刀を持ったメイド、イリシアが立ち上がった。

「由香里さん、何やってるんですか？それよりあの不審者だれなんですか？それにアレイ様まで傷を負って一体…」

直後、ルアカーゼの姿が残像を残したまま、正美に突っ込むが、突然、横から殺気を感じ叩きつけられる前に、片手で防御をするが、圧倒的な腕力で地面に平行したまま殴り飛ばされていた。

「私もいることを忘れてもらっては困ります。」

エルフィーナが、ルアカーゼと正美の進路上に割って入ってきたのだった。

試練　後編

「正美様、そこに立っていると攻撃の的になります。下がっててください。」

言いながらエルフィーナが駆け寄ってくる。
そして、アレイクードの隣に立つと、剣を地面に突き立てて立っているアレイクードの治療を始めていた。
由香里はそれを見ると、姿を消しているルアカーゼの気配を読みながら周囲の空間上にセンサーを展開していく。

「今、正美ちゃんは心具の精製を行っているとこなんです。ですから身動きが出来ません。しばらくは私達が時間を稼ぐしかないです。」

そう言いながら、由香里がアレイクードとエルフィーナの前に立つとイリシアも由香里に並ぶように立つ。

「由香里さんも、正美様と同じ世界の人だったんですか?」とイリシアが疑問に思った事を問うと、由香里がそれを肯定した。

『まったく、人の姿のまま相手をしようと思っていたが…』

その声が聞こえたと同時に、光の粒子が集り5人の前で一体の巨大な白い狼に変化していた。
その姿を見た瞬間、由香里の本能が叫んでいた。
あれは危険だと…。

くっ、あれは冗談じゃな…。

その瞬間、由香里の片腕が宙に舞っていた。

「なっ！そ、そんな！」

自分が展開した空間上のセンサーの伝達速度を遥かに凌駕する速度で攻撃された事、そして由香里自身、この世界にきてから初めての体の欠損と言うダメージで一瞬思考が停止してしまっていた。

続いて、肩口から血が噴出し、地面を赤く染めていく。

「あああああああああああーっ。」

想像を超えた痛みが続いて脳に送り込まれてくる。

由香里は右肩を抑えながら倒れこむ。

「ば、ばかな。攻撃した瞬間すら見ることが出来ない…だ…と？」

アレイクードは、自分の視界で映った事に驚愕していた。

どんな攻撃でも、相手に当てる瞬間には見る事が出来るはずなのだが、見ることすら叶わない事に。

『我の契約儀式をまだ邪魔をするならばこの程度では済まない。すぐに立ち去るならば命までは取る事はせん。』

「冗談じゃないわ！ここで引いたらお姉さまに怒られるし、それより私のプライドが許さないわ。」

そう言った途端、イリシアの姿も掻き消える。

周辺で、剣戟の音が鳴り響く。

「エルフィーナ、私はもういい。早く、由香里の容態を見てくれ」

「はい。」

エルフィーナが、由香里の容態を見ようと体を起すと肩半ばから引き千切られていた。
その傷跡からは血が次々と滴り落ち地面を赤く染め上げていく。

「こ、こんなの高位司祭が扱う修復魔流術じゃないかぎり無理よ！」

エルフィーナが悲鳴を上げるように声を絞りだす。
そして、ギィィィンと音が鳴ると同時に、近くの木にイリシアが叩きつけられた。
それと同時に、口元から内臓が傷ついたのか血を吐き出し、糸を失った人形のように地面に倒れた。
そして。両手に握ってる赤い双刀も一本が砕けており、もう一本は全体にヒビが入っている。

『さて、ここまでか？人間にしてはがんばった方だが…』

少しづつルアカーゼが、正美の方へ近づいていく。
それをアレイ一人で押し止めようとしている。

正美は焦っていた。

音だけしか入ってこないが、悲鳴が立て続けに聞こえ少しずつ周囲の力ある者の気配が薄らいでいく事に…。
どうすればいい？
何をイメージすればいい？
何を俺は望んでいる？
俺は一体どうしたいんだ？
早くしなければ、早くしないと皆がみんなが、俺のために、死んでしまう。
俺なんかのために！

叫び声が聞こえた。
無意識に瞼を開けてしまっていた。
同時に視界に入ってきたのは、アレイクードの心臓の位置から一本の角が背中から生えていた光景だった。

「えっ…。」

角が背中から消え、巨大な白い狼がアレイを飲み込もうとした所で横からエルフィーナがルアカーゼを殴りつけるが微動だにしない。
驚愕の眼差しのまま、ルアカーゼが振るった尻尾がエルフィーナの首を叩きつけると、ゴキッという鈍い音が辺りに鳴り響きそのままエルフィーナが館の壁に叩きつけられた。
周囲を見るとイリシアも由香里も血の海に沈んでいた。

「い、いや。あ、あ、あ、あ」

『落ち着け、落ち着かんか、正美。お前がする事をわすれるのではない。』

正美の中で必死に、煉獄（エウ）の審判神（メディア）が正美に声をかけるがまるで効果

が無い。

（俺のために皆が死んでしまう、死んでしまう、死んで、死んで、死んで…）

『まずい、錯乱しておる。妾の声が届いておらん。』

ルアカーゼはそのままアレイを蠅でも払うかのように弾くと地面にアレイは叩きつけられるが！アレイは剣を杖代わりにして立ち上がる。

口からは血が流れており、致命傷だと言うのは誰でも分かるが…。

『まだ、我と殺り合うと言うのか？力の差は歴然というは理解しているだろう？』

その言葉に反応せずに一歩一歩、アレイクードは歩みを止めずに正美の前に立つと両腕を広げてルアカーゼの前に立ち塞がった。

「ああ、理解してる。だがな、自分が惚れて告白したんだ。だから自分の女を守るのが男だろうが！たとえ、この命が消えても正美は守って見せる！」

『そうか、ならば貴様から死…な、なんだと！？』

ルアカーゼの周囲に、幾数条の糸が張り巡らされていた。

「ようやく間に合ったわね。これでしばらく時間が稼げるわ。」

その声の方向に視線を向けると、由香里の仲間達が敷地内に立っていた。

「ウーネイ！すぐに由香里と怪我人の治療をしてくれ。この化け物をいつまでも抑えておく事はむずかしい」

「ああ、わかった。イスピル、お前も手伝え、由香里の腕を接合するからすぐに拾ってきてくれ」

二人はすぐに行動に移すと、由香里の腕の接合を始めた。

それを見ながらガイアスは、目の前のルアカーゼを見上げた。

『なるほど、エルフの悠久束縛の魔術か。これなら我をしばらくの間は足止めする事は可能だ、だが、女。貴様のその矮小な魔力ではもって数十秒と言った所であろう？

この束縛が解けた時、貴様達、ここにいる者全てが死ぬと言う事を忘れるな。神聖なる契約の儀式を邪魔した罪は重いぞ？』

その言葉に、ガイアスが目を細めると懐から一つの指輪を取り出す。

「これが何か分かるか？化け物。全てを塵と化す白炎の原書（オリジン）、これは、体内の力を注ぎお前のような化け物に投げるだけで効果が発動する代物だ。国から出る時に何かあった時にと教皇様が渡してくれた物だったがまさか使う事になろうとはな…。」

それをガイアスが振りかぶり、ルアカーゼに投げるとそれと同時に白い炎がルアカーゼを飲み込んでいく。

「はぁはぁ」

リメラは魔力が尽き、地面に座り込む。

「大丈夫か？リメラ。」

「え、ええ。それより、あいつまだ生きてるわ。」

「なんだと？」

白い光が消えた後、体中が黒く染まったルアカーゼが立っていた。

『たのしいぞ、ああ、饗が乗ってきたぞ？ここまで我と戦えた者は我が主を抜かすと貴様らくらいだ。さあ、もっと戦いを楽しもうではないか！』

その頃、正美は倒れてきたアレイを支えていた。

「あ、アレイ。なんで私なんかを…。」

「約束しただろう？お前を何があっても守るとそれとも忘れてしまったのか？」

「わかんない、わかんないよ、何で私なんかを助けるの？なんで私のためにここまでしてくれるの？」

「それは、カハッ。」

言葉の途中でアレイが血を吐き出す。すでに正美が来ている服はアレイの血で真っ赤に染まっていた。

「だ、ダメ。無理に話したらダメ。」

正美がアレイが話さないように抱えなおそうとすると、死の直前の力とは思えないほどの力で正美の手がアレイの手で握りしめられた。

「いいから、聞け。俺がお前の全部を肯定してやる。どんな時でも、全てが敵に回っても俺だけはお前を信じる。もし、お前が道を誤った時はあの約束を果たしてやる。
だから、お前は自分の信じた道を進めばいい。わかった…な……」

その言葉を最後にアレイが瞼を閉じてしまう。
俺が周囲を見ると、ルアカーゼと知らない人たちが睨みあってる状態だった。

由香里も、イリシアもエルフィーナもそして、アレイも俺を守るために戦ってくれていた。
俺は何も出来ずに守られているばかりだった。

俺は一体何をしていたんだ。
俺が心から本当に望んだ事は！

その瞬間、もう一人の俺が視界の映りこんでくる。
そして寂しそうに俺を見て微笑みかけてきた。

「貴女はやっぱり、その道を選ぶのね。だから貴女には渡したくなかったのに…。
でも、貴女がそれを決めたなら私も覚悟を決めるわ。さあ。貴女の

本当の願いを言って！私に聞かせて！」

その言葉を聞いて、俺の力強く頷く。

皆を守りたい！

皆を救いたい！

皆と繋がり心を通わしたい！

だから、だから、だから！

全てを守る力を、全てを守護する力を、全てを癒す力を！

これが俺の望む答えだ！

だから、俺に力を貸してくれ！

突然、周囲に暖かな風が吹く。

同時に周囲の破壊された館や、怪我をしたイリシア、エルフィーナ、由香里の傷がみるみる修復されていく。

そしてアレイの怪我も修復されていく。

『何？こ、これは？』

ルアカーゼも風が送られてくる方向へ視線を向けるとそこには、光

輝く2枚の翼を背中から生やし、歌を口ずさんでいる正美の姿が視界に入ってきた。

『癒しの風だと？否、これは、そんな生易しいモノでは…。だが、ようやく我が主らしく…くっ。』

突然、歌の戦慄が変わる、同時にルアカーゼの視界内で、光り輝く翼が紅色に染まっていく。
紅の翼が燃えるように光り輝く。

「煉獄（エウ）の審判神（メディア）、しばらく力を貸してもらう。」

『いいだろう、妾もひさしぶりにルアカーゼと戦ってみたかったしのう。じゃが気をつけるのじゃ、妾の力は人の身では余りある。恐らく今のお主の力では一撃が限界じゃ』

「ああ、わかった」

俺は視界を一度閉じ、黒の巫女姫の力にアクセスする。
そして、瞼を開けると周囲の景色がいつもの見てるモノとまったく違った物に見える。
全ての構成が、グラフで数値で表示されていく。
そしてルアカーゼの姿が消えた途端、視界の数値が変化する。
そして、俺の視界には、次の瞬間に現れるルアカーゼの位置と姿が表示された。

「いくぞ、煉獄（エウ）の審判神（メディア）」

手の平に、巨大な煉獄の炎の剣を顕現させ、これからルアカーゼが現れる所へ振り下ろす。

と同時にそこにルアカーゼが現れ、驚愕の眼差しのまま俺の煉獄の剣をまともに受けて、ルアカーゼは館に生えている木々を薙ぎ倒しながら館の強固な壁を破壊し地面を削りながら止まった。

『よくやったのう、正美。』

「ああ、なんとかな…。」

周囲を見ると、俺が使った固有スキルで死人はいないようだったが、今、壊した壁を修復する力は残っていない事に気がつきながら力尽きるように俺は倒れこんだ。

そして、正美の周囲を光り輝く燐分が雪のように降り注いでいた。

仕組まれた罠

ルアカーゼと正美の再契約からすでに二日が経過していた。

あの後、駆けつけたクレイネルとエメラス指示により館に残っていたメイド達が正美を始め怪我人をベットまで搬送し、ガイアスを始めとする由香里の仲間達は、エメラスに捕まって尋問に近い質問を受けていた。

正美が発動した固有スキルのおかげもあって、正美以外は全員がその日に目を覚ましていたが、その日は安静を取る事となった。

そして、たった今、執務室では由香里を含む、ガイアス達がアレイクードに質問されていた。

「なるほど、つまり王宮の禁書図書館は襲ってはいないと言う事か。」

どちらにしても王宮がある首都イースバールは消滅した事はすでに確認されている。

すでに禁書図書館がどうとかと言う問題はとうに過ぎている。

それよりも王都が消滅し、国が傾きかけてる現状の情報が流れる方がずっと問題であった。

今は、他国から介入を如何にして防ぐかが焦点になっている。

そのため、他の3公爵に自領地に戻り対策を講じている。

「わかった。それで、始原(ノア)原書と言ったか？やる事は出来ないが、貸し出す事ならば出来る。

由香里殿が元の世界へ帰るのに必要ならば、正美の同郷と言う事も

ありしばらく貸しておくが？」

その言葉に由香里は苦笑した。

つまり、アレイクードはこう言ってるのだ。

正美が担保としてここに滞在してる限り貸してやると…。

「いえ、大丈夫です。代わりに正美さんを私達が引き取りたいと思っているのですが？どうもここでは籠の鳥のように扱ってるようですし、本人も外で暮らしたがっていますから。」

その言葉にガイアス達も、目を丸くしてしまっていた。

由香里の話を直訳すると、正美がここは窮屈だから出て行きたいと言ってるから正美を連れていきたいですとなる。

お、おい…。

ガイアスが小さく由香里に話かけるが、その目を見た途端に断念した。

由香里の目が我が侭な目になっていたからだ。

「それは、許可できないな。」

アレイも即答する。

「正美はここにいる方が幸せだと俺は思っている。」

「それは男の人の理屈です。それを押し付けるのは傲慢だと思いますが？」

途端に部屋の空気が冷たくなっていく。
由香里としては、正美がこの屋敷から出ていきたいのを理解していたからこその言葉だったのだが…。

「少し、いいでしょうか？」

エメラスが一歩進み出て、由香里とガイアス達４人に一枚づつ紙を配っていく。
そしてそれを見た瞬間、由香里たちがその紙を見て氷ついた。

「こ、こ、これって？なんか０がたくさんありますけど一体？しかも請求先が正美さん宛てになっていますけど？」

その言葉に、エメラスは得意げに頷く。

「それは、正美様の使役獣のルアカーゼさんが商業都市フェルンを壊滅させて請求された金額になりますわ！」

エメラスの高笑いするオホホホホという笑いがこの場に響くようであった。
実際そんな笑い声は響いてはいないのだが。
由香里がガイアス達を見るとお手上げポーズをしていた。

（ご、ごめんなさい、正美ちゃん。私は無力だったわ。さすがに２兆円ものお金を融通することは出来ないわ。強く生きてね…。でも、なら！）

「それなら、しばらく、私達を用心棒として雇いませんか？人手が足りないようですし！」

その言葉に、アレイがゲンナリしながらエメラスを見ると何かを思いついたかのように瞳をキラキラさせていた。
それを見て、盛大な溜息をアレイはついていた。

「いいわ、丁度、メイド達が足りなかったから皆、採用してあげる！」

その言葉に、アレイだけではなく、ガイアス達がエーっと心の中で叫んでいた。

その頃、正美の部屋では、イリシアとエルフィーナが部屋の中で正美を見ていた。
スーッ。スーッと規則正しい呼吸音と同時に豊かな胸が上下に動く。

そんな背景に、木で作られた十字架にルアが逆さまにされて貼り付けられていた。
首からは、迷惑かけてごめんなさいというプレートが掛けられている。
あの戦いの後、ルアカーゼは、正美の力を認めて再度、契約をしたのだが、何故がほとんどの力を失っており小動物に戻っていた。
その為に、今の現状になっているわけだが。

そして、もう一匹、正美の額の上で着物を着た紅の髪をした女性が座っていた。
胸の上では黒い髪をした少女が胸を枕にして寝ている。

その様子はとっても混沌（カオス）だった。

「お姉さま、なんだか、正美様っていろんな変な物に憑かれる体質なのでしょうか？」

「どうかしらね？」

二人は正美の周囲にいる一匹と二人？の小さい小人を見てヒソヒソ声を交わしていた。

その頃、レイユーズ公爵と娘であるフィンナが乗るアレイクード公爵から貸し出されていた馬車が襲撃にあっていた。

バカな？ここはまだ、アレイクード公爵領地内なのだぞ？

エルハンス王国内でも治安はいいはずがどういう…。

次々と悲鳴があがっていく。

そして扉が開かれた。

「レイユーズ公爵殿ではありませんか？何故アレイクード公爵の馬車で移動してるのですか？」

その言葉にレイユーズも男の顔をじっと見ていると、あることに気がつく。

インフェルノとレイユーズとの連絡の橋渡しをしている男であった。

そして、レイユーズは一部話に嘘を交えて、男に説明をすることにし、話をした。

「そうでしたか、それは良かったです。国の上層部からレイユーズ

公爵には王都へは絶対に向かわないようにとの伝令が出ていたのですが、間に合わずに危険に晒す所でした。ですが、奥方様の静養先を調べるために、アレイクード公爵の領地まで足を伸ばすとは…。詮索はしないようにしておきましょう。」

レイユーズが話しの途中で男を睨んだために話は途中で途切れる。

「そうでした。レイユーズ公爵殿と、会うことがあればと書簡を預かっていたのです。目を通しておいてください。」

「わかった。お前はこんな所で何をしてるのだ?」

「私はアレイクード公爵亡き後の、その派閥に属する貴族達の処理をしています。それでは、その書簡どおりお願いします」

男はそう言うと、馬車を取り囲んだ男達に命令を下し撤退していった。

それを確認した、レイユーズが書簡の中身を開くとそこには、今回の軍事国家レクイエムの宣戦布告は真っ赤な嘘であり、宗主国家インフェルノと手を結んでいた事が書かれていた。

そして、レイゲンの上層部とも手を結んでおり、事実上、エルハンス王国はこの3国に騙された形になっていた。

続きを読んでいくと、エルハンス王国の王都を消し去り国の体裁が保てなくなった国を、インフェルノが統治することになっており、その統治をする者が、他ならぬレイユーズの名前が書き込まれていた。

インフェルノの属国になってしまうが、今よりずっと強い権力を握れる事に、レイユーズの心が動かされてしまっていた。

戦いの序曲

コツコツと乾いた音を立てて、男が進んでいく。

男が進んでいく通路は、何かの施設のようであり両側には人間が入った試験管が数多、並んでいる。

何入ってるのは全て拉致してきた日本人であり、ここの施設は日本という国から巻き上げた税金により作られていた。

全ては、長い年月を掛けて、日本を蝕んできた結果であった。

そして、自国の民すら守れない国を思うと、自然と男の顔に愉悦が浮かんでくる。

男が通路の行き止まりの扉を開けると、そこには一人の女性が巨大なプールの中に数多のケーブルを体中に繋がれて浮かんでいた。

「経過はどうだ?」

男が、近くにいた研究員に話しかけると男は面倒くさそうに話しかけてきた男を見る。

そして、男が誰だかを確認した途端に、顔色を変えて立ち上がる。

「エ、エウルユニス様、本国に戻ったのではないのですか?それにこんな場所にお出でになるとは思いませんでした。」

男が敬礼をしながら言葉を紡ぐ。

「余計な事はいい。それで経過はどうだ?実験はうまくいきそうなのか?」

エウルユニスのその言葉に男は顔色をますます青くしていく。

「は、はい。人格の消去と構築、記憶の改竄は順調に進んでいます。あと一週間あれば、ご希望に沿うように作り変えられるかと…。」

「3日だ！それ以上は待てん。それ以上かかるようならば分かっているな？」

男はエウルユニスの言葉に、頭を上下に振る。

エウルユニスは、口端を歪めると瞳を細くし、浮かんでいる奈津美を見て笑いながら着た道を戻っていった。

その頃、深い深い眠りの中で正美は夢を見ていた。

「誰か…誰か…助けて……。私が消える。誰か助けて…。」

助けを呼ぶ声が、どこまでも沈む意識の中で木霊（こだま）す。

その声は、どこまでも悲しみと絶望に沈んでいる。

俺はその声の主に、耳を傾けようとした途端、自身がいる空間が薄れていく。

それと同時に、助けを呼ぶ声も膜が出来たように聞こえなくなっていった。

「んっ～っ」

ゆっくりと瞼を開けていくと、外から入ってくる日差しが眩しく中々、きとんと瞼を開ける事が出来ない。

再度、瞼を閉じたあと、ゆっくりと日差しに馴れさせ開いていくと、視界の中に黒く長い髪を広げたウェディングドレスを着た長身が５ｃｍほどの少女が俺の胸を枕にして眠りについていた。

『涙か？正美。何か悲しい夢でも見たのか？』

その声が俺の額の上から聞こえてくる。

そして、額の上で衝撃を感じたあと、ドレスを着ていた少女が寝ていた胸と違うもう片方の胸の上にそれが着地した。

良く見ると赤いストレートの長髪を綺麗に腰の位置でまとめており、神楽を舞う服装をした２０歳程の女性が立っていた。

「だれだ？お前？」

『誰だとは失礼だのう。妾は「いい、わかった。煉獄の審判神（エウメディア）か。なんでそんな姿で俺の前にいるんだ？」

『正美、お前が力を使い果たした事で、抑圧されていた我々の力が一時的に使えるようになったのじゃ！それで黒の巫女姫と妾はそれぞれの意識端末を深層意識から外部へ出すことにしたのじゃ！その方が意志疎通が楽だしの』

「そうか、わかった。とりあえず、人に見られると厄介だからさっさと元の場所へ戻れ！」

『いやじゃ、いやじゃ！正美の意識の中は何もなくてつまんなくて、まるでお主の性格を写したような本当につまらない場所なのじゃ！そんなつまらない所に妾を戻すつもりか？』

「つまらなくて悪かったな！それよりようやく目が覚めたって事は

ずいぶん寝てたのか？」

『主は3日程、寝ていたぞ？』

声をした方向を見るとルアカーゼが壁に張り付けにされていた。

「ルア、お前そんな所で何をしてるんだ？」

俺がルアに話しかけた途端に、ルアカーゼを縛っていた糸が焼失する。

『ようやく、力がもどった。どうやら、主の力と我の力は呼応してるようだな。』

ルアカーゼがひらりと絨毯の上に下りると、一瞬光ったあと、銀色の髪を背中に流した美丈夫な男に変化した。

それを見て、俺は思わずドキッとしてしまった。

それを感じたかは知らないが、俺の胸に頭を乗せていたもう一人の黒髪の少女も目を覚ましていた。

『正美～。やっとおきたー。今、大変な事になってるよ。早く戻らないと取り返しのつかない事になるよ！』

そう言いながら、腰まである黒い髪を煌かせながら少女が俺に話してきた。

その頃、由香里とガイアス達はメイド達が着替える部屋に通されていた。

「お、おい。由香里！俺とウーネイとイスピルは大の男なんだぞ？メイド服なんて着れる訳無いだろう？」

ガイアスが切羽詰ったように由香里に意見しているが、エメラスと由香里が何かを話していてその意見はスルーされてしまう。
そして、由香里がニコッとガイアスに笑顔を向けた。
途端、ガイアス達、男性陣はその笑顔に凍りついた笑顔を返す。

「ま、まて。由香里！話せば分かる。そう、俺は分かり合えると信じてるぞ？だから、ちょっと待て！っていうかお前それはダメだろ！やめろって！」

由香里が空間上に数多の文様を作り上げていく。

「だ～め。だって、ガイアスだって、私が嫌だって！言ったのに無理やりメイドにしたし！」

「いや、だからって、今から俺達に掛けようとしてる術は人としてダメだと思うぞ！」

「大丈夫よ、ガイアス、ウーネイ、イスピル。痛いのは最初だけだから？」

「なんで最後が疑問系なんだ？」

ガイアスが思わず突っ込むがすでに三人を数多の文様が包みこみ、光が収まった後、そこにいたのは、２０歳程の女性が三人立ってい

た。

「ふう、なんとかうまく言ったわね！」

由香里はその様子を見て、ニコッと悪魔も逃げ出す笑みで微笑んでいた。

現実の世界へ！

黒の巫女姫と煉獄の審判神（エウメディア）が正美の胸の上から降りた後に、正美はベットの上に座る。
正美が座ったのを確認すると、膝の上に煉獄の審判神（エウメディア）と黒の巫女姫が乗ってきた。

『正美、いい？』

黒の巫女姫が正美に確認すると、正美は話を進めるように頷く。
それを確認した黒の巫女姫は、空間上に指を走らせていく。
指を走らせると同時に光の文字が空間上に書き込まれていく。
数分でそれは完成し、直系２０ｃｍ程の魔法陣が空間に書き込まれる。

それと同時に魔法陣の中心部分が歪み始め一つの光景が映し出された。

「うっ」

その光景はひどいものであった。
数多のガラス瓶の中には、臓器が入っている。
一般人には馴染みの無いものであり、その事で、現在、正美が吐きそうになっているのを堪えてるのを攻められる者はいないだろう。

「な、なんなんだ？これは？」

『ふむ、生物の臓器のようだな。』

正美の後ろから、長身の美男子に変身しているルアカーゼが覗き込んできた。

『これがどうかしたのか？黒の姫巫女よ』

煉獄の審判神（エウメディア）も、特に関心が無さそうに光景を見て黒の姫巫女に話しかけてきた。

黒の姫巫女はその言葉に頷くと別の光景を映し出す。

そこには、一人の女性が透明なケースの中で浮いてる姿であった。

ケースの前で一人の研究者の男と別の男が話してるのが確認出来る。

「あ、あいつは！」

吐きそうになるのを我慢しながらも、正美が見た男は自分が憎んだ男であった。

それと同時に夢の中で見た光景を思い出す。

奈津美を処置しておけと言う言葉。

そして二人の男の後ろにある巨大なケースに浮いてる女性。

髪の毛が揺らぎ、その女性の顔が視界に映る。

「奈津美！」

正美が叫びながら、魔法陣に触るとそれと同時に魔法陣が崩れ消えてしまう。

同時に映像も消失してしまう。

「どう言う事だ？なんであんな場所にいるんだ？おい！」

『正美、以前にも光景を見せたけど、あの男は人間じゃない。それに何かひどい事を考えてると思うよ。
正美も夢の中で見たんでしょ？だから私にも正美の知覚した一部が流れてきて分かったのよ？』

正美は、その言葉にハッと気がつくと額に手の平を当てていた。

「ああ、そうだ。助けを求めていた。自分が消えてしまうって…
…」

『主よ。どうやら、奈津美という雌は記憶もしくは人格を破壊される可能性がある。早くしなければ取り返しのつかない事に成りかねない』

ルアカーゼが、顎に手を当てて、正美に告げてくる。

「人格？記憶？どう言う事だ？魔法か何かが絡んでるって事か？」

『そこまでは分からないが、人間達には人間達の技術があるのだろう？ならば、もう主のすることは決まっているのではないのか？』

ルアカーゼのその言葉に、正美は頷く。

「ああ、奈津美を救い出す！だから力を貸してくれ。」

正美のその言葉に、煉獄（エウ）の審判神（メディア）、ルアカーゼ、そして黒の巫女姫が頷く。

「私達も力を貸します。」

その言葉と同時に部屋の扉が開く。

「正美様、以前助けて頂いた恩を返させて頂きます。」とエルフィーナが進み出てくる。

「お姉さまが行くならっていつもは言うのですけど、命を助けてもらった恩もありますので、私もついていきます」

イリシアも腰に2本の刀を吊るして進み出る。

「やれやれ、仕方ねえな。どうせ、俺達もいくんだろ?」

見たこともない女性4人そして由香里が進み出てくる。

「正美ちゃん、こめんね。立ち聞きしてて…　。奈津美って私のお姉ちゃんの事だよね?それなら私も力を貸す、ううん。お姉ちゃんを助ける為に力を貸して!」

その言葉に全員が頷いた。

「それと、正美ちゃん。なんでお姉ちゃんを知ってるか今度、教えてね?」

「ああ、わかった。」正美はそのまま相槌のように返答する。

そして、ルアカーゼと煉獄(エウ)の審判神(メディア)もテレパシーで話をしていた。

『ルアカーゼ、お主、手駒が必要という判断で立ち聞きしてる者がいた事を知らせなかったな?』

『そうだ、主の身を守るのも我の役目だからな、煉獄の審判神（エウメディア）、貴様も手を抜くなよ？』

『ふん、言っておれ』

『正美～。それじゃ今からいく？』

世界と世界は、上級神ですら、めったに渡ることが出来ないのに、黒の巫女姫はまるでこれからご飯いく～？といった風に正美に話しかけてくる。
その言葉に正美は迷いの無い瞳で応じた。
正美の目の前で黒の巫女姫が消えると同時に頭の中で声が木霊す。

『正美、これから世界を穿つ式の組み方を流すから、私の力にアクセスしてね』

正美が瞳を閉じ、再度開く。
同時に周囲の生物、世界の構成が数値でグラフで視界内に表示されていく。
自然に指先が流れていく。

そして……１０分後そこには数多の魔法陣が空間上に展開されていた。

世界を超える転送門

正美が寝ている部屋は一般の学校の教室並に広い。
今はその部屋中に、数百の魔法式が宙に書き込まれ浮いていた。

『これは壮観だのう』

煉獄(エウ)の審判神(メディア)が思わず感嘆の声を上げる。
その声に、黒の巫女姫が煉獄(エウ)の審判神(メディア)を睨みつけた。

『貴女が勝手にこの世界に来るために私が眠ってる間に力を使ってくれたもんだから、大変だったんだからね！
無意識下でこれだけの魔法公式を組ませたんだから今度、責任取ってもらうからね。」

『わかった。わかった。さて、これで正美たちがいた世界にいけるのか？』

黒の巫女姫は、煉獄(エウ)の審判神(メディア)のその言葉に首を横に振った。

『なんじゃ、いけんのか？』

煉獄(エウ)の審判神(メディア)が黒の姫巫女を見て、ふうーと溜息をつくとそれを見たルアカーゼも溜息をつく。
なぜ、この煉獄(エウ)の審判神(メディア)は、挑発的な態度ばかり毎回とるのだろうと…。
黒の姫巫女は、煉獄(エウ)の審判神(メディア)の態度をスルーして説明を始めた。

『う～ん、なんて言えばいいのかな？本当は、正美と私達だけで行

く予定だったから正美の今の力でもギリギリ世界の壁を渡る公式組んでおいたんだけど、これだけの人数だとちょっとねー。何か、向こうの世界で作られた物があればそれを媒体にいけるんだけど…。』

先ほどスルーされた煉獄の審判神（エウメディア）は、『まったく使えんやつじゃのう』と愚痴を言っているが、全員がスルーしていた。

全員かなりスルースキルが上がってきてる。

そして、黒の巫女姫の話を聞いていた、全員がまず由香里に視線を移した。

由香里も異世界から来たと言う事を聞いていたからだが…。

その期待は、すぐに裏切られる。

由香里が首を横に振り、口を開く。

「無理だよ！だって私、この世界に来てから1年以上経ってるんだよ？魔物討伐とかいろいろしてて、戦いの役に立たない物なんて全部捨てちゃたよ！だから私がいた世界の物なんてもってないって！」

由香里が説明すると、正美もそれに続いてウンウン頷いていた。

「俺も寝てて気がついたらこの世界に来たから、着てたパジャマは捨てられて携帯電話くらいしか持ってないぞ」

その言葉に全員が沈黙する。

……。

…。

「あれ?今の会話で見落とした所があるような気がするんだけど?」と由香里が疑問を口にし、そのまま正美を見た。

「ん?どうしたんだ?俺、何かおかしい事言ったか?」

「うん、正美ちゃん、さっき言った事を反復してくれる?」

「ああ、いいけど…。俺も寝てて気がついたらこの世界に来たからパジャマ捨てられたって所か?」

「ううん、その後の話。」

「携帯電話しか持ってないって所か?」

「うん」

…。

ハハハハッと正美は笑いならが後頭部をポリポリ掻いている。

「そこに気がつくって事はやはり、由香里さんはすごいね！」

正美のその態度に全員があきれた視線を投げ掛けていた。
このままでは話が進まないと思った煉獄(エウ)の審判神(メディア)は溜息をつくと、口を開く。

『とにかく、その携帯と言う物があれば問題は解決なのじゃろう？ならすぐに持ってきたらどうじゃ？』

煉獄(エウ)の審判神(メディア)のその言葉に、エルフィーナが頷くと部屋の中の引き出しの中に入ってる小物入れから一つの銀色の物を取り出す。
エルフィーナは、以前気になっていたからこそすぐに思い出して差し出すことが出来たのだが…。

それを見た煉獄(エウ)の審判神(メディア)が顔色を変えていた。

黒の姫巫女が正美が携帯電話を受け取ったのを確認すると部屋中に展開されていた魔法式をひとつの魔法陣に組み替え、部屋の中央には一つの積層型の魔法陣が展開された。

『正美、携帯電話をもった手で魔法陣の中心部に描かれている文字に触れて』

その言葉に、正美は頷きながら手を触れると魔法陣が輝き出す。
それと同時に公爵邸周辺の光を全て喰らい尽くし、周囲が昼間だというのに闇に閉ざされる。
公爵邸の周囲に明かりが戻ると同時に、エメラスが部屋に走り込ん

できた。

「こ、これは…！」

エメラスの視界には、転送魔法を行ったという跡が残っていた。
それも普通の転送では在りえないほどの力の残滓が部屋に残っていた。

そして、ベットの上には一枚の手紙が置かれていた。
その手紙には、無理矢理エメラスに花嫁修業で覚えさせられた正美の文字でこう書かれていた。

「探さないでください…。」

と…　…。

転送先は仕事場です！

平日の午前中。
それは、仕事の時間であり一日の始まりでもある。

それは、オフィスと言う場所には特に顕著に現れる。
本来、仕事のアポ取りや納品、出荷、営業などで活気づくはずのフロアでは、全員がデスクワークにしがみ付いていた。

それと言うのも…。

突然、発生した光が突風を撒き散らしており、現在、飛ばされないようにする事で精一杯であった。

そして、突風が止んだ事により、オフィス内の様子に騒然となる。
突風によりオフィス内の機能は破壊されつくしたからであった。

突風が止んだ場所から現れたのは、元から本職のメイドである副メイド長のエルフィーナ、そしてイリシアであった。
日本のオフィスの雰囲気とはまったくかけ離れた雰囲気を醸し出しており、どこの国の方ですか？
と思わず聞いてしまうような容貌も手伝い、とほうもなく場違いであった。
さらに、ウーネイ、ガイアス、イスピルは由香里の幻想技術（フィーナエルガント）により理想的な女性に仕上げられている為、本職には勝てないまでもその美貌は二人に追随しており、整形を繰り返しているアイドルすら足元にすら及ばない。

リメラに至っては長い耳、整いすぎた美貌、金色の腰まであるサラ

サラの髪が、幻想的に光っている。
由香里も、ひさしぶりに元の地球という世界に戻ってきた事により感動を隠し通せずにいた。
そして、正美と言えば…　…。

「ま、正美君か？」

一人のスーツを着た中年の男性が、話しかけている。

「は、はい？」

正美も思わず自分の名前を呼ばれた事により反射的に答えてしまっていた。
話しかけてきた方向を見ると、そこには自分が働いてた際のフロアの責任者であり支店長であった中年が机にへばりついていた。

「松角さん！」

声を出してから、正美は気がつく。
なぜなら、声色が今までとは違うから、否、元に戻っていたから…。
それに気がついた正美は心の中で思わず、ガッツポーズをとっていた。

「正美君、今日は休みだと思ったのだが…。」

松角と正美に言われた男は、怒るまでも不審に思ったわけでもなく事実を確認してきた。

「え？俺、もう3ヶ月以上無断欠勤のはずじゃ？」

そう、正美が異世界にいってからかなりの時間が過ぎていた。
だが、その言葉は次に帰ってきた言葉で覆される。

「何を言ってるのかね？3連休のあと今日は月曜日だろう？今日は休みだと思っていたのだが、そうでもなかったのだな。
よかった。
それよりも今さっき、突然、突風が起きてな、見ての通りだ。」

正美はその言葉で、フロア全体を見ると、パソコンを始めてとして、椅子、観賞植物などが吹き飛ばされておりとても仕事が継続できそうな雰囲気ではなかった。
これが自分のやった事だとバレたらと思うと正美の顔は真っ青になった。
そしてそれを見た支店長の松角は頷くと正美に話しかけてきた。

「正美君、どうもまだ体調が悪いようだな？今日は、もう仕事にならないと思うから本社へ確認して上からの指示も仰いで業者の手配もしないと行けないから今日は帰った方がいい。」

「すいません、今日は帰らせて頂きます。」

松角へ正美はそう言うと、後方にいた由香里達に手でフロアを出て行こうと合図を送る。
由香里達は、ここに居るべきでは無いと判断してフロアを出て、そのまま、建物を出た後、近くの公園で立ち止まった。
不審に思った正美が後ろを振り返ると全員が不審者を見る目で正美を見ていた。

「ま、正美様ですか？」

エルフィーナが正美の目を見つめて話しかけてくる。

「ああ、そうだけど？」

その返答に由香里以外が氷つく。

え？正美って女じゃないの？とかなんで男になってるの？とかいろいろと聞こえてくる。

「な、な、なんで、正美先輩がここにいるんですか！？」

一番、当惑していた声を出したのは、由香里であった。

自分が可愛がっていたのが、好きな人だった正美自身だったからだ。

由香里の混乱の極みに達していた。

なにせ、お風呂まで一緒に入っていたのだ。

そこまで妄想がいった所で、由香里は意識を手放して倒れてるところで、

腰まである茶色の髪を靡（なび）かせ一人の女性（ガイアス）が由香里が倒れる前に体を支えていた。

『主よ、主以外に掛けている認識阻害の術の効果が切れて大事になる前に移動した方がいい。』

よく見ると正美の服装は普段、仕事をしている紺のスーツ姿になっている。

そのスーツのポケットから小さくなったルアカーゼが顔だけ出して正美に話しかけてきていた。

「ルア、お前がこの服を用意したのか？それに、由香里達が見咎め

られなかったのも全部、ルアが？」

『主が後々困ると思ったからこそ、原子変換をして主が来ていたドレスを周囲のオスが着てる物に変換したのだが何か問題があったら言ってほしい。』

「いや、ルア。グッジョブ！
さすがに男の姿でドレスは引かれる以前に変態扱いだからな。
それに由香里達までいたら問題になっていたのは少し考えただけでも分かるし」

と言いながら、正美が全員を見るとメイド服はないよなと突っ込みを心の中で入れていた。

『主、了解した。』

ルアカーゼのその言葉と同時に、由香里を含めて全員の着てる服が女物の服装に変換されていく。

「お、おい。何する？」

『気にするな。主に迷惑が掛からないようにしただけだ。それと余計な振る舞いは慎め。』

「わかったよ、それより本当にその男が正美さんなのか？」

ガイアスのその言葉に全員の視線が正美に集中する。

「ああ、そうだ。俺が正美だ。とりあえずまずは俺の家にいかない

か？ここだと目立つしな」

正美が周囲を見渡すと、正美は別として由香里達の見目麗しい姿が周囲の人間達の目を引いて人だかりが出来初めていた。

『しかし、ずいぶんと酷い有様だのう。』

煉獄（エウ）の審判神（メディア）の声が正美の頭の中で響く。

それを聞きながら、正美は両親から受け継いだ自宅のリビングを見て呆然としていた。

テーベル、やソファーは倒されており、引き出しなどは引き出されたままになっており、中に入っていた物は床に散らばっている。

本来であれば警察を呼ぶべき所なのだが、それは黒の巫女姫からしないように言われており、まだ連絡は入れていない。

あの後、正美達は逃げるようにして正美の自宅に向かった。

正美以外の者達は、日本人が着てる服装に合わせてルアカーゼが力を振るい服装を変えた事で奇異の目で見られる事はなかった。

それでも、その美貌とスタイルで電車の中でも街中でも熱い眼差しを向けられており、一緒にいた正美には嫉妬の眼差しが向けられていた。

まさに、針の筵（むしろ）と言った感じである。

正美は、地球に戻ってきてから何度目か分からない溜息をつくと未だにショックから目を覚まさない由香里をソファーに寝かせると部屋の中を片付けていく。

そしてそれを見ていた他のメンバーは呆然としていた。

一部興奮してる者もいる。

そして、日も暗くなってきた事もあり、壁にあるスイッチを押し明かりをつけ、テーブルに人数分のお茶を置き、今後の事を話そうとするとイリシアが口を開く。

「正美さま？」

何故か疑問系でイリシアが話しを切り出した。

「なに？」

正美としては、今後の予定をすぐに決めたかったのだがつい、律儀に聞いてしまう。

「ここの世界って正美様？が生まれて育った世界ですよね？」

「ああ、そうだけど？」

「ここに来る間に、建物がずっと途切れないで続いてましたけど、どこまでが町なんですか？」

「え？」と思わず正美は答えてしまった。

何せ、日本という国から出た事の無い正美としては、町や家並みはずっと続いてる物だと認識しる。逆に、イリシアを含め幻想大陸ルシアードに住んでる者は町と町は離れており交易ルートもしくは道で繋がってるのが一般的であるというのが認識であった。
双方共に、根本的に町や国といった認識に食い違いが出来てしまうのは仕方の無い事であった。

正美もしばらく考えた後に、商業都市で暮らした事を思い出し、よ

うやく合点がいく。

「ああ、そうだな…。日本って国は、ずっと町並みが続いてるんだよ。だから、イリシアさん達が住んでる世界とは少し違うかな？それに国と言っても日本だけで１億２千万人の人が住んでるし、かなり違うと思う。」

「一億２千万！？」

正美と由香里以外、全員がその途方もない数に、驚きの声をあげた。

「そ、それってこの国は大陸の王都か何かなのでしょうか？」

「いや、王都とかこの世界にないし、ここはそんなに大きい国でもないし。それと世界というかこの星だと１００億近く人間がいるんじゃないのか？」

その声にガイアス達は、ポカーンとしてしまう。

「大きい国じゃなくて１億ですか？それにひ、百億ってどういう世界なんですか？」

エルフィーナもつい、興奮して聞いてしまう。

クレイネルに学問を教えてもらっており、幻想大陸ルシアードでも全人口は数百万である。

億を超える人間を支える国家構築など想像も考えも思いつかない。

だからこそ、正美の世界の事に関して純粋に疑問に思ったのだった。

ガイアスも百億と言う人間の数にはすでに理解が追いつかずにいたからこそ、いち早く意識が異次元から戻ってくる事が出来て、気分

を落ち着かせるために湯のみを手に取ってそれを飲み込んだ。
と同時に、驚きのあまり噴出す。

「お、お、お、おい。これ熱いぞ！一体どうやったんだ？火を炊いてる場所など無かったはずだが？」

ガイアスの驚きは、当たり前である。
何故なら、向こうの世界ではインフラ設備と言うものが無い！
火を興し、水を温めようとすれば竈（かまど）が必要となる。
そのためにはそれなりの設備が必要になるが、正美達がいるリビングにはそのような物が一切見受けられない。

「ああ、それか。コレだよ」と正美がガイアスに差し出してきたのは電気ポットであった。

それを見たガイアスは頭の上にクエッションマークを出すほど、電気ポット見て考え込んでいたが電気ポットの蓋（ふた）を開けた時に立ち上った湯気に腰を抜かす。

「な、なんだ？魔流術か？」

ガイアスが腰を抜かしながら正美に尋ねると、「違う、電気で水を温めて常時保温状態にしておくんだよ」と正美は普通に返す。

「保温？常時？」

聞いた事の無い言葉を聞いてエルフィーナは首を傾げた。

「ああ、ずっと同じ温度で保っておくって事でいいのか？」

ガイアス達になんと説明していいのか分からない正美は、思いついた言葉でその場で説明する。
それにしてもと正美は思う。
ガイアス以外も、正美のリビングを見て目をキラキラ光らせている。特にイスピル、ウーネイに至ってはテレビをつけた途端に噛り付いたように見ていた。

正美はそれを見ながら、心の中で話しが進まない事に溜息をつくと、突然、トゥルルルルと自宅の固定電話が鳴った。
それにいち早く反応したイリシアは、腰から刀を引き抜くと正美の見てる前で子機を叩き斬った。
子機に手を伸ばしかけたまま、「え?」と言う声を出したまま真っ二つになった子機の前で正美の思考は停止した。

「正美様、大丈夫ですか?どうやら敵は何かの罠を「なんて事するんダー!」…え?」

あまりの斜め上を行く反応に正美は声をあげる。語尾がカタカナになっているのは驚きのあまりと信じたい。
購入したばかりの電話機の子機を壊されたのではなく、文字通り叩き切られた事により正美は脱力する。
そのうち、子機から親機の方へ転送され親機が鳴り出す。
それと同時に、イリシアの姿がその場から消えた。
その一瞬で正美は、親機が危険に晒されている事を察する。
その判断はまさに刹那!ムダに早い判断である。
正美は黒の巫女姫の力にアクセスし、ルアカーゼの身体能力上昇の力を使うと全力全開で親機へダッシュをすると同時にイリシアが刀を振り下ろす瞬間を視る。
そして、刀の軌跡からはずれるように親機を靴箱の上から持ち上げる。

辛うじて親機を助け出すことに成功した正美が安心した途端、靴箱が真っ二つにされて、自分の靴と靴箱が殉職していく風景が視界に入ってきた。

「イリシア！やめろおおおお。それはそれは、ブランド物のデートの時に履く予定で買った靴なんだぞ？まて、それはスーツの時に履く靴だあああああああ。」

正美の悲痛な絶叫が家中に木霊した。

全員が正美の絶叫に驚き、玄関に集ってくると正美は放心して座っていた。

何かをブツブツ呟いている。

エルフィーナが正美を揺さぶっても反応がない。

どうやら、現実逃避してるようだ…。

そしてエルフィーナに睨まれた、イリシアはシュンと子犬のように丸くなっていた。

そして再度、親機が鳴り出す。

正美は、大きな溜息をつきながら現実逃避から戻ってくると親機に表示されている番号を確認すると瞳を大きく見開いた。

そこには、奈津美の実家の電話番号が表示されていた。

交錯する思い　前編

親機から受話器を上げるとガチャと軽い音が玄関先で響いた。
正美は緊張し、震える手で受話器を耳元へ近づけるとそからは切羽詰った声が聞こえてくる。

「正美君かね？よかった。中々連絡がつかなかったから今からそちらへ行こうと思っていたんだ…。」

男性の声で、捲くし立てるように話してくる。
その声には身に覚えがある。
結城奈津実（ゆうきなつみ）の父親である結城重衛（ゆうきじゅうえ）。
奈津美にいつも連れられて、結城家へ訪問した際は大企業の出世頭と言う事だけあり落ち着いた雰囲気であったが、今の電話からの雰囲気では想像もつかない。

「お久しぶりです。それで、どうかしたんですか？」

正美は、自宅の惨状も含めて勘ぐられたくない事もあり務めて冷静に話を切り出した。

「どうかしたも何も、娘達と連絡が取れないんだ。妻も心労から倒れてしまって…。」

重衛（じゅうえ）の言葉を聞きながらも、正美は何と答えていいか迷っていたが、何か手がかりがあればと聞くことにした。

「それで娘達って？いつから戻ってきて無いんですか？」

「あ、ああ。どうやら、奈津美は一週間前から自宅に戻ってきていないらしいんだ。それと由香里は2週間前から自宅に、戻ってきていないようだ。」

「重衛さん。先ほどから戻ってきてないらしいとか第3者にような話し方ですけど、なんで戻ってきてないか分からないんですか？いつも自宅には帰っているんですよね？」

正美は只、疑問に思ったから口に出した言葉であったが、相手側からの返答は正美の価値観とはまったく逆の回答であった。

「あ、ああ。今は、会社の大事な時期でもうすぐ社長になるための大事な役員会議があるんだ。だから、娘達が行方不明というのは不味いんだ。」

受話器の向こうから声が聞こえてくる。

重衛は受話器を離しているようであったがそれは確かに聞こえてくる。

（これでは会長派に足元を切り崩されてしまう。）

（あの不良娘共がどこまで私に迷惑をかければ気が済むんだ。）

（これだから地位を得るために子連れと結婚するなどとそういう声が聞こえてくる。）

正美は、それを聞きながら、親が子供を大切に思ってない事にショックを受けていた。

だが、実際は、重衛は、その様な事を心に思っただけで口には出してはいなかった。

正美の覚醒した能力が受話器越しでも相手の思考をそのまま読み取っていたのだった。

「正美くん、娘達が見つかったら連絡をくれ。今は大事な時期だから警察へだけは知らせないでくれ」

そう言うと、ツーツーと電話が切れたのを確認すると、呆然としたまま受話器を親機に正美は戻す。

「正美先輩…。」

呆然としたまま、声を掛けられた事から正美は思わず親機を落としそうになってしまうが、なんとか落とさずに踏みとどまると玄関の床に置いてから声をかけられた方向に視線をもっていく。
そこには、正美の顔色からどのような話があったのか察して、泣きそうな顔を笑(わら)いで誤魔化した由香里が立っていた。

「お父さん、やっぱり私達の事なんてどうも思ってなかったよね？迷惑とか言ってた？」

正美は反射的に首を横に振りながら「そんな事はない。」と言うと、「そう、よかった（嘘つき）」と言いながら笑顔をその場の全員に見せていた。
一瞬聞こえてきた声に正美は驚きながら由香里を見ると、特におかしい所は見受けられなかった事から気にしすぎかと思ったが…。

（正美先輩の嘘つき、どうせ、お父さんは私達の事を重荷とか言ってたんでしょ。本当の事を言ってよ。どうせ、私はいらない子なんだから…。）

正美だけに聞こえてくるように、由香里の言葉が直接、正美の中に流れてくる。
それに正美は戸惑いながらも、先ほど重衛（じゅうえ）が言ったと思っていた言葉が心の中で思い描いたモノだと言うものに本能が気がついていた。

正美達はそのままリビングに戻ると、ルアカーゼが今日は休むようにと全員に命令をしてきた。
全員、すぐにでも奈津美を助けにいく予定ではあったが、居場所も分からずに闇雲に探しても意味がない、我に任せておけというルアカーゼの言葉から全員、その日は体を休める事にしたのだった。

全員が寝静まり、すでに深夜2時に指しかかろうとした所で、煉獄（エウ）の審判神（メディア）の声が頭の中で鳴り響いた。

『なんじゃ眠れんのか？』

正美は唯一の男と言う事もあり、自分の部屋で一人で寝ていた。
だが、中々寝付けずにいた。
それは、突然聞こえ始めてきた声に当惑していたからであった。

「ああ、ちょっとな…。」

『愚痴りたい事があれば聞いてやるぞ？』

「なあ、突然、人の心の中の声が聞こえてくるっていうのは能力と

してあるものなのか？」

『そういう力を持つ原書（オリジン）は知らないのう。おそらく能力の有無が直接的に影響を与え生まれる原書（オリジン）でそれが無いと言う事はそういう例外はないと思うのじゃが……。』

「そうか、って事はまた何かしらの要因があるって事なのか？」

『それは断定できんが、黒の巫女姫の力は代々の異世界から召喚された者達の力の集合体であり黒の巫女姫がそれ単体で膨大な複合的な力を備える言わば禁断の書庫の役割を担っているのじゃ。
じゃが、お主の力は不可解な部分が多すぎる。
まずはその眼じゃ、妾もお主の目を通じて発動中に視界を覗いたがそんなモノは聞いた事も見たこともない。
そして極めつけは世界の壁を越える力…。これは星の重さに匹敵するエネルギーを中和するほどの力を発動させなければ世界の壁を越える事が出来ん。
それをお主の中にいる黒の巫女姫、否、もう一人の幼き正美をベースとした黒の巫女姫は何事もなく行ってしまっておる。
これは、本来、神々ですら安易に行える力ではない。数千年生きてる妾ですら、お主の力はどれほどなのか想像もつかん。
それに…。』

「それに？」

『異世界からの侵略者を一柱で壊滅に追い込んだ幻獣王ルアカーゼをお主が一体どうやって最初から手懐けておったのか…。』

「何を言ってるんだ？あれはお前が契約していたんじゃないのか？」

『違う、あれは黒の巫女姫より正美を守るようにと渡されたモノじゃ』

「どう言う事だ？なんで黒の巫女姫がルアカーゼを？」

『わからん、だが一つ言える事は黒の巫女姫がルアカーゼの主人ではないと言う事だけじゃ』

そこまで話をしていた所で、ベットから立ち上がると窓の外を見ると、由香里が庭で立っているのが見えた。

「あいつ何してるんだ？」

『さあのう。由香里の所へ言って今度はお主が話しを聞いてやるのじゃ。どうやら、一人で何かを抱え込んでるようじゃからのう』

正美は、煉獄（エウ）の審判神（メディア）の声に半信半疑ながらも階段をおり、玄関から庭へ出ると空を見上げてる由香里の姿が視界に入った。

その姿は、いつも知ってる由香里ではなくとても儚く今にも折れそうな雰囲気を醸し出してる女性であった。

交錯する思い　後編

正美の視界に映りこんできているその姿は、月に照らされていてとても幻想的であったが、それは危うくもあった。

「結城(ゆうき)さん」

男の体に戻ってから、正美は由香里と呼ぶのを控えていた。
それは、人間関係が苦手な正美が、女性との距離をある程度取っておこうとした予防策であった。
正美の声に、由香里は気がついたかのように振り向くが、実は正美が家の中から自分を見た瞬間から正美が自分を見ていた事には気がついていた。
それは気配や殺気をいち早く察すると言った幻想大陸では日常とも言える命のやり取りの中で研ぎ澄まされた能力故であった。
そして、その事に気がついた途端、由香里は自分が何を求めていたのかと言う事を無くしてしまい、途方に暮れた所で正美が声を掛けてきたのだった。

「由香里(ゆかり)！今までどおり名前で呼んでほしいの、ダメ？」

正美は、自分の言葉に反応に振り返って開口一番に言ってきた言葉に、思考が一瞬止まってしまっていた。
何故なら、その言葉を言ってきた由香里はとても辛そうに笑っていたから…。

「ああ、わかった。由香里、一体どうしたんだ？もう冬だしそんな薄着だと風邪を引くぞ？」

「ううん、大丈夫。私には、幻想技術（フィーナエルガント）があるから…。」

そう言うと、由香里は自虐的に自分の手の平を見つめる。
仕方ないと言っても数多の命を奪ってきた血塗られた自分の手の平を…。

「そっか、でも」

正美は言葉の途中で自分が着てきたジャンバーを由香里に掛けると自分はパジャマ一枚になり由香里の隣に並んだ。
男に戻った事もあり、今の正美は身長が１９０ｃｍ近い。
由香里からは身長差が２０ｃｍ以上あり、見上げる格好となってしまう。

「なあ？あんまり我慢するといつか壊れちまうぞ？言いたい事とか聞いてほしい事があったら俺で良かったら聞くぞ？まあ、俺がそんなガラじゃないって事は分かってるし、頼りないけどな」

正美はそう言うと、そのまま由香里の頭の上に手を乗せると由香里が押し黙ったまま、俯（うつむ）いてしまった。
それを見た正美は、俺失敗したかー。と心の中で反省会をする所でか細い声が聞こえてきた。

「正美先輩、実はね、私とお姉ちゃんはお父さんと血が繋がってないの。」

「……。」

「日本最大の広告会社の電堂って知ってる？」

「ああ、広告シェア率６０％を超える大会社だろ？」

「うん、そこで私達の今のお父さんは、出世のために当時の部長の娘、私達の母親に近づいたの。」

「でも、他の人もそれを考えたんじゃないのか？」

「ううん、夫に先立たれ二人の子持ちと結婚する人はいないわ。
でもお父さんはそこにつけ込んだの。
もちろん、お母さんの父親は喜んだわ。
だって、当時からお父さんは出世頭で同期から見ても明らかに毛色が違ったから。
お母さんにも私達にも最初はすごくやさしくしてくれた。
でもそれはお母さんと結婚してから、ガラリと変わったわ。
いつも、お父さんが居る時も居ない時も家の空気が重かった。
でも、そこにお姉ちゃんの友達だった正美さんが来てから空気が変わったの。』

自分が何をしたのか正美は理解出来ないまま由香里を見る。
それに由香里も気がつくと正美の手をぎゅと握ってきた。

「正美さんの家にお姉ちゃんと一緒に招待された時、私はすごい驚いたの。
だって、正美さんのお父さんもお母さんもとっても正美さんを大切にしてるのが分かったから。
とても暖かったから…。
これが本当の家族なんだなって思ったの。
それと比べると私達の家は一体何なんだろうって…。
お姉ちゃんが正美さんの家によく出入りしてたのは、そういう空気

に触れたかったからだと思う。
私も行きたかったけど、お母さんを一人にするわけにはいかなかったから…。
本当は、私達の家族はもう壊れてたんだよね。」
えへへと強がった顔で由香里は正美を見る。
「別に壊れてなんかいない。」
「え？」
由香里が驚いた顔をして正美を見上げる。
「由香里のお母さんは、由香里と奈津美が居なくなってから心労で倒れたって重衛さんは言ってた。
それって心配してたって事だろ？なら家族の絆は壊れてない。
これからだって生きてる限り、いくらでもやり直しは効く。
奈津美を助けたら、由香里も一緒に重衛さんを軽くシバいてお互い思ったことを言って見ればいいんじゃないのか？
お互いに思った事を言い合えるのが家族だろ？
遠慮なんかしてたら家族なんかじゃない。ならダメ元で言い合ってみろよ。
もう、俺には誰もいないが由香里の家族は生きてるじゃないか。だったら諦めるなよ。」
「でも、でもそれで、ダメになったら…。」
「どうしてもダメならその時は俺も手伝ってやるよ、どこまで出来るか分からないけど、ドーンと豪華客船に乗ったつもりでいろ！」

その言葉に一瞬、由香里は呆気に取られた。
何を言ってるのかと。
そして、あまりにも簡単に言い切ったことに笑いが込み上げてきた。

「そうだね、ずっと弱気になってたかも。もう、私も以前の私じゃないもんね！むかついたらうちのお父さんを一発斬りつけてあげる。」

いや、そこは斬り付けたらダメだろーと正美は心の中で突っ込んでいたが、涙を拭きながら笑ってる由香里を見るとまぁいいかと思って空を見上げると星が輝いてる空に黒い染みが見える。
そしてそれは見る見る大きさを増していく。
そして、地響きを立てると同時に、巨大な狼に変身したルアカーゼとその背に乗っていた黒の姫巫女が降りてくる。

『えーっと、私達はお邪魔だった？』

正美と由香里が手を握ってるのを見た黒の姫巫女が、首を傾げて意味ありげに微笑んでくる。

「べ、別にそんなんじゃないんだからっ！勘違いしないでよね！」
そう言いながら、由香里は正美を突き飛ばすと、家の中へ顔を真っ赤にしながら逃げるようにして走り去っていった。
正美はその後ろ姿を見ながら、本日、最大の溜息をついた。

「で、お前達は何をしてたんだ？」

正美は一人と一匹が空から降ってきた事への疑問をぶつけた。

『主の家を襲った連中たちの居場所が判明した。今度はこちらから攻め入る番だ』

ルアカーゼはそう言うと、これからの戦いに向けて楽しそうに奈津美がいる方向へ視線を向けた。

交錯する思い　後編（後書き）

次はいよいよ、大規模戦？予定です。

ルアカーゼと黒の巫女姫は、エウルユニスが正美の家に使用した魔術の痕跡を解析し、男の居場所を割り出したのであった。
そして、今、リビングでは正美達はルアカーゼと黒の巫女姫が見つけ出した場所について説明を受けている。

『つまり、今、奈津美さんが捕まっているのはここになるの』

そう言うと、黒の巫女姫は正美の自宅にあったノートＰＣを起動し、キーワードを打ち込み表示する。
それと同時に画面上に場所と地図が表示される。

日本海　南西部　北緯３７度１５分、東経１３１度５２分

それを見た正美の顔色が変わる。

「ここって！」

正美のその言葉に黒の姫巫女も頷く。

『そう、男が乗っていた車のナンバーも確認したわ、外交官ナンバーだったのは分かっていたから正美には警察には知らせないようにと言ったの。
この国のＴＯＰは国民の命より外交を取るからね』

「おいおい、いくらなんでも自分の国の民や領土を侵犯されて黙ってる国はないだろう？」

ガイアスがそんな事はありえないと口を挟んでくる。

『なるほどのう、木を隠すなら森の中か。ならば、こちらも手加減はいらないのう?それとガイアスとやら、この国の人間は長い間、誤った歴史で洗脳されてきておる。自虐と言った方が正しいかのう?自分達は何をされても自発的に行動出来ないように枷を幼い頃から嵌められておるのじゃよ。それは大人になってもすぐに取れるものではないし、もし仮に少数がその事に気がついて意見をしても大多数に潰されてしまうだけじゃ。だからこの国は変わらないのじゃよ。』

全員が、煉獄(エウ)の審判神(メディア)のその言葉に黙り込む。

『じゃから、この国の統治している政府に何かを求めても変わらん。それは政府の下についてる国を警備するというお題目に作られた軍、警察機構も叱りじゃ。やつらが守っているのは国の民ではなく、外国だからのう。自分の身を守るには自身が強くなるしかないのじゃ。』

「なんだ?それってどう言う事だ?民を守れない国にどういう意味があるんだ?」

『ここはそういう国と言う事、豊かなのは見かけだけと言う事じゃ。』

静かになったリビングで、正美が立ち上がると自然と全員の視線が正美に向かった。

「今、そういう事を議論してても仕方ない。大事なのは俺達がこれ

から何をするかだ。
俺達は、奈津美や捕まってる人達を助ける為に、世界の壁を超えてこの世界に来たんだろう？ならすることは一つだけだ。
皆を助ける！それだけだ。だから…。
議論を重ねる前にまずは動こう。どうやって奪回するかそこから考えていこう。
敵は恐らく国になる。
だが、俺達にはこの世界には無い力がある。
それを使い、不当に拘束され連れ去られた人を助けよう。
国も人の評価も正しい事と思った事をする上でそんな事は関係ない。
だから、力を合わせて共に戦おう。」

「ああ、そうだな。」と言いながらガイアスが立ち上がる。
それに合わせて次々と立ち上がっていく。

『くっくっく、本当に可笑しいのう。たった数ヶ月という短時間でこれほどまでに人間と言うモノは成長するものなのか』

『そうね、でも、もっと強くなってもらわないとね』

『我が主ならば問題はない。』

「うるさいぞ、まるで俺が最初はダメな人間だったみたいじゃないか？」

等身大に顕現した煉獄（エウ）の審判神（メディア）が腰まである赤い髪を揺らしながら不敵に微笑む。

『自覚がないのがまだまだダメな所じゃのう。さて、奪回作戦じゃ

がいい作戦（プラン）があるのじゃがどうじゃ？やってみるかの？』

その言葉に全員が頷くのを見た（煉獄（エウ）の審判神（メディア）はこれからの作戦を立案していった。

ＡＭ７：００　日本海　南西部　北緯３７度１５分、東経１３１度５２分から南方に１０ｋｍの位置で、自衛隊基地へ通信が入っていた。

「こちら、現在、北上中の巨大艦影を確認。応答を願う。位置は…。」

同時刻、アメリカ国防総省内で非常召集が掛けられていた。

「どういう事だ？何故、こんな時期にこんな物が？」

次々と衛星から取られた写真が閲覧されていく。

ＡＭ７：３０　首相官邸では、情報が錯綜としていた。

自衛隊のみならず、アメリカ国防総省からも同じような問い合わせが来てるからであった。

「まだ原発の問題すら終わって無いというのに、何故こんな物が出てくるのだ？」

日本という国の首相は、現在の問題に頭を抱えていた。

ＡＭ８：００　正美達を乗せた船。否、戦艦「大和」は北上しており、奈津美達が捕まっている場所まで目と鼻の先まで近づいてきていた。

「しかし、（煉獄（エウ）の審判神（メディア）も思い切った事するよな。」

正美は艦上から船を見下ろすと呟く。
あの後、煉獄（エウ）の審判神（メディア）が立案した作戦と言うのは戦艦大和を蘇らせそれで市民を助けに行こうという話であった。
戦艦大和が敵の目を引いてる間に正美達が内部へ強襲。
そして、捕まってる人達を解放する手筈になっている。

海に沈没した戦艦大和を復元と言う作戦が取れたのは由香里の幻想（フィーナ）技術（エルガント）が大きい。
由香里の幻想技術（フィーナエルガント）で船体の全体像を一時的に細部まで構築。
その後、ルアカーゼが周囲の大量の海水を原子構築、由香里が一時的に構築した船体をモデルに全てを作り変えた後、安定させ戦艦大和を完全な状態で復元したのであった。

そして、それを動かすのは…。

以前船を動かしていた大日本帝国海軍の将校達であった。
黒の巫女姫の力により一時的に現世へ呼び戻し作戦への協力を取り付けていた。

「どうですか？正美さん。ここからの見晴らしは」

「はい、思ってた以上です。でも、うちの連中が無理を言ってしま

って申し訳ありません」

正美が、頭を下げると男は正美へに声をかけてくる。

「それには及びません。皇国の民が捕まったとなれば国家の一大事ですから、協力するのは当然です。それに…もう一度、日本のために戦う事が出来るのですから…」

正美と男が話していると赤い髪を揺らしながら一人の女性が部屋に入ってきた。

『正美、そろそろ作戦開始じゃ。』

正美がそれに頷くと部屋から出ていこうとした時、背後から「ご武運を！」と声が掛けられた。

「はい、有賀さん、ありがとうございます。」

正美がそう言うと部屋から出て行った。

一人残された有賀はその言葉に頷くと前方を見て、二人が出ていったのを見計らって入ってきた船員に矢継ぎ早に指令を出す。

「大丈夫でしょうか？彼らは？」

一人の船員が声を掛けてくると有賀は笑うと、

「彼らの中には日本人としての誇りと精神が息づいている。我々がする事は、敵の目を引く事だ。彼らが己の信念を無くさない限り大丈夫だ。」と船員へ告げた。

ＡＭ９：００　竹島を巡っての正美達と、エウルユニスとの戦いの火蓋が切って落とされた。

基地内を慌しい空気が包みこむ。
と同時に一つの扉を叩く音で男が目を覚ました。
男は機嫌が悪そうに扉を開けると一人の男が青ざめた顔で立っていた。

「何かあったのか？」

男が不機嫌そうに尋ねると、扉を叩いて男は青ざめた顔で一言一言話し始める。

「エ、エウルユニス様、敵襲です。すぐに管制室へお出でください。」

男の言葉にエウルユニスは一瞬、考え込んだ。
ここの基地を強襲してくる相手はだれだと…。
この基地がある竹島は国際上、微妙な立場にある。
それは、韓国という国がアメリカのＧＨＱからの要請により竹島を奪った事が発端と聞いた事があり、その事は未だに尾を引いている。
日本が何故、この島に手出しできないのか、それはアメリカとの秘密裏に行った交渉があるからだ。
そこに攻めてくるなど、今の腰抜けの日本国政府が出来るわけないだろうと…。
そして、日米安保を考えてもアメリカが竹島占領を指示してきたという裏がある限りアメリカが攻めてくるわけがない。
そうすると中国と言う事になるが、それはありえないと断定できる。

かの国が竹島を襲う大義名分がないからだ。
ならば、どこが襲ってくる?どこが強襲してくる?
どこまで考えても答えは出ずにいた。

「分かった。敵襲はどの国の軍隊だ?」

エウルユニスは考えても答えが出ない事を、呼びに来た軍の者に尋ねる。
そうすると男は一瞬、言いよどんでいたがこう答えた。

大日本帝国海軍戦艦　大和　だと…。

その頃、数機の日の丸をつけた自衛隊機が戦艦大和の上空を旋回していた。
大和は竹島に近づいていく。
それを見た、竹島の防衛はその巨体に圧倒されていた。

聞くと見るとでは大違いである。

そこでエウルユニスは管制室へ到着するとモニターに表示されている戦艦大和を目にして驚いていた。
自らが知る戦艦「イージス」とは比べ物にならないほどの圧倒感に…。
だからこそ…。

「貴様達、何をしている！敵は近くまで来ているのだぞ？迎撃の準備を始めろ！」

エウルユニスの言葉に、軍人達は信じられない者を見るような視線を投げかけた。

「無理です。こちらから手を出してしまえば、国際問題になった時に不利になります。まだ相手側はこちらへは何も行ってきておりません」

「ふざけるな！あんな物を送りつけてきたのだぞ？こちらの領海に入ってきたのならば攻撃を加えろ！しないならば貴様を殺す。」

エウルユニスのその言葉に、管制室は大和への攻撃を開始するように通達を流すと同時に砲火が大和へ向けて打ち出されるがまだ距離がある事から船体にはまだ当たってはいなかった。
そして、竹島側から攻撃が大和へ向けて始まった事は、由香里と黒の巫女姫のハッキング能力により全メディアを通して世界中に流されていた。
そして由香里の力によりすでに衛星は支配下に置かれており、竹島の防衛をしていた軍は対外的に情報を遮断されて孤立していた。

「どうやら、煉獄（エウ）の審判神（メディア）の言ったとおり向こうさんから攻撃をしかけてきたな」

呟きながらガイアス達は由香里と黒の巫女姫が力を集中して使えるように護衛をしていた。

その頃、正美と言えば…。

（死ぬ、死ぬ、俺死んでしまう。い、息がああああ）

絶賛、狼になったルアカーゼの体に荒縄で縛られていた。
そしてルアカーゼはそのまま、戦艦大和から海に落ちると海底を走っていたのだった。

海水からの水圧、そして無酸素状態の中、正美は、俺の敵は身近にいたのか…。
と心の中で呟いていた。

そのうち、岸壁が近づいてくる。

『煉獄（エウ）の審判神（メディア）！」

『わかっておる。』

同時に岸壁を炎の濁流が蒸発させ、そこをルアカーゼが通り抜けると同時に流入してくる海水を原子変換し穴を塞いだ。
岸壁の内側は、くり貫かれており通路が形成されていた。

「はぁはぁはぁはぁ、死ぬかと思った…。おい、煉獄（エウ）の審判神（メディア）、お前、こんな事をするなんて聞いてないぞ？」

『うむ、言って無いからのう』

煉獄（エウ）の審判神（メディア）は何を言ってるのだ？という表情で正美を見る。
それを見た瞬間、正美はこいつに何言っても無理だと肩肘と落とした所で肩の上にルアカーゼがポンっと前足を置いてくる。

『さて、時間がないからのう、さっさとやる事をやって帰るかのう』

正美は疲れた顔で頷くと奥へ続く通路を駆けていった。

ＡＭ１０：００　世界中に竹島での戦闘状況が流され始めた。
それは一方的に竹島から攻撃を受ける戦艦の様子を写していた。
テレビ、インターネットどこを見ても全て同じ情景しか映っていない。
竹島の実情を知っている日本、韓国、アメリカ政府はそれに驚愕していた。
一番、驚きを隠せないのは韓国と日本だろう。
すでに情報統制を各メディアにお互いかけていたが、効果を上げる事が出来ずにいた。
魔法、魔術と言った力を理解しない限り統制など無意味だったから…。

日本の首相官邸はすでに現状の収束をするために無意味に論争を続けていた。

その頃、エウルユニスがいる管制室が突然の爆発に大きく揺れた。

エウルユニスは管制室の制御モニターを管理している男の元に近寄る。

「い、一体何が起きたのだ?戦艦からの砲撃か?」

「いえ、違います。これは…。地下７Ｆの隔壁を破壊された音です」

その言葉にエウルユニスは目を見開いた。
自分達を出し抜いてどうやって上陸したのかと…。

「わかった。お前達はこのまま、あの戦艦を足止めしてろ。私が直接行ってくる」

エウルユニスの言葉はそう告げると部屋から出ていく。

「日本には古来より強大な力を持つ一族が居たと聞いていたがまさかそれか?兄上から交戦は控えるように言われていたが７Ｆに直接進入してきたと言う事は私の独断での研究に気がついた者か。くっくくっくっ、いいぞ。ひさしぶりに力を振るえるな。」

獰猛な笑みを表情に浮かべるとエウルユニスはそのままエレベーターが来るのも待たずに扉を開けると黒い淵に身を投げた。

誇りをかけた戦い　後編

「攻撃が散発的になってきた？」

リメラが、魔法障壁を展開しながも周囲を見渡すと先ほどまで雨のように降ってきた砲弾が目に見えるような形で減ってきた事に気がついた。

「どうやら、上陸班はうまくやってるようだな。」

ガイアスのその言葉にイスピルとウーネイが頷く、それと同時に島にある基地で、もうすぐ昼間だと言うのに目も眩むような光が炸裂する。

「おいおい、軍人って言っても大した力を持ってない奴に全力は出すなよ…。」

ガイアスは心の中で死者が出ない事を祈っていた。
あくまでもこれは陽動だから…。

その頃、管制室では突然の閃光により逃げ惑う軍人の姿がモニターに映し出されていた。

「い、一体何が起きたというのだ？」

それと同時に、イリシアとエルフィーナの姿が画面上に表示された。
イリシアは長い髪を後ろで束ね、両手に日本刀を持ち、腰に２本差した状態でモニターに表示されている。

エメラスは、辞書のような分厚い本を開き銃弾の中を平然と前進していた。

「な、なんだ。あれは、め、メイドか？」

そう、今、イリシアとエルフィーナはメイド服を来てたった二人で基地に強襲をかけていたのだった。
あまりにも場違いなその姿に管制室は凍りつく。

大日本帝国海軍、そして戦艦大和。極めつけはメイド。

あまりにも想定外の事態に現場のみならず、指揮をする管制室ですら何が起きてるのか理解が追いつかない。
只一言、言えることはたった二人で竹島の防衛網を相手にしに来たと言う事だけであった。

そして、モニターには、銃弾が降り注ぐ中、まったく動じないメイドであるエルフィーナが光の結界を展開し銃弾が届く前に全てを分子崩壊させていた。
イリシアと言えば、姿が消えた瞬間、数人の銃が豆腐でも切断するかのように切り刻まれ床に散らばっていくのが映し出されていた。
それを見た管制室は恐慌状態に陥る。

「ば、化け物だ…。」

誰かがそう呟いた瞬間、管制室の扉が吹き飛ぶ。
そこには、エルフィーナが立っていた。

正美は長い長い通路を走っていた。
途中にあった隔壁は全て、煉獄(エウ)の審判神(メディア)の炎で蒸発させられており侵入者を防ぐという役割をまったく果たせずにいた。
一際大きい隔壁を蒸発させ、中へ入るとそこには、数多の高さ３ｍほどの試験管の中にたくさんの人が閉じ込められていた。

『正美、ここは妾とルアカーゼで開放しておく。お主は先へ進め。』

「わかった。後は任せた。」

部屋を出るとそこは長い通路になっており、走っていくと一つの今までとは違う大型の隔壁が道を閉ざしていた。
正美は、手の中に煉獄の剣を作り出すと隔壁を切り裂く。
部屋の中で踏み込むとそこには、一人の男が立っていた。

その頃、日本、アメリカ、韓国は完全に情報封鎖を由香里と黒の姫巫女にされており身動きが取れない状態であった。
何せ、世界中に現状の竹島で起きてる事態がリアルタイムで配信されてるからだ。
日本国内の領内に不当に占拠をしてる韓国も自国の領土と言う事が世界中に認識されてない以上身動きが取れない。
もし、援軍を送る事になればそれは他国の領内を侵犯することを世界に大々的に宣伝する事になってしまうからだ。
そして、日本国政府も韓国が不当に占領していた場所が襲撃された

と言って、今まで手出しをしてこなかった以上、今更、手を出す事は出来ずにいた。

煉獄（エウ）の審判神（メディア）の取った作戦。

それは、全世界の一般人に現状をリアルタイムで配信する事に国連のみならず日本、アメリカ、韓国に足枷をつけたのだった。

それも、時間制限ありであったが…。

日本国政府の動揺を誘うために、旧大戦の戦艦大和を使ったのも、そこを考えた上の事であった。

一方正美は、部屋の中央部まで進むと男と向かい会うと男の方から話しかけてきた。

「まさか、貴様から来るとは思いもよらなかったぞ？桂木正美。貴様がここまで来れる力を手に入れたと言う事は創世の種子はやはり桂木夫妻が持ち出していたのか。」

「さあな？そんな事は知らないが、お前が下らない力を振りかざして奈津美に酷い事をしていたのは見ていた。」

正美のその言葉に、男の眉が吊り上る。

「私の名前は、エウルユニス。貴様のような奴に名乗るなどもったいないが、今なら、創世の種子を渡せば助けてやらんでもないぞ？どうせ、貴様達、日本人には何も出来はしないからな。大人しく強い「ふさげるなよ」なんだ？」

思わず、エウルユニスは正美の気迫に飲み込まれてしまう。
見た目はどこにも取り得がない只の男にしか見えない。
だが、体の芯からの振るえが止まらない。
まるで、自分を全否定してきた正美の父親のように…。

「俺だけなら、まだいい。だが、奈津美や両親や他の人に手を出してきて、助けてやるだと？
それはこっちのセリフだ！自分の罪を悔い改めるなら命までは取らずにいてやる。」

正美がエウルユニスの顔を睨み言い切ると、エウルユニスはその端整な顔を怒りで歪ませた。

「貴様ー。何様のつもりだ、私が誰だか知らぬわけではあるまい？ＣＩＡの長官にもっとも近く幻想大陸でも最強の魔術師なのだぞ？もういい。貴様を殺した後に貴様の屍骸から後でゆっくりと創世の種子を奪ってやろう」

その言葉にも正美は冷静さを失っていない。

「そうかよ、ならお前を倒して、奈津美も助け出す、そして拉致されていた人達も救いだす。それで終わりだ！」

正美の右手から、炎を纏った煉獄の剣が作られていく。
それと同時に、エウルユニスが１ｍ程の炎の玉を何十も打ち出してくる。

正美は左手を前に翳す。
その動作だけで、数十の火球が次々と正美の前で消滅していく。

「ば、バカな？一体何をした？」

エウルユニスの顔が驚愕に歪んだ。
同時に正美が、ルアカーゼの身体強化を使い、姿が霞むほどの速度でエウルユニスを斬りつける。
辛うじて防御魔術が間に合ったエウルユニスだったが、作り出した防御魔術陣ごと体を一刀両断でされ、奈津美が入れられていた巨大な水槽にめり込む。

「クハッ。バカな…。たかが人間如きが何故これほどの力を…。」

エウルユニスがそう言った途端、水槽は一気に瓦解し中の水が一気に流れ出す。
正美は、そのまま走ると由香里に繋がっていたケーブルを、黒の巫女姫の力を使い解析し、原子を操作し消滅させた。
そして、それを見ていたエウルユニスは自身の敗北を悟った。

「なるほどな…。その力、創世の種子だけの力ではないな。だが何故だ？何故危険を犯し、下手をすれば世界を敵に回すかも知れない状況で何故、たった一人の女の為だけに助ける為だけにここまでこれるのだ？」

正美は、エウルユニスの方を見ると悲しみに満ちた瞳を向けた。

「エウルユニス、誰かを救うのに理由はいるのか？」

その正美の言葉に、エウルユニスは瞳を見開いた。
そうどこかで聞いた言葉だったから…。

そうあれはずっと昔…。

（何故だ？何故なんだ？フィーナ。何故、お前が黒の巫女姫の呪いを受けなければいけないんだ。そんなモノは下等な人間に任せておけばいいではないか？）

（お兄様！命はみんなたった一つなのですよ？それに私達は王族です。王族は民衆を守る義務がありますわ）

（だが、異世界の人間なのだぞ？やつらがこの世界に侵攻してこなければ全ては起きなかった、なのに何故お前が犠牲にならなくてはならない？）

（異世界の方の命も一つだけです。もう、多くの命を奪うのは止めましょう。悲劇は繰り返しては行けませんわ。）

（だからと言ってお前がそこまでして、その者達の救う意味はどこにあるのだ？）

（だって、人の命を救うのに理由なんて要りませんもの。だから、私はお父様が行おうとしてる儀式を止めてきます）

「そうか…。そう言う事だったのか…。ようやくお前の言った意味が分かったぞ、妹よ。バカな兄を許してくれ。」

そう言うとエウルユニスは正美の方へ視線を向けてくる。

「正美、お前は強い。私の負けだ、これを持っていけ」

そう言うと正美の方へ一枚のディスクを放り投げてくる。

正美はそれを受け取ると、憑き物が落ちたような顔をしている男へ視線を向けた。

「エウルユニス、お前一体何を。」

「正美、お前達は知らないと思うが、この世界には5人の偽天使と

一人の神が世界を牛耳っていた。それを２０年前、ある者が討滅した。
いま幻想大陸で、暗躍してるのはそれに近しい連中だ。
やつらはこの世界と幻想世界を滅ぼし、創生の種子を使い自分達だけの世界を作ろうとしている。
私は奴らの、世界を滅ぼすと言う言葉に引かれて手伝っていたが…。
だが、本当は違ったのだな。
妹（フィーナ）は、たくさんの命を助け世界を愛していたのだな。
私はそれを汚してしまったようだ。
正美、そのディスクには各国政府の裏取引が書かれている。
それを使えば、有利に物事が進められるはずだ。」

そういうとエウルユニスは正美にもう行けと、視線を向けてきた。

「ふざけんな、死んで逃げようとするなんて許される訳ないだろ！
俺の力があればお前を助ける事も可能だ！自分自身が犯した罪は生きて償えよ！」

その言葉に、エウルユニスは笑う。

「まったくどこまでも甘い連中だ。
日本人というのは本当に自分の事には無関心の癖に人が窮地に陥った時は身を省みないのだな。
そこが、お前達、日本人の強い所なのだろうな。
私の妹も、同じだった。
だが、私は自分が何も出来ない事に絶望し世界を恨み、世界を滅ぼそうとしてしまった。」

そう言うとエウルユニスは左手を正美にの視界に入るように向けてきた。

それを見た途端、正美の顔色が変わる。
左手が、結晶化し次々と砕け肩まで競り上がってくる。

「気にする事はない。私の体はこの世界で生きる為に魔人化を施していた。
エメラスと違い欠陥品だったがな。
どちらにせよ、私はもうすぐ消える運命（さだめ）だった。さあ、もう行け時間がないのだろう？」

ハッとすると。次々と瓦礫が部屋に落下してくるのが視界に入った。
正美が奈津美を抱き抱えて部屋から出て行くのをエウルユニスは見届けると、周囲の壁を見回した。
そこには巨大な亀裂が走っており次々と大量の海水が流れこんできている。

「これが、信念を持つ者の力か、本当に信じられん力だ。それにこの結晶化の力。この力があれば正美ならもしかしたら…。」

その言葉と同時にエウルユニスの上に巨大な岩盤が降り注いでくると同時に体が完全に結晶化し砕け散った。

カウントダウン

「冗談じゃねえー。」

叫びながら、正美は、奈津美を抱き抱えて地下７Ｆの通路を走っていた。
後ろからは岩盤から流出してきた膨大な海水が追ってきている。
そして、ルアカーゼと煉獄（エウ）の審判神（メディア）と分かれた部屋を通りすぎる。

「ん？臓器も無くなってるのか？一体…？」

正美は疑問に思い立ち止まろうとしたが後ろから海水が流れ込んでくる。

「くっそ！」

正美は、海水を解析し瞬時に分解し簡易的な壁を作り出す。
作り出した壁に海水がぶつかり、軋み音が鳴り響きだす。
正美はその間に走り出すが重要な事に気がつく。

「やばい、俺、道知らないぞ？」

海底から、直接岩盤と隔壁をブチ破り入ってきた正美は上へ上がる道を知らなかった。
致命的なミスである。
そこで、正美が作り出した壁が水圧で吹き飛び、海水が近づいてくる。
正美は奈津美を左脇に抱えると、後方から海水が近づいてくる音を

聞きながらも意識を集中させる。
右手に煉獄の剣を作り上げ、それを頭上に構える。
剣の纏う炎が、一気に強くなり正美の周囲の隔壁が蒸発していく。

「いけえええええええ」

同時に身体能力を最大限まで強化し跳躍する。
跳躍した瞬間頭上の壁がみるみる近づいてくる。
そこに炎を纏った剣が接触する前に、天井の隔壁が蒸発していく。
次々と蒸発していき、そのまま一気に展望台まで飛び出す。
正美はそのまま、展望台に飛び出したのを視界で確認すると剣を消して床に着地すると周辺には軍人が呆然と正美を見ていた。
誰も正美に近づこうとする者はいない。
そもそも誰も武器を保有してはいなかった。
床には、切り刻まれ屑鉄になったナイフ、銃が転がっている。
いくら鍛えられた軍人と言えど、素手で、床を蒸発させて飛び出してきた人間をどうにかしようと思う者はいなかった。
エルフィーナとイリシアの化け物ぶりをその目で見てきたのも一因を担っていたが…。

正美が周囲を見渡すと、エルフィーナとイリシアが立っていた。
どうやら二人ともここの防衛の無力化に成功したようであった。
エルフィーナとイリシアの後ろには多くの日本人が横になっている。

『主、臓器を摘出されていた者の蘇生は完了した。』

ルアカーゼが何事も無いように、巨大な白い狼の体で近寄って話かけてくる。
正美は頷くと、それを見た軍人達は腰を抜かしていた。
ルアカーゼの放つ畏怖に本能が危険だと感じていたのだった。

正美はルアカーゼの隣に立っていた煉獄の審判神に視線を向けると、煉獄の審判神が難しそうな顔をしている事に気がついたが、これからの行動を確認する為に話かける事にした。

「煉獄の審判神、後は、拉致された人を全員、大和に乗せて帰還する手筈でいいんだよな？」

『なるほどのう、ずいぶんと面白い趣向を最後に持ってきてくれたものよのう。』

正美の話をスルーして煉獄の審判神は、愉快そうに唇の端を吊り上げた。

その頃、首相官邸では総理大臣に就任したばかりの男が、ガタッと音を鳴らし、椅子から立ち上がり、目を見開いていた。

「そ、そんな事をされては私の政権は一瞬で飛んでしまいます。国内でそんな事をされればいくらなんでも世論が、それに私の政治生命が！」

「問題はないだろう？何のために武器を輸出出来るように法を改正させたと思ってるのだ？今から起きる問題は全て、北朝鮮と韓国に罪を着せてしまえばいいのだよ。
我がアメリカ軍は世界最大の軍であり世界の警察と呼ばれているのだ。
多少の事は、湾岸戦争の時のように問題をすべてこじつけてしまえ

ばいいのだよ。
それに竹島は日本の領土だろう?そこを侵犯されていたんだ。
丁度、イラクがクウェートを侵攻した時のようではないか?
ＣＩＡのエウルユニスが持っている各国のデーターは漏れれば大変な事になる。
それごと、目撃者も全員消し去り、さらに韓国と北朝鮮を戦争に巻き込む事により戦争で膨大な利益を貪る事が出来るではないか?
日本は黙って、我が国の指示に従っておけばいいのだ。
それにもう、遅い。
竹島にはすでに北朝鮮と韓国の周囲に展開させている原潜から核ミサイルが１０発近く発射されている。
誰にも止められはせんよ。
賢く行こうじゃないか。
ビジネスだよ」

ツー。ツー。と受話器から音が鳴る。

総理大臣になったばかりの男は受話器を叩きつけた。

「やつらは、自分達の利益と権利を守るためにまた、しなくてもいい戦争をしようとしているのか」

男は悔しそうに顔を歪め、、部下を呼びつけすぐに、竹島周辺の住民の避難と海上自衛隊と航空自衛隊の撤収を指示した。

「どう言う事だ?煉獄(エウ)の審判神(メディア)。」

『言ったとおりだ、どうやら正美が持ってる物は、大国の逆鱗に触れてしまったようじゃな』

「だが、そんな事で？」

『人間が愚かな生き物であると言う事は貴様が一番良く知っておろう？特にやつらは神という物に自分が犯した罪を擦り付ける事で自分の罪を自覚しない分、尚更、性質が悪い。おそらくあと１０分ほどでここにミサイルが降り注ぐはずじゃ』

その言葉に正美以外、竹島を占領していた軍人も顔を真っ青にした。

「つまり臭い物には蓋をしろって事かよ？」

正美はそのまま、空を見上げる。

まだ、正美の位置からは見ることが出来なかったがすでにミサイルは、正美達の居る竹島へ向かっていた。

力の代償　前編

「空を飛んでいた鉄の鳥が離れていくぞ？」

イスピルは上空を見て、不思議そうに呟いた。
ガイアスも戦艦大和の船上から周囲の海域を見渡す。

「由香里、何か嫌な予感がするぞ？どうなってるんだ？」

生物の生存本能からか、冒険者として生きてきた長い期間で培われたモノか第六感がガイアス達にここは危険だと警鐘を鳴らしている。
由香里も黒の巫女姫が解析したデーターに自身の能力で楔を打ち込む事により情報を操作しながらも周囲の雰囲気が時間が立つ事に重くなっていくのを感じていた。

『まずいよ、これ。アメリカの原潜が１１発の核ミサイルをここに向かって撃ち込んできてる。情報解析が間に合わないよ。このままじゃ皆、死んじゃうよ』

黒の巫女姫の言葉に由香里を含む全員の視線が黒の巫女姫に集中する。

「なんで？貴女の力で解析すれば『ううん、対抗策を取られて遠隔操作出来ないように遮断されてるの。だから、今、私と由香里じゃ止める事はできないの』」

黒の巫女姫が切羽詰った声で、由香里の言葉に途中で被せるように一気に説明した。

この世界では、黒の巫女姫・ルアカーゼ・煉獄(エウ)の審判神(メディア)は、極端に力が制限されていると…。
それでも、人と同じ大きさに顕現出来てるのは、この世界に来てから正美が受け取っている膨大な力のおかげだと。

『だからね、今の状態だと、煉獄(エウ)の審判神(メディア)もルアカーゼも上空１５００ｋｍもの高さから飛来するモノを迎撃する事なんて不可能なの。』

「なら、正美先輩なら？」

由香里のその言葉に、黒の巫女姫は首を横に振った。
黒く輝く髪が光輝く。

『わかんない。たしかにもう一人の正美(わたし)は、この世界に来てから信じられない程の力を振るってるけど、それで止められるかは…。』

「でも信じられない力があるなら『気安く言わないでよ、由香里。分かってるの？力を振るう為には代償が必ず必要なの。この世界に来てから無尽蔵とも言える程の力を正美は使ってるけど、どんな代償が続いてるのか分からないのよ？私が使う力は自分の力を解析する事が出来ないの。だから今、どんな状況に正美が置かれてるか分からないのよ？今回の作戦だって本当なら大国を相手にしても、ルアカーゼだけで殲滅できたのよ？でも正美と由香里の力の消費を抑えるために情報封鎖で国家相手に足枷をつけてるの。少しでも力の消費を抑えるためにね。由香里だって力を使いきれば、死んじゃうんだから！』

「おいおい、仲間内で言い合ってる場合じゃないだろ?今はどうするかを考えないといけないだろう?」

ガイアスが由香里と黒の巫女姫の肩に手を乗せて揺すりながら話しかけると、二人は視線をガイアスに向ける。

「なんで、仲介役した俺が睨まれないといけないんだ?」

「ガイアス、女同士の喧嘩に男はね、割り込まないほうがいいのよ?」

リメラが島の様子を見ながら呟くと、ガイアスは肩を落として二人から距離を取るために船上を歩き、リメラの隣に立つと島の人工構造物に視線を向けた。

「どうやら、向こうさんは終わったようだな。それと、正美が上空を見てるって事はやっぱり向こうも気がついてるみたいだな?」

その頃、正美達は、どうすればいいか議論していた。

『じゃから何度も言っておるが、妾とルアカーゼは、それなりの力を使う事は出来るが超超高度から降り注ぐ物体を同時に破壊する事は出来ないのじゃ。せいぜい3つか4つと言った所かのう?』

『主よ、この世界の核と言うものは生物に有害のある物が多分に含まれているのだろう?我が落とせるのは恐らく煉獄(エウ)の審判神(メディア)と同じ

数かそれより多いくらいだ。あとは主に任せる形になってしまう。』

「わかった。後残りは俺が破壊すればいいんだな？」

正美がそのまま上空を視る。

景色が空が全てグラフで数値で視界に表示されていく。

「数は１１発か…。」

正美の言葉に、周囲が静まりかえる。

普通の人間なら、１発の核弾頭ですら死亡フラグ確定である。

それが１１発、生身の人間の精神では耐え切れるモノではない。

正美、ルアカーゼ、煉獄（エウ）の審判神（メディア）は別として…エルフィーナとイリシアが取り乱さなかったのは只、よく理解出来ていないという点が大きい。

そして理解出来ている一般の人間の行動は…。

島を守っていた軍人は我先にとゴムボートに乗り島からの脱出を図っていた。

数キロ離れた程度では意味が無いと知っていても、それが普通の人間の感性なのだろう。

中には呆然と、空を見上げてる人もいる。

逃げてもムダだと悟ってるからであった。

「さて、ルアカーゼと煉獄（エウ）の審判神（メディア）は二人で８発を成層圏で迎撃してくれ。俺は残り３発を潰す」

『御意』

『仕方ないのう』

「ちょっと待て！」

ルアカーゼと煉獄の審判神（エウメディア）が空へ飛んで行こうとするのを正美が押し止めた。

『まだ何かあるのか？』

「いあ、その俺、空飛べるようなチート能力ないんだけど…だからルアカーゼに連れて行ってもらいたいなーって」

『正美、お主は以前、初めて力を使った時に炎の翼を出してた事があったと思うのじゃが？』

「いや、それは無意識だったからなぁ…。」

正美がそう呟きながら、煉獄の審判神（エウメディア）に何か言われるかと思った所で、煉獄の審判神（エウメディア）の顔が強張る。

ルアカーゼも空を見上げ、上空を正視する。

「ど、どうし…た！？」

言葉の途中で正美もその圧力を感じ、タイルに膝をつく。

その頃、国防総省では全ての核ミサイルが消失した事で混乱の極みに達していた。

「どうした？何が起きた？」

男、この国の大統領は突然の出来事に驚きを隠せずにいた。

「分かりません、大統領。核ミサイルが同時に全てレーダー上から消えました。」

オペレーターが声を張り上げる。
すでに場は騒然としており、声を張り上げなければ声が届かないからであった。

途端に空が黒く染められていく。
同時にレーダーが巨大な影を感知する。

「た、大変です。上空に巨大な物体を確認。落下してきます。大きさは、そ、そんなバ、バカな！？」

国防総省の上へ巨大な島が降り注ぐと同時に、周囲の物質が反発しあい巨大な爆発を引き起こす。
爆発の余波が消えた後、そこには都市も建物も全て一瞬で消滅し直径１０ｋｍ以上もの巨大なクレーターが出来ていた。

その頃、正美は突然、現れた重圧（プレッシャー）が消え、核ミサイルも同時に消失した事から床に座り込んでいた。

「なあ？今のは、何だったんだ？」

正美のその言葉は、この場にいた者ならば誰でも思った事であった。
正美は核ミサイルが消失し自分が助かったと言う事を含めて何が起きたのか知りたかった。

『あれは、おそらく…。』

珍しく煉獄（エウ）の審判神（メディア）が言葉を言い切ろうとしない。
煉獄（エウ）の審判神（メディア）の顔を見ると信じられないと言った表情をしていた。

「んっ…。」

煉獄（エウ）の審判神（メディア）の話を聞こうとした正美の耳に、聞きたかった音が入ってきた。
正美は床に寝かせていた奈津美に近寄ると、体を抱き起こす。

ゆっくりと奈津美が瞼を開けていく。
数度、瞼を動かすと、ゆっくりと覗き込んでいた正美を見る。

同時に悲鳴を上げながら奈津美は、正美から離れると周囲を見渡す。
周囲には軍人らしき人と巨大な白い狼、メイドさん？そして見知らぬ男性が驚いた表情で自分を見てきていた。
知らない男の人だった。
そして、自分自身なんでこんな所にいるのか分からなかった。
誰かと一緒に遊びに行くのに家を出てからの記憶がない。
誰か？誰だったか思い出せない。

奈津美はとても混乱していた。
そして、口を開いた。
それはとても、残酷な言葉であった。
正美の方を見て一言、「貴方誰なんですか?」と…。

「うん、うん。ありがとう。」

ベランダで由香里は、携帯電話の話を終わらせると部屋の中へ戻っていく。
部屋の中には、由香里の姉の奈津美がベットの上で座っていた。

「由香里、お父さんなんだって？」

奈津美が、不安げに由香里を見上げ聞いてくる。

「うん、お父さんが何か必要な物があったら言えって言ってくれたよ？」

「ほ、本当に？」

「うん」と由香里は即答していた。

「やっぱり、由香里。何だかすっごい変わった気がするんだけど、気のせいじゃないよね？やっぱり隣の部屋にいる人達の影響なの？」

「う～ん、話すと長いんだけどね。もう私は、在りのままで人とぶつかる事にしたの。怯えてても何も前進しないしね」

その言葉に、奈津美はやっぱり由香里はずいぶん変わったねとうれしそうに笑った。
由香里はその笑顔を見ながらも心の奥底で、これからの事を思い不

安に駆られていた。

あの竹島での戦いから一週間が経過していた。
アメリカのワシントンの消滅が切っ掛けとなりこの一週間の間で、中国、ロシア、イギリス、ドイツ、フランス、カナダの6カ国の首都に大型の巨大建造物が落下し首都を消滅させていた。
その事から世界経済は現在、停滞状態になっておりエネルギー供給を含め深刻な状態となっている。
日本は特にその影響を受けており、都会や首都に落下する傾向から東京と大阪では疎開が始まっている。
世界的に危機的状況に陥ってる事から竹島で起きた問題は、新聞やメディアで一時は大々的に報道されていたが世界中の首都の消滅という異例によりすぐに忘れされれてしまっていた。
それでも救出された拉致されていた被害者は戦艦大和に乗せ、新潟まで運び役割を終え、契約が終わった後、戦艦大和は大日本帝国海軍将校達との契約の解除と共に海の底に再度眠ることになった。
現在は、東京にあるホテルで一行は体を休めていた。
本来ならば、正美の家に行くのが良かったのだが、正美の家は競売にかけられていた。
原因は、桂木夫妻の死亡により跡継ぎがいなくなった正美の家の売却であった。
そのために急遽、由香里が仲直りした父親の協力を得て都心のホテルを手配してもらい、そこで一行は体を休めていた。

由香里がエルフィーナや正美達がいる部屋に入ると、そこはお通夜のように暗かった。

「やっぱり、正美先輩の情報は区役所にも？」

その由香里の言葉に、正美が頷く。

『どうやら、これはかなり深刻な問題のようじゃのう。』

「どう言う事だ？」

『つまり、正美が特殊な力を持ってると認識していた者以外からの正美の記憶、この世界での存在が無かった事になっておる』

その言葉に、ガイアスとリメラが息を呑む。

由香里はよく分かっておらず、首を傾げている。

正美も理解が追いつかず、煉獄の審判神（メディア）に話の続きを進めるように訴える。

『この世界で力を振るう為には、大雑把に言えば肉体の力を使い行使する方法と精神を消耗して使う2種類がある。魔術と言うのは精神力を消費し大気や元素に直接、力を伝え使う術になる。そして肉体の力を使うモノが、魔流術という物になる。肉体に流れる生命力を媒介にし世界に干渉し大気や元素を間接的に一クッションおいておる。

つまり、魔流術と違い魔術は直接、大気を扱う事から膨大な精神力を必要とする代わりに巨大な力を行使することが出来る。

だが、それとは別に自身の生命と精神力を同時に使用し扱う例外的な規格外の力がある。それが由香里の幻想技術（フィーナエルガント）になる。』

そこで、煉獄（エウ）の審判神（メディア）は一度、瞼を閉じる。

黒の巫女姫は、一呼吸おいたあと、全員を見回し、重い口を開く。

『ここからは私が言うね。正美の力の源は、自身の存在の力なの、つまり力を使えば使うほど皆からの記憶から正美が消えていってしまうの。
ここからは私の予測だけどね、正美はもう戦わない方がいいと思うの。
これ以上、戦ったらきっと正美は皆からの記憶だけじゃなくて自分の存在自体消失すると思う。』

その言葉に、正美は耳を疑った。

「な、なんだよ…。それって…、俺は力を行使すればいずれ死ぬって事なのか？」

煉獄（エウ）の審判神（メディア）と黒の巫女姫がそれに対して肯定するように頷く。
由香里以外の冒険者達であるガイアス達も俯いていた。
誰も何も語らず部屋の中を沈黙が支配するかと思われた所で正美がその場から立ち上がるとテレビをつける。

「まあ、過ぎた事は仕方ない。これからの事を考えよう。」

明るい声で、場を取り持つように正美が発言しながら、全員がテレビに映された状況に息を呑む。
オーストラリアの首都が一時間前に消滅していた事をテレビでは流していた。

「ねえ、なんで日本は攻撃されないのかな？」

由香里のその言葉に、ガイアス達は思わず頷いていた。

『恐らく、不確定要素がこの国におるからのう』

「不確定要素？ルアや煉獄（エウ）の審判神（メディア）の事か？」

『違う、一番の不確定要素は、桂木正美、お主じゃ。』

闇の鼓動

どこまでも、漆黒の闇が支配する広間。
その中に、紅の髪を靡かせ一人の男が音を立てずに入ってくる。

「ユーゼイ、貴様！一体何を考えてる？」

男は広間の虚空部分を見つめると声を張り上げる。

「何故、他世界への干渉を行っている？まだその時期ではないはずではないのか？」

男の言葉が広間に響く渡ると同時に、別の声が広間へ響き渡る。

『黒の巫女姫を再度、この世界へ引き込むためだ。』

男はその声に表情を変える。

「世界の境界は神の力でもそう何度も超える事は出来ないはずでは？」

『だが、確認した所、黒の巫女姫はこちらの世界には来る際、召還陣を使ってないことが判明した。』

「どう言う事だ？召還陣を使わずに世界を渡る事が出来る？どう言う事だ？」

男が虚空を見つめながら声を上げると男の後ろで魔法陣が構築されていき、一人の男が音も立てずに広間へ現れた。

「ウインクード、つまり黒の巫女姫は我々の知らない力を有してると言う事ではないのか？」

男がそう言いながらウインクードの隣に進む。

「ユーゼイ、貴様、俺に王都イースバールを落とさせたのは過去を消し去る為ではなく、異世界への干渉が目的とか言わないよな？」

その言葉と同時に男の周囲に何十もの魔法陣が作られていく。

「やめろ、エドルガルド。こんな事をしてる場合ではないだろう？」

「ふん、ウインクードに感謝するんだな。」

途端に、エドルガルドは手を振るう。空間に形成されていた魔法陣が動作に反応し霧散するとエドルガルドは広間から退出し、それを応用にウインクードも出ていく。

出て行く際に、広間を睨みつけて…。

二人が退出し静まりかえった広間の空間が裂けていく。

そこから現れたのは緑色の神官服を纏った1対の翼を生やした男であった。

『これは、創造主様、何をしにこちらへ？』

「大事が発覚したのでな。我々の本当の計画はまだ感づかれてはいないだろうな？」

『はい、黒の巫女姫を使い、星を生贄に捧げ、五天使と神を復活させるという計画は漏れてはいません』

「そうか、ここからが私が来た本当の問題だ。」

その言葉に広間が静まり返る。

「地球にいる正美と言う者が黒の巫女姫の力を宿してる。」

『はい、それは他の者からの報告で聞いております』

「そうか、その正美と言う者だがどうやら、以前、我々を邪魔をした時、地球に飛ばしたはずの煉獄(エウ)の審判神(メディア)の協力を得ているようだ。」

『煉獄(エウ)の審判神(メディア)ですと？あの煉獄の？ですが力が強い者ほど異世界の影響下に置かれ消滅するはずでは？』

「私もそう思っていたが、どうやらしぶとく生きていたようだ。」

その言葉に、広間全体の闇が震えるように脈動する。

煉獄(エウ)の審判神(メディア)、同じ上級神と崇められていてもその力は雲泥の差がある。

それは、元からの発生条件がまったく違ったからである。

『煉獄(エウ)の審判神(メディア)と黒の巫女姫ですか。ずいぶんと危険な取り合わせですね。ですがそれだけならば「違うだろう？ユーゼイ。お前も無意識に感じ取っているのではないのか？本当はそんな物で片付けられるほど本質は甘く無いと言う事に。だからこそ、この大陸から切り離した小島を地球に降下させる際、障害になりそうな首都を破壊している際に、日本という小国には手出しをしていないのだろう？あそこには正美がいるからな…。」

『決してそのような事では…。』

「そうか？正美に幻獣王（ルアカーゼ）が力を貸してるとしてもか？」

闇が、怯えるのを男は感じていた。

上級神と言っても所詮は、元はエルフと言う脆弱な器から作られたモノだと言う事に苦笑しながら…。

『そ、そんな筈は…。幻獣王（ルアカーゼ）は、休眠期から覚めた際に一人の異世界から渡ってきた人間に討滅されたのです。何かの勘違いいいいい』

突然、広間の声にエコーが掛かる。

闇に話しかけていた男の周囲には、闇よりも尚暗い漆黒が放出されていた。

それが闇を侵食し喰らい尽くそうとしていた。

「私の話が信じられないのか？それとも私に意見をするのか？私が作ってやったというのに！」

『い、いえ。そのような事では…。』

「まあいい。しばらくはそのまま人口の集ってる場所へ王都イースバールを落とした際の建造物を落としておけ。あの国の人間ならば、必ず食い止める為に、この幻想大陸に戻ってくるはずだからな。それと大陸を切り離す際に、人間が作った核兵器を応用したのは中々の案だったぞ？」

同時に男からの重圧（プレッシャー）が消える。

重圧（プレッシャー）が消えると同時に、薄くなっていた闇が再び濃くなっていく。

男は、それを気にせずに何もない虚空を見上げる。

「ようやく、ようやくです。これで我々の世界が手に入る事でしょう」

男の壊れたような声が、漆黒の広間に響き渡っていた。

波紋

「俺が不確定要素？そんな事あるわけないだろ」

正美は煉獄（エウ）の審判神（メディア）の指摘に即答していたが煉獄（エウ）の審判神（メディア）はジッと正美に視線を向けたまま逸らさずに見ている。

「じ、冗談だろ？なんで俺に、俺にはそんな力は…。」

『まだ、分からんのか？幻想世界の上級神である妾（わらわ）、そして、代々の異世界から召還されて生きてきた者の知識（オリジン）の集合体の黒の巫女姫、世界の大陸を支える数多の幻獣の王である幻獣王（ルアカーゼ）。これだけの力を正美、お主は自由に使う事が出来るのだぞ？これだけの力を使う事が出来る時点でお主はもう世界の理（ことわり）から外れているのだよ』

その言い方に、由香里が立ち上がり煉獄（エウ）の審判神（メディア）を引っ叩いた。

『何をするのじゃ！？』

煉獄（エウ）の審判神（メディア）が由香里を見ると、瞳に涙を蓄えていた。

その様子に、ガイアス達が息を呑む。

由香里と一年以上、一緒に冒険をしてきた事があったからこそ、その涙の意味に気がついたからだ。

「いいかげんにしてよ！正美先輩が、今、どんな気持ちか分かってるの？貴女が今、言った言葉は、どう言う意味を持つか分かってるの？」

由香里が怒りに震えながら、煉獄（エウ）の審判神（メディア）を睨みつけていると、後

ろから正美が由香里の頭の上に手を乗せた。
手を乗せられた事に気がついた由香里は、後ろを振り向くと困ったような顔をして右手で後頭部を掻(か)いていた。
その仕草は、本当に困った時に見せる正美の癖であった。

「正美…先……輩」

由香里は、正美の仕草に気がつき、床に座り込む。
正美は立ったまま、煉獄(エウ)の審判神(メディア)を見る。

「って言う事はだ、俺がここにいる限り日本は無事だが、俺の存在を知ってるって事は、このまま此処にいても事態は進展しないって事だろ？煉獄(エウ)の審判神(メディア)。」

その言葉に、煉獄(エウ)の審判神(メディア)は頷(うなず)く。
それを見た、正美は再度、後頭部を掻(か)く。

「そっか。なら、行くしかないよな幻想大陸に！大事なモノを守るためにな！」

『我が主ならそう言うと思っていたぞ。』

ルアカーゼはそのまま、正美の頭の上に小動物に変化して乗る。
正美はルアカーゼを頭から下ろすと全員を見回す。

「明日、幻想大陸に戻りこの世界(ちきゅう)に干渉を及ぼしてる原因と根源を突き止める。
だから、皆、俺にもうしばらく力を貸してくれ」

「正美様、このエルフィーナは正美様に命を助けてもらった恩があ

ります。どこまでも付き従います。」

エルフィーナはエメラスより受け取った系譜原書（ノア）を握り締めた。

「このイリシアも、命を助けてもらった恩があります。それにまだメイドとしての仕事も覚えてませんし…。」と、日本に来てから手に入れた刀の刃の調子を見ている。

それを見た全員が、刀ってメイドの仕事って関係あるのかーっと心の中で突っ込みを入れていた。

「俺達ももちろんついていくぞ？一緒に帰らないと帰れないしな。だが、行動を共にするかは、各ギルドと教皇に確認を取らないといけないな」

「そ、そんな…。」

ガイアスの言葉に、由香里が思わず声を上げた。

「そうですね。ウーネイさんは神官そしてガイアスさんは召還術師でしたね、そうしますと女神を信仰する国家レイゲンの教皇に今までの経緯と今後の活動の説明をしないと教団の教義に反しますものね」とエルフィーナはガイアス達を擁護する。

「で、でも、リメラは？」由香里はリメラを見る。リメラは由香里の視線に首を横に振る。

「由香里ちゃん、ごめんね。もう私達の個人の力では対処しきれる限度を超えてるの。分かって、はっきり言って、私やガイアス、イスピル、ウーネイじゃこれからの戦いの足手まといにしかならないの。私達のような最高のSランクに近い冒険者ですらこうなのよ？

もう無理だわ」

リメラは、喉を絞るように声を発していた。
それは、本当に苦しそうに。自分達が無力だと分かるだけに苦渋の決断であった。
足手まといになるくらいなら…。

「で、でも、待ってよ、皆、なんでそんなに悲観的なの？今まで皆で何でも乗り越えて来たじゃないの？」

由香里が必死に、ガイアス達に声をかける。

「もう、無理なんだよ！」

突然、上がったイスピルの声がホテルの一室に響く。
その声に、由香里は信じられない表情でイスピルの方を向く。

「もういいだろ！俺達だって人間なんだよ、命が惜しいんだよ。世界とか言われても訳わからねーよ。
後は、煉獄（エウ）の審判神（メディア）と黒の巫女姫と幻獣王（ルアカーゼ）に任せておけばいいじゃねえかよ？
これだけの顔ぶれならなんとかできるだろ？
もう、俺達を付き合わせるのは止めてくれよ。
怖ーんだよ！核とかよく分かんねえけど、あんな恐怖はもう嫌なんだよ！」

「イスピル、それ本気で言って…「由香里、もういい。無理強いはしたくない。」

正美が、イスピルに近寄ろうとした由香里の肩に後ろから手を置き、

近寄るのを阻止する。
それを見た、イスピルは正美から一歩下がった、その顔に恐怖を貼り付けたまま。

「そ、そうだよ。正美だって分かってるんだろ?俺達が部外者だって事にさ、それに正美ほどの力があれば一人で何とでも出来るだろ?」

その言葉に、今度こそ、由香里は切れイスピルの胸元を掴み持ち上げた。

「イスピル、本気で正美先輩に全部やらせようとしてるの?貴方だって知らない訳じゃないでしょ?正美先輩は力を使えばどうなるかを!」

「ああ、知ってるさ、聞いてたからな。だがな、おかしいだろ!なんで人間個人がそれだけの力を有してるんだ?
そもそもなんでこの世界にきてからあれだけの力を行使できるんだよ?
最初の契約の儀式の時、幻獣王(ルアカーゼ)と戦った時、たった一合で力を使い果たしてたよな?おかしいだろ?
もうこいつは人間じゃないんだよ!化け物なんだよ!そんなのとまともに付き合えるほうがどうかしてるんだよ。わかってるのかよ?」

イスピルはそこまで言うとハッとし、由香里を真正面から見た。
由香里の瞳から次々と涙が零れるのを見たからであった。

「イスピル、酷いよ。そんな言い方なんてあんまりだよ。」

次々と由香里の瞳から涙が零れる。

「私が、幻想大陸に飛ばされて困ってた時、ガイアスより先に私の事を元の世界に帰してやるって言ったのは何だったの？打算だったの？私を心配してくれたからじゃないの？私達は皆で一つのチームだよね？なんでそんな悲しい事を言うの？仲間なら、皆で助け合おうよ。冒険者ギルドでチームを結成する時に、皆、約束したよね？どんな時でも、仲間を思い助け合って困難に立ち向かおうって！それがなんでこんなになっちゃうの？」

その言葉に、ガイアス達は俯いてしまう。

「由香里さん、無理はよくありません。ここからは、冗談では済まないのですよ？」

イリシアが、刀を鞘に収めてから立ち上がり寝室へ入っていった。

『うむ、もうこんな時間か。明日に向けて全員、睡眠をしっかり取っておくようにの』

煉獄（エウ）の審判神（メディア）の場の空気を読まない言葉に、煉獄（エウ）の審判神（メディア）を含め、幻獣王と黒の巫女姫も部屋から出て行ってしまう。

「まぁなんだ？人それぞれやる事あるしな。ガイアス達も明日に向けて休んでおけよ、な？」

正美はそのまま、イスピルの胸元を掴んでいた由香里の手を離させると、ガイアス達を部屋から出した。
まだ由香里は下を俯いたまま涙を流している。
その頭の上に手を置くと、正美は窓から外を見て呟いた。

「なあ？ちょっと俺さ、実家に行って調べたい事があるんだけどさ、付き合ってくれないか？」

そういうと由香里の頭から手を離し、バルコニーに出ると正美は、今は、所々しか明かりがついていない町並みを視界に収めていた。

「律儀と言うか、仕事に対して勤勉と言うか世界中が危険な状態に陥ってるというのに列車が動いてるのはさすが日本って事なのか？」

正美は電車の席に座りながら、窓の外を見ると、建物の明かりはほぼ消えており外灯のみが都市を照らしていた。

「まるで、町が死んでるようね…。」

声のした方向を見ると由香里が正美の横に座っている。
由香里も電車の中から外を見て意識せずに呟いた。
正美は、由香里を見た後、電車の中を見回すと電車の中には正美と由香里以外に乗ってる者は居なかった。

「そうだな。」

それだけ言うと正美は、椅子に座ると目を閉じた。

二人が乗っていた電車が駅に到着したのはそれからしばらくしてからであった。

３０分後…。

正美と由香里は、桂木家の門を開け足を踏み入れていた。
そこは、まるで数年間放置されていたかのように荒れていた。
荒れている庭を正美と由香里は踏みしめ進み、正美は懐から鍵を取

り出すと桂木家の玄関のドアを開く。

「鍵は同じなんだな…。」

抑揚の無い声で正美は、誰にも聞こえない程の大きさで呟いた。
正美が土足のまま桂木家へ上がると、由香里も後を追うように後を追いながら口を開いた。

「ねえ？一体ここに何があるって言うの？」

「イスピルが言ってただろう？人間個人がなんでこれほどの力をもってるのか？ってもしかしたら俺の出生に何か秘密があるかもしれないだろう？
それに俺の親は、よく子供の記録を事細かに残してたしな。きっと俺の本当の過去が残されてると思う。
それに、ある記者が言ってたんだ。俺の父親が何かをしてた可能性があるんだ。
だから、それを見つける。そうしないと行けない気がするんだ。」

そのまま、正美は2階へ続く階段を上がり、自分の部屋の扉の前に立つとそこには、正美の部屋のドアにプレートが貼ってある。
そのプレートには正美ちゃんの部屋と書かれていた。

「正美先輩、これって？前に、ここ来た時は無かったですよね？」

「ああ、きっとこういう事なんだろう」

扉を開けるとそこは、ピンクの壁紙、たくさんの人形が棚の上に並んでいた。
そこはまるで小さな女の子の部屋のようであった。

部屋の中へ入ると、小さな机の上に写真立てが立てかけてあり、正美がそれを手に取った。

「正美先輩、なんで黒の巫女姫が正美先輩の両親と一緒にいるんですか?あっ、先輩、どこにいくんですか?」

正美はそのまま部屋を出ていくと、階段とは逆方向の通路の突き当たりの部屋の前に立つと扉を力任せに開き足を踏み入れる。

「先輩!一体ここは?」

「ここは、親父の書斎だ。もし何かあるとしたらここだと思ってな。」

正美はそう言いながら書斎を見渡す。
この世界へ戻ってきた時には荒らされた後があった書斎は綺麗に整然と並べられている。
まるで、全てが無かったかのように…。

「どういう事なの?一体何が起きたって言うの?どうしたっていうの?」

この世界に来てから、そして自分が本来知ってるはずの正美の家では無い事に由香里は戸惑っていた。
まるで初めて入った事があるような家の様子に。

「それは全てこれを見れば分かると思う。」

由香里が声がした方へ視線を向けると、正美が一冊の本をもっていた。そこにはｄｉａｒｙと記載されていた。

正美と由香里は、電気が通っていない部屋で懐中電灯を頼りに、書き込まれていた内容を読み始めた。

真実への道　後編

○年４月

私は製薬会社ロシュ　日本支社へ入社した。
そこでは、多くの実験がされていた。
私は、若い頃から万病を直す薬を作り苦しんる人を助けようと実験に明け暮れた。

○年５月

大学の時代から付き合っていた奏美（かなみ）と結婚した。
結婚する時に、両親に挨拶に行った時の衝撃は私は一生忘れないだろう。
奏美（かなみ）の実家は、日本で有数の最古参の神社だった。
その日は、奏美の実家に止まる事になったのだが、父親がお酒が入ると絡む体質だったからか、神社の設立、大神の血を引いてるなど話していたが世迷言と思いながらその日は私もお酒が入っていた事から意識が遠のいていった。

○年１２月

仕事は順調に進んでいた。私の仕事振りを評価してくれたのか、国が新しく作る研究所の所長に抜擢された。
そこで私は、国からの指示により万能細胞、通称　ＥＳ細胞を研究する事となった。

○年９月

３年以上実験をしているが未だに形には程遠い。
培養した細胞が本来の体の持ち主である者の免疫作用に壊されてしまい適応しないからだ。
だが、私の研究が成功すれば少しでも多くの人を救える。

〇年５月

妻との間に、諦めかけていた待望の子供が生まれた。
妻の奏美（かなみ）に似て、とても可愛い。将来は、美人になるはずだ。
奏美から一文字とり、娘には正美となずける事にした。
如何なる時でも、どんな時でも、自分を見失わず思いやりを忘れず正しく美しく育って欲しいと願いを込めて。

〇年９月

ＥＳ細胞がようやく形となってきた。
だが、最後の免疫作用をどうにかしないといけない。

〇年１１月
娘の正美が、突然体調を壊し入院する事となった。
その際、正美は特定疾患と言うのが判明した。
体中の細胞の免疫機能が機能しなくなり、細胞の自己増殖が効かなくなる病気だった。
世界中で始めての症例だった。

〇年１２月

正美を助ける為、実家に戻らず私は研究を続けた。
全ては、ＥＳ細胞に掛かってるからだ。

○年1月

研究は行き詰っている。
娘の容態は一進一退でありいつ容態が急変してもおかしくない。
どんな手を使ってでも娘を助けなければ。

○年2月

国の機関よりある物の解析を頼まれた。
それは、楔(くさび)だった。
本来ならば、まったくここの研究所の仕事とは関係ないのだが、手に取り私は驚愕した。
それは、生きて脈動していたからであった。

○年3月

その楔を解析した結果、それは別の細胞を取り込みそれを吸収する事により成長するモノであった。
一体、これはどういう理論で作られているのだろうか？

○年4月

ES細胞を与えた所、楔は大きな反応を示した。
実験の結果、生きてる細胞と合わせる事により細胞自体を書き換え、あらゆる毒素を跳ね返し、自己増殖まで兼ね備えるという驚愕した事実を私に見せ付けた。
それと同時に、戦争などに転化されれば不死身の兵士を造り上げてしまう事が予想できた。
私は、実験結果を国へ渡す事を考えざるを得なかった。

○年５月

娘の容態が急変した。
正美はまだ、一才。
私は、決意した。封印しようとした楔を中心に埋め込んだＥＳ細胞を使う事に…。
本来であれば、実験を行うのだが、それだけの時間が残されていない。
娘を失うくらいならと、奏美に何も話さず病院へ忍び込み正美を連れ出し研究室へ連れてきた。

○年６月

娘の正美の容態は安定している。
そして、娘の体を調べた所、ＥＳ細胞も楔も消えていた。

○年３月

娘が小学校に入学した。
このまま、何事も無く無ければいいのだが。

○年７月

今回が、楔に関しての最後の報告書になる。
政府はこれが何なのか理解出来てはいない。
だが、私も本当にそれが何か理解したのはもう少し後になってからであった。

○年３月

事件が起きた。
娘が男達に拉致されそうになった。
だが、それ以上に私を驚愕させたのは、娘がたった一人で成人男性二人を殺していたと言う点であった。手口が普通では考えられない内容であった。
車の一部分が切り取られたように鋭利な刃物で切り取られ、それが何百倍もの重力をかけられて潰される事など普通は在りえるのだろうか？

〇年３月

私が、楔を私物化している事が判明してしまった。
政府は、私の娘を差し出すように要求してきた。

〇年４月

妻は断固拒否していた。
私は、娘が政府に渡るくらいならと、娘を助ける為に、実験結果を政府に提供する事を目的に取引を行った。

〇年５月

娘は、自分が殺した男や友達を毎晩、夢に見てうなされている。
同時に娘はあの事件以来、空ろな眼差しで感情を置き忘れたように、一つの言葉だけをずっと繰り返している。
「殺して…と」
私の心を罪悪感が蝕む。
こんな事の為に、研究をしてきた訳ではないのに…。

〇年６月

実験の途中結果であったが、信じられない結果が出た。
未だに解明されていない、地球が太陽系における影響の公式をわずか8歳で解いてしまっていた。
その瞬間、娘が何か別なモノのように感じ取れた。

同月

研究の際の、スキを狙って娘は自分の喉にナイフを刺すという事件が発生した。
私は驚き、娘にかけより抱き起こすと傷口が数秒で塞がった。
娘は一言その時もいつもの言葉を呟いた。
私はそれを聞き、涙を流した。

○年7月

未だに娘は、あの事件以来、笑顔を見せてはくれない。
空ろな眼差しをしたままだ。
感情が壊れたかのように、ただ虚空を見上げている。

○年8月

娘が研究所から姿を一時間ほど消していた。
戻ってきた娘は、以前とはどこか違っており瞳に生気が宿っていた。
何かあったのだろうか?

○年9月

娘が少しづつ感情を取り戻していくのを感じられた。
だが娘が一日の間、目を話した隙に姿を消していた事に私は疑問を抱いていた。
ある日、モニターで確認した所、見たことも無い模様を娘が描き姿を消していくのが分かった。
それは、意識せずとも私が正美を別のモノとして見る切っ掛けになってしまっていた。

〇年１０月

国より一人の男が研究所に配属された。
男の名前は、エウルユニスと言った。

〇年１１月

エウルユニスは、アメリカからの研究内容を奪おうとしたスパイだった事が判明した。
判明した原因は、エウルユニスが正美を連れ出そうとした際、正美に反撃され傷を負いその際、正美が男の考えを読み取った事をその場で告げた事からであった。
そして男はその正美に対して、多大な興味をした眼差しを向けていた。
私は3度目の経験から娘を見る目は変わらなかった。
いや、もう私はその時から…。

〇年3月

私が国からの要請を受け研究所を離れてる間に、研究所は爆破され研究資料が持ち出されるという事件が発生した。
すぐに国が関与しているというのは理解出来た。

それと同時に正美の行方不明にも殆ど、心が揺れ動いていない自分を嫌悪した。
そう、私は娘の正美を別の生き物として見て居た事に…。

〇年同日

エウルユニスは私の前に現れ、告げてきた。
正美を渡せと…。
私は何も知らないと告げると男は、「そうか、ならば出さなければならない状況を作るしかないな」と呟き姿を消した。
文字どおり目の前から消えた。
それを見た途端、エウルユニスがまったく私達と違う存在というのを理解できた。

〇年3月

娘である、正美を失った事で寝込んでいる奏美を実家である神社へ連れていき静養させる事にした。

そこで日記は締めくくられていた。
そして今、俺達は日記に書かれていた母の実家の住所にきている。
俺の目の前には全てが廃となった神社跡が視界に入っていた。

「ひ、ひどい。なんでこんな事が出来るの？」

由香里が言葉を、体を震わしながら震えていた。
俺は燃えた神社跡を歩いていくと一つの手帳が落ちてるのが視界に入った。

手に取ると、日記の続きが書き込まれていた。

大神家は人とは異なる力をもっている。
それは神代の時代より脈絡に受け継がれてきた退魔の家系である。

私は道を踏み外してしまい、世界の理を捻じ曲げてしまった。
それにより、人外をこの世界へ招き入れ、娘の心を傷つけてしまった。
人を助ける事を研究していたモノがいつの間にか人を傷つけるモノになってしまっていた。
これを見ると言う事は、もはや私はこの世界にはいないだろう。

妻、奏美は予知の力を有していた。
いつか、娘の正美、いや男である正美がこれを見てくれると、だから、謝罪したい。
申し訳なかった。
親のエゴで子供に罪を背負わせてしまった事を…。

私達の娘と息子が自身の力で道を切り開いていけるように願っている。
そして最後に、一つ、妻である奏美からだ…。

正美、よく聞いてね
今、世界は異界のモノに狙われているの。
大神家は、代々、そう言った者と戦ってきたの。
でも、お父さんやお祖父様ではそれに叶わなかった。
あまりにも強大だったから。
そして私にも力は無いわ。
本当は、正美には戦ってほしくないの。でもこのままだと近い将来、

あなたは巻き込まれるわ。
だから、正美だけには本当の事を言うわね。
あなた達の本当の力は戦うモノではないの。
本当の力は、人の心の中にあるの、明日を望む力、それがいつかあなたを支えてくれるわ。
だから、どんな時でも、絶望したら駄目よ？
最後まで仲間と自分の力を信じてね。

私達はいつまでもあなたを見守っているから。

「正美先輩？」

由香里に話しかけられると、正美はハッとしたように周囲を見渡した。
手の中には手帳だと思っていたモノが光り輝くと同時に、小さな水晶球へ変化した。
それは暖かく光輝いている。

「ああ、大丈夫だ。皆の元へ帰ろう。」

正美はすぐに踵（きびす）を帰すと神社跡を背中にして歩きだした。
由香里に流れる涙を見せないようにして…。

ルシアードへ

都市から人が流出し、明りが消えた都市では、夜空からの光が神秘的に周囲を照らしている。
その光に照らされた少女が暗闇の中で立っていた。
夜の闇の中で光に照らされながら漆黒の髪が風に靡(なび)くたびに黒の巫女姫を構築している魔力の光が舞い散る。
その光景は、明りが消えた中では、少女の整った容姿を含めて幻想的に誰の目にも映るほどであった。

『部屋から抜け出し屋上に来たと思ったら、こんな所で何をしているのだ？黒の巫女姫よ』

声をかけられた黒の巫女姫が、声のした方向を向くと煉獄(エウ)の審判神(メディア)がいつの間にかその場に存在していた。
現在、煉獄(エウ)の審判神(メディア)も元の姿に顕現しており、紅のマーメイドドレス、腰まである紅の髪が風に揺れるたび、炎の粉が舞う。
それを見ると、黒の巫女姫は空を見上げ悲しそうな顔をする。

『ううん、私が隠してた過去を正美が知ってしまったようなの』

空を見上げてる黒の巫女姫の横顔を見ながら煉獄(エウ)の審判神(メディア)は、何時にない神妙な顔つきをしていた。

『過去は隠し通せるモノでは無いと言う事は理解しておるのだろう？』

煉獄(エウ)の審判神(メディア)のその言葉に、眉を潜めながら黒の巫女姫は視線を自身の手元に落とす。
自分の手が血に塗れている事を確認するように…。

『そうね、でも過去を知った事で、アーくんはすでに記憶を取り戻してるからこれで、フィーナが正美にかけた封印が解けてしまうわ。私は、たとえ偽りの命と存在であっても、正美には生きていてほしかったの。
だってもう一人の私だから。
でも、これでこの世界での正美の存在は完全にこの世界から消えてしまうわ。』

『じゃが死ぬわけではないのだろう?』

『違うわ、人と言うモノはね、神様と違って人との繋がりが消えてしまう事は、世界から拒絶され死ぬ事と同じ意味を持つのよ?』

『妾には理解できないのう。』

その言葉に、黒の巫女姫は口元を綻(ほころ)ばせる。

『そうね、貴女(エウメディア)には理解出来ないかもね。神様と言えど、信仰を無くし存在を忘れ去られれば消滅しかないのに、貴女(エウメディア)は生きているものね。
本当に、貴女(エウメディア)はどれだけ規格外なのかしら?』

黒の姫巫女がそのまま、煉獄(エウ)の審判神(メディア)の方へ視線を向けると、煉獄(エウ)の審判神(メディア)は視線を空へと移す。
その動作だけで、炎の粒子が周囲に舞い散る。

『それは、黒の巫女姫たるお前にも言える事であろう?妾も見たが、正美のあの視界は尋常ではないぞ?世界の構成を見ることが出来るのだからな」

『違うわ。あれは、正美の本来持ってる力ともまったく別物よ。あれはまったく違う次元からたまたま人間が手に入れたモノだわ。』

『なるほどのう。妾や黒の巫女姫、そして幻獣王の力すら利用する事の出来る力。その力は不明と言う事か』

煉獄(エウ)の審判神(メディア)の声を風が運ぶ。
それは誰かに語りかけるように。

その頃、由香里と正美は、タクシーに乗りホテルを目指していた。

「しかしあれだな。この非常事態に夜間料金で動いてるタクシーがいるとはな〜」

「そうですね、でもさすがに道路はガラガラですよね」

首都高速の北池袋を通過し首都高から降りてから西池袋にあるホテルへ向かっていた。
普段はごった返してる池袋西口も閑散としており、開いてる店舗が見当たらない。
そんな中でも電車や交通が生きてるのは平和呆けした日本と言うだけあるだろう。

ホテル前で止まると外壁はガラス張りの３０階以上あるホテルであった。
二人はカウンターを通り、エレベーターへ乗り拠点としている３０階まで上がっていく。

「正美先輩、明日は…。」

「ああ、分かってる。奈津美を父親が迎えに来るんだろう？由香里もせっかくこの世界に戻ってきたんだから、こっちの世界に居ればいいんじゃないのか？」

由香里は首を横に振り、決意の篭った眼差しで正美を見つめる。

「分かった、わかった。それじゃ明日な」

「はい」

素直に頷く由香里を複雑な心境で正美は見つめていた。

翌日…。

ガイアス達は、昨日、正美達が帰ってきた後、由香里が術を解除した事によりすでに元の姿に戻っていた。
そして…。
屋上には、奈津美と由香里を抜かした全員が集っていた。

「本当にいいのかよ？」

ガイアスが朝から何度目かも忘れた言葉を口に出した。

「ああ、いいんだ。これは、俺のエゴだ。これ以上、大事なモノを失いたくないし、これは俺の問題だしな。
それに、帰れる場所がまだあるならそこに居るべきだと思う。
わざわざ危険に晒す必要もないしな」

「そうか、ならもう何もいわないが、別れの挨拶もいいのか？」

「手紙は置いて来たから大丈夫だ。これ以上、議論しても仕方ないしな。始めるぞ？」

正美は空間に魔法式を書き込み始め、それを黒の巫女姫が集約していく。
そして、来る時にはあれほど時間の掛かった積層型の魔法陣が３０秒ほどで作り出された。

「お、おい、その姿…。どうなってるんだよ？」

ガイアスは突然、起きた事に放心してしまう。
正美の姿が、１９０ｃｍ近くあった成人男性の姿から黒の巫女姫を成長させた姿、アレイクード公爵邸で始めてあった時の美しい姿に変化してしまったからであった。

「ああ、どうやら、この世界での俺の存在は完全に消えてしまったようだな。さていくか？」

正美が魔法陣へ踏み出そうとした時、後ろから肩を掴む者がいた。
それはイスピルであった。

「昨日は、動揺してて悪かった。言い過ぎたと俺も思ってたんだ。だけど歯止めが効かなくて…。」

その手を正美は握り返すと視線をイスピルへ向ける。

「仕方ないさ、俺だって怖いからな。だが、後は俺に任せてくれ！やっと俺がやらないといけない事が分かったしな」

正美はそのまま、魔法陣の中へ消えていく。

全員、正美の後へ続くと最後に、黒の巫女姫がその場に残された。

『正美、本当にそれでいいの？自分の意思だけで自分の力だけで解決しようとしてる危険性が貴方には分からないの？』

黒の巫女姫は、そう言うと最後に魔法陣を通過する。

同時に魔法陣の形が壊れ消滅する所で二つ人影が飛び込んだ後、魔法陣は消滅した。

六元神襲来

『おかしいのう？』

以前、来る時には一瞬で地球に戻れた。
だが、今はどこまで進んでも入り口が見当たらない。
その事に、煉獄（エウ）の審判神（メディア）は、おかしい事に気がついた。
最初、地球から幻想大陸へ来た時も、一瞬で世界の狭間を渡れたのに今は、どこまでも伸びる通路がある事に不信感を募らせていた。
しばらく進むと、突然、視界が開けそこには４人の男が立っていた。

「本当にきたぜ？」

赤い髪をした男が口を開くと男は正美の方へ視線を向けた。

「幻獣王（ルアカーゼ）ともあろうモノが人間ごときと仲良くするなんて、創造神はお怒りだぜ？」

突然、男の周辺に渦が生まれ開けたドームを炎が埋め尽くしていく。
そしてそれが、マスコットのように小さくなった幻獣王へ向かってくる。

『愚か者が！我の力を知らんと見える』

直後、幻獣王の周囲に水の膜が形成されると同時に、青い髪をした少年が手を横に振るうと幻獣王（ルアカーゼ）の作りあげた水の盾が泡となって消失してしまう。
そして炎が正美達を包み込む。

「なんだよ、こんなもんかよ！話に聞いてたのとはまったく違うじゃねえかよ！」

赤い髪をした男が落胆しながら声を張り上げる。
その声がドームに響き渡ると同時に炎に亀裂が入る。

「なっ！」

赤い髪をした男が驚くと同時に、正美達を包んでいた炎がガラスが砕け散るように霧散する。

『幻獣王（ルアカーゼ）だけだと思っていたか？妾も舐められたモノよのう。』

正美達の前に、煉獄（エウ）の審判神（メディア）が片手を前に出している。

『いきなり攻撃を仕掛けてくるとは何者じゃ？』

「くっくっくっ、だから言ったじゃねえか？獄炎神（イグニード）。そんなお遊び程度の炎じゃ奴らを仕留められないってな！」

灰色の髪をした男が、狂気を滲ませながら紅の髪をした男の方を見ながら笑う。

「うるせえ、暴風神（カイエム）。てめえも戦いやがれ！それと魔水神（ウルカヌス）、お前も手を抜いてるんじゃねえよ。旧世代（ルアカーゼ）に何防御術を展開させてんだ！」

「三人とも喧嘩をせずに今は、不確定要素を処理する事を最優先にしてください」

金髪の髪をした男が、正美を冷淡な眼差しで見下ろす。

「これはこれは挨拶が申し送れました。私の名前は、天地神（エイギス）と言います。
そしてこの赤い髪をした者が、獄炎神（イグニード）。
灰色の髪をした者が、暴風神（カイエム）
青い髪をした者が、魔水神（ウルカヌス）と言います。全て、貴方（ルアカーゼ）が居なくなった後、世界の根源を司る者として創造神ウィンダード様に作られました。」

天地神（エイギス）が頭を下げる。

『創造神ウィンダードだと？誰じゃそれは？』

煉獄（エウ）の審判神（メディア）の上げた声がドームに響き渡ると、男達は面白そうに笑う。

「旧世代（エウメディア）ですか？そうですね、貴女より遥かに強い異界から来た神ですよ。」

その頃、黒の巫女姫は、魔法陣から入った後、正美達とは合流できずにいた。

『おかしいわ、一体どうなってるの？この空間はおかしい。誰かが干渉してきている？次元の境界の狭間に干渉してくるなんて一体誰が？あっ！』

足元が突然消え、黒の巫女姫は暗闇の中で浮遊感を感じながら、落下する。

同時に黒の巫女姫の視界が、グラフで数値で表示されていく。

『私に喧嘩を売ろうって言うの？いいわ。相手になってあげる！』

途端に前方から数百に及ぶ雷光が暗闇を切り裂いて飛来してくる。
そして、それを見て瞬時に解析。
手が舞い宙に高速で術式を組んでいく。

『我が身を守れ！断空壁（ソリッドエアーシールド）』

術式の発動と同時に見えない空気の断層が幾重にも編まれ防壁となる。
全ての雷光が、空気の断層に阻まれ消失する。

「なるほど、なるほど、さすがは始源原書とも呼ばれる黒の巫女姫ですな。これは少し骨が折れそうですね」

黒の姫巫女が声のした方向を見ると、雷光が男のシルエットを浮かび上がらせた。
男は黄色い髪をした男であった。

「初めまして、私の名前は、雷光神（エルグランド）と言います。黒の巫女姫、貴女を捕らえるようにと我が創造神に言い付かってきました。」

『捕らえる？この私を？雷光神（エルグランド）、貴方がどれほどの者か知らないけど、貴方の術は全て私には効かないわ。
だからその言い付けは達成できないわ。』

黒の巫女姫は、瞳で雷光神（エルグランド）を解析したまま、いくつもの魔法陣を展

開していく。
それを見た、雷光神（エルグランド）も目を見開く。

「これは、これは、とてつもない魔法ですね。私程度では貴方には勝てません。」

『そう。なら、このまま戻る事ね。』

「ですが。こういう方法もあるのですよ?」

『なっ！』

突然、足元から崩れ落ちるようにして黒の巫女姫が床に倒れる。
男はそのまま、黒の巫女姫を見下ろす。

『なにをし…た…の…?』

黒の巫女姫は、突然、全ての力の行使が出来なくなり、体の力が入らなくなった事に混乱していた。

「簡単な事ですよ。貴方の力の供給源である正美との生体リンクを切断させて頂いただけですよ?」

男の言葉と同時にもう一人、漆黒の黒髪をした男が空間から突然現れる。

「闇神（ジェルド）ですか。どうかしたのですか?」

「いや、創造神（ウィンダード）様がお前の手伝いをしろって言ってたから来たんだが、来る必要もなかったようだな?」

「いえいえ、助かりましたよ。持ち運びは面倒ですしね？貴方（ジェルド）の力があれば便利ですし」

「まぁいいか」

ジェルドと呼ばれた黒髪の男が手を振るうと、黒の巫女姫の四肢が闇の中で束縛されると同時に床の中へ沈んでいく。

『貴方達はい、一体何者なの？』

闇神（ジェルド）はこれから起こる事を想像し愉快そうに笑う。

「そうだな、お前はもうすぐ世界を破壊する創世の種子に変わるんだ。その前に教えておいてやるか？残り４人を含めて俺達は六元神（オラシオン）だ。」

『六元神ですって？』

こんな化け物が６人も…。正美達に知らせな…い…。

そこで黒の巫女姫の意識が闇に飲まれその場から消失した。

「さてと、これで任務完了だな？あとから着てる二人の地球人はどうするんだ？」

闇神（ジェルド）の言葉に、雷光神（エルグランド）は首を左右に振り必要ないと帰還を指示した。

敗北

ドームの中で炎が渦巻き絡み合い周囲の空気を焼く。
その都度、剣戟が鳴り響く。

「やるなじゃねえか？おい」

獄炎神（イグニード）が炎で作られた2本の剣を両手で持ち獰猛に笑う。
逆に煉獄（エウ）の審判神（メディア）は肩で息をしながら炎の長剣を両手で携えている。

一方、幻獣王（ルアカーゼ）も追い込まれていた。
幻獣王（ルアカーゼ）が作りだした炎が風の刃が全て不可視の力に掻き消されていく。

「こんなモノなのですか？幻獣王の力というものは。」

天地神（エイギス）は、感情の無い瞳で見てる前で、幻獣王の姿が白い巨大な狼に変化する。
そして、一瞬で姿が掻き消えると同時に、白い巨体がドーム内の大地に音を立てて縫い付けられた。

『ぐぅ、重力操作だと？』

正美も、身体強化を行い片手に煉獄の剣を展開し、周囲の状況を解析しながら相手の出現位置と攻撃パターンを解析しながら戦っている。

「やるな？人間がそこまで戦えるのは大したモノだ。」

暴風神（カイエム）が一瞬で正美の前から姿を消す。

それを、視界で数値でグラフで確認し次の出現予想場所を確認する

そして、煉獄の剣を振り下ろす。

「なッ！？」

視界の数値が一瞬で変化し、別の場所へ出現するのを知らせるがそれでも身体が追いつかず空振りをする。

途端に背中に衝撃を受け凄まじい速度でドームの床を転がっていく。

（ま、まずい。この速度で壁にぶつかったら死ぬ）

正美は、床に剣を着き立て、床を溶かしながら制動をかけるが、剣の火力が高すぎて速度の減速が微々たる物であった。

ドンッと大きな音が背中からすると同時に、赤い何かが正美の肩口を赤く染めた。

「だ、大丈夫ですか？ま…さ…み……さ」

ドサッと言う音と同時にイリシアが床に倒れこみ、正美の代わりに壁に叩きつけられた衝撃から内臓を傷つけたのか口元は血で塗れている。

「ほう？あの速度で転がる者に追いつける人間がいるとは思わなかったな？」

暴風神（カイエム）は、事態の進行を愉快そうに眺めた。

「召還に応じ具現せよ！漆黒の竜（ナイト　ドラゴン）」

エルフィーナの言葉に応じ、巨大な黒い竜が召還される。

《ふん、あの時の小娘か？エメラスはどうした？》

その言葉に、エルフィーナは首を横にふる。

「今は、私があなたの主人（マスター）。力を貸して！」

《ふん、何故私が貴様ごときに力を貸さねばならないのだ？》

黒い巨大な竜は翼を広げ周囲を見渡す。

それを魔水神（ウルカヌス）は面白そうに見る。

「原書のトカゲか。そんなモノでこの魔水神（ウルカヌス）をどうにか出来ると思っているのか人間？」

《トカゲだと？身の程を知らぬ分際で！》

同時に漆黒の竜の周辺に巨大な黒い炎の球が作られていく。

それが魔水神（ウルカヌス）へ打ち出される。

着弾寸前で、巨大な水の壁が漆黒の竜ごと炎を閉じ込め、上空からの巨大な水の圧力で竜ごと押しつぶす。

竜が消える寸前にエルフィーナが放った光の粒子弾が魔水神（ウルカヌス）の体を貫き通す。

「竜は囮で、本命はこっちの攻撃か。だがこの程度の攻撃で「爆円(ボムズサークル)！」くあああ」

エルフィーナは、打ち出した光の粒子弾が散ったのを確認すると全てを火系の爆呪に変換させて魔水神(ウルカヌス)を体の中から爆発させたのだった。

爆発した際の煙が晴れていくとそこには無傷の魔水神(ウルカヌス)が立っていた。

「残念だったね。私にはそんな攻撃は効かないんだよ。」

男の言葉と同時に、エルフィーナの太ももが圧力をかけた水で貫かれ、床に倒れこんだ。

『まずい、このままでは…。』

周囲を見渡した幻獣王(ルアカーゼ)は、周囲の空間を見渡す。

何度も見渡していくと、一箇所、この空間を構築している綻びを見つける。

正美を通して、幻獣王は煉獄(エウ)の審判神(メディア)に空間の綻びを伝える。

「なんだ、なんだ、なんだ?何かでかい技でも出すつもりなのか?いいぜ!相手になってやるぜ?」

獄炎神(イグニード)の持つ2本の剣が黒く燃え上がる。

煉獄(エウ)の審判神(メディア)は、獄炎神(イグニード)が勘違いし力を貯めてる一瞬の隙をついて綻びまで一足で移動し斬り付け抉じ開けると同時に周囲の空間が音を立てて崩れていく。

「ふざけんなああ、逃げるのか？」

獄炎神（イグニード）の声が遠のいていく。

「もういい、追うな、獄炎神（イグニード）。」

「ふざけんなよ？天地神（エイギス）！逃がしたら面白くないだろうが？」

獄炎神（イグニード）の言葉に天地神（エイギス）は首を横に振り、黒の巫女姫はもう捕らえた。追う必要はもう無いと告げた。

「獄炎神（イグニード）、私達が半分の力も出してないのに彼らはあの様だよ？私達の障害になるとは思えないよ。」

魔水神（ウルカヌス）のその言葉に、獄炎神（イグニード）は不満気にその場から姿を消した。

それぞれの道

パチッパキッと火により薪が音と鳴らす。
そして、その火に照らされた黒髪の少女の瞼が揺れる。

「んっ…。」

口元から声が漏れると、意識が覚醒したのかゆっくりと瞼が開いていく。
最初に視界に入ったのは藁で編まれた屋根であった。
昔風の日本の農家の屋根と言えば分かりやすいだろうか？

「大丈夫？」

少女が声のした方へ視線を向けると、妙齢の女性が布を絞り少女の額に乗せてくる。

「こ、ここ……は？」

短い言葉を発しただけで咳き込んでしまう。
女性が、少女の背中に手を回し上半身を起すと水を差し出してくる。
それを少女は飲み込むと、体中が水分を欲していたのか木で作られていた器に入っていた水を全て飲み干してしまう。
床間に寝かされると、一気に睡魔が襲ってくる。
ここがどこなのか、あれからどうなったのか？
確認する事も出来ずに眠りに落ちた。

その頃、アレイクード公爵邸にある一室。
地球へ渡る際に、集っていた正美の部屋でガイアス達は戸惑っていた。
自分達だけが先に、この世界、幻想大陸へ戻ってきたからであった。
しばらくしてから、空間から吐き出されるようにガイアス達の後に現れたイリシアとエルフィーナは重傷を負っていた。
今は、ウーネイの高位神官のみが使える回復術で傷口を修復しているが、イリシアは内臓が傷ついてる事から完治まで時間がかかると想像できた。

「私達が正美の世界に行ってからもう8ヶ月も立ってるなんて、信じられないわね」

リメラは、自分達がこの世界から正美達の世界へ移動してる間に起きた出来事を記した記録誌を、冒険者ギルドへ貰いに行き、戻ってきてから目を通していた。
そこには、この8ヶ月の間に幻想大陸ルシアードで起きた出来事が書かれている。
状況は悪いと言うどこではない。
深刻と言わざるを得ない状況であった。
軍事大国レクイエムは宗主国インフェルノと結託し、戦線を拡大。
エルハンス王国は侵攻されたのが3ヶ月前。
王都イースバールが消失した事により指揮系統の崩壊、各地で起きている有力貴族の暗殺により軍はほぼ機能を停止している状態であった。
そして、そこを見計らうようにレイユーズ公爵領を経由し、宗主国インフェルノの大軍がエルハンス王国に侵攻。
本来ならば、防波堤を担うレイユーズ公爵は内乱を起こし、他公爵の軍と交戦。

他公爵の足止めを行っていた。
インフェルノの大軍は、現在、商業都市フェルンに侵攻を開始しており到着は2週間後と想定される。
領土を死守するためのアレイクード公爵が指揮する軍は、1万5千程でありそれはインフェルノ軍の５０万と比べても勝ち目が無いのは誰でも理解出来る。
そして、インフェルノ軍を指揮するのは突然現れた魔道を扱う者と言う点。

「まったく、これじゃどこに行っても逃げる場所なんて無いじゃないの！」

リメラは客室のベットの上で寝ながら記録誌を見て居たこともあり、そのまま、ベットの上に記録誌を置くと枕を抱き寄せた。

「現状の打破は、冒険者協会と勇者派遣協会に力を借りる事だけど…。」

呟きながらリメラは、協会に顔を出した事を思い出す。
協会を仕切る評議会の方から、今回の戦争に関して一切手を出してはならないと全ての支社を通して、冒険者に厳重に命令が下っていた事に…。
あまりにもタイミングが良すぎる事にリメラはイラついていた。
自分が所属する魔術ギルドも今回の問題に関しては静観を決めていたからだ。
いつもは、どんなゴタゴタにも率先して首を突っ込む連中まで…。
まるで、悪い夢のようだとリメラは煮えきられない思いであった。

ガチャと音を立てて扉が開き、リメラは扉が開いた方へ視線を向けるとそこにはイスピルに支えられたウーネイが立っていた。

「大丈夫なの？」

リメラはすぐにベットの上から記録誌を退け、ウーネイをイスピルと一緒に寝かせながらイスピルに二人がどうなったのか聞く。

「ああ、それなら大丈夫。エルフィーナさんもイリシアさんももう大丈夫。治癒術の使いすぎでウーネイが逆に倒れたけどな」

その言葉にリメラはホッと息を吐くと椅子に座る。

「ねえ？イスピル。私、考えてたんだけどね、私と貴方（イスピル）、ガイアス、ウーネイが襲撃にあわなかったのは、私達の力が襲撃者から見て取るに足らないと判断されたんじゃないのかな？」

イスピルはリメラの言葉に沈黙した。

それは、敵側からも戦力外通告されたのと同じであった。

その頃、ガイアスは自分達が異世界から戻ってきた場所を調べていた。

召還師であるガイアスに取って次元の歪みが生じた場所というのは、自分の術式を比較し検討するいいサンプルになるからであったのだが…。

「やはりおかしい…。この残留術式、俺達の他にこの世界に来ている者がいるのか？」

ガイアスは、調べる事を止めると正美が居た部屋から出ると声をかけられた。

「ガイアス、どうかしたのですか？」

声をかけた女性は、メルビルと言いイリシアより早く入った先輩である。

かつては冒険者協会のＳ＋（オーバーエスランク）の術者である。

「い、いえ。なんでもありません。し、師匠！」

そう、メルビルという女性は若作りしていて２０歳程に見えるが、実年不詳の女性である。

「部屋の中にある歪みの事より、貴方達はＡランクの冒険者なのに戦力外通告されたんですってね？」

その言葉に、ガイアスは凍りつく。

長い間、師匠（メルビル）の元で習ってきたガイアスにとってメルビルの怒りはこれから起きるスパルタ教育に他ならないからだ。

「し、師匠。お、俺は、レイゲンまで戻って教皇に会わないといけないんだが…。」

ガイアスが、額から脂汗を滲ませながらメルビルから離れようとした途端、体の身動きが取れなくなる。

「イレネイスには私から話しておきます。念話でね！あなた達を少し教育しないといけないみたいね？」

ガイアスは身動きが出来ないまま、ズルズルと音を立てて足首を掴まれながら引きずれていった。

その頃、イリシアは目を覚ましてベットの上で自分のお腹に手を当てていた。

「内臓はもう大丈夫かな？」

ゆっくりとベットから立ち上がると、地球から持ち込んだ2本の刀を手に取り目を伏せた。
幻想大陸ルシアードで作られた刀はさまざまの効果を内包しているが、内包しないと行けない一番の理由は刀身の弱さをカバーする為であった。
それが地球で、手に入れた刀は特に特殊な力が無くともあれだけの斬撃を打ち出しながら傷がついていない。
襲撃を受けた際に、風の術式を受けても微動だにしなかったから事からも強度が優れているのは証明されている。
だが、今のままでは暴風神に勝つことは出来ない。
だからこそ、この世界の技術を融合させる必要がある。
さらに、それを扱う自分自身の鍛錬、その為には、一度戻る必要があった。
イリシアの故郷である千連の里に…。

イリシアがアレイクード公爵邸から姿を消したのはエルフィーナが起きてから事情を説明した後の事であった。
事情を説明されたエルフィーナは、体が動くようになってから正美、煉獄の審判神、幻獣王が一緒に姿を現していない事を、メルビルから聞いていた。
そして、エルフィーナも本来で在れば、アレイクード公爵と共に戦いたかったが、今、することは六元神に打ち勝つ事と知っていた。
だからこそ、彼らと戦う術を調べるために黎明庫へ向かった。

それから2週間後、エルハンス王国歴　２１２年　後の世に降魔戦争と呼ばれる戦いの序章が切って落とされる事となる。

「殺せ！滅ぼせ！消し去れ！我が前に立ち塞がりし全ての者を！」

その声が響き渡ると同時に、周囲が砕け散る。
そして、何度目か分からない光景が浮かび上がってくる。

そこは、ワンボックスカーの中だった。
煩いほどの騒音が耳に入ってくる。
その騒音は、この車が出している音。
そして、ハンドルには成人男性だと思う体が押し付けられていて、
それがクラクションを鳴らしている。
成人男性だと思われると言う原因は、男の頭が無かったからであった。
散弾銃か何かで吹き飛ばされた跡のようであった。
フロントガラスは真っ赤に染まっており所々、白いモノが付着している。そして車の右側は切り取られたかのように無くなっており、
地面を陥没させるかのように潰れている。鉄とアルミの間からは白いモノと赤い血が流れて出ている。

意識をすれば、どうしてこうなったのか今の俺には理解できた。

そして…。

「や…め……て」

少女が恐怖に怯えた表情でこちらを瞳を覗きこんでくる。
俺の中の何かは狂ったように笑いながら少女の手元へ手を近づけていく。

その情景を、俺は何度も見せられていた。

「や…め……ろ。」

力なく言葉を発するが、手が止まる事はない。
そして少女が指先、足元から水晶化していく。
そして砕け散る瞬間、少女の瞳の中に映った俺の顔の瞳は複雑な文様が描かれていた。

「あああああああ」

声を上げながら、俺はベットから起きた。
しばらく、俺はベットの上で顔を俯(うつむ)かせたまま、両肩を自らの手で抱いたまま、自身に恐怖し歯をカタカタ鳴らしていた。

そこに、やさしく包み込んでくれるモノがあった。
とても暖かく、忘れていた匂い。
何度も、髪を手櫛(てぐし)してくれている。

「もう、大丈夫よ。怖い事があったのね？」

優しい言葉が心に染み込んでくる。
恐怖と絶望で視界が狭まっている俺はそのまま女性に抱かれたまま意識を手放した。

その頃、エルフィーナは黎明庫の扉を開けその様子に唖然としていた。
周囲の石版、布、粘土板、あらゆる書物から光が立ち上っていたからであった。
それと同時に、エルフィーナが右手に持っていた始源原書も光始める。

《本当は、こんな事はしたくないんだが》

声が、黎明庫に響き渡る。
黎明庫内に巨大な漆黒の竜が現れる。

「呼び出してないのに？」

エルフィーナは、突然現れた漆黒の竜を見上げながら目を見開いた。

《あいつらと戦うんだろう？だったら封印されたままの瞳じゃあいつらには勝てるわけがない。エルフというのは精霊を見、肌で感じ、存在を受け入れそして語りかけ力を借りるモノだ。俺も、お前も譲れないモノがあるのだろう？》

竜の言葉をエルフィーナは繰り返し、理解しようとした。

「わ、私がエルフ？」

震えた声が、黎明庫に木霊（こだま）す。

《そうだ、それも精霊王（ノア）を従える素質のある者、エルフの中でも稀有な存在、識別者（イスペランサー）だ。だからこそ、俺が自由に貴様と会話出来てる訳だしな。》

「精霊王（ノア）？エルフ？い、一体何を言っているのですか？」

その言葉に、漆黒の竜の笑いが黎明庫を振動させる。

《自覚がない識別者（イスペランサー）は初めてだな？フィーナ以来か？》

その言葉にエルフィーナは突然反応し、竜へ一歩近づく。

「お母様の事を知っているのですか？」

スッと竜の瞳が細くなる。

《そうか！お前はフィーナの娘なのか？なら、理解出来るな。アイツは5千年ぶりに生まれた識別者（イスペランサー）だった。だが、くだらん事で命を落としたからな》

「どういう事なの？」

《言った通りのままだ。お前は原書（オリジン）と言ったモノがどうやって作られるか知っているか？》

エルフィーナは首を横に振る。

《まったく、自分達が使ってるモノが何かと知らないとはな…。イイだろう。フィーナの娘であり識別者（イスペランサー）よ。お前に教えてやろう》

あれから3時間後、エルフィーナは自室でベットで天井を見上げていた。

漆黒の竜が説明した事、それはこの世界の真実の一端であった。
原書（オリジン）、それは異世界から召還された者の残った一番強い思いが形になったモノという。
原書（オリジン）になる確率は低く1割にも満たない割合だったと言う事。
精霊王（ノア）と言う者は、消滅した原書（オリジン）の集合体であり、黒の巫女姫と対を成す肉体を持たない存在と言う事であった。
そして、召還された一番の理由は創世の種子と言う世界を支えていた種子の再生が目的だったと言う事。そのためには膨大な異世界の人間の命と感情が必要だったと言う事。
全てはこの世界を生かす為だけに、異世界の人間を生贄として数千年の間、上級神ユーゼイに操られたエルフ族が暗躍し最後には、アレイクード公爵の祖先が率いる連合軍と黒の姫巫女により１００年以上前に討伐されたと言う内容であった。
エルフィーナは、自分の母親が始源原書の表紙になっている事も竜から聞いていた。

「お母様が黒の巫女姫だったなんて…。しかも同族と戦ってたなんて…。い、一体何がどうなってるの？お父様なんで何も教えてくれなかったの？」

エルフィーナは困惑した声で呟いていた。

動き出す悪夢

―アレイクード公爵邸から南方へ5日ほどの場所―

馬を駆り、イリシアは霊峰イズルに差し掛かっていた。
山の中の獣道をイリシアは進んでいる。
しばらく進むと大きな音が聞こえてくる。
それを感じとったイリシアは馬を進める。
視界が開けた所は、巨大な滝が音を立てて流れ落ちている。
馬から下りると、手綱を引きながら滝の裏側へ続く道を進んでいく。
滝の裏側は洞窟となっており、所々一定の間隔で松明が立てかけられている。
火は灯っていないが、新しい松明から人の手が入っているのは一目瞭然であった。
5分ほど進むと、突然視界が開け暗闇の中を歩いてきた事から、イリシアは数度、瞼を瞬かせた。

そして、眼下には五十程の集落が並んでいるのが見て取れる。

「少し、家の数が増えたのかな？」

イリシアは思った事を口に出しながら、洞窟の入り口からの下り道を降りていく。
洞窟から続く道を歩き、里へ続く道の間には両側に畑がある。
先に進むと畑を耕している見慣れない人が数人視界に入ってきた。
この世界では、頭を下げて挨拶をするのは貴族に仕えるメイドや執事のみである。
思わず、イリシアが挨拶のために頭を下げてしまうのはエルフィー

ナの教育の賜物である。

畑を超え、集落へ入ると見知った女性がイリシアへ向けて手を振っている。

それを見たイリシアは、馬を引いたまま歩いていき近くまで行く。

「ただいま、お母さん」言いながらイリシアは母親に抱きついた。

「ねえ?お母さん。お父さんはまだ怒ってる?」

イリシアの母親、エルクルは口元に人差し指を持っていくと首を傾げながら口を開く。

「う~ん。すっごーく落ち込んでるかな?」

その言葉にイリシアの「えーっ」と言う言葉が村に響き渡った。

5時間後、イリシアの家は集落の端に位置しており、家の様式は純和風。

3年ぶりに戻ってきた、イリシアは畳の上でゴロゴロとしていると、家の戸が開く音が聞こえてくる。

「かえったぞー。」男の声が聞こえてくる。

イリシアは、その声が聞こえてきても自分の部屋でゴロゴロとしていた。

ひさしぶりに戻ってきたから動きたくないのだ。

ユリバースは自宅の戸を開けて、すぐにエルクル以外の靴が在るのに気がついた。
靴の大きさから女性のモノと言うのは分かるがこのような靴を履くものが集落にいるとは考えられない。
ユリバースが戻ってきた事に気がついた女性が姿を現す。

「貴方(ユリバース)、おかえりなさい。」

「ああ。誰か来ているのか?」

ユリバースの言葉に、エルクルは口元に手をもっていくと嬉しそうにする。

「冒険者になりたいって出ていった娘(イリシア)が戻ってきたのよねー。」

エルクルのその言葉に、ユリバースは眉をムッと潜めた。
それをエルクルは、面白そうに見ていると、ユリバースは玄関から上がっていくとイリシアの部屋の戸を開ける。
そこには、イリシアが畳の上で寝転がって寝ていた。
怒鳴ろうとしていた、ユリバースはそれを見て肩透かしを食らったように溜息をつく。
まったく誰に似たのかと…。
寝ているのを無理に起しても仕方ないと思ったユリバースはそのまま部屋から出ようとすると、後ろで柱から顔を半分だけ覗かせて自分に視線を向けていたエルクルに気がつき再度溜息をつく。
この母親ありの娘だと思いながら。
エルクルとすれ違う際に、ユニバースは明日、娘(イリシア)と話をすることを告げると自分も寝室に入っていく。
商業都市フェルンまで足を伸ばし、村で生産したモノを売りに行った事で、ユリバースも疲れていたのであった。

『ここは？どこなの？』

声が響き渡る。周囲は深遠の闇が囲まれており自分の姿さえ見ることが出来ない。
その中で突然、闇が振動する。
そして、男の声が響く。

「初めましてと言う所かな？黒の巫女姫であり、始源原書であり、創世の種子の代行物よ？」

声のした方へ視線を向けるが、闇が認識を阻害しており見る事が出来ない。
そして、体中の力を入れる事が出来ず、空間を解析する事もできずにいた。

『一体、私に何をしたの？貴方は一体何者なの？』

闇へ問うと、心底愉快そうに笑う男の声が響き渡る。
それにより、黒の巫女姫の心の中に不安を根付かせる。

「何者か。私が誰だか知らないとはな。黒の巫女姫、お前を作り出した存在だ」

『私を作りだした？上級神ユーゼイなの？』

「くっくっくっ、あの程度の力しか持たぬモノが上級神とはな…。

本当の力を持つ神ならばお前のような存在を作らずとも世界を改変出来ただろうに…。」

『せ、世界を改変？い、一体何を言ってるの？』

「お前を構成している原書という名の知識を使い私の力を使いこの幻想大陸を浮遊させている力を消去し、幻想大陸と地球の間にある結界を完全に破壊する。
そして幻想大陸を地球に落とし、全ての生物を死滅させる。
その後、新たに世界を貴様の力を使い一から全ての生物を作り変える。」

『そ、そんな事を私が手伝うと思っているの？』

「貴様の意志は関係ない。貴様の全ては消去され只の知識の塊となる。そして貴様の両親がいた日本にこの幻想大陸は貴様の手で落ち消滅する事となる。一ヶ月という猶予をせいぜい楽しむがいいだろう」

声が消えると同時に気配も消える。
四肢の感覚が感じ取れない空間の中で、黒の巫女姫は全ての力を封じられたままで意識が遠のいていった。

『正美、た…助けて。早くしないと世界が消えちゃう…。』

そこで意識が途切れた。

最後の試練　1

イリシアが千連の里に向かってから2日ほどしてから、クレイネルより一通の書簡がアレイクード公爵邸に届いていた。
それを見たメルビルが休暇を取り、レイゲンのギルド総本部へ出かけていた。
ガイアス達はその付き添いに現在、一緒に出かけておりアレイクード公爵邸には、エルフィーナと必要最低限の使用人しか残されていない。

そして、エルフィーナと言えば、イリシアが不在になってから１０日間、アレイクード公爵邸の中庭にて原書（オリジン）を使っての練習を行っていた。
連日の修練の影響からかエルフィーナの目元には、隈が出来ている。

「求めに応じ彼方のモノを切り裂け！《風斬（ウィンドブレイド）》」

エルフィーナの起した、無色の風の刃が、立てた木の人形に刺さり人形が真っ二つになる。

《エルフィーナ、何度言えば分かる？それでは原書の力の１割も引き出せて無いと言うのがまだ分からないのか？
いいか？
魔術の起動は精神。
魔流術は肉体に流れる力の回路を介して術を使用している。
この２つの術に共通するのは精霊を服従させて使役してるという点

だ。
それに比べて、識別者（イスペランサー）と言うのは、術を起動させてる根源たる力の源である精霊から直接、力を借り受けることが出来るのだ。
服従では、どんなに強大な精霊を使役しようとそれを使い切る事は出来ない。
そして、どんな存在（モノ）であっても、元は生きていたモノである事には変わりは無い。
俺のように憎悪が形になって作られた原書は、強い自我を持ち話しをする事が出来る。だが、それだけとは限らない。
だからこそ、精霊を視（み）、心を通わせ、お互いに協力し術を発動させる事が識別者（イスペランサー）の力は大きなアドバンテージとなる。》

そこで漆黒の竜は、エルフィーナがフラついてるのを見て、体を休めるように言うと、エルフィーナは首を横に振り拒否する。

《精霊をどんなに見る事が出来ても言葉を聞けないかぎり、通常の術を使うのと力の消費は変わらない。今日はここまでにしておこう》

「わ、私はま、まだ…。」

エルフィーナの言葉を無視して、漆黒の竜は、体を咥えるとそのまま、開いてる窓からエルフィーナを部屋の中に投げるとエルフィーナの体は、ベットの上に落ちる。

ここ数日の連日の過度の練習から、無理にでも休みを取らせるために、漆黒の竜たる彼が取った方法であった。
窓から見るとすでに、エルフィーナは、力尽きたかのように眠ってしまっていた。
エルフィーナが寝てるのを見た漆黒の竜は１０m近い巨体を地面に横たえると近づいてきた気配に気がつく。

《フィーナ、まさかお前が恐れていた事が現実になってしまうとはな…。》

漆黒の竜が呟きながら再度、巨体を持ち上げる。
そこにいたのは、本来ならばこの場にいないはずのクレイネルであった。

その頃、正美は目を覚まし周囲を見渡していた。
ここ、数日間寝ていたことで体調は驚くほど改善されていた。
それでも一つだけ問題があった。
自分が今まで何をしていたのかさっぱり思い出せずにいたのだった。
記憶に霧が掛かったように、何かを想い出そうとすると記憶がボヤけてしまう。
名前以外が思い出せない。
それでも、一生懸命思い出そうとすると一人の黒髪の女性が小屋に入ってきた。
そして正美が起きてるのを見ると、心配そうな顔をする。

「もう大丈夫なの？正美」

「う、うん。」

俺は思わず、掛けられた言葉に頷いてしまっていた。

「ここは一体どこなんですか？」

正美の問いかけに女性が困ったような顔をして思案していると一人の男性が中に入ってきた。
男性は女性の方を見ると頷くとすぐに部屋を出ていく。

「えっ！？」

正美は、突然女性に手を掴まれてベットから起き上がらされてしまう。
手の中に硬い丸いモノが握らされた感触がある。
それは、薄っすらと光輝く直径５ｃｍほどの水晶球であった。
その水晶球の光が少しづつ輝きを増していくのが分かる。

「こ、これは一体？」

「それはね、皇玉という物なの。来るべき時が来た時に使い手に渡るようにと代々、血と魂の中に受け継がれているもの。さあ、外であの人が待ってるわ。」

話の展開についていけず、正美は小屋から出るとそこはどこかの神社の境内であった。
立派な、本殿に左右にある美しく整えられた造形物。
そして後ろには、高さ１０ｍ近くある立派な赤く塗られた鳥居が立っている。
自分自身が先ほどまでいた小屋がどこにも見当たらない。

「い、一体…ここは？」

正美は、混乱した頭で考えていると、本殿の方へ続く道に気配を感じ、振り向いた。
そこには、先ほど小屋の中にいた際に女性と視線を交わしていた男性が立っていた。
身長は１７０ｃｍ前後、痩せ型であるが所々、必要最低限に筋肉がついており非力そうには見えない。
顔は引き締まっており、精悍そのものであり背中まで伸ばした黒髪を背中で纏めていた。

男性を見ていると、纏ってる空気が一遍する事に気がつく。
途端に、体中の細胞が危険を知らせてくる。
その場から飛びのくのと同時に、石畳が砕け、砕け散った石が正美に打ち付けられる。
石畳に背中から打ち付けられながら、転がりながら立ち上がり、男が攻撃した部分を見ると、自分自身の方へ石畳が削られているのが視界に映った。
そして、ほんの先ほどまで無手であった男の手元には、何時のまにか緑色に光る刀剣が握られていた。

「くっ、一体ここはどこで貴方は誰なんですか？」

正美の疑問に答えたのは、男の斬撃であった。咄嗟に、身を翻した事により辛うじて避ける事に成功する。
さらに一歩下がると、いつの間にか着ていた巫女装束の袴の部分に切れ込みが入っている。
うっすらと太ももから血が流れてもいる。
目の前の相手は自分を殺すつもりで攻撃してきたのが手に取るように何故か理解出来た。

それと同時に、自分が死の危険に晒されている事も容易に理解出来る。
正美のそんな心境変化に気がついた男は、手に持っていた刀剣を肩の上に乗せると笑みを浮かべると視界から男の姿が消える。

「しまっ！」

とっさにその場から飛びのくが、肩が焼けるように熱い。
肩を抑えた右手を見ると、手には血がついており、上着である白衣（びゃくえ）が真っ赤に染まっていく。
それに伴い体中から力が抜けていく。
肩膝を石畳についた所で、男が目の前にたっており刀剣を正美に向かって振り下ろす。
正美は横に倒れながら、刀剣を避けると砕けた石畳の破片が正美の体を打ち付ける。

「うっ…。」

ポタポタと口元から血が流れる。
どこかで内臓が傷つけられたのだろうか？
男が一歩一歩近づいてくる。

「こんなモノなのか？」

男は、一言だけ正美に言い、正美に刀剣を振り下ろした。

最後の試練　2

気がつくと、そこは小屋の中であった。
囲炉裏の木が燃えるたびに音を鳴らしているのが耳に入ってくる。

「いったいなんでこんな所に…？」

ゆっくりとベットが立ち上がると、服を着ていない事に気がつく。
周囲を見渡しても着るモノが見当たらない。
そこで、小屋に女性が入って着て、私を見ると服を着せていく。
白衣（びゃくえ）を着、その下に緋袴を履く。
腰まである黒い髪は白い布で纏め上げていく。

「えっと、私は、い…一体誰なんですか？」

名前が思い出せない。
否、全ての記憶が抜け落ちたかのように何もない、空っぽだった。

「もう、そこまで…。」

女性が俯くと、少女を抱きしめる。

「いい？心を強く持つのよ。強く持たないとあなたはこの世界に取り込まれて消滅してしまうわ。これを…。」

女性が、５ｃｍほどの大きさの透明な球を、少女に渡す。

「これは、一体何なの？」

その疑問に女性は、皇玉とだけ答える。
同時に、寂しそうな顔を向けてくる。
そのまま、小屋から出ていくと男が立っていた。
男は少女の姿を見ると、眉を潜める。

「もう、全ての記憶を失っているのだろう？」

男の言葉に、少女は首を左右に振る。
その反応に男は、「そうか。もうそんな判断すらできなくなったのか」と呟く。

「さて、最後の審問を始めようか？」

男は言い放つと、手の中に緑色に輝く刀剣を作り出し握る。
私は、呆然と男の右手に握られてる刀剣へ視線を向けていた。

途端に心の奥底で誰かが私に、声を投げ掛けてくる。私はその声に引き摺られるようにその場から右へ飛びのく。
男の刀剣はそのまま石畳を砕き破壊しながらその反動で、私の方へ剣を流すよう軌道を取る。
私は、その剣を上半身を倒す事により避けた。
男はその身のこなしに眉を潜める。

「今の斬撃は避けれるタイミングでは…！？ま、まさか…これは……。」

男の迷いが剣を曇らせ、男の剣を避ける度に、少女の心の中に響く声が強くなっていく。
それと同時に、右手の皇球の光がより一層光輝く。

男が放った突きを、手の平にて刃のない刀身部分を押しずらす事により無効化してしまう。
突きを放った男に、一歩踏み込み男が居た位置と自分がいた位置を置き換える。

それを一呼吸の間に行った少女を男は、驚愕の眼差しでみていた。

「ま、まさか…。たった2週間でここまで成長するものなのか？」

少女は感情を無くした瞳で男を見つめる。
途端に周囲の空間に亀裂が走っていく。

「こ、これは、い、一体…！？」

男が周囲を見渡すと、少女が握っていた皇球の光が目も眩むような光を発する。
その光に男が気がつき、目線を向けるとそこには色は違えど形は男が握ってる剣と遜色ない剣を握った少女が立っていた。

その頃、アレイクード公爵率いる軍は、宗主国インフェルノの軍とおぼしきモノと交戦していた。
敵の第一陣は、約3万ほどであり、ほとんどは亜人であるリザードマンで構成されていた。

「アレイクード様、どうしますか？第一線を下げますか？」

現在、アレイクードが率いる軍は1万5千。
そのうち、5千を商業都市フェルンの防衛に回しており、平原部分で簡易砦を作り戦ってる状況であった。
部隊の構成は、1万のうち4割が戦争や戦いを経験した事がない兵士であり亜人との戦いにおいて劣勢に追い込まれていた。

「一度、砦まで下げる。伝令を！」

アレイクードの指示により軍が下がり、砦の近くまで下がった所で、簡易砦に残っていた2千の兵士から雨のように一斉に矢がリザードマンに降り注ぐ。
それにより追撃をしていた亜人の数が減っていく。
アレイクードは、ペンダントに力を流しこみ、長剣（バスターソード）に変換する。

「残りを討伐する。全軍、私に続け！」

アレイクードを先頭に、敵陣へ騎馬隊が突っ込んでいく。
すれ違いざまにアレイクードは剣を最大まで巨大化し周囲を切り伏せていく。
アレイクードの通った道には、数多の亜人の死体が転がっておりそこだけ道が出来ていた。
そこを残りの歩兵が詰めていく。
浮き足だった亜人の半数が討ち取られた所で、後方に黒い染みのような影がいくつも視界に入ってくる。
その姿が、目視できる所まで来た所で、前方に位置していた兵士達から悲鳴が上がった。
アレイクードは、視線を悲鳴が聞こえた方へ向けるとそこには何千、否。何万もの黒い影がたっていた。

「ま、ま、魔人だ…。魔人ジェードだ。なんで、こんな所に…。」

一人の兵士が震えながら呟く。
アレイクードの耳にも、その呟きは入ってくる。
それにしても、あの数は…。

「全軍一端、商業都市フェルンまで撤退しろ！」

アレイクードは、魔人ジェードの方へ馬を操り走る。
すでに視界の中で黒き魔人はこちらの軍と敵(リザードマン)を無差別で殺してる姿が視界で確認できる。
馬から落馬した兵士に止めを刺そうとした魔人ジェードが飛んできたナイフに反応しその場から退くと、その体を銀光が煌き真っ二つに裂くと同時に兵士の前を1頭の馬が横切る。

「切りがない。」

アレイクードは聖剣グラムを馬上にて弓に変える。
そこに、自身の体内の回路に力を流し、周囲の粒子を弓の前方へ集約していく。

「赤き、炎。炎獄よ。我が命に従え！焼き払え。炎と化身となりて、全てを紅蓮にて消し去れ」

アレイクードの力強い言葉と同時に、聖剣グラムに蓄えられた力が一気に開放され数千の火の鳥が周囲を薙ぎ払っていく。
焼き払ってる間に、軍を撤退させていく。
インフェルノの軍勢は、前方に現れた炎の壁に足止めを受ける形となってしまい、進軍する事が出来ずにいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0677v/

神様それはないよ！

2012年1月9日22時47分発行